
真・恋姫十無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

日時々雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

【Nコード】

N2814Z

【作者名】

日時々雲

【あらすじ】

ちよつと、どころではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張りのお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。

（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しは、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。

改良もあれば、改悪の部分もあつたりします。

初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアスを含んじやいます。

まだまだ経験が足りないので、拙いです。

そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。

さらに、オリキャラも多数（100ぐらい？）存在します。

さらにさらに、主人公は（自重はしてますが）チートです。

最後に、アンチっばいのを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、backでお願いします。

かなり長くなりそうですが、どうかお付き合い下さい。

第一話（前書き）

プロローグというやつ？？です。

第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずぼらしく、貧しさだけで服が擦りきれてぼろぼろになっているとは言い難い格好である。
そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……ううん、冷たいし、かてえなあ。下が土だから当然といえば当然かあ？」

(土？あん？)

「なんでこんなところにいるんだっけか？」

さかのぼること数刻前……

「うう……、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよい歩いていた。
言わずともわかるであろう。
食糧調達の為である。

最後の食糧が尽きて数日が経っており、足元はふらつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあの手でやらなければよかったぜ……。でも、ああも嬉しそうに食ってたし、しょうがねえか」

(やっぱり動物には優しくしないと、なあ。

動物愛護家たるもの、そうする義務があるぜ)

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……って、楽観的になってる場合じゃねえ！ 僕……俺の生死に関わる問題だ！」

(まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないからいいんだけどな)

ヒステリックになつては、皮肉げに笑みを浮かべ、コロコロと表情を変えながら、さらに奥へと進んだ。

「おっと、あれは……」

すると、何故か地面から30〜40cmほど宙に浮いている(正確にいえば、吊るされている)林檎があった

「……やった！ す、数日ぶりの食糧だッ！ この際、なんで浮い

てるかなんて気にしねえ！」

いつもの少年ならば、当然畏だと警戒したであろう。

しかし疑ってかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かにとりつかれたかのように飛びついた。

この少年、馬鹿なのだろうか。

「いっしょよっしゃあ！ うむ、では早速、頂きm……」

（あれ？

なんだこの浮遊感は。

……嬉しすぎて、天に召されてるとかか？
洒落にならねえぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくなああー！ いたっ！ ぐおおお……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻をさする。

「ケツがああああ！ ふう、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに 穴の中なのだから当然だ 平静を装う少年。

本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだあ？ はっ！ また、死に損なっただか」

少年は、小さく憎々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなあ、おい。しかも、若干深めで出れねえし。……ま、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と気付く罠に引っ掛かった状況でなお、楽観的だった。もう、馬鹿で良いのでは。

「う、……思い出ただけで、なかなか恥ずかしい」

(うん、これから気をつけよ。
だがな作者、貶しすぎだろーが)

思い返した少年は、深く反省することにしたようだ。
とりあえず、メタ発言は止めましょう。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

期待はしねえが、な。

都合良くいるはずがないことをしりながら、そつ声をもらした。

同じころ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罫だったんだけど、うまくいったかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよな？

そう小さく呟きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、ここら辺に仕掛けたはず、なんだけどなあ……。」「森に入って早、半刻（一時間）。

少女は、未だに見つけられないでいた。

「うーん、間違えたかなあ……。ん？」

「……思い……。けで、なか……。しい」

（声？が聞こえる……。捕まって騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そっちに足を運んだ。
すると……

「近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここは十八番しかないよね

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つゝ

メタ発言は止めて欲しい。

「ここにいるぞー」

はっきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「って、何処にだよ！」

とツッコミつつも、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入ったとき晴天だったはずなのに、ほとんど光が入ってこない。

すなわち、木が生い茂っていて、かつ、かなり長く歩いていたはずだから森深くにきている……。
確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽っている少年を尻目に、少女はひょっこりと顔を穴へと出し、口を開く。

「ここだけど」

至極当然、単純明快なことであったのに、何故ツッコんでしまったんだろう、と少年かは少し後悔した。

「どづかしたのー？」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うん、いいよ　ちょっと待っててね」

待つこと、ほんの一時

植物のツル？が、少年の元に落ちてきた。

「それに掴まってね。案外丈夫で切れないから安心してね」

「ありがとう」

少年はツルを何度か引つ張り、強度を確認すれば、本当に一人を吊るしても切れないだろう、と思うほど丈夫だった。

若干の警戒をしつつ、それをつたってよじ登ると、穴から出たところにさっきの少女がいた。

（さっきは光が少なかったから見えなかったけど、かなり可愛いなあ、おい）

と、少年が内心想うほどの頭に美のつく少女だった。

「ホント助かったよ、ありがとう。ええっと」

「たんぽぽはねえ、馬岱ってゆづの」！

これが少年と馬岱との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語った。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは」と

第二話

日も少しだけ傾き始めたころ、中庭に五人の人物がいた。うち二人はそれぞれ獲物を携えていた。

（いきなりだが、どうしてこうなった！！）

相対する二人のうち、片方は頭を抱えなくなっていた。

（冗談じゃねえぞ！

だってよ、目の前で女が十文字槍を振ってるんだが、風を切る音が尋常じゃないんだぜ？）

勿論、槍の刃は潰してあるのだが、そこは最重要問題ではない。

というより、当人にはそんな些細なことはどうでも良いことであつた。

一番に気にしているのは、何故闘わないといけないか、それも女とということだ。

（まあ、何度考えても行き着く答えは一つだがな……）

そう考えながら、闘うはめになった原因の女性を睨みつける。

睨まれている張本人は、それを笑顔で受け流している。

どうやら実に楽しみにしているようだ。

10メートルほど間をあけ対峙し、戦わんと相対しているのは。

穴に落ちていた少年　真名を陽という　と、そこから這い上が

る手伝いをし、ここまで案内してくれた馬岱の従姉妹である馬超であつた。

「うっし、準備できたぞ！ さあ、始めようぜ！」

準備運動したほうがいいのでは？

本当に闘いたくない陽はそう問いかけ、無駄と言える時間稼ぎをしていた。

結果、実力を目の当たりにしてしまいさらに頭を悩ませたのは余談である。

「ホントに止めにしませんか？ 僕みたいな弱くて、剣を使ったこともない初心者と戦っても楽しくないでしょうに」

「いや、駄目だ！ 母上が強いつて言ってたんだ。やるったら、やるぞ！」

（あの女の言うことを信じているのかよ。

まあ、だったらしい母親の言だから当然とも言えるが、本当にやめてもらいたいんだが）

陽はよりいっそう落胆して肩を落とし、深いため息をついた。
すると

「じゃあ、いくぜ！ ハアアアア！……！」

「ちよっ、待つ、いやあああ……！」

馬超は真っ直ぐ陽の方へ駆け出した。

何の構えもしてなかった陽は、逃げるより他なかった。

「あつ、コラ、逃げるなっ！」

「いいいやああだああ！」

真剣勝負になるはずが、鬼の変わらない鬼ごっこになりかわってしまっていた。

一刻前……

二人は森を抜けるべく歩いていた。

一人は軽快だったが、もう一人はおぼつかない足取りだった。

やはり、林檎一つなど気休めにすらならなかったようだ。

「ねえ、ホントに肩を貸さなくても大丈夫？」

「うん、大丈夫。その気持ちだけ貰っておくよ」

フラフラと歩く様子に、馬岱はちよくちよく気にしてくれているようだった。

だが、森の外まで案内してくれてさえいるのに、これ以上借りを作るのは不味い、と陽は判断し、感謝の言葉を述べるのみに止めた。

「そういえばさあ、何であんなところにいたの？」

「いや、まあ、その……」

(非常に答えにくい質問を……)

そう、陽は心の中で呟く

少し前に思い返していたことなので鮮明に覚えていたが、話すのを遠慮したいほどの失態だったため正確に答えるか否か迷っていた。しかし、助けられた身分であったので簡潔に事の成りを話すことにした。

「あははっ、バカだねえ」

満面の笑みでいいのける馬岱。

そこには侮りも呆れの感情もなく、心底愉快そうだった。

馬岱の一言が陽の心に突き刺さる一方で、その笑顔に釘付けになっていた。

「どうしたの？ たんぼぼの顔に何かついてる？」

「いや、ただ笑顔が可愛いな、と」

「……………っ！ や、やだなあ、もう！」

(頬が赤くなってる。)

(……熱でもあんのか?)

如何にも鈍感らしいことを思考する陽。

馬岱が顔を赤くしたのは、不意討ちの称賛の言葉に免疫がなかった

為だ。

それは、彼女の血筋特有のものである。

「ええ」と、とにかくお腹まだ減ってるんでしょ？」

「いや、問題ない…『ぐう』…：こともないです」

慣れないことをはぐらかすように、あからさまに話題を変える馬鹿。それを気に止めず、否定の意をこめたやせ我慢で返事をするつもりが、陽自らの腹の音に敢えなく失敗する。不様である。

「じゃあさ、家にこない？ 伯母上様も歓迎してくれるよ！ 伯母上様の作る料理本当に美味しいんだから！」

(伯母……ねえ)

親はいないのだろうか、この子は伯母の何を知っているのだろうか、何をもって歓迎してくれるといいきれなのか、実際に歓迎してくれるだろうか。

と、黒い思いを一瞬頭に廻らす、すぐに尻ぎ払われる。

陽の頭の中を占めるはご飯のことばかり。

「お言葉に甘えて行かせて頂きます！」

何故か張り切る陽。

幾分か足取りが軽くなったようだ。

こんな腹ペコキャラにするつもりはなかったのだが。

意外と近かつたらしい馬岱の家のある畠。
何度もいるいるな人に声をかけられながら
だが、奥へとぐんぐん進んでゆく。 実際は馬岱のみに、

「ここがたんぽぽの家だよ」

なんだ、ただの県城か。
少しだけ現実逃避をしたくなった。

(城住みで、かつ見知らぬ奴を勝手に入れられる自由さ。……伯母
はかなりの権力者か。

……馬岱もあつち側の人間らしいな)

陽は燦ぶる思いを胸に、馬岱に連れられ、庭を迂回して厨房の裏口
にまわる。

其処には一人の女性が立っていた。

「只今戻りました伯母上様！」

「お帰りなさい。畠の方は……失敗したようね」

女性は馬岱の手に何も無いことを見て、そう言った。
猪が本当に取れていようがいまいがどちらでも良かったので、そん
なに気にすることはなかったようだ。

「猪捕まえるのには失敗したけど、代わりに人間捕まえちゃったよ」

「……捕まえたのってそつちの子?」

「うん」

(あん? こつち見んなよ)

女性と陽は、視線を交わす。

睨むように見る陽に、女性は笑みを浮かべた。

「……蒲公英が初めて捕まえたのは食べないかね」

「ええっ!」「……は?」

女性のとんでも発言に、心底驚く馬岱と、何言ってるのコイツ、みたいな視線を送る陽。

「冗談よ、冗談 大方お腹を空かせてるからって連れてきたのでしょう?」

「……う、うん」

「だったらご馳走してあげないと」

そういつて女性は厨房に入っていた。

女性を観察する為、口を開かないことにした陽だったが、きつい冗談には嫌でも反応させられことに、少しだけ感心した。

(成る程、厄介だ)

そう、深く思いながら。

「……じゃ、じゃあ中に入ろっか」

あの冗談は馬鹿にも効いたらしく、少しだけ気まずそうだった。陽は気にすることなく黙ってついていった。

「さあ、た〜んとお食べ」

陽の前の机に、結構な量の料理が並べられる。

(どんな時間配分したらこんなに早く出来るんだよ)

自分自身で作ったとしても、これほどは早くはできないので、心からそう思う。

……涎をだしながら。

だからこんな腹ペコキャラにするつもりは(r y

「本当にいいんですか?」

「ええ、早く食べないとさめちゃうわ」

「……では、頂きます」

一度合掌する陽。

陽自身、自分がなぜ食べる前に合掌するのかわからないでいるのだ

が。

幾度となく思考してきたことを頭にしまい、料理を口に運んでいく。

(美味しい)

そう思いながら、ものすごい速さで消費してゆく。

その速さは隣で食べている女の子に匹敵した。

「かなりあったのに綺麗に平らげたわねえ」

「ご馳走様でした」

もう一度合掌する。

量に加え、質も良かったので、陽は心底満足していた。
そこに突然……

「坊主よ、剣をとったことはあるか？」

……違う女性が声をかけてきた。

「ないですけど」

「そうか」

「何か問題でも？」

「いや、問題はないんじゃないが、少し思いつとるがあの」

うづむ、といいながら思考する女性。

陽自身も、何がなんだかわからなかった。
脈絡もなければ、剣に触れたこともないのに、先のように声を掛けられたのだから、当然だろう。

「わからないなら闘って貰えばいいんじゃない？」

片付けを終え、戻ってきたさっきの女性が言う。

「ふむ、それもそうじゃのう」

「翠、この後暇だったでしょう？」

「ん？ そういやそうだな」

陽の隣で食していた女の子が反応する。

「だったらこの子と闘ってみなさい」

「はあ？」「えっ！」

女の子と若干空気になっていた馬岱が驚きの声をあげる。

「この子多分強いわよ」

「よっしゃ！ならやるぞ！」

迷わず返事をする女の子。

そうして勝手に話は進み、そして冒頭へと戻る。

実はこの会話、陽は殆ど聞いていなかった。

ずっと、剣についてを考えていたのである。

しかし、強引に連れて行かれ、成り行きを話され、対峙させられたのだった。

逃げる陽、追う馬超。

この後日が暮れるまで続いた。

この時の事を陽は語る。

「あのとぎの翠姉の目はマジだった」と

第三話

辺りはすっかり暗くなったころ。
城内の廊下を歩く五人がいた。

「明日だ！ 明日は絶対やるからな！」

「丁重にお断り申し上げたいです」

「やるつたら、やるからな！」

「嫌です、ホント勘弁して下さい」

「明日の朝またあの中庭だからな！ 必ず来いよ！」

「人の話を聞きましょうよ……。絶対行きませんから」

先の一騎討ちで闘えず、不満気な顔を露にしながらも再戦の約束を
こぎつけようとすり馬超。

命からがら逃げ延び、疲れきった顔をしながら丁寧にならぬ断つてい
く陽。

諦め切れない馬超。

闘いたくない陽。

そこに、不意に助け船が現れた。

「はいはい、そこまでよ！ とりあえず部屋に入りなさい」

「むう〜」

無理矢理切り上げられたと思った馬超は少々むくれるが……

「明日のことはご飯のあとでゆっくりとね」

……船が出されたのは馬超の方であった。

嬉々としている一方で、もう一方は激しく項垂れていた。

「「「「「馳走様でした」「」」」」」

「お粗末様でした」

「やはり牡丹の作る飯は旨いのう」

「ふふっ、料理だけは薊あひまに絶対負けない自信があるわ」

「他でもわしに勝ってみせる癖に料理だけとはよく言つもの。嫌味か？」

「そんなんじゃないわ。他はうかうかしているとすぐ追い抜かれてしまつほど不安定なものじゃない。内心冷や冷やしてるんだから」

熟女どう、オホン……お姉様方で話が弾んでいるようだ。

牡丹と呼ばれた女性は、娘の馬超と同じように、（むしろ娘が真似してするのであるつか）濃い赤色の長い髪を頭の頂点より少し後ろで一つにまとめている。

そして、薊と呼ばれた女性は、薄めの紫の長い髪を後ろで2つに分けている。

二人とも、歳よりも若い雰囲気を持っている。

（それにしても、旨かったなあ）

そんな二人を気にも留めず、陽は料理の評価をする。

だから、腹ペコキャラ（ry

（……って何でまた馳走になつてんだよ！

逃げにくくなつちまつたじゃねーか！

ちっ！ あのととき逃げる好機だったのによお……。

あの猪娘、足速すぎなんだよ）

元々の陽のプランでは、昼飯を食べたら目を盗んでとんずらしようと試みていた。

しかし、突然闘わされる羽目に 実際逃げていただけだが なり、その所為による空腹に身を任せて流されるがままにしていたらいつの間にか……であった。

どうやら流されるのが得意なようである。

馬鹿、ともいえるが。

「そういえばこの子、名をなんというのかしら、蒲公英？」

「あはは、……聞いてなかった」

不意に、牡丹と呼ばれる女性が、蒲公英に問い掛ける。

しかし、今の今まで聞いていなかったと気付いた馬岱からは、渴いた笑い声が響く。

「あはは、じゃないだろ！全く！」

「それで、なんというの？」

「姓名はありません、訳あって捨てました。ですが、命を助けて頂きましたのでどうか真名の陽、とお呼び下さい」

正直、名前を教えていなかったことを、陽は知っていた。

しかし、これで会うこともないだろう、と考えていた為、敢えて教えようとは思わなかった

のだ。

やはり悔れない、と陽は思った。

「そう……わかったわ。私たちも名乗りましょう」

名前を聞いて満足だ、と言わんばかりに笑みを浮かべ、牡丹と呼ばれる口を開く。

「私は馬騰、字は寿成、真名は牡丹よ」

「儂は韓遂、字は文約、真名は薊じゃ」

「あたしは馬超、真名は翠ってんだ」

「蒲公英の真名は蒲公英だよ」

各々で自己紹介する四人。

陽には名前はどつだつていいのだが、いきなり真名は不味くないか、とは思った。

「此方は真名ぐらいしかお礼に渡せるものがないのでお預けしたのですが……よろしいのですか？」

「よろしいのよ」

（軽いなおい！）

馬騰による即答にツッコミたくなつたが、陽は自制した。

「……わかりました。大切にお預かりさせて頂きます」

（ま、別に構いやしねえさ。

どうせ会つのは今日かぎりなんだからな）

夜中にも出て行こうと思つていた陽には、四人の真名など、本当に些細なものだった。

「そう思つていたときもありました」

ある部屋で、独り言を呟いて頭を抱える者がいた。

先ずは、前言撤回からしなければなるまい。

夜逃げは夜するもので、朝にするものではないからである。

今までになかった結構な待遇を受けた陽は、戸惑っていた。
何時も通り逃げるか、否か。

（夜逃げ、ダメ、絶対！）

という温情に対する背徳心や罪悪感。

（夜逃げ？

はっ、違う違う。

俺は帰るだけさ、家と言う名の広大な大地に！）

という無茶苦茶な合理化による夜逃げの正統性。

この2つによる余りくだらない葛藤の末、結局夜逃げを選択した
陽。

早速、扉の取っ手に手をかけ、押すが開かない。

何度も試みるが失敗する。

蹴破つてやろうか、などと一瞬思うが、流石に夜逃げをするに音は
立てられまい、と諦め。

さらに、此処までの旅路の疲労、頭をフル回転させた副作用による
突然の睡魔。

少しだけ、と寝台に就き睡眠。

起きたらまさかの朝。

という、なんとも馬鹿馬鹿しい展開である。

「お〜い、起きてるか〜 飯だぞ〜！」

突然扉を押し入ってくる馬超に、思考が遮られる。

(ちょっと待て、今馬超は押し入ってきたよな)

陽は、凄く死にたくなつた。

そんなこんなで数刻後……

今日もまた、陽は中庭に剣をもたされ、立たされていた。

「お腹が減りました」

「嘘つけ！ さっき食つたろ！」

「ちょっと厠に……」「さっき行ってただろうが！」「……むっ」

「準備運動は……」「もう終えた！」「……ぬっ」

「ああ、もう！ さっさとやるぞー！」

しびれを切らしている馬超。

どうしてもやらないと気が済まないらしい。

「は、初めてなんです！ 優しくしてください」

「どごその生娘の言葉か！」

まさかの韓遂から突っ込みが入ったことに、陽は少し驚く。そしてそのまま、なかなかやる人だ、などと意味のわからない評価をした。

陽がまだまだふざけていると、馬超が怒りで震えだした。

（そろそろやめようか）

少し、腹を括った。

「はあく〜。じゃ始めましょうか」

そう溜め息をつきながら、適当に構える陽。

剣を握ったことすらなかったはずが、自然と寸分の隙もない中段の構えをしていた。

「へえ〜」「ほう」

牡丹と薊は揃って感嘆の声をあげる。

やはり見立て通りだ、と二人は思った。

「あれが初めて剣を持ったやつに見えるか？」

「見えないわね〜。どう見たって熟練の剣士の構えじゃない」

「そんなに凄いの？」

馬岱が二人の会話に割り込む。

少しばかり槍術をかじっている為、剣とはいえ興味を惹いたらしい。

「そうじゃのう……翠はもしかすると負けるかもしれん」

「えっ！ お姉様が！？」

韓遂の言葉に、馬岱は驚く。

同じ槍術を習つ、自分より遥かに強い馬超が負ける、と聞かされたのだから当然であろう。

「ええ、そうよ。蒲公英もこの闘いをしっかり見ておきなさい」

「はい！ 伯母上様！」

その元気の良い返事のすぐ後に、均衡は破られる。

「ハアアアアア！！」

雄叫びと共に槍を携え真っ直ぐ突っ込んでくる馬超。

馬超の流れるような降り下ろし、薙ぎ、切り上げなどの怒涛の攻撃が、容赦なく襲ってくるのが陽の目に映る。

本来ならば、見えるはずのない左目にも、である。

陽は普段、右目でしか世界は見えない。

何故なら、左目は包帯で封じているからだ。

そこに、無いわけではない。

見えすぎるから、封じているのである。

にもかかわらず。

ちょうど馬超の一撃一撃と重なる太刀筋が、陽の左目には見えていた。正確には、瞼の裏に浮かびあがってくるような感覚だった。

それに伴って、ズキズキと左目に痛みが走る。

それに耐えながら、陽は馬超のあらゆる攻撃を全て、避け、反らし、受け流す。

身体が覚えていると言っべきか、頭の記憶が身体を動かして言っべきか。

とにかく、全ての攻撃に対して身体が勝手に動いていた。

それは陽自身もよくわからない不思議な感覚だった。

「あたしを舐めてるのか！」

「……………」

一度攻撃の手を休め、下がりながら馬超は言い放つ。
なかなか攻撃しようとしないう陽に怒っていた。
しかし、陽は答えない。

「チツ！」

舌打ちをしながら、馬超は一気に距離を詰め、急所である喉元を狙い突く。

その瞬間、今までにない激痛が陽の左目に走った。

中庭に二人立っている。

一方は刃を相手の喉元に突き付けており、もう一方は腕が弾かれ無防備な状態であった。

しばしの静寂のあと、一人が地面に崩れ落ちていった。

剣を落とし、左目を押さえながら。

「知らな……知っている天井だ」

何せ昨日の夜、今日の朝に見たのだから、当然である。

「あつ、起きた？ 伯母上様たち呼んでくるね！」

「あつ、ちよっ！」

馬岱の閉めた扉の音が無情に部屋に鳴り響く。

（ちよっとぐらい待ってなくても良くね？）

半ば無理矢理相手をさせられたのだから、もうちよっと労って欲しかったようだ。

闘いといえは、さっきの痛みは何なのだろうか、と陽は包帯の上から左目を撫でる。

（しかし、だ。

ちよっぴり頬が赤かったのは気のせいだろうか？）

一通り考えたが、分からぬことは分からぬ、ということと陽は思考を投げ捨てた。

そして、先程の馬岱に対する思考を始める。

暇つぶしにもなるので、考えることは好きなのだ。

その後、すぐにいつもの四人でやってくる。
そんなに暇なのか、と思わせる出現率だ。

「陽、アナタの武、凄かったわ。その後すぐに倒れたけど大丈夫かしらっ。」

「……まあ、異常はありませんね」

「本当にお主、剣を振るったことも、持ったこともないのか？」

「……ありません。嘘を言っても仕方ありませんし」

「本当に初心者に負けたのか……」

質問に簡単に答えていく。

若干項垂れている馬超を、陽は気にしないことにした。

「それで、提案なんだけど。……うちにこない？」

「はあ？」

「うちで働いてみないかってこやつは聞いているのじゃ」

「はあ……」

(コイツ、馬鹿だろ)

若干驚き、そして呆れる陽。

予想外の勧誘に、つつい余計なことを考えてしまう。

「なんだったら、家族にならない？」

満面の笑みを浮かべる馬騰。

「「「「はあ!？」「「「「

そんな話を聞いていない四人は、満場一致の驚愕だった。

この時のことを、陽は親友に語る。

「あれは俺の人生の中で二番目に驚いたことだった。一番は、お前に会ったことだがな」と

第三話（後書き）

自己紹介が二話目で、とかw

第四話

「……朝、か」

隙間から僅かばかり入ってくる光に、陽は目を覚ます。

その光が疎ましいと思わなかった日はない。

陽は物心つく前から朝が苦手、否嫌いだった。

また明るる日が来たという合図であり、自らの持つ真名と同じ字を持つ、太陽が何よりも嫌いだからであった。

まだ醜態を晒して生きているのか、と問われている気がして。

自らの真名と比較され、見下されているような気がして。

「戯言だな」

毎朝やってくる嫌悪感を振り払い扉に手をかけて引く。

さすがに1週間前と同じ過ちは犯さないさ、と心で呟きながら部屋から出る。

日課となった剣の鍛練をするために中庭にやってきた陽。

朝の運動にはもってこいであった。

いつも通り 剣の重さと長さに違和感を覚えながらも ゆっく
りと振るってゆく。

自らの記憶を掘り起こすかのように、
剣を振るった記憶などないはずなのに。

（にしても、馬超強えよなあ。

どこからあんな力が女の身体から湧くんですか、っと）

思わず思考してしまっ。

馬超との闘いはほぼ全て反射のように身体が動いており、初闘時に勝利を納められたのもカウンターが反射的に繰り出されただけだった。

初闘時……

首への突きが左目に見えた突きと重なった瞬間、それをどう対処してきたのが、陽の封じている左目に映る。

その対処の仕方を脳で勝手に処理されたのか、身体が勝手に動く。槍の切っ先を剣の腹の側面で軌道を反らし、左足を退いて半身になり、槍に沿わせたままの剣で槍を突き、素早く右手のみで剣を相手の首元に突き付ける、という具合だ。

実際には槍ではなく細剣？の情景が映ったのだが、応用が可能だった。

勝敗がつき緊張がぬけると、流れてきた情報の量に脳が耐えきれず、左目の痛みを伴い気を失ってしまったのであった。

(結局、あれは何だったんだ?)

そんなことを考えながら半刻ほど剣を振るっていると、後ろから声がかけられる。

「お兄様、ご飯だよ！」

馬岱が呼んでいた。

これもこの1週間で習慣になったことだった。

馬騰の家族にならないか発言の翌日に、

「お兄様って呼んでいい？」
と聞かれた陽。

早いだろ、と思いながらも悪い気はしなかったのでそう呼ばせていた。

(まあ、とりあえず飯だな)

そう思い、馬岱の方に向かった。

朝食後、陽は城の一番高いところに来ていた。

馬鹿は高いところが好き、と言っがそうだった所以ではない。

生憎、陽は馬鹿ではない。

多分、そう、めいびー。

というより、抜けていると言った方が適切であろう。

「今日で1週間だな」

馬騰の問題発言についてを思う。

完全に思考がストップし戸惑っていると。

「とりあえず今は保留ってことでいいわね？ 2週間……いや、1週間ね。1週間あげるから考えて置いてね」

と、勝手に決められていくが、有無を言わせない笑顔にコックリと頷いてしまったのだった。

(あれはなかなか怖かったなあ)

縁に足を外に投げ出して座り、そう小さく呟く。そして、頭に両肩、腿など計五羽の鳥を留まらせながら思考に耽る。はたから見れば、なんともコミカルな絵図である。

ここ1週間を振り替えると、ろくなことがない 此処に来るまでとは天と地の差がある 毎日だった、と陽は思う。

馬騰の作る飯を食って、马超の鍛練に無理矢理駆り出され、韓遂には読み書き、ひいては兵法の勉強をさせられ、馬岱に街に連れ出され。

(……使役じゃないの馬騰だけなんだが)

でも、不思議と嫌ではない、と考える自分に困ったのも記憶に新しい。

正直に言えば、比較的に自由なのでいつでも逃げる事ができたが、逃げなかった。

否、本当は逃げられなかった。

- 1、2日目は、ただ飯食らいが出来る、という損得勘定から。
- 3、4日目は、ここまで世話になったのに、という罪悪感と此処の居心地の良さから。
- 5、6日目は、どうしてここまで待遇が良いのか、という懐疑心から。

何故、俺を家族にしたいのか。

ぶんべつ
分別出来ない。

何故、俺を家族にする必要があるのか。

理解出来ない。

本当に俺が家族になっても良いのか。

判断出来ない。

わからない、分からない、解らない、判らない、ワカラナイ。

いくら考えても答えが弾き出されない。

(陽、たしか15歳！

六日過ぎたころかな、イライラする！)

ボケたところで、このイライラはなくならなかった。

突然に、理由もわからず優しくされたことと1週間待つと言われたはいたが、普通ではあり得ない待遇に、陽の中で戸惑いと疑問が生まれる。

疑問はいつしか疑念に変わっていく。
心に巢食う闇がそうさせた。

しかし、先の四人と過ごすときは払拭される。
だが、また独りになると、そういう黒い感情が湧き出てくる。
そんなコロコロと変わる自分に、苛立ちを覚えていた。

気付けば、いつの間にか鳥たちはいなくなっていた。
飛び立っていったことに気付かぬほど深く思考していたのか。
はたまた、暗い思考していることを感じとり、恐れ逃げてしまったのか。

「どっちでもいいか」

八つ当たりの対象にしなくて済むなら。

それ程、動物たちは傷つけたくなかったのだ。

それ以降の思考を打ち切り、陽は寝入ることにした。
呼ばれているような気がしたが無視することにした

「お兄様あ〜」

かなりの声量をあげ、自らの義兄になるやもしれぬ人を探す。
太陽も天高く昇り、いわゆるお昼時であった。

「いつもは、たんぽぽやお姉様、伯母上様、薊様の誰かと一緒にいるはずなんだけどなあ」

そう呟きながら城内を歩く。

辺りを見回してはまた次へ、と結構必死な彼女の名を、馬岱という。
どうして探しているか、と問われたら、陽を昼食に誘う為である。
が、なかなか見つからない。

……この時点で既に城の上にいる陽に、気付けるはずもなかった。

「仕方ないのかなあ？」

(今日、だもんね)

小さく溜め息を吐く馬岱。

義兄になってくれるのか、もしくは友達、悪ければ赤の他人になっ
てしまうのか。

それを決めるのが、今日だ。

馬岱としては、本当はいて欲しいと思っている。

強さに対する尊敬と、何故だかわからない絶対の安心感。

それが、離れたくない理由だ。

しかし、それは兄と呼ぶ陽が決めること。

自身が口出ししていいことじゃないと分かっている。

それが、すこしだけ歯痒い。

「ここにいたい！って思ってくれるように手は尽くしてきたつもりだけどなあ……………」

正直、馬岱ら四人の行動に対し、陽はうつとおしいと思っていた。

しかし、呆れか諦めか、はたまた違う感情か。

こんなのも悪くないと思いついて直している。

馬岱の強引な行動は、かなり良い方に傾いていた。

「蒲公英」

自分を呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向く馬岱。

声の主は伯母の馬騰だった。

「今日はそつとしいてあげなさい」

「でも……………」

「蒲公英は、やれるべきことはやったんでしょ？」

「それは勿論だけど……………」

馬騰の言葉に目を伏せる馬岱。

そこにどれほどの気持ちがあるのかを押し量れた馬騰は、安心させるように笑む。

「だったら待つだけしかないわ。それに多分大丈夫よ」

「ホントに？」

「ええ、私に任せなさい！ だから、昼飯食べなさい、冷めてしま
うわ」

「うん」

どこからその自信が来るのかは分からないが、伯母の言に従う馬岱
だった。

馬超は中庭にやってきていた。

無論、鍛練の為である。

自らの愛槍 銀閃 を振るってゆく。

目前には、最近鍛練に付き合わせた男の姿はない。

また誘おうと思ったが、母様と薊さんに止められたのでやめていた。

「母上や薊さんとは違った強さなんだよなあ」

思わず呟く馬超。

ここ一週間何度も闘い、勝ってはいるが、体力的なことではしかな
く、まだ一本も取れていなかった。

負ける気はしないのだが勝てない、という不思議な感覚を覚える馬
超だった。

「まだまだあたしは強くないと。アイツから完璧な勝利を得る
為にな！」

それを為すにも居て貰いたいんだけど、と結構私欲の傾向は強いものの、残って貰いたいという気持ちはあったようだった。

政務をそこそこに、窓縁に右膝を立てて横向きに座り、外を眺めながらちびちびと酒を飲む妙齡の女性がいた。
韓遂である。

昨日まで、毎日一刻ほど座らせ、勉強させていた机を見やる。
そこに、だらけながらも指示したところまできちんとやる男はいない。

「一体、何を考えているのかのお？」

それは馬騰に問うたのか、はたまた陽になのか。
あるいはどちらにもか。

どちらにせよ、此処にいない存在から答えが返ってくるはずなどなかった。

「才を無駄にしないためにも、此方にいて欲しいが、……何とも言えん危うさも持ち合わせておるからう。……困ったもんじゃ」

思わず溜め息め息が漏れる。

字が読め、かつ勉強させた時、驚くほど速く吸収していく陽の才を潰すには惜しいと思っていた。

しかし、人生経験豊富である韓遂は、陽の心の闇に気付いていた。
その為、どっち付かずの状態であった。

「それに、よく似ておる……。それが所為か、義姉上よ」

思いを馳せるは今は遠き人。

空を見上げれば、厚い雲に覆われていた。

「嵐の予感じゃな」

もう一度溜め息を吐いた

「あーあ、昼食い損ねた」

此処にも溜め息を吐く者がいた。

三刻ほど寝ていたであろう陽である。

「さてさて、時間かな」

そう呟いて城を降りていった。

待ち受けるは波乱と知らずに。

この時のことを陽は語る。

「これはあんまり思い出したくない記憶だなあ」

と

第五話

Side 韓遂

「いつまで続くのじゃ、この下らん言い争いは……」

かれこれ半刻ほど経っておるのに……よく続くのう。

「労働力だといって、強引に連れてかれ、働かされ！」

「強引に手をひかれ、連れてかれるなんて何時ものことだったわ……

…（嫌じゃなかったわね）」

「そのとき、俺は何度鞭でうちつけられたか！」

「私だってあるわ、そんなことぐらい……（主に閨でね）」

「抵抗したら縄で縛られ、何日も放り出され！」

「抵抗したら、縄で縛られ……ああ……」

この1週間でもほとんど出すことのなかった感情を、これでもかと言
うぐらい前に出しておる。

聞いておると、こやつのだ絶な過去がわかる。

それを似ていると言われ、相当腹が立っているようじゃな。
それはまだわからなくもないのだが。

……問題は牡丹じゃ！

さつきから聞いておれば、何の話をしておるのだ。
牡丹の漏らす話の内容が怪しすぎるではないか。
明らかに邪なことを考えておるじゃろう。

しかしながら、いくら似ていると言えども、それを重ねて考えてしまつほど、あやつは愚かではないはずじゃ。
なんととっても、儂の義姉やってるのじゃからの。

義姉上よ……本当に一体何を考えておられるのじゃ？

ある一室で舌戦……舌戦？が半刻ほど繰り広げられていた。
対峙しているのは、言わずもがな陽と馬騰である。

陽は顔を赤らめ激昂中。

馬騰は恍惚とした表情で、両手を違う意味で赤くなつた頬に手を添え、いやいやといった様子で首を振り、ほぼ自分の世界にトリップ中。

馬岱はそんな二人の間で、仲裁に入るかどうか決めあぐね 正確
には隙が見当たらないため おろおろしている。

馬超は自分の母の言っていることが違うことを意味しているように感じるが、知識として無いものがわかるはずもなく、ぼけーとして
いる。

韓遂は据えた目で馬騰を見ている。
というカオス的狀況であつた。

元々、事の発端は馬騰の一言にあつた。

曰く、「自分と似ている」と。
陽は昏間の苛立ちも相まって、冷静にはいらねず、熱くなっていたのであった。

「てか、アンタ、話聞いてんのか！　っ！！」

思わず発してしまった言葉で陽は気付く。

先ほどからほぼ自分の過去の独白になっていたことに。

この台詞を言わせる為に、わざと反感を買うように立ち回り、ここまで誘導されてしまったことに。

嵌められたことに、沸々と込み上がる怒りを残っていた理性を総動員させて無理矢理押さえつけ、馬騰を睨み付けていた。

「せっかく綺麗な顔してるんだから、そんな形相しないの」

「……………」

しかめっ面で、無言を決め込む陽。

「ふむ、やっぱり似ているわ……………同じとっていいくらい」

「　っ！！」

眉間の皺はさらに深くなり、眉も一気につり上がる

「……………なよ……………」

「えっ？」

「アンタと同じだと……ふざけるな！ アンタみたいな幸せ者と俺が、何が似ているだ！何が同じだ！一緒にすんじゃねえよ！」

二度も似ている、更には同じと言われ本気で腹を立てていた。

「そんなこと言っても、……本当はわかっているでしょう。アナタと私は同じ存在……だから、アナタがそれに気付いていることくらいお見通しなのよ」

もともと、陽がこの一週間逃げなかったのは、誘いを受けたときに家族となるそれぞれの人物たちを観察し、見定める為でもあった。そして、馬騰の言う通り陽は気付いていた、いや、感じていた。馬騰のことを「自分と似たような奴」と。

しかし、それを頑なに認めることを拒んだ。認めてしまうと、自分と似た奴が自分の近くにいて、という事態に嫌悪感を感じ、そしてその事実にも劣等感も感じるからであった。

「……認めねえ。絶対認めねえ！」

そう言いながら、左目を隠す為に巻いてある包帯を取り除いていく。決定的な違いを見せつける為に。

「これがアンタとは違う理由だ！」

隠していた包帯をすべて取り去って左目を開く。
そこにあったのは……

「「……………」」「「！？」」「

……………瞳の黒い目だった。

瞳の色自体は別段変わった物ではなかった。ただ、右目とは圧倒的に違っていた。光を入れて、反射させて輝く銀色の右目。光さえ吸い込み、輝きをみせない漆黒の左目。片方ずつなら、何ら問題ない目。右目と左目が相まって、初めてわかる異常。今で言うところ、オッドアイだった。

「綺麗、だね」

馬岱が頬を朱に染めて声を洩らす。馬騰と陽の間に居たので、一番近く、見やすい位置にいた。

「……………は？」

途端、ズキツ、と。

陽の左目に、この前以上の激痛が走った。

「綺麗な目だね」

「……………え？」

「だから、綺麗だつて」

「綺麗？ ……ちょっと待ってよ。どうして？ ……こんなの、おかしー！ この色違いの目が恐ろしくくないの？ ……怖くないの？ おお

ぞましくないの？ 気持ち悪くないの？」

「そんなこと全く思わないね！ むしろ格好いいな、って思ってる」

「あはははっ。綺麗に続いて、格好いいだなんて……可笑しな人だね、君は。でも、ありがとう」

「へ？何が？」

「初めてなんだ……この目をそんな風に言ってくれる人」

「なんで？ こんなに綺麗なのに？」

「君は本当に可笑しくて、不思議で、変な人だね」

「変じゃないよ」

（なんだ、今は。

いつもより……鮮明すぎる。

だというのに相手の顔だけ見えない。

誰なんだろうか？）

記憶から溢れるように見えた映像のようなものに、陽は疑問を持つ。稀にこの手の夢を見るのだが、鮮明に声などを聞いた覚えはなかった。

「ちょっと、お兄様……大丈夫？」

左目を押さえて、痛みから耐えるように歯をくいしばっている陽に心配の色を見せる馬岱。

「大丈夫……だけど、なんでだ？ この色違いの目が恐ろしくねえの？ 怖くねえの？ おぞましくねえの？ 気持ち悪くねえのかよ！？」

とりあえず、さっき小さな自分が小さな少年？に言っていたことを問うた。

それに対して、馬岱は満面の笑みを浮かべ、答えた。

「ううん、全然！ むしろお兄様によく似合っつて格好いいよ！」

「そうね」

「うむ、そうじゃの」

「そうだな」

いつの間にか陽の目の前に周りこんでいた三人も、馬岱の言に同意する。

「はっ……はははっ。可笑しな人たちだ、アンタらもアイツも……格好いいだなんて。おかしい……本当に可笑的だよ」

はははっ、と愉快そうに笑い続ける陽。

両目からとめどなく流れるものを気にもとめずに。

「むう〜！ たんぽぽたちはおかしくないよお〜」

当然のことを言っただけなのにおかしい、と言われたことにむくれる馬代。

「はっ、はは。はっ、はぶっ、ぶぐうっ！」

「笑うなら笑う、泣くなら泣く。どっちかにしなさい」

泣き笑いをし続ける陽は、馬騰にかなり強引に抱き寄せられ、優しい手つきで頭を撫でられる。

ほぼ初めてである母のぬくもりに身を委ね、四対の優しい眼差しに見守られながら馬騰の胸の中でひとしきり泣いた。

この目のお蔭で虐げられ続けてきた苦しみが、全て涙で溢れ出した。心の中で、この人が母なら、ここにいる人たちが家族なら、悪くないと思った。

ここで終われば良い話だが、それは問屋が卸さない。

「寝ちゃったわね……さて、どうしようかしら」

「牡丹よ、お主は止めて置けよ……何をするかわからんからの、ナニをするか」

「し……ないわよ、息子になつたばつかなのに」

「うん？ なんじゃ、今の間は？」

「うっ……かといって薊には渡さないわよ！」

「べ、別に欲しいとは言つておらんわ！」

「ぶっん」

「ぐっ！」

実は別に寝ていなかったりする陽。

息を整えていただけである。

それを勘違いされ、しかもなかなかタイミングを見出だせず、さらにかんりの力で抱かれている。

遺伝というのは不思議で、馬騰と馬超の髪の色は全然違うのに、胸の発育は似ている。

母親の馬騰の母性は素晴らしいものだ。

よって、ぶっちゃけ陽は窒息しそうなのである。

しかし、馬騰と韓遂の二人はにらみ合いで気付くはずもなく。

そんな二人の様子に馬超はあたふたとしている。

（志なんてないが、半ばで死ぬのか俺は！

頼む！誰か助けしてくれる奴はいないのか！）

必死にもがき、偶然、合い言葉？を強く思う。

「ここにいるぞー！」

すると、馬岱が名乗りをあげて二人のにらみ合いに参加。
陽が死にそうだ、ということ伝えていく。
小悪魔的な笑みを携えて。

結果、助かりはした。

だが、陽に助かった気はしなかった。
何故なら、隣で妹分が寝ているのだから。

(H A H A H A ! なんてこった !)

意味分らないテンションで頭を抱える陽。

救った代わりに隣で寝かせろ、と要約するとこんな感じの要求をされ、こっぴどくなった。

(こっぴどなったら自棄だ !)

結局、馬岱を抱き枕にして寝てしまった。

正直、今の陽に家族 なったばかりだが と呼べる者のぬくもりが有り難かった。

翌日、馬岱と顔を会わせる度真っ赤にして逃げられたのは余談であるが。

陽はこの時を振り返る。

「今、俺が俺で居られるのは二人、いや家族皆のおかげだ……。本当に感謝してる」と

第六話

正式に馬家の一員になって 真名も改めて交換し合って 早一週間を過ぎたころ。

陽はまた城の上に登っていた。
前回もなのだが、どう登ったのかは触れないでおこう。

陽がわざわざここにきた理由があった。
それは、新たな悩みが浮上したからである。
陽は悩み、疑問など頭脳労働をするときは一人熟考するタイプなのだ。

故に、一人になりたいのだがこれがなかなかにして難しい。
睡眠以外、ほとんど一人でいる時間がないのである。

半分は納得できた。
何故なら自ら望んだことだったから。
しかし、もう半分はそうではない。

「母さんとの鍛練がキツイ」

陽の義母、牡丹との鍛練こそが陽の新たな悩みであり、一人でいる自由時間が出来ない理由だった。

（何故だろうか？）

俺、別に頼んでないのに強制的にやらされているんだよ？（

そう考えてみたが、理由は正直わかっていた。

しかし、今一度原点に戻らないとやるせない気分になってきた陽は、振り返ることにした。

(あれは、薊さんに相談した時からだったかなあ……)

S i d e 薊

「母さんの、いえ、家族の皆に恩返し出来るぐらい役に立ちたいです」

「……は？」

「だから、兵法とか、教えてくれませんか？」

儂は耳を疑った。

あれだけやる気のなかった奴がこうまで変わり、あまつさえ教えを乞いに来るとは……。

まあ、前は無理矢理だったからの、当然とは言えるのだが。

「ちょ、あのー」

「お、おお、すまんの。うむ、心得た。……じゃが、条件が一つある」

「なんです？」

「堅つくるしい言葉使いはやめぬか。家族内での約束でもあったであろつが」

「あ、ああ、そついやそつでし……だつたな。うつかりうつかり額を軽く叩く陽。

なんじやろつ、凄く腹立たしい。

「全く……」

「でもさ、人に頼むときは誠心誠意でするもんじやないすか？」

「ま、まあ、それはじやな……」

むう、言いくるめられてしもつた。

この辺りは本当に牡丹と似ているところじやな。

まあ、この際じや、それは置いておこつ。

「よし、では早速やろつではないか！」

「あ、無理矢理話題変えたね」

「う、うるさいわ！」

クスクスと笑つておる。

まあ、ここは年の功で抑えて……だれじや、儂を歳だといったのは！

「……？ まあ、頼んだ俺もあれなんだけど、積み上がった書簡の山々はどつすんの？」

「……あ」

「あつはっはっはっ。これ借りてきますね。時間が出来たらまたお願いしますわ」

何冊か持ってでていったしまった。

笑われたのは癢に触ったが、まあ良しとしようではないか。今はとても気分が良いからな。

何故って、牡丹に自慢出来るのじゃぞ？

フフフ……牡丹の狼狽える様子が容易に想像出来るのう

しかし、笑顔を見せてくれるとは……。

一昨日までの奴と同じ人間だとは到底思えんわ。

この日、薊と顔を合わせた者たちは一様に、

「韓遂様の笑みが黒い……」

と言った。

そしてその夜、案の定牡丹の、

「ななな……なんですってええええ!!」

と、某未来の特盛金髪ロールばりに狼狽した声が城内にこだましたという。

そしてその翌日、笑顔だが決して目は笑っていない母さんと出会った。

「役に立ちたいからって、薊を頼ったのね？」

「……まあ、そうだね」

なぜか薊、の部分を妙に強調させてくる。
嫌な予感はそののだが、事実だから同意で返答した。

「何故私のところに来なかったのかしら？」

微かに額に青筋がたっているのだが、……全くもって意味がわからん。

「それはわかりきってるでしょ。母さんが太守だから遠慮しておいただけじゃん」

母さんこと馬騰は、ここ隴西の太守なのである。

蒲公英の行動から身分というか、立場的にお偉いさんだとは思っていたのだが、まさか太守とは思ってなかった。

毎日飯作って顔見せて、としてたから、どんだけ暇な役職なんだ、と思っていたんだけだな。

それを知ったのも、ここ隴西が涼州のかなり西のほうであることを聞いたのも昨日のこと。

自分自身、こんなに西に来ているとは思ってもみなかった。

「それでもよ！ まあ、それはもういいわ。……役に立ちたいのよね？」

「……まあそれは、うん」

「じゃあ、そうね槍を扱えるようになってもらおう」

母さんは満面の笑みだったが、俺は盛大に顔がひきつっていることだろう。

「ここは西涼。漢の領土の北西端に近い位置よ。故に、主に北の匈奴と西の羌からの侵攻を防がないといけないところなの。……たとえ漢に服していても、いなくてもね」

真剣味を帯びた母さんの言葉にうん、ととりあえず首肯する。

「そして、主な戦力というと向こうも同じだけれど、騎兵なの。……ここまで言えばわかるわよね？」

「俺が戦にでるのはすでに決定事項なのね……」

「当然じゃない」

わかっていたことだが、一応、肩を竦めておく。

「もちろん、陽の剣の実力には一目置いているわ。……けれどね」

「馬上じゃ使えない、って訳ね。……ハア」

「そ　理解が速くて助かるわ」

すごく頭を抱えたい事態になってしまった。

「さて、早速始めるわよ！ 私の息子になった以上、手加減はしないわよ！」

「……政務はどうすんのさ？」

「あんなもの、薊に任せたわ！」

おいおい、本当にそれでいいのかよ。
結構やべーだろ。

つか、勉強の時間が無くなるじゃんか。

「いいのよ、二人で交代してやるから。勉強の時間は無くならないわ」

出来れば、心は読まないで欲しいんだが？

「無理　　そうね、蒲公英と翠を呼んで、調練場に来なさい」

コイツ、うぜえw

な感じは本気で腹が立ったぞ、このやろつ。

三人で向かった後は、俺と蒲公英は基礎固め、翠姉　歳はさして
変わらないだろうが、母さんの長女ということでごうよんている

は鍛え直しの猛特訓という地獄のような二刻を過ごした。
昼を挟んで、俺と蒲公英（翠姉は逃げた）は薊さんとお勉強会……
というより講義？を受けた。

……それから昨日まで一週間、二人からまるで腹いせか、八つ当た
りを受けているかのような怒涛の日々だった。

(つか、なんとなくすんなり頭に浮かんだが、地獄ってなんだっけ？)

そう一瞬考えたが、今浮上した疑問も、牡丹の若干正統性を持った、理不尽とも言うべき鍛練と称した暴力さえも、今の陽にはどうでも良かった。

何もかも忘れて、今はこの僅かばかりの休息を享受したいのだ。現実逃避だ！といわんばかりに、陽はふて寝した。

一刻ほど経ち、城下の騒がしさに陽は目を醒ます。人々からは、称賛の声があがっていた。

(ま、多分母さんの軍かなんかだろうさ)

心底どうでも良さそうに見下ろしていると、蒲公英が庭を駆けずり回っているのが見えた。

十中八九、自分をを探しているのだろう、と陽は思う。

そういう役回りをいつも蒲公英が担っていたので、そう予想する。

(まあ、困らない程度に降りてあげますかね。困った蒲公英を見るのは楽しいんだけどさ)

若干酷いことを考えながら、陽は降りることにした。

その後、蒲公英と合流して玉座の隣の部屋に向かった。
合流時に、

「もう！ お兄様！ あんまりわかりにくいところにいかないでよね
！」

と、陽は怒られた。

高い所に隠れず居るのだから、ある意味滅茶苦茶わかりやすいのだが、城の近くからでは流石に見えないのである。
ということ、とりあえず陽は謝罪することにした。

部屋には既に翠もいた。

そのまま牡丹達が来るまで、陽、翠、蒲公英は待機するしかない。
三人が玉座に入らない……入れない理由はたった一つ。
正式な臣下ではまだないからである。

いくら君主の親類であろうが、一応は兵として段階を踏む。
家族だから、高い身分の血があるから、という理由では、この地で
昇進することは不可能である。
外敵からの防衛ラインの前線である地で、そんな甘えは通用する八
ズがないだろう。

因みに、翠はもう軍に所属しているが、まだ玉座に入れるほどの地
位ではないらしい。

それについて、聞いてみた陽。

「あんだだけ強いのに、まだ将じゃねえの？」

「お前に負けたから、下げられたんだよ！」

あともう少しだったんだからな！

と、続いて叫びながら陽を軽く殴る翠。

それは自業自得じゃね？

と思った陽だったが、言葉には出さず、理不尽な暴力を甘んじて受けることにした。

かなり痛そうだったが、こういったスキンシップが陽には嬉しかったようだ。

陽は決してMではない。

そのようなことは断じてない。

(これは大事な事である)

さらに半刻ほど経ち、牡丹、薊、そして陽の知らない二人が入ってきた。

「あつ、山百合さん、瑪瑙、おかえりなさい！」

「山百合、……お疲れ」

「……只今戻りました」

「なーんか、年下から呼び捨てってやっぱしっくりこないわ。それで、翠はボクに対しての労いはないのかしら？」

「うっせ！」

片膝をつき、右の手で握った左手の拳を覆っている、紫紅色の髪を後ろで一つに束ねた者。

据わった目で翠を見て腕を組んで立つ、褐色の髪をツインテールにしている者。

前者は真名を山百合、後者は瑪瑙といった。

勿論、陽は二人を知らず、二人も新たな家族が増えているなど知るよしもなく。

「こいつ誰？」

「この方はどちら様でしょうか？」

「お二方は一体誰のですか？」

と、三者三様に質問するはめになった。

最初は瑪瑙、自然体に……いや適当に。

次は山百合、少々含みを持った笑みを浮かべて。

最後に陽、丁寧語で笑顔と言う名の仮面で覆って。

端からだど、穏やかな様子に見えるだろうが、居合わせた四人には一触即発なムードにしか見えなかった。

陽は語る。

「二人との出会いは互いに最悪な印象を持ってたなあ」と

第六話（後書き）

蒲公英 だというのに、未だ蒲公英成分が少ない、だど……！

第七話（前書き）

遅々として進まねえ……。

第七話

Side 陽

何とも言えない険悪なムードに、とりあえず母さんが仲立ちとして入った。

「陽。この二人は鳳徳、そして閻行。そして、山百合、瑪瑙。この子は馬白よ」

……あ、そついや俺、馬白ってんだっけ。

母さんから貰ったのは良いが、使う機会が皆無だったから忘れてた。髪が白いからって理由で名付けた。冗談らしかったが。と言ったときは流石に殺意を覚えた。

本当はきちんと問い詰めて、理由を聞いてやりたい。

けど、どうせはぐらかさるだけだろうと思ったので止めた。

まあ、こんな話、今はどうでもいいんだが。

「馬、ですか？」

「そつよ」

「……ならば。……私は鳳徳、字は令明、真名は山百合と申します。宜しくお願いいたします」

拳と掌を合わせて一礼する鳳徳さん。
律儀だねえ。

「ボクは閻行、字は彦明、閻艶なんて呼ばれたりもするわ。どれでもお好きにどうぞ」

心底どうでもよさそうな閻行さん。

難儀だねえ。

「姓名は母さん……いえ、馬騰より頂きました、馬白と申します。どうか宜しく」

相手も名乗ったことだし、とりあえず自己紹介しておく。差し障りのない笑顔でも振り撒いておこうじゃないか。

……と、なんとなく昨日のことについて回想に入ってみた。

誰の為にとは聞かないでくれ。

そんで、だ。

俺が鳳徳さんに持った印象は、いけ好かない人、というもの。

まあ俺の場合、含みのある奴と勘繰ろうとする奴には大抵もつ感情だが。

閻行さんに関しては、嫌な奴だ、と言うか嫌いな部類に入る奴だ、と思った。

俺などどうでもよさそうで、明らかに差別的、侮蔑的な目で見ていた。

散々そういつ目で見られていたので、別に表に露にするほどの怒りは感じねえし、俺はそんなに愚かでもねえ。

どんな感情も笑顔で全て包み隠す。

それが、この腐った世を生き抜く為に必要なモノなのさ。

なにに対して持論を語ってんだか、俺は。

そんなことはさておいて。

多分、俺が持つて印象と同じように思っている二人だろうが、なるべく仲良くしなくちゃならない。

「だって、家族だかな」

これは母さんの受け売り。

家族は大切な存在よ、と再三言われているもんで染み着いた。

それに救われた俺自身、余程の事がない限り染み抜きはしないだろうし、出来もしないだろう。主に母さんの所為で。

まあ、黒に垂れ、じわりと広がる白を、染みと言っかは定かではないけど。

そんなことを考えながら、朝日の光も射し込まない中庭で拳を振るう陽。

誰かに教わった訳ではなく、見よう見まねで覚えたので我流の拳法であるが。

これも二日に一回の日課だったりする。

何故早朝、それも日の昇っていないときにやるかという時間が無いのもあるが、何より見せ物ではないからであった。

その後日が昇る頃には、剣の鍛練、朝食を挟んで槍の鍛練へと続く。

(そついや、今日から槍の基礎から基本に移るって言ってたっけ)
と、陽は呟く。

なんにせよ、面倒な母との鍛練があるという事実には、陽は嘆息したかった。

(っと、違うことを考えている場合じゃなかったなあ)

自らに言い聞かせ、強制的に思考を修正する陽。

鍛練のことも大変悩ましいが、二人との距離の詰め方の方が今は大切だ、と考えた為だ。

(さてはて、何日かかるんだろつかねえ?)

これからを考え、小さく息を吐いた。

延々と考えているうちに日は昇り。

さらに剣を振るって半刻たち、蒲公英がやってくる。

「なあ蒲公英……どうしやいいと思う?」

「なにが?」

中庭から部屋に戻るとき、陽は蒲公英に相談してみることにした。そついや主語が抜けてたなあ、と思いつつ、二人の事を聞いてみた。

「山百合さんは、寡黙な人だから積極的に話してみた方がいいと思うよ！ 蒲公英たちがお兄様にしたようにね」

（あそこまでやられると多分きついと思うんだが）

四人で、弓兵が間断なく放つ矢のように自分のところに来られたのは本気で鬱陶しかった。しかしながら、途中からは若干嬉しくなっていたが、ので、そこまではやるうとは思わないが、参考にすることにした。

「んで、閻行さんは？」

「んー……、わかんない」

思わずずっとこけそうになる陽。

最初は何でも聞いて、みたいな自信のある態度だったのに、分からないとあっけらかんと言われたら、そうなるのも無理はないだろう。

（しかし、思案するときの行動がいちいち可愛いなあ）

今も口元を人差し指で押さえ、首を傾げる姿になんともいえなくなる陽。

「お兄様？」

「……っ!？」

惚けてていた陽を心配になったか、蒲公英は顔を覗きこむ。

いきなりのごとに、ドキッとする陽。

(まったく、不意打ちなんだってばさ!)

「どうかしたの?」

「……何でもない」

「ふん。あつ、瑪瑙のことは薊さんに聞くといいよ」

「何故に?」

「瑪瑙は薊さんの娘だからだよ。……義理の、だけれど」

確かに仲がいいな、と思う節もあったがそういうことだったのね、と陽は思った。

そうこうしているうちに、部屋につく。

どうやら陽と蒲公英が最後であった。

陽は静かに謝罪の意で一礼してから席につき、蒲公英は陽のそんな様子に首を傾げながらも席についた。

「皆揃ったわね　では、頂きます!」

「」「」「」「」「」「」「」「」

朝と夕は可能であるなら、なるべく家族皆で食事をする事。
食事初めと終わりは声を揃えて挨拶をすること。
この二つは、牡丹がつくった家族間のルール……鉄則、掟と言っ
ても過言ではないものだった。

Side
陽

「「「「「「馳走様でした」「「「「「

「はい、お粗末様でした」

食事は滞りなく終わった。

昨日の夜と合わせて、二度目の家族全員での会食。

昨日は全く口を開かなかつたけど、今日も、とは流石にいかないの
か振ってきたので、不躰にならない程度に答えておいた。

「そうそう、今日は時間ができないから、三人は山百合から指南を
受けること。いいわね？」

「うげっ！ 山百合のかよ〜」

「……翠様、それは挑発と受け取らせて頂いても宜しいでしょうか
？」

「うっ！ ううう〜、陽！」

翠姉が最初に目についたのが俺のようであるが、我、関せずを決め

込むぜ。

俺には関係ねえし。

まあ、とりあえず、目を明後日の方へ向けておこつ。
鍛練に向かうときに殴られたのは余談である。

「さあ翠様、始めましょうか」

「なあ、山百合、朝のはだな。その、……言葉のあやって奴でな」

「……朝の発言は関係ありません。……半分は、ですが」

中庭の真ん中には、翠姉と鳳徳さんが対峙していた。

翠姉はいつもの十文字槍を携え、鳳徳さんは双戟とでも言うのかな？とにかく、片腕ごとに一本ずつ戟を持って自然体に構えている。鳳徳さんを見れば見るほど感じるものは一つ。

(強い)

今まで観察していて、立ち振舞いといい、纏う雰囲気といい、そして今の構える姿といい、半端じゃないと思った。

翠姉……御愁傷様です。

陽が翠に対して合掌した直後に戦局は動いた。翠から、先ずは一突きと言わんばかりに、鳳徳の心の臓を神速とは言えないものの、それなりに速い速度で突く。そんな一撃を、両腕の戟を胸の前でクロスし、いとも簡単に防ぐ。母さんとの1週間の鍛練でここまで変わるのか、と陽が思うほどの重さと速さの一撃を、である

「……翠様、お強くなりましたね。ですが　「うわっ！」
まだ踏み込みが甘いですよ」

たった一撃で、鳳徳も翠の目まぐるしい成長に気付いたようだ。しかし、簡単には褒めることはせず、更なる力で叩く。変な自信をつけさせない、傲らせないためである。ムチが圧倒的に多い、アメとムチの鍛練が鳳徳独特のスタイルである。

その為、白馬の女王様とか氷帝などといった二つ名があったりするとかしないとか。

S i d e
陽

半刻後、翠姉の番は終わった。相当叩かれたようで、真っ白に燃え尽きていた。おてての皺と皺をあわせて、南〜無〜。

「死んでない！」

俺ですら元ネタが正直わかってないのにさ、よくツッコめるよねえ。
こついう場面で使うということだけはなんとなく覚えてたけどな。
ん、間違ってるって？

……………しらんがな。

俺の変な記憶にいえや。

「誰と話してるの？」

蒲公英さんや……………ヤバい奴見るような目はマジで勘弁してください、
俺の心はガラスでできています。

あれ、ガラスって何？

またか、俺の変な記憶！！

このままじゃ無限ループになり……………ループってなんだあああ！

自爆して、突然頭をぐしゃぐしゃに掻き回す俺を、蒲公英と鳳徳さ
んはひいていたが。

他人なんざ構うものか！

冷静さを取り戻した俺は、楽しい楽しい独り言（泣）を終わらせ、
鳳徳さんの向かいに立った、否、立たされた。
いやいやいや、まだ基礎習ったばっかですよ。
なんでいきなり実践形式！？

と、いろいろ考えながらも表情には出さないが。
ひとえに、人間の学習能力の賜物と言えよう。

「……………では、きてください」

「……ハア」

あんまり乗り気にならないんだけどね……正直面倒だしな。

俺は基礎に習った通りに槍を振っていく。

突き、払い、降り下ろし、このみっちり教わった三つで、相手の急所、鳳徳さんがわざと作っているであろう隙を的確についていく。

「……これならば問題ないですね」

小さく呟く鳳徳さん。

何故だろう、凄く嫌な予感がする……。

鍛練は終わり、昼は適当に食事をすませる。

今はお勉強の時間になるまでのちよつとした休憩。

そういえば蒲公英は、槍の扱いはまだまだだが筋はいい、と鳳徳さんに言われていた。

そのことが良かったか悪かったかは、これからの時代と自分自身の受け取り方次第だけだな。

なんとなく、隣にいる蒲公英の頭を撫でてやる。

ちよつとだけ困った顔をして俺を見上げた後、すぐに笑顔になってくれる。

やっぱり、可愛いな。

乱世の最中でも、この笑顔は無くしたくねえよなあ、と漠然と思っ
た。

陽は語る。

「蒲公英に特別な感情を抱いたのは、突き詰めればこの頃からかも
知れないなあ」
と

第八話（前書き）

まだまだ進まない。
ほのぼのが続くぜ！

第八話

「陽、軍に入りなさい」

「俺、まだ槍術基本。おk？ 軍？ は、問題外」

「却下。師たる私が良いというのだから良いのよ」

「却下は却下だぜ。足引つ張るだけだかな」

「却下の却下は却下。想定内よ、それは。元から協調性がないことぐらい分かってるから」

「却下の却下の 「ええい、喧しい！ 却下却下五月蠅いわ！」

ぬう」

陽の勘は当たってしまった。

いつも通り家族全員で食事を済ませたときに陽は牡丹から通達された。

反論は勿論したが、それも悉く返されてしまい。

陽が折れることで、話は収束した。

陽は盛大に頂垂れていたが。

S i d e 牡丹

元々、山百合たちが帰ってきたら、陽を山百合の率いる部隊に入れることは決めていたんだけどね。

もう少し羌の討伐には時間がかかると思っていたし、陽を鍛えるのにもまだかかるだろうと思っていたのに。

それを山百合が認める程に成長してるなんてね。

……ホント、良い意味で裏切ってくれるわ。

全く、流石私の自慢の息子、としか言いようがないわね

「あ、そだ、あれも陽に任せようかしら……」

この私でも出来なかったんだもの、一筋縄ではいかないと思うけれど。

ま、山百合を認めさせるなんてもっと至難の業なだけけどね

「陽、ちょっとおいで！」

顔がひきつっているわ。

全く、失礼しちゃうじゃない

S i d e ????

俺は元々、三流とも言えないほどのクズに飼われていた。

そいつは気が短く、気に入らないことがあれば直ぐに他に当たり散

らし、気に入らない奴がいれば殴り、なぶり、そして棄てた。そんな奴が、俺にだけは決して何もしようとしなかった。むしろ、可愛かった。

俺がどんなに拒もうとも、へりくだり、貢ぎ、俺に必死で気に入られようとしていた。

俺は世間から賢いと言われている。

他の奴らに劣る気も、引けをとる気もさらさらない。だからこそ気に入られた。

……願ってもいけないクズに。

気持ち悪い！

クズが俺に触れてくれるな！

幾度も、幾日も、幾月もそう思っていた。

そしてそれと同じ回数だけ嘆いた。

何故俺だけ違う！

頼むから解放してくれよ！

と、何度も何度も。

さらに、現実には甘くなかった。

……何故お前だけ。

……お前だけが幸せで。

……お前だけ愛されて。

そんな敵意の籠った目で見られるようになった。

違う！

俺は奴なんかには愛されたくない！

俺はこんなところで生きていたくななどない！

と、何度も叫んだ。

しかし、そんな声が届くはずもなかった。

だから、俺は逃げた。

数日数週間かけて、繋がれた縄を食いちぎって。

幸いにも俺は脚が速い。

振り切ることなど容易かった。

だが、外を知らなかった俺は懸けて、賭けて、駆けるしかなかった。

それが一番身を守ることに繋がることぐらいは知っていた。

だがそれも、長くは続かなかった。

疲労の蓄積と満足でない食事は、徐々に身体を蝕んだ。

そして俺は、崩れ落ちるような感覚に陥った。

……その朦朧とした最中で人影を見たのは、何故かはっきりと覚えていた。

どれ程の時間が流れたのだろうか。

俺は人の膝に頭を預けていた。

何故だか不思議と心地がよかった。

「ほれ、やるよ」

今日は朝から何も食べていなかったの、一心不乱に食べてしまった。

あ、あゝ、俺のがあゝ、という嘆きの声には少し罪悪感を感じた。

まあ、仕方ねえなあ、と呟いた後で。

「ちょっとここを深く入ったところに水場があるから、後でいけよな」と、優しく撫でながらそう言ってくれた。

新天地で、あのクズでない人に優しく、慈しむように見てくれるその銀の隻眼が無性に嬉しかった。

「さてと、そろそろいくわ。ま、ちゃんと休むこつたな。……そんなじゃ、達者でなあ〜」

と言って、行ってしまわれた。

この恩は決して忘れない、と心に刻みこんでおいた。

ふと思えば。

こんなに短時間しか一緒にいなかったのに、もう寂しいと感じてしまっていた。

………ついでに行きたい。

そう思った。

だが、それを俺自身が許さなかった。

動けないのがこんなにももどかしいと感じたのは、初めてかもしれない。

しかし、”主”からの初の命令、ちゃんと休め………こう考えると自然と嬉しくなった。

(未来の我が主よ………再び相見えんことを)

俺は天を仰ぎ見た。

それから、目的をもって走るようになった。
我が主を求め、ひたすらに走った。
そうしたら、ある軍に遭遇してしまった。

「なんだ、こいつ？」

「……さあ」

「十分な体調じゃないようね。……母様たちに任せます？」

「……それが最善でしょう」

抵抗はしてみたものの、弱りきっていた身体には酷なことだった。

そして、今、俺は保護という形でここにいる。

最初、俺には捕らわれている、という風にしか感じられなかった。

一刻も早く主に会いたいのになんかところで立ち止まっている暇な
どない！

ここから早くだせ！

我が魂の叫びを聞け！

そう、ずっと思っていた。

だから暴れたりもした。

「誰かが、誰かが私を呼んでいる！」

そこに、まさか反応する奴がいるとは思っていなかった。

「安心なさい　捕らえる気なんてないわ。……あなたみたいない子には是非ともいて欲しいのだけれどね」

そう言っつて、撫でてくれた。

主並の心地良さがあつた。

主に似ている、と感じた所為なのかは分からないが。

「心に想い人がいるようね。……まあ、簡単には諦めないわよ」
主を見つけていなかったら、この人を主だとしていたかもしれぬ。
不覚にもそう思ってしまった。
だから、少しの間だけ留まってみようと思った。
その判断は間違っていないかつたと証明される日がこんなに早くやっ
て来るとは思ってもみなかった。

S i d e
陽

「だから、痛いつての!」

耳引つ張られるとか、尋常じゃないです、はい。
心底嫌そうな顔をしたのが気に入らなかつたらしい。
そんなこと言つたつてしょうがないじゃないか！
だってどうせ面倒事なもの。

「ほら、ついた。ちょっと待つてなさい」

俺と母さんと蒲公英と鳳徳さんは、ある小屋のそばにある広場に来ていた。

正確には、俺だけ耳を引つ張られ、連れて来させられたんだがな。
鳳徳さんは保護した責任者として、蒲公英は暇潰しと興味本意でついてきていた。

そして母さんがその小屋へ向かい、俺たち三人は待つことにした。

……因みに、俺と鳳徳さんの間の険悪なムード(?)は、鳳徳さんがある程度認めてくれたことで払拭されたさ。

しかしながら、まだぎこちない感じだから、どちらから口を開く、
というのではないけどな。

そうこうしてる内に、母さんがとある馬を引き連れてくる。

あれ、あいつは……。

「……あの馬鹿馬か？」

「ほえ？ 馬は馬鹿じゃないよ！」

「それは知ってる。……知ってるけどさ、俺を生命の危機に追いやった奴を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶ！」

「生命の危機？ …… ああ〜！ じゃあ、あの子がお兄様の食料を？」

「まつ、そゆこつたな」

でも食料がなくなってなかったら、森に入る必要もなかったからなあ。

……だったら全ての始まりはあいつとの出会いからなのかもしれない。
感謝すべきかねえ？

「あつ、ちよつと待ちなさい！」

母さんの声が聞こえたと思ったら、すげえ速さで走ってくる奴がいる。

まあ、あの馬鹿馬だけど。

いや、待て。

……その速度でこつち来んの？
止まるどころか、さらに速度あがってますよ？
流石にあせるぞ？

待て待て待て、ぶつかるときのエネルギーって半端ねえんだぞ！
速度は2乗するんだぞ！
とっさに思い出したやつは知らんが……俺、確実に死ぬぞ！

「ちよつ、とま ひでぶっ！！！」

ちよ、視界が、グルグル、回ってるな。

ああ、これが、フィギュアスケートのジャンプしてる人の気持ちな

んだろうか。

そろそろ現実逃避はやめ
ぐべっはあっ!!!!

地面に叩きつけられる俺。

「いつでええええ!!」

無茶苦茶痛え。

あれ、ちよつと待てよ。

……(身体を確認中)。

馬鹿な！なんともないだと！

骨折ぐらいあつて然るべきな衝撃だったぞ！

こっ、これがギャグ補正と言っちゃつなのか！

……何も言つな、俺が一番わかっているから。

そんなことよりさあ……。

「つか、何で頭突き!? お前は恩を仇で返すのか!」

ブルツ、と鳴いた。

(そんな気はなかった)

とのことらしい。

え、何でわかるかって?

俺は動物たちの気持ちはなんとなくだがくみ取れるんだよ。

ずっと動物だけが友達のボツチだったからな。

「ふうん、想い人って陽のことだったの」

「想い人ってなんだよ、気持ち悪い。……こいつオスだぞ？」

何時の間にか近くにいた母さんが、変なことを呟く。

生物としての壁を超えさせるだけでなく、男色に靡けというか、この母親は。

「何を馬鹿なことを考えてるかは知らないけど。背を預ける主という意味よ」

「……主い？ ちよつとさ、話の飛躍度が半端じゃないんだけど」

「その子に聞いた方が早いと思うのだけど？」

「確かに」

……いや、馬と会話できるのが当然、みたいなこのやりとり、頭おかしいだろ。

まあいいけど。

とりあえず、聞いてみた。

「それで。どうして俺が主？」

（貴方は命の恩人だ。それに、俺は貴方に惚れた。だから、俺の背を貴方に預けたい。駄目だろうか？）

「惚れた、て……。まあ、いいか。これから戦場に出ることになる

だろうが、宜しく頼むぞ」

ブルッ！（おうさー！）

俺が応えてやれば、ここ一番の大きな返事をする。
つか、そんなに嬉しいのかよ。

「……………この子の名前はどつするのですか？」

……………ここに来て、初めて口開いたな、鳳徳さん。

まあ、問題ないけどさ。

「うっ〜ん？」

どうしようか。

漆黒の毛……………なんつーか、記憶の片隅にある黒 号ってやつより細
いしなあ。

脚はかなり速く、立派なたてがみ。

……………カスケ ド？

うん、何故だかわからんが凄くしっくりくる。

しかし、そのまま使ったらいかん気がしてならない。

うむむ、どうしよう。

ま、ここは無難にいくか。

「毛が黒で、兎のように脚が速いから、今日からお前は黒兎だ！」

赤兎馬って、こんな感じで名前つけられた、って聞いたことがある。
我ながらかなり適当だが、喜んでるようだし、まあいっか。

「一筋縄でいってしまったわね。……つまんな〜い」

母さんがふざけたことぬかしてやがったが、ここは抑えてやるつ。

戦場の苦楽を共にする、人馬の主従はこんな出会いだった。

陽は語る。

「黒兎は俺の最高のパートナーだな。……しかし、カスコードって
呼びたいな」
と

第九話（前書き）

今更ですが。

鳳徳の鳳は本来、广に籠です。

でも、ひなりんもこの鳳だし、いいか、みたいな考えです。

第九話

「えーと、私は武官として山百合さんの部隊に入る予定だったと思うんですけど?」

「そうよ」

困惑した様子で質問する者に、淡々と答える。
質問者を見る素振りもない。

「じゃあ、何故太守お側仕え兼侍女みたいなことをさせられているのでしょうか?」

「侍らせておきたいから?」

「何故に疑問形ですか……。で、最も聞きたいのは、この名札の置かれた机と、そびえたつ書簡の山はなんなのですか!?!」

「貴方専用の机と、仕事だけど」

「見りゃわかるわ! じゃなくて、どうして文官みたいなことをさせられそうになっているのかを問うているんです!」

困惑から怒りに一瞬変えるが、それを無理矢理抑えて、あくまで丁寧語で書簡の山を指差して問い詰める。

それに答える者は、満面の笑みを浮かべ、親指をグッと上げてみせた。

「貴方が文官候補だからよ」

「その幻想をぶち壊す！」

書簡の山にパンチする。

勿論の如く、大きな音をたてて崩れさった。

「あ、自分で倒したたのは自分で責任持って片付けてね」

「ち、ちくしょおおお！！」

今にも泣き出しそうな声色で、しぶしぶ山を積み直し始めた。

今までの一連の流れを演じたのは、言わずもがな陽と牡丹である。

いつも、暇な時間は侍女紛いなことをやらされていた陽であったが、今日初めて牡丹の政務室に来ると、昨日までなかった自分の名入りの机に気付いた。

かねてからの疑問であったこと　何故侍女紛いをやらされていたのか　を共に聞いてみれば。

なんとということでしょう、自分の知らないところで役職が増えていくではありませんか。

陽はそんな状況を打開する一手を打とうとしたのだが、あっさり返された為、惨めに片付けをしているのであった。

S i d e
陽

どうしてこうなった！！

何時の間に文官候補になったんだよ。

何時もの一連の流れは。

母さんのお茶を淹れて、母さんからの質問に適当に答えて、ただそれだけの……あっ。

……思い返してみれば、母さんは政治的な質問しかしていなかったっけ。

さらに、たまに書簡まで見せて聞いてきたこともあったような……。

……。
うん、俺か。

そっ、それでも一言あるってもんでしょ、普通！

「どうせひと悶着あるのだから早いとこ終わらせたかったのよ」

だから心を

「それに、解るでしょ？　うちは文官が少ないのよ。……一人でも多く良い人材を集めるのが、太守の務めではなくて？」

ぐうの音もでません。

流石と言つべきなのか、何と言つべきか。

……真面目な母さんに感服したぜ。

「ほらっ、ぼーっと突っ立ってる暇なんてないわよ！」

「うい、了解」

丁寧語は、まあいいか。

Side 三人称

(面倒くさがりだけど、根は素直なのよね)

黙って席に付いて、仕事を始めだす陽を見て、牡丹は思う。だからこそ、有無を言わせないように言いくるめたのだが。その行為が、陽を騙しているようで牡丹は心が痛かった。

しかし、自分は太守。

私情をはさんだ事を言っではいられない。

文官の数が少ないことは、死活問題だからだ。

(陽はいろいろな面で頭が回るから、きっと解ってくれる……。解って、くれるっ)

だがやはり、内心ではとても歯噛みしたい気持ちだった。

無理矢理に自分に納得させようと言い聞かせても、やはり葛藤は避けられないのだ。

牡丹という女は、どうしようもなく母親だった。

(それにしても、さっきの陽の呆け様はなんだったのかしら?)

嫌なことをこれ以上考えることを止め、ふと思ったことを心で呟く。

(ふふっ、もしかして、母さんに惚れてたり……?)

まあ、冗談か冗談じゃないかは別にして、もっと母さんのかっこいいところ見せちゃおうかな)

牡丹はそれ以上の思考を切り上げ、政務モードの頭に切り替える。そんな母親の空気の変化を横目で見た陽は、一層真剣に取り組むことにした。

二人が没頭すると、そこには、さらさら、と筆を走らせる音と、時折書簡を積む音だけがするという、異常な空間が形成されていた。後々聞けば、二人のとんでもない集中力に、侍女たちだけでなく、他の文官たちも入るのをためらったという。

S i d e 陽

二刻後、そんなはりつめた空気が霧散する。

「おっ、終わったあー!!」

いや、やっと終わった。

俺は一山、母さんは三山……とんでもねえです。

いや、初めてだよ!?

かなりの健闘はしたと自分でも思っただけ!

すげえ集中力だったと自分で褒めてあげたい勢いなんです。

にしても、大分時間経った気がする。

その証拠にほら、日が傾いてきて……あ、っ。

「あ、ああああ!」

そっいえば、本日、山百合さんの部隊の召集がかかってたっけか……!

せっかく、最近改めて真名の交換をしたというのに、速攻で信用が落ちた。

……オワタ(、、、)

駄目だ鬱だ死の

……いや、こんな弱気でどうする！

正当な理由があったのだ！

これを使わない手はない！

俺は、断固として戦うぜ！

さて、と。

……死地に赴くか。

横目で見えた母さんが、どこか笑っているように見えたのは気のせいだろう。

修練場に来ると、たくさん**の**兵隊さんがいました。

こんなかにはいるのか。

……やだなあ、出来なくはないけど、集団行動とか苦手なんだよなあ、俺。

そんなことを思いながら歩いていると、真打ちが登場した（汗）
いやまあ、ずっと正面にいたんだけどさ。

「……これはこれは一刻ほど前の召集に応じずそのくせそのまた一刻後に急ぐ素振りもなく平然とやって来られる胆力の持ち主の馬白様ではありませんか」

「すみませんしたー！！！」

普段の寡黙さに背反して、息継ぎなしで皮肉る山百合さんに恐れをなした俺は、その場で土下座をし、頭を垂れる。
普段はお淑やかな人がキレると怖いってよくあるよね。

(因みに。

陽が起立状態から土下座までの時間は、約0.5秒。

土下座に入るスピードにタイムレコードをつけるとしたならば、今のところ、1〜10位まで全て陽の名で埋まることとなる。
そう今のところは、だ。

この後に、自分より素早い土下座をこなす君主が現れることなど、陽は思ってもみなかった。

……思っていたら逆に凄いが)

閑話休題

言い訳もなく、誇りもなく、さりとして臆面もなく。

それが俺が土下座する時の三大信条さっ！

いや、表に出さないだけで、バリバリにびびってます、はい。

そんな俺に何を思ったか、一つ爆弾を落とした。

「……………いいですよ、牡丹様から通達はでていましたから」

……………。

……………えっ？

……………ふう。

オーケー、もちつけ、俺。

よし、深呼吸だ。

吸って、吸って、吸って……………。

「な、ななな、なんですとおー！！ 土下座の意味ねーじゃん！
なんで怒ってます雰囲気醸し出してたかな！？ チクシヨオオオオ
！！ だから母さん笑ってやいがったのかああ！！！」

はい、一気に吐き出す！

この、やり場のない感情に、頭を抱えて、かぶり振ってしまった。
周りから見ればとても痛い人に見えるだろうが、気にしねえ。

……完ッ全に騙された……！

怒りよりも脱力感が半端ねえ。

騙された自分に溜め息が自然にでるぜ。

これを考えたのは山百合さんじゃなくて、あんのどアホ母親だろう。
野郎じゃねえが、ざけんな、コノヤロウ！

「……………ぷっ……………くっく……………」

っていうか、山百合さんの肩が忙しく動いている。

……………笑ってる？

あの山百合さんが、か？

表情筋が本当に機能してるかわからない人が？

いや、俺の前だけ無表情なのかもしれないけどさ。

見上げつつ覗き込むと、必死に堪えようとしていながらも、笑みが
こぼしている山百合さん。

……………うん。

「可愛いな」

あ、声に出してしまった。

だけど、それくらい可愛いかったんだよ。
まあ、日頃の面持ちとの差、所謂ギャップ（だったか？）というものがあつたりはするが。

「……ふざけたことを言わないでください」

そう言つて、いつもの顔に戻つてしまふ。

別にふざけてる訳じゃなく、至極真面目なだけだなあ。

元々の顔立ちは、可愛いというより綺麗つて感じ。

だけど、今のちょっと幼さも残つた笑顔には可愛さがあつた、いや、ホントに。

「……本日あなたのやることはありませんですがしっかり見ておくように」

まるで逃げるように、兵たちに号令をかけにいつてしまった。

あらら、残念。

まあしかし、貴重なものが見れたな。

今日は慣れないこととしてとても疲れたんだ……役得として貰つぐらいいいだろ？

ま、答えは聞いてないけどね。

Side 山百合

牡丹様や薊様には何度も言われたことはあつた。

私の考える男、の中では、あるたった一人の男性だけ、言つて頂い

た人がいた。

自覚がありますが、元から愛想が無かつたらしく、可愛いと言ってくれたのはその三人と、変態さん達だけでした。

……綺麗だけど、可愛げないよな。

……そうだな、厳しいっつーか、怖いっつーか。

……冷たいんだろ。

……でも、その冷たさがまた。

他の男からは同じようなことを何度もいわれました。

流石に最後の人みたいな人たちは殴っておきました。

毎度恍惚とした表情で倒れていくので、根深く記憶に残っています。その総評により、氷帝、白馬の女王様という別名がついてしまいました（乗っている馬は白なのでわかりますが、女王というのはよくわかりません）。

ついた当初は別段気にも止めませんでした。牡丹様が「かっこいいじゃない」と言うので、今は好きだったりします。

とにかく、私の中でのたった一人の男性が亡くなって十余年、私を可愛いと言った者がいました。

新しく家族になった子です。

最初に会ったときは、少々戸惑いました。

あの方に容姿が似すぎていましたから　髪は白く、目付きは悪かったです。

だから、本能で男を嫌う瑠璃ちゃんと違って、敢えて距離をおきました。

そうして、人となりを見ようと思ったからです。

結果は、合格です。

真名のように、輝いていて、イキイキとしていました。

しかし、無邪気さの中に冷徹さも垣間見えたのも確かです。

あの子の武は特殊で、冷徹さの集積とっていいほどに、目が、剣筋が、冷たかった。

そこに惹かれ、認め、そして真名の交換さえしました。

そんな子が、牡丹様の手のひらの上で面白いように踊るものだから笑ってしまいました。

そんな最中に不意に言われました　可愛い、と。

あの頃はまだ十代で、慣れない扱いに戸惑いと恥ずかしさがあったのだと思っていました。

ですが、違いました。

慣れなどありませんでした。

柄にもなく焦りました。

とても恥ずかしかった。

でも、どこか嬉しかった。

だから、取り繕いました。

赤面していないか、それだけが心配でした。

そして、逃げました。

あれは、様々な感情からの逃避でした。

兵の指揮を名目に逃げる最中、忙しく辺りを確認しました。

逃げる私を自身で滑稽だと思えますから、見られたくありませんでしたから。

しかし、それ故に他に見ていた方の存在に気付いてしまいました。

「……………あう……………／／／／」

恥ずかしい。

顔が凄まじいほどの熱をもっているのがわかります。
結果を見るべく、策を考えた人が近くにいることなど、考えればわかることでした。

.....。

くっ！ 陽君、許すまじ！

S i d e 三人称

なかなかの逆恨みもいいところなことを考えていたが、その後すぐに山百合は修練場全体に聞こえるように指示を飛ばした。
どうやら将モード切り替えることで、無事に熱を冷ませたようだ。

陽を陥れ、かつ二人の様子を伺いにきていた者、すなわち牡丹は咳いた。

「あとは、瑪瑙ね」

これがまた大変なのよねえ.....、と嘆息した。

陽は語る。

「このときから、長い間ずっと悪寒が止まらなかった」と

第十話（前書き）

基本的に地の文とかの呼称は、オリ主が真名を預けられたかどうかで変わります。

第十話

「で、なんでボクがアンタなんか指南しないといけないのよっ！」

「知りません。母さんや薊さんに言いましょう」

「アンタ、母様達を侮辱する気！」

「誰もしてませんよ……」

(凄く面倒くさいです、ありがとございました)

陽は閻行と共に、先日来た馬小屋近くの広場に向かっていた。

何故なら、閻行の言う通り、陽は馬術の指南を受ける為である。

さらに、閻行が不機嫌なのは理由があった。

それは、

「ボク、アンタのこと嫌いだから」

この一辺倒なのである。

陽と山百合、閻行が会って、そろそろ1週間が経とうとしているが、話をするまでには関係は進んではいるものの、まだまだ閻行との確執はなくなっただけではなかった。

話といっても先の程度。

如何に距離が縮まっていけないのが容易にわかることだろう。

その為、なんとか二人の関係の修復を試みようとする牡丹、薊の計画が、今回の馬術訓練に繋がるのであった。

「黒兔〜！」

陽は、先日愛馬になったばかりの馬である黒兔を呼ぶ。呼び掛けに応じ、すぐさま猛然と駆けてくる黒兔。

牡丹が言うに、繋いでおくれ無駄、とのことで黒兔はほぼ自由なのである。

しかし、陽の命令によって馬小屋で大人しくしているのであった。

S i d e
陽

相変わらず速いな。

そんなことより、顔面すれすれで止まるのは止めようぜ。

マジで怖いから。

そんなことを訴えながら、首を二回ポンポン、と叩いてやる。するとブルツ、と黒兔が鳴く。

(では、遠慮なくぶつかれと?)

と聞いてきた。

……何故にそう解釈だよ。

まあ、多分冗談だろう。

そう、思いたい。

「へえ〜、仲がよろしいのね。……本当にアンタには見合わない良馬ですこと」

「ですよね〜」

閻行さんは男を下にみる節があるっぽい。

自分より弱い癖に威張ってる奴らがいるというのが癪に障るのだから。

まあ、その点に関しては俺には関係ないけどな。
弱くはねえし、威張ってねえ。

むしろ、下手下手に立ち回ってやってる。
でも、その姿勢が嫌いっぽいから、本当にどうしようもないんだが
な。

……ま、黒兎が俺に見合っただけでもないってのも事実なんだが。

「何笑ってるの、気持ち悪い」

おもっくそひいていやがる閻行さん。

知らず知らずのうちに笑みがこぼれていたらしい。

……自分でも気持ち悪いと思ったんだから世話ねえぜ。

「とりあえず、乗りなさい」

なんて無茶ぶりだよ、おい。

ど初っぱなからなんのコツとかもなしですか!?
指南者として、それはどうさ。

「百聞は一見に如かず、よ。さっさと乗りなさい!」

なーんて高圧的なんだろうか。

残念ながら、俺は被虐趣味なんてないぞ。

むしろ、こう、なんというか。

閻行さんみたいな高圧的な奴とかだと特に

「さっさと乗れって言うてるでしょうが!」

屈させてやりたい。

どうやら、俺は嗜虐志向、らしい。

なんて、アホな思考をしている暇なんざなかった。つたく、乗ればいいんだろ、乗れば。馬銜と呼ばれる馬具を黒兎の口につけて乗ってみせる。

「（ふん……格好だけは一丁前ね）　しっかり内腿を使って、しめあげる気持ちで力をいれなさい！　腰掛けるようではダメよ！」

「こっ、ですか？」

何故だろう、凄えしつくりくるんだが。

懐かしい、訳じゃないんだか、そんな感じ。

どうやったたら上手く乗れるのか、そういうのが身体から湧き出る感じだった。

Side　三人称

「黒兎、ちょっとおもいつきり暴れてくれる？」

「ちょっと、何言ってる！　……っそ……」

閻行は、暴れる黒兎の上に平然と乗り続けている陽に絶句した。

通常数カ月、下手をすると一年以上かかることを、たった1日で平気でやってのけたのだ。

驚いても無理はないだろう。

（……っ、そうよ、黒兎って子が手加減してるだけよ！）

だが、閻行はそのような事態を認めるのを潔しとしなかった。いくら家族の面々が認めた奴といえど、閻行の前にいるのは、ずっ

と蔑んできた男。

簡単には認めるわけにはいかったのだ。

「いやっ、ちよっ、まっ、こくっ、止まってええええ!!」

(限度つてもんがあるだろ!)

そう心で思えば、黒兎はゆっくりと身体を動かすのを止める。
意志疎通って、素晴らしい。

(つかやっべえな、明日内腿絶対筋肉痛だな、こりゃ)

数分動いてもらっただけだが、既に脚は悲鳴を上げている。
かなりの力を使ったのだろうと思ひ、明日の自分の体調を心配した。
その中で、ふと思つた。

(そういえば、ちょっとした助言以外、何も教えもらってないんだ
が)

しかしながら、これについては陽が悪い。

馬術に限らず、何に対しても教わる上で過程と段階がある訳だが。

陽は知らずうちにそれら全てを通り越して、最終段階までクリアし
てしまったのだから。

それを知らぬ陽は、さらに閻行の神経を逆撫でする。

「閻行さ〜ん、教育放棄しないでくださ〜い」

「~~~~~! ……ないわ」

「はい?」

「アンタに教えることなんて何も無いわ！」

(え、帰っちまうの!?)

心底憤慨した様子で帰っていく閻行に、何か怒らすようなことしたか、などと陽は考える。

(今更存在自体に、って言われても困るけどな)

そう思いつつ、陽は黒兎をゆっくりと走るよう指示する。
人の感情の起伏にはたまに疎い陽なのであった。

場所は移ってある回廊。

Side 閻行

「なんなのよ、アイツ！」

なんだか無性にイライラする。

下手に出てきて、へりくだった胸くそ悪い女々しい奴かと思ったら、
たまに男の癖に意外な一面を見せてくる。

今回もそうだ。

馬をたつた1日にも満たない、あの短時間で乗りこなす？

……あり得ない。

そんなことあつてたまるか！

「どうかしたのか？」

「あつ、母様……」

うわ、ヤバ……！

よりもよって母様と会うなんて……。匙投げたってバレたら怒られる！

「またあやつと何かあつたか？」

「……え？」

母様は、優しい言葉で問いかけきた。

……怒つて、ない？

「悩みがあるのじゃろ？ それも陽絡みの。……全部顔に書いてあるわ」

「うっ……」

母様は凄い。

分かり易いのもあつたかもしれないけど、表情でどんなことを考えているのか、大抵わかってしまう。

「一体、儂が何年お主の親しておると思つておるのやら」

「はいっ！ 今年で十年目となりますっ！」

ハッキリとボクは答える。

この十年は、ボクの誇りだから。

「もうそんなになるか……時が流れるのは早いのがう」

「十年なんて、あっという間でした」

「ほとんど代わり映えのない日々だったからの……と、そうではない！」

話を拗らせるでない！

と言われた。

今の、ボクのせい？

「まあ兎に角、話してみよ」

ボクはとりあえず、相談にのってもらうことにした。

気概なく話せる唯一に近い母様に、出来事も、思ったことも全て話した。

「ふむ。……羨ましかったのじゃな」

「なっ！ 違っ「わないぞ」……」

「その才に嫉妬してしまった。……だから認めたくない。そうじゃある？」

「……………」

凶星だった。

そして迂闊だった。

母様は聡明だから、ボクが心のどこかで考えていたことなどわかってしまう。

母様に話したのは間違いだったかもしれない。
ある意味間違ってたかったかもしれないけど。

「まあ、非凡の身である癖に、あやつは堂々としめないから。さらに、自分が非凡であることをわかってないことがなお性質が悪い」

母様もそう評価するの……。

なんだかムカつく！

「これこれ、嫉妬心剥き出しにするでないわ。……お主はお主、奴は奴じゃ」

少しむくれていると、頭を撫でてくれた。

「お主は僕の大切な娘。そうじゃろ？」

「はっ、はい！」

(因みに。

薊は、そんな愛らしい一面を自分だけに見せる娘のことが、堪らなく可愛いと思ったりしている。

結構な親バカぶりである)

「うむ、よい返事じゃ！ そうしたら瑪瑙、お主は陽のところへ戻れ」

「えー」

「えー、ではない 儂と牡丹の頼み、聞けぬか？」

「ううゝ、わかりましたよおゝ」

母様と……牡丹様、の頼みだから、不承不承ながらやることにする。せつかく親子水入らずだったのに、水をさされた気分だわ。

陽は、自分の知らぬところで閻行の 些か理不尽である 怒り
をかっていた。

変わって広場。

S i d e 陽

相も変わらず、黒兔を走らせてる。

まだまだゆっくりとした速度だが、大分慣れてきたな。

「暇だなあゝ」

何やりやあいいのわからんから、ぶつちやけ暇。

「誰か暇潰し相手になってくれる奴はいない……」

あ、ヤバ

「ここにいるぞーっ！」

お約束通り蒲公英が表れた。

こういった問いかけをすると、どこから聞きつけたかわからんが、
ほぼ確実にやってくるんだよ。

……凄くね？

「……………」

うん、現実逃避は止めよう。

……ヤバいって言ったのは違うんだ！

ほら、あれだ、一応訓練中だから遊んではいけないと思ったただけであって。

そっ、そっだ、言葉のあやって奴で……！

決して悪意があった訳じゃ

「どうかしたのお兄様？」

「ごめんなさい」

すかさずの謝罪だ。

蒲公英は何が何だかわかっていない様子。

俺の罪悪感からの行動だから、わかったら凄いんだけどさ。

ふう、危なかつたぜ……。

「……………って、えええ！ お兄様、もう馬に乗れる様になったの!？」

今頃気付く？
っていうか。

「そんなに驚くことなのか？」

「う、うん」

マジか。

馬術、つてのは案外難しいもんなんだな。
でも、半日でここまでできちまったぞ？

俺が凄いのか？

うん、やるな、俺。

「さて、続きをやるわよ！」

自分褒めてたら、さっきより不機嫌二割増の閻行さんが帰ってきた。
一度放棄したのに、平然と戻ってるって、どうよ。

ま、反論は認めない空気だから、黙って従うことにするけど。

「ごめんな蒲公英、呼んでおいて。埋め合わせは今度するからな」

「うん！」

さてと、やりますかねー！。

陽は語る。

「このとき、自分で言ったのを後悔するとは思わなかった」と

第十一話（前書き）

ちょっと遅れた。

第十一話

Side 陽

「ちょ、蒲公英、引つ張らないで！ 痛い！ マジ死ぬ！」

「お兄様が埋め合わせはする、つて言っただよお〜」

「うんっ！ 覚えてる！ だから、頼む、手放してくれ！」

「ええ〜！ そんなこと言うの？ たんぽぽ傷ついちゃったな〜」

「だったら、俺に合わせて歩いてくれよおおお〜！」

案の定の筋肉痛です、はい。

その所為で、ただでさえ歩くのもままならないのに、蒲公英さんは手を繋いだ左手を容赦なく引つ張ります。

拷問ですね、わかります。

「ぐおおおお……痛え……」

時折止まり、左手は蒲公英さんが放してくれないので、余っている右手で内腿をさする。

マジで黒兔に乗るのキツイ。

内腿で挟みつつ、踏ん張るとか尋常じゃない力がある。だから、内腿と腹筋あたりが凄く痛い。

本当に、足腰をもっと鍛えようとつくづく思ったりした。

「大丈夫？」

「まあ、なんとか、な」

蒲公英が顔を覗き込んでくる。
他の部位は別に問題ないしな。

「なら良かった！　じゃ、お兄様、早く早く！」

「そんなに焦ることなんてないだろ？」

「いいから、いいから」

何がいいのかさっぱりだ。

まあいいか。

蒲公英がいいならそれで。

……これで兄貴分らしくなれてるか？

えー、ここで現状の説明だ。

只今俺と蒲公英は街へと繰り出す途中。

前に約束した通り、埋め合わせをする為だ。

本当は、昨日に酷使し続けた筋肉が悲鳴をあげてたから、寝台の上から動きたくなかったんだがな。

しかしながら、蒲公英さんによって手を引かれ強制連行され、今に至ってるのだ。

きゃー、視姦されてるみたい、萎えるう〜。

（信じたくないことに）有名で名声が高く、人気者である母さん、すなわち馬騰の姪であり、性格的なものも相まってか、蒲公英は人気がある。

そんな蒲公英の隣に男　しかも手を繋いでる　、つまり俺のことが気にならないはずがない。

俺は、そ、そんなに見られたら、感じちゃう、な性癖の持ち主じゃないんで、発情なんてしないが、むず痒くなってくる。無論、居心地が悪いという意味で、だ。

大体、こういった奇異の目で見られるのが一番嫌いなんだよ。だから、あんまり往来を歩くのは好きじゃなかったりする。

かといって、　自分で約束した訳だし　蒲公英を無下には出来ない。

べっ、別に蒲公英の為なんかじゃないんだからねっ！

勘違いしないで、自分の言葉に責任を持ってるだけなんだから！

……………うん。

瑪瑙さんと真名交換したときの言い回しの真似、なんだが。

……………男が言ったら、ただキモいだけだな。

もし金輪際、男でこんなようなことを言うような奴がいたら、問答無用で殴ってやるぜ。

おっと、話がずれた。

まあ、視線を受けながらも、人間臭いところを半ば強制的に歩かされてる。

もう両の指では数えられないほど連れ出されていたから、慣れてる

つもりなただけぞ。

「お兄様、こっちこっち！」

「うん？」

俺は、それはもう凄まじく振り回されまくっていた。服屋に入っては物色し、甘味処に入っては冷やかし、また違う服屋に入っては……と、蒲公英がはしごしまくった為だ。知り合いの人、特にご老体には、時たま声をかけたりもしていたのもある。

蒲公英は、お洒落したいお年頃でありつつも、基本いい子なのだ。蒲公英可愛いよ蒲公英。

そんなこんなで、俺は黙ってついていつていた。

「ねえねえお兄様、似合う？」

「……………」

黄緑色の髪留めで横髪をまとめている。（原作でつけてたやつ）おろした髪のままでも良かったんだが……うん。なかなかどうして。

「これ買った」

似合ってるとは思ったけど、……そんな即決されるほどあっけからんに表情変えた覚えはないんだがなあ。
つか、意外と高い。

「蒲公英さんや。……ちょっとここでまっけてくださいな」

「ええ〜！なんでえ〜！」

「さっきのゴマ団子のおかげで足りません」

まあまあ味のだったよ、うん。

「もう、しょうがないなあ〜」

「そんな露骨な反応すんなよな。……多分、すぐに帰ってくるはず？」

「たんぽぽに聞かないでよ〜」

母さんに前借りを要求してくる予定だ。

でも、あの阿呆な母親の気分次第で交渉時間が激しく変わってくるからなあ。

あの阿呆、マジで性格、つか性質が悪い。

聞けば、面白さ第一主義だということらしい。

俺を文官候補にしたの、7割が面白そうだから、だったそうだし。

あの真面目は3割だけだったと聞いた時は、俺の拳は無意識に振り上げられてた。

それに気付いた薊さんに羽交い締めされ、

「無駄じゃ、……諦めい」と諭されたけど。

ハア、……母さんに借り作るとか、気が遠くなるなあ。土下座のみで事足りればいいけどなあ……。

Side 三人称

「遅い遅い遅ーい!!」

蒲公英はほんの少し、ちょーっただけ怒っていた。かれこれ半刻は経っているにも関わらず、陽が一向に帰ってくる気配がないからだ。

自分の伯母、すなわち牡丹が面白いこと好きなことを蒲公英は知っているが、それを考慮し差し引いていたとしても遅いと感じていた。そこに……、

「よう、爺さんよ……ただでさえクソ不味いラーメンに髪が入ってるなあ、どういっつもりだ!」

「アニキの言う通りだ!」

「そ、そうなんだな。美味しかったけど、お金は払えないんだな」

「そ、そんな!」

……それはもう典型的なごろつきが表れた。

蒲公英がいる呉服店の向かい側の、老夫婦が営むラーメン屋でからその声は聞こえた。

蒲公英は、その老夫婦と気の知れた仲であるので、ごろつきの自作自演であろうことを確信していた。

だからこそ、この街の長の姪としても、一個人としても、見逃す訳にはいかなかった。

「おじさんたち、言い掛かりは良くないと思うな」

「おじさつ!?!? ……何が言い掛かりだつて? これを見る!」

そこには、しつかりスープまで飲み干された空のどんぶりの底に、黒髪があった。

「(……うわ、わかりやすっ) でも、これにすぐに気付かないほうがおかしいんじゃない?」

「これでも退かないとは……言葉ではわからないみてえだな。体に教えこんでやるうか?」

「すぐに暴力で解決しようとする。……これだから脳筋は」

蒲公英は、やれやれと言わんばかりに肩を竦め、リーダー格の男をアニキ煽る

「お嬢ちゃん、いい度胸じゃねえか。……表に出やがれッ!」

四人は大通りと呼べる、呉服屋とラーメン屋に挟まれた路地に出た。

(三人組を誘いだすことは出来た。後は、倒すだけ)

蒲公英はそれだけ考えていた。

その頃陽は猛然と駆けていた。

普段は眼帯で封じてある、黒目を開いて、だ。

実はその目、アフリカ人ばりの視力(5・0)を持っている。

右目だけでは見るに心許ない距離にあるものでも、左目では鮮明に見ることができる。

左目が封じてあるのは、そんな両目の圧倒的な視力の違いに、焦点を合わせるのに目の疲れが激しい等、いろいろ不便だという理由も含んでいた。

その曰く付きの左目によって、かなり遠くから、今の蒲公英の置かれていた状況を把握していた。

蒲公英なら多分、そんじょそこの奴には負けないだろうと、陽は思っている。

だが、陽にとって、家族の誰かに手をあげること事態が許せないのだ。

戦ならそうも言ってもらえない、と割り切ってはいるが。

「っ！ チエストオオオ！！」

チビが蒲公英に特攻をかけていたのが見えた陽は、スピードを落とさず、蒲公英との距離にして約五歩の地点で踏み切る。ジャンプ一番で蒲公英を飛び越し、そのままチビの顔面にドロップキックをお見舞いした。

「チビーーーー!!!」

陽は無事に着地し、チビは吹っ飛んでいってしまった。

「蒲公英！」

陽はそれを一瞥し、すかさず振り返り左手を出す。蒲公英は疑問に抱きながらもその手をとった。

「いくぞ！」

「わっ、わわっ」

「てめっ、逃がすか！」

蒲公英の手を引き、駆け出す陽。

いきなりのことに少し慌てるが、なんとか足を運ぶ蒲公英。それを阻止せんとするアニキ。

「誰も逃げるとは、言ってねえが　「ひぎゃっ！　あ、」

突如陽は足を止め、背後から駆けてくるアニキに、右脚の後ろ回し蹴りを放つ。

それはアニキの虚を付けた……そこまでは良かった。

しかし、いかんせん突然だったので蒲公英は止まれず。繋いでいた左手が前に引かれたことによって、腰のひねりと左脚を軸とした遠心力が十二分ついた踵がアニキの右側頭部に入ってしまった。

陽はちよつとだけ罪悪感を覚えた。

S i d e
陽

「大丈夫ですかー？」

正直マジで痛そうだな……。

ハッキリ言って、相当な威力だったから、死んでもおかしくはない。いや、生きてますけどね。しぶとい。

あ、なんかむさいのきた。

「あ、アニキの仇、なんだな」

「正当防衛だ。……つか勝手に殺してやるなよ」

「え？死んでない？」

「ああ。だから金置いて、そいつらもってさっさとどっかいけ」

「わ、わかつたんだな」

「次はねえぞ」

金を置いてそそくさ（といっても、デブ体型かつ、のびてる二人引き摺ってるからかなり鈍重だが）逃げていった。

『うおおおおー！』

『やるな、兄ちゃん！』

途端、賞賛の声があがる。

正直うるさい。

こつこつの嫌いだし。

「ありがとね、お兄様」

「「ありがとつごぜえます」」

「うーん、蒲公英でも出来ることに横槍いれただけなので、感謝される筋合いないんですけどね」

むしろ、邪魔したかもしれんな。

終わりよけりゃ全て良しだが。

陽の、賊二人をいとも簡単にのした実力と謙虚ともとれる態度に、民衆からの評価もうなぎ登りに上がっていくのであった。

その後。

「お兄様」

って、うおっ。

腕を引かれたことよって、中腰みたいになる。

忘れていた筋肉痛がッ！

おおっ、パネエっ！！

そこに、頬に柔らかい感触とともに、聞き慣れない快音が耳に届く。
蒲公英の頬が若干紅く染まった顔が異様に近いんだがな。
何だったの？

「ホントにありがとね」

陽は語る。

「なんだかんだ、町に出るのが楽しみになっていった瞬間だったよ」と

第十二話（前書き）

シリアス？です。

てか、そろそろ主人公設定とかうpした方が良いのだろうか。

第十二話

ある執務室から出てくる二人。
一方は呆れ、項垂れていた。

S i d e
陽

「ねえ、山百合さん あの人馬鹿ですか？ 馬鹿ですよ？ 馬鹿
だと言ってくださいっ！」

「……本当に馬鹿でしたら、漢から見ればこのような辺境の地、直
ぐにでも落とされているでしょう」

「いや、そういうことじゃなくてですね。……百騎で五百人相手に
しろとか、おかしいでしょ！」

「……一人五人斬れば良い話です」

「だから、そういうことじゃねえって！」

「……ならばなんだというんです！」

「なんかキレられた！？ 敵より多く兵を揃えるという常識、完全
無視つてのがおかしいでしょうが！」

「……たかだか賊五百人ごとき、百騎で十分と判断したのでしょ」

「いや、でも、もっと多く兵を用意して、一気に殲滅で良くないですか？」

「……必要ありません。機動力が落ちますし、それに、百騎中には私と貴方、陽君がいるのです……十分過ぎるでしょう」

「どんな働きを期待してるか知りませんが、俺、一般兵かつ初陣ですから！」

「……関係ありません」

「関係ねえの!？」

もう僕ちゃんびっくりですよ。

君主が無茶苦茶だったら、家臣も無茶苦茶とか、なくね？

いや、まあ山百合さんは忠実に従ってるだけだと思うが（むしろそう願いたい）。

それでも、振り回されるこっちの身にもなれってんだ、コノヤロウ。いや、野郎じゃないんだけど。

今から初陣ですよ？

二人とももつと労れや。

完全な被害者たる俺が、ちゃんと政務に励んでいたと思えば、これだ。

「山百合、百騎連れて賊五百人の殲滅、宜しくう」

「……はっ！ かしこまりました」

「あ、陽もついでにいつてきなさい」

「……ええ」

「山百合、連行！」

「……はっ！」

「ちよっ　ぐえ、ぐび、じっ、じまっでまっずっで」

ついでつてなんだよ。

そんなノリで死地に踏み込ませる馬鹿がどこにいる。

そこにいるぞー！だつて？

ははっ……殴つたるかボケエ！

Side 三人称

元々、牡丹は早いところ陽を戦場に立たせようと画策していた。

戦場に立ち、どれ程の実力を発揮し、どのような戦功を立て。

そしてどうやって自分の隣まで登り詰めてくるのか。
楽しみで楽しみで仕方がなかった。

そこへ、偶然にも転がりこんできた、願ってもみなかった賊退治の
依頼。

それも、五百人という、測るにはもってこいな人数。
だから、万が一の為に山百合をつけつつも、あえて兵を減らしたの
である。

「ふふっ、楽しみね …… って、今日の陽の分どうするのかしら
？」

自分の右前には、高々と積み上げられた山が三つ。

そして左前方の陽の机には、これまた高く積み上げられた山が一つ。
いくら考えても、自分がやる、という結果しか見えてこなかった。

「……たーすーけーてーあーざーみー（泣）」

執務室にこだます、悲鳴にも聞こえる声。

まるで、の○太が猫型ロボットを呼ぶような声だ。
されど、援軍が来ることはなかった。

S i d e
陽

意外と近かったな、おい。

「……鋒矢の陣を敷き、騎馬の勢いを持って一気に蹂躪します」

応、と力強く、きびきびとした声で返事をする皆さん。

ま、俺初陣だし、どうせ比較的安全なところだろう。

皆さん頑張れw

そんなことを考えてると。

「……先頭は馬白で」

馬白……馬白……あ、俺か。

……。

(……って、はいいい！?)

危ねえ、声出そうやった。

……あの、こんな状況の経験者はいますか？

その方に質問です。

実際にこういう状況に置かれたときって、爆笑か、渴いた笑いか、泣くか。

どれがいいんです？

ちよつwwおまつww

みたいにすればいいの？

まあ、聞いたところでどれもせず、ただ今の様に無表情を作り続けるけどな。

「質問です！ 何故僕が先頭なんですかー？ この部隊の隊長で

あり、強者である鳳徳様が先頭であるべきではないでしょうか？」

わざわざ手を挙げて質問した。

流石に、ここでは真名では呼ばねえさ。

ただでさえ、今はいきなり先頭に抜擢されるということに不信感を抱かれているのだ。

そこに、上官である人の真名で呼ぶなんて無礼な真似、出来るかつ！
っー話だよ。

そして、ここにいる皆が頷いた。

そらそつでしょーね、ふっー。

「……愚問ですね。答えなどわかっているでしょう？」

いや、答えてやれよ……。

皆さんはわかんねえだろ。

黒鬼のせいだつてことをさ。

何故つて、黒鬼さん速すぎるんだもん。

「しかしー」

「……これは決定事項です。異論は認めません」

やりたくない俺は、反論を試みるが、山百合さんは有無を言わせてくれなかった。

ひどい。

これに対して一瞬どよめく皆さんだったが、すぐに治まった。

隊長の それも将軍中で一番の信のおける（らしい） 山百合
さんの命令にこれ以上とやかく言うつもりはないらしい。

……つかさあ、再三言ってるけども俺、初陣なんだって。
先頭とか死なせる気？

まあ、死ぬのも一興だけど。
でも、生憎と死ねないんだ。

”死ぬな”

……もう五年ほどにもなる、昔に契った古い古い約束。
俺からの約束は破られたのに、俺は何故か破りたくなかった。
ま、今は関係ねえわな

人を殺すコト。

それは意外にも簡単だった。

一人目は袈裟斬りで、二人目は喉への突き、三人目は首を跳ね、四人目は、……と二桁殺したところからわざわざ殺し方や殺した数を数えるの止めた。

死んだ奴のことなど、気にしていられなかったからな。

……いや、いちいち気にする必要なんてないんだが。

俺は黒兎の背の上で、ただただ槍を振るえば良いんだからな。

俺の思念を読み、黒兎は動き。

俺が思考しておらずとも、黒兎は動く。

人馬一体と言うべきなのか、黒兎に動かされている、と言うべきなのか。

とにかく今の俺は、俺たちは、負ける気など起きるはずがなかった。

取り残しは、まあ、後ろに任せますよ。

Side 三人称

先頭を走って 勿論すれ違う奴らは全て斬り伏せて いると、
陽は見たような奴らを見つけた。
確認すれば、この前逃がした三人組であった。

なんとなく観察してみると、その中のアニキが、この賊どもの頭らしいことがわかった。

気が向いた陽は、逃げようとしていたところを捕まえることにした。
陽が、……再登場早すぎだろーが、と思ったのは余談である。

「って訳で、そろそろ死ぬ？」

「いやいや、どういふ訳でだ！」

「そこにいるデブに聞いたらわかるだろ」

「どづいつことだ、デク！」

アニキが振り返り、デクに問う。

間違えることなかれ。

デブではなく、デクである。

その間に陽は黒兔から降りた。

「なあ、兄ちゃん。……また、見逃してくんねえかな？」

デクから聞き、再び陽の方に身体を向ける。

陽が剣呑な目を向けて、腰に刺さっている。今の状況だと槍より使い勝手が良い。剣を抜いて切っ先を向ければ、アニキは慌てて取り繕う。

「勿論タダでは言わねえ！ ……何が欲しい？ 金か？」

陽は無意識の内に、剣の握る手に力を籠めていた。

アニキは如何に自分の身を守るかで精一杯なのか気付かない。

さらにアニキは言葉を紡ぐ。

……それが自らの首を絞める結果になっているとは気付かずに。

「そつだ！ ご要望とあらば女でもいいぜ？ 今いる上玉の奴は皆
アンタに回してやるよ！」

「その金と女は、何処で仕入れた？」

「勿論、そこいらの邑からさ」

「ふん」

陽は右手に持った剣を挙げる　ゆつくりと、されど確実に。その行為は、剣を肩に担ぐ過程であるように見えなくもない。だが、後ろで見ていたチビとデクは気付いていた。……明らかに殺める為の動作であると。しかし、陽の一挙一動にあわせて、凍えるてしまうのではないか、と思えるほどに温度が下がっていくことに。凍てつき、冷たい陽の右目に、恐れ、声すらもだせなかったのである。

「あつ、アニ……」

ピタリと陽の挙げる剣が止まる。

これ以上は流石に不味いと思ったチビは、懸命に声を上げようとした。しかし、その瞬間、冷たい殺気が向けられ、口を閉ざしてしまった。そして、窺うように陽を見た途端、チビは固まってしまわずにはいられなかった。

射殺さんばかりの、酷く鋭く冷たい陽の右目と目があってしまつては。

「あ……い……」

「なあ、だから、なあ頼むよ兄ちゃん！」

チビは身震いが止まらず、押し黙ってしまった。

よってチビの声は届かず、まだアニキは気付かない。

そればかりか、アニキはさすがのように陽の裾をひき、頭を下げたに懇願する。

「頭、上げな」

(へへっ、ちよろいもんだぜ)

そう思いながら、素早く頭を上げるアニキ。
しかし、現実には甘くなかった。

陽の右目が、それを雄弁に語っていた。

すぐにアニキも動かなくなってしまった。
いや、本当は動けなかった、が正しい。
まるで、本当に凍らさせられたかのように、逃げなければ死ぬ、と
頭でわかっているのに、身体が固まってしまっていたのである。

「俺、正直どつちにも興味ねえから。それに、アンタ前科たっぷり
みてえだし、……死ねよ」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない！！
だずげで、があぢゃーん！！)

口を開くことさえ出来ないアニキは、心の中で叫ぶ。
しかしその叫び、陽にとっては駄々漏れの言葉だった。
陽にしてみれば、ここまで動揺しきった人の心を見透かすことなど
容易だったのだ。

陽が目を鋭く細める。

それにより、一気に温度が下がる。

そして……、

「……ちつちええな」

……陽は剣を振り降ろした。

陽は、頭^{かしら}であったアニキの首級を持ち、来た道を帰る。

その道は壮絶だった。

全て一太刀で斬り伏せられた死体が、通った道を示すかのように並んでいたのである。

それを成した者。

それは、先頭をひたすら走った者。

名を馬白、真名を陽と叫んだ。

この戦いは陽が、”西涼の天狼”として台頭するための前哨戦であるかのように、陽のために用意された独壇場だった。

「なんだか、……虚しいよな」

そう思わねえか、黒兎。

道中その声を洩らし、自分の馬に問いかける陽。

されど、今回ばかりは黒兎の嘶く声しか聞こえなかった。

そう。

だから、山百合が、帰ってきた陽に付着した返り血が、陽の涙のよ
うに見えたのは見間違いではなかった。

陽は静かに語る。

「初めての戦で、相手は全滅。俺が殺したのは総勢33人。……意
識して数えてた訳じゃなかったのに、未だに覚えてるよ」
と

第十三話（前書き）

また、ちょっと遅れた。

第十三話

S i d e
陽

憎き太陽から光を受けた満月が、東の空から下界を明るく照らすかのように輝く、俺にとって一番腹立たしい夜。

俺はいつもの城の上に来ていた。

どうやって登ったかは割愛だ。

未だに、騒がしい声がここまで聞こえてくる。

たった百人にも満たない数でのひっそりとした勝利の宴だったはずなのに、この騒がしさはなんさ。

戦後の昂りを鎮める為に酒を飲むらしいが、むしろ酔いによってもっと舞い上がってるんじゃないか？

って感じで、俺にはそのノリについていけないというか、合わないし、考えたいこともあったんで、その宴会から抜けてここに来たって訳。

俺と皆さんとの間にはかなりの温度差があったからねえ……。

正直、皆さんからすると盛り上がり欠ける奴は邪魔だっただろうから、抜けたのさ。

べつ、別に仲間外れにされた訳じゃないからな！

「ぐへっ！」

……今のは、瑪瑙さんの真似した自分への罰だ。

ま、一番の戦功者である（らしい）俺が抜けてもいいのか、って聞

かかれたら、すつげえ答えにくいんだけどさ。

そんなことはさておいて。

今日、初めて人を斬りました。

自らの手で、殺しました。

まだ斬ったばかりであるかのように、手にはその感覚が残っている。未だ戦場にいるかのように、血の臭いが鼻にこびりついている。

だが、特に罪悪感に苛まれてはいない。

……その必要すらもな。

どちらかといえば、俺は悪人っぽい考え方だが、別に殺意に任せているから、って訳じゃあねえ。

誰かを傷つける、斬る、殺すということは、それと等しく自分が、傷つけられる、斬られる、殺される可能性がある。

その因果応報を受け入れる覚悟を俺は持っている。

さらに、殺せば何らかの益に、殺さなければ何らかの不利益を生むであろう奴らを殺したただけだ。

殺すコト＝罪。

俺の頭の中で、この等式は成り立っていないので、なんとも思わねえんだよ。

ただ、虚しいと思うが。

だから俺に、罪の意識はねえ。

かといって、俺自身がやったことが正義だと思っている訳でもねえさ。

人の見方によって、捉え方が違うだろうけどよ。

大体、ガキの頃、散々いろんな人を　特に俺を利用してきた奴らを　見殺しにしてきているから、罪悪感なんて今更ってやつなんだよねえ。

あと、俺、基本大人嫌いだから、マダオ（まるでダメな大人）を消すことができるだけ、俺にはむしろ喜ばしい限りだ。

……この人間嫌い、戦時に湧き出た冷たい殺気の根源となっているっぽい。

よくわからんが、なんとなくわかる。

言ってること矛盾してるけどな。

そういうのを改めて考えられた今だからこそ、本当に、蒲公英には驚かされる。

Side 三人称

ときはさかのぼること、二刻前……。

太陽は沈みかけ、西の空は血に染まったかのように、真っ赤に映えていた頃。

陽と山百合を含めた百騎は帰路についていた。

いや、厳密には98+1+1と言ったほうがよいだろう。

九十八騎が前を走り、その後ろに山百合、さらにその後ろを陽が追っているからだ。

行きは、先頭を山百合、九十九騎が後に続く形であり。戦闘直前に、陽と山百合の位置が代わっただけだった。

では、何故行きとは違うのか。
主に、というか、徹頭徹尾陽の所為である。

陽は、戦が終わっても、アニキ（とついでに二人）を斬ったときの冷たすぎる目と、漏れ出る殺気を抑えられなかった。

陽のその目を見、全身に纏う冷気にも近い殺気を感じた山百合は、一瞬身震いし、怯んだ。

……歴戦の将である鳳令明でさえこの有り様だ。

いくら自分が選抜した九十八騎でも、耐えられはしないだろう。

そう判断した山百合により、隊と陽の間に自分が入る、という今の形に至るのだ。

未だビシビシと背に刺さる殺気に冷や汗をかきながら、山百合は馬を走らせた。

程なくして、城に到着する。

兵のまとめ上げも完了し、戦後処理を皆に一先ず任せ、陽君を連れて玉座に参上しようか、と山百合が思っている。

そのすぐ先に、珍しく出迎えがあった。

牡丹、薊、瑪瑙に翠、そして蒲公英……家族皆が来ていた。

ほとんどは、陽を気にしているのだと分かった山百合は、いちいち言及することはなかった。

「……今しがた、参上奉ろうかと愚考しておりました。しかしながら御足運ばせる結果となりし我が遅行、どうかお許しを……」

山百合は、片膝を着き、左の拳を右手で包み、頭を垂れる。

「別に問題無いわ。こっちが勝手に出向いただけだし。……しっかしかったいわねえ」

「今に始まったことでは無かるうに」

牡丹の呆れを含んだ言葉に対し、薊が答える。

「まっ、そうなんだけどねえ。……ところで山百合、……陽、どうだった？」

「……言わずとも、直にわかると思います」

心配するようで、かつ、好奇心を含んだ牡丹の問いかけに、頭を上げて山百合は答えた。

「「どづいづこと」／＼だ」？」「

「翠、ボクに被せてくるなんていい度胸ね」

「はあ？ お前が被せてきたんだろ？ あたしの真似して」

「何でボクがアンタに被せなきゃなんないの？ ばっかじゃないの？」

「んだと……っ！」

翠と瑪瑙が同時に尋ねる。

見事にハモってしまった仲の良い二人は、口喧嘩を始めてしまう。

「聞く前に、呼べば早いのになあ……………」

蒲公英は、そんな二人に呆れていた。

……………妹分に呆れられる姉貴分ってどうなの、と思っただら負けである。

「……………やんのか？」

「ボクに喧嘩を売るなんて、ホントにいい度胸ね！」

二人の口喧嘩が本格化し、どこからともなく武器を取り出し、打ち合いが勃発……………

「っ　　っ！？」

……………することはなかった。

二人の本能が、無意識に殺気に反応したからだ。

その冷たい殺気が漂ってくるほうに構えれば、山百合がいた。

（山百合さんの殺気はこんなに冷たくはなかったはず）

（じゃあ誰だっつてんだよ！）

（知るか！　ボクに聞くな！）

共通の敵と判断した二人は、意志疎通をとる。

二人の仲は、喧嘩が絶えることがない程最高に良いが、そのお陰が連携は、他の誰と組むよりはるかに屈強だった。

「……あれ、皆勢揃いでこんなところで何してんだ？」

「……へっ？」

山百合の後ろから、聞こえる声に素っ頓狂な声を上げる二人。

(まさかとは思うけど……陽？)

(あっ、ああ、まさか、な)

(あれ？ どうしたのかしら、翠？ 震えてますよー？ ……ビビってるの？)

(バツ、そんなんじゃ……。へっ、人のこと言う癖に、自分も震えてるぜ？)

(ボクは翠とは違うの。……そう、これは武者震いというものなのよ)

(ははっ、そうか、そうか)

(……何よ)

(んだよ、やんのか？)

二人は小声でも口喧嘩するという、なんとも珍妙なことをやってのけていた。

いや、むしろ軽口を叩きあっていないと、耐えられそうになかったのである。

陽が一步近づくとに漂ってくる、心底まで凍えそうな冷たい殺気に。

「……いねほどはね」

「うむ、お主の全盛期を彷彿とさせるようじゃ」

「あら？ 私はまだ現役なのだけど？」

「どの口が言うか。……二年程前から落ちて来ておるぞ」

「まあ、……張り合いがなくなっちゃたからね」

一瞬だけ寂しい目をする牡丹。

「そんなことより、陽ってば、その全盛期とやらの私なんて確実に凌駕しているわよ」

「だったらどうするのじゃ？ あれは流石に不味いぞ？」

薊は、その牡丹の一瞬の変化に気付くも、理由も知っているので、何も言わず流した。

そして、陽についての会話を進めた。

「分かっているわ。そのためにわざわざ私の息子にしたのよ」
「自分と似ている。」

それは、陽の冷たささえ読みきつての発言でもあった。

「よ　「お兄様！」　ムカツ！」

「これ！ 姪っ子に怒りを露にするでないわ！」

陽、と言おうとした矢先、その言葉は違う言葉に遮られてしまう。
それをしてしまったのは、蒲公英。

別に狙った訳ではない。

偶然である。

台詞を被らされたことと、先駆けされたことに反応する大人気ない牡丹。

それにすかさずツッコミを入れる薊。

今でこそ、阿吽の呼吸で漫才できる程の間柄だが、それぞれの娘

翠と瑪瑙 の関係と同じく、この二人も実は昔、仲が悪かったりしたのは余談である。

「お兄様！」

もう一度声を上げ、陽を抱き締める 身長差がある為、抱き付くような形になっているが。

「……無理、しないでね？」

「……………」

他の面々が、冷たい目に、殺気に、たじろぐ中、蒲公英は臆すことなく見上げ、陽の目をきちんと見て訴えかける。その行為に、陽は思わず声を失ってしまった。

蒲公英の武は未だ完成されておらず、相手の心気を感じることにまだ疎かった為、出来た所業だった。

それを知るところではない陽は、今まで何人たりとも近づけなかったのに、それをいとも簡単にやってのけるとは、と素直に驚いていたのだ。

そうして、陽は心のどこかで、大人びた一面を見せるものの、まだ子供である蒲公英を傷付けることを拒んだのだろう。

不安げに揺らぐ蒲公英の瞳に映る自分を見て、

(…………おっそろしい顔してんなあ、俺)

そう思い、苦笑することで纏っていた冷たい殺気を霧散させることに成功させた。

それと同時に、はりつめた緊張感も消え、翠と瑪瑙は揃って腰をおとし、山百合も、ほっと息を吐いた。
一方、牡丹と薊とはというと。

「私って、何なのかしら。…………ぐすん」

「おお、お痛わしい限りじゃ」

よよよ、と言わんばかりに泣き崩れる義姉に、慰めの言葉を掛けるの義妹。
といった、かなりシユール光景を形成していた。

場所と時は戻って、再び城の上…………。

S i d e
陽

そういえば、

「何故自ら武勇を奮い、戦い、そして殺すのか」
と、戦功が認められ、玉座に参上したときに”馬騰様”に聞かれた。

戦で人を初めて殺した兵には必ず聞く、という習わしであるらしい。

奴らがやってきた事をやり返してやりたいから。

一般的にそう考えれば、一番楽なのだろう。

しかし、正義面して、やることは同じってのは最高に笑える。殺しの理由付けとしては、馬鹿馬鹿しすぎるので見当違いだ。

次に、誰々のために、ってやつ。

これも、考えれば簡単なことだろうさ。

だが、求められているって訳でないのに、勝手に、何々の為に、だの、皆の為、とか、責任転嫁にも程があると俺は思ってる。

俺自身、重い嫌いなんで、

「俺は戦う！何々の為に！」

みたいな殺し文句っていいのか？

これも不適當だ。

大体、戦うのに理由が必要か？

人を殺すコトに意味を見出だす必要があるのか？

……等々、いろいろ思ったが、建前上、

「馬騰様の歩む道を阻む者を排除したいが為にございます」と答えておいた。

”母さん”は、すっげえ胡散臭さそうな顔してたよ。

まあ、正直なところ、ひねくれた頭から弾き出された答えは、今のところ一つだけ。

「置かれている環境の改善」

そう、私的な場で”母さん”に本当のことを伝えた。
そしたら母さんに、そんなところだと思った、などと言われた。
心を読んでいましたよ発言には、もう何も言っまい。

陽は語る。

「俺と蒲公英は、孫策と周瑜の関係にある意味似るのかな？ ……
ただ、戦によって引き起こされるモノは真逆だし、やることで冷め
た感情が戻るって訳じゃないけどな」
と

第十四話（前書き）

一限があると、ペースがホントに乱れる。

そんな訳で、また遅れたぜ！

第十四話

「ふっ、やつ、たあ！」

「……まだまだですね」

三連撃をいとも簡単に避け、いなし、そして弾く。そして、流れるような反撃をする。

「わっ！？ あつぶな〜……。だったら、もっと手加減してくれたつてえ〜」

「……良いのですか？手加減しても」

「うう〜……。やっぱ、ダメ！」

「……左様ですか」

片方は、笑顔を僅かに溢すも、また直ぐに真剣な面持ちをして対峙する。

もう一方は、いつになく真剣な顔をして槍を構えていた。前者は山百合、後者は蒲公英である。

何故二人が　というより蒲公英が　鍛練しているか。それは、蒲公英自ら山百合に願い出たからだ。曰く、強くなりたい、と。

先日の賊討伐戦は、牡丹によって無理矢理組み込まれたものであったので、山百合はその分の休暇を得ていた。正直暇をもて余していたところに蒲公英が教えを乞うてきたので、快く引き受けたのだった。

「……………少し休憩にしましょう」

鍛練用の、槍に見立てた棒を杖代わりにしてなんとか立っている蒲公英に声を掛ける。

「……………うう、疲れたあ」

その場に座り込む蒲公英。鋭い一撃ばかりで気を抜くことができないので、その分短い時間でも疲れるのだ。

「……………何故今、強くなりたいのです？」

特に焦る必要はないでしょう？

と、山百合は思い、些か唐突に蒲公英に問うた。

確かに、この今にも乱れそうな不穏な世界で確実とはいかずとも、高い確率で生き残る為には、それなりの腕が必要だ。

しかし、蒲公英は既に、訓練された一兵卒を凌ぐほどの実力をもっている。

焦らず、むしろ時間を十分に掛ければ将になれるだろう、と山百合に思わせるほどの資質があった。

時間を掛けずとも、今回の様に 質を上げればなんとかなら

ないでもないが、時間を掛けるにこしたことはない。
だから、何故強くなりたいのか。
山百合は理由が聞きたかった。

「…………お兄様には内緒だよ？」

指を唇に当ててジェスチャーする蒲公英にコクリ、と山百合は頷く。

「ホントはね、あのとき、すっごく怖かったの」

(…………あのとき、とは…………?)

と、山百合は思考する。

「お兄様がお兄様じゃない様に見えて、怖かった」

(…………あのとき、ですか)

話し始めてからずっと伏し目がちな様子と、ポツリポツリと小さく
呟く様子に、山百合は解釈する。

あのとき、とは、陽が初陣から帰ってきたときのことだ。

確かに、戦中、後の陽君は別人の様だったなど、山百合は思い返す。

「目も、いつも以上に鋭くて…………。でもね！」

「…………でも？」

「どこか悲しそうで、辛そうだった。泣いてる様にも見えただ…

…」

「……………」

いつも明るく、元気な蒲公英が陰りをみせる。

浴びた血が陽自身の血涙に見えていた山百合は、無言で頷いた。

「だからね、お兄様の悲しさ、辛さを共有したい、共感したいって思った……、んだけど」

「……………だけど？」

それだけの意志だけで今は十分だと思うが、まだあるのか、という疑問に、思わず言葉を復唱する山百合。

「たんぽぽはまだ子供だから、戦にはいけない。けど、あと少しも経てば、戦場に立つ日がやってくるのは分かってる。だからね、そんな時にお兄様の足を引っ張りたくない……むしろ支えてあげたい、助けてあげたい、って思ったの！」

「……………！ 成る程」

勿論、街のみんなを守りたいって気持ちもあるけどねっ！

と続け、いつも以上の眩しい満面の笑みを浮かべる蒲公英。

好きな人の為に、と、自分の気持ちをこんなにも素直にだせるのか、ここまでのカクゴを持っているのか、と山百合は素直に感嘆する。

（……………まだまだ子供だ、と思った私は見誤っていたようですね。

流星は牡丹様の姪……いえ、自らが持つモノに血統なんて関係ありませんか）

知らぬところで成長していた蒲公英を、我が子であるかのように山百合は喜んだ。

「……でしたら、すぐにでも再開しましょう」

「ええー！ もう少し、もう少しだけ休憩！」

「……強くなつて、陽君を支えたいのでしょう？」

「うっ……。そつ、それは反則だよ」

蒲公英は、やっぱり話さなければよかったかなあ……、と頂垂れながらも立ち上がる。

山百合はそんな蒲公英を、少しだけ、ほんの少しだけ羨ましい、と思っていた。

時を同じくして、陽は、というと……。

「ふあ〜……ああ〜、ダルいや暇や平和や、ダルダルダルビツシユ
やあ〜」

……山百合同様に休暇を貰っていたので、二度寝できたからという非常に微妙な理由で、いつになく上機嫌だった。

いつもの様に日が昇らぬうちに起きた陽だったが、今日は非番だ、
と思い返し、やることに特に見つからなかった。日課の鍛錬も、
今日はない日だった。ので眠った。

しかし、非番だろうが、勿論のこと朝夕食時のルールは適応される。
……むしろ非番ならば尚更のはずである。
ということだ、

「なんでボクがつ！いつもみたいに蒲公英でいいじゃないっ！」
と呟きながら瑪瑙が陽の寝室に赴いた。

……が、寝ている陽を起こさなかった、否、起こせなかった。
寝顔が幸せそうであつ、可愛かったから、というなんともベタな理由だつた。

いつもとの凄まじいほどのギャップを感じつつも、邪魔してはいけないという感情が湧いたので、そつとしておいたのであつた。
そのことにより、現代でいうところの、10時頃まで情眠を貪っていたのである。

S i d e 陽

何もすることがない退屈感が好きですが何か？
長く寝過ぎたときの倦怠感も好きですが何か？
ダルビツシュって誰ですか？

……一体、誰に話しているのだろうか。
まあ、いいか。

「腹減つた」

こんな時間にメシがある訳ねえだろうなあ。
久々に作るのかな。

ずっと主に母さんの料理しか食ってなかつたし。
まあ、母さんの料理旨いからいいんだけどさ。
だが、たまには自分で作るってのも悪くないだろう？

「という事で、やって参りました、厨房です！」

周りに誰もいない。

……なんか寂しい。

さて、朝飯というには遅い、昼飯というにはまだ早いので、仕込みをすることにしました。

……麵打ちからやろうかな。

料理に関して、俺は本格派だ。

やるからには全部自分でやらんと気が済まん夕チなのだ。

「……なんもねえ」

マジでびびった。

野菜がない小麦粉もない肉とかもない。

……なんもできねえええええ！！

あぁつと、かろつじて豆腐があった。

……なして？

豆腐だけとか最早意味わからんわ。

いいよもう、……麻婆丼にするから。

ひき肉買いにいつてこよ。

母さんの商談は成立し、お金貰いました。

「その斬新な麻婆井とやらを私にも作りなさい」

要約するとこんなん。

別に作る分には問題無いんだけどさあ。

……麻婆井って斬新か？

などと考えていると、ちょうど中庭にさしかかった。

「あれ？ 蒲公英……と山百合さん？」

母さんの執務室から外に行く廊下を通ると、中庭が見渡せる様になつている。

いわゆる、ご都合主義？

とにかく、珍しいと言えば珍しい組み合わせでの鍛練がちょうど終わつたっぽい。

「お兄様、どこかいくの？」

あ、蒲公英さんに気付かれました。

別に隠れてた訳じゃねえけど。

「まあね。ただの買い物さ」

「たんぽぽも行くー！」

「構わんけど……大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題 「それを言ったらいけません！」 むむっ」

肩で呼吸してるもんだから心配してやれば。

キリッ、って感じで言い出すもんだから、一応遮っておきました。

「ホントに平気か？」

「うんっ！ ぜんぜん疲れてないよ！」

「……ならば、もう少し 「さっお兄様、行こっ！」 ふ、仕方ありませんね」

俺の手を取り、逃げるように走りだす蒲公英。

山百合さんが、分かっていたけどね、的な感じで肩を竦めている様子が見えたが、気にしないの方向で。

Side ????

この邑に来たのは久方ぶりだ。

捕らえられないように、わたしの住む村の周りにある村や街、邑を順番に巡っているから、前回来てからずいぶんと間が空いちゃった。

さて、本日の狙いは、っと。

そーだなあ……、鈍重なデブとか、女連れの優男とか、かな。

そういう奴らからって、すっごく簡単なんだよね。

サクッとこっちやおう

そこに丁度、前から、白髪で左目を眼帯で覆っている、少し背が高

めで、穏和そうな雰囲気の男と、少し長めの薄茶の髪を左横で結んでいる、活発そうな雰囲気の少女（といってもわたしよりは2、3歳は上だろう）が仲良く手を繋いで歩いてくる。いかにも仲睦まじい兄妹、だ。

……関係、ない。

他の兄弟姉妹がどうなっても、幸せを奪う結果になっても。

……関係、ない。

自分の弟の為に、家族の為に、わたしはなんだってしてやる。

男は右手を繋いでいる。

左目が覆われてるから、空いている左側は死角になってる。

まさに、カモがネギを背負っているのに、翼までもがれているような状態だ。

こんな千載一遇の好機、逃す訳にはいかない！

（いつもの様にぶつかって、懐に手を入れ、盗って、平謝りして逃げるだけ）

頭の中で唱え、イメージしながら、少女はその二人組へと足を運ぶ。顔を俯き気味にし、小走りして、さも、急いでいるかの様に。

「……っと、そうだった」

「……っ！……」

男が左足を半歩翻したことで、左半身に当たりになっていた少女は当然すかしをくらう。

しかし、ただでは転ばないのが、スリのプロ。

懸命に手を伸ばし、相手の服の裾を掴んで崩れかけたバランスを戻し、懐にもう一方の手を伸ばした。

……が、左腰に刺さる男の剣によって阻まれてしまった。

一般人では明らかに目視不可能な引っ張られる裾に注意がいくため、手が、動かないはずの剣に阻まれた。

それは、格の違いを意味した。

「……やっぱり、か」

腕を捕られ、バレていたかのような発言に驚愕の色を露にするスリ未遂の少女と、理解が追いつかず思案顔をする、言葉を発した男と手を繋ぐ少女。

「スリが辺りで多発している」ってのは何回か報告にあったけど、まさかなあ……」

「……どういうこと？」

「んー、母さんがね、”買い物ついでに、スリ事件解決してきてねー。今回はこの街っばいから”って言ってたんだよ」

男、すなわち、陽の困ったような声色に、手を繋いだ少女こと蒲公英は、陽に問う。

すんなりとお金を持たされた理由は、ここにもあったのだ。

「まあ、元々視線には気付いてたけどさ」

(獲物を捉えたような視線にね)

と、心で言葉続ける陽。

スリ未遂の少女は慌てて土下座する。

陽から見れば演技甚だしく、慣れた動きの様だった。

「ごめんなさい！ その、お金……がなくて、貧しくて、日々の食事も儘ならなくて……」

「こんなに肉付きが良くて、顔色が良いのにか？ はっ！ 嘔泣きもいいところだ」

涙ぐみながら、ぼつりぼつりと話す少女。

そんな少女に、容赦無い言葉をぶつける陽。

冷たささえ覚えるほど瞳は、少女の心まで見据えていた。何気に酷い。

しかしながら少女は、気丈にも睨み返していた。

「お兄様っ！」

「……ふっ、わかったよ」

グイッ、と右手を引かれたので、陽はそっちを見る。

そこには怒った顔の蒲公英。

元々、それ以上責める気なかったのか、蒲公英に怒られてなのか。

陽は鋭く冷たい目を止め、少女に笑いかける。

突然のことに、少女は目を丸くした。

「子供は素直なのが一番なんだぜ？」

左手を自分の懐にもっていつてある袋を探し、その袋の中のあるものを少しばかり抜き取って服のポケットらしきところに入れてから、少女の目線と合わせるようにしゃがんで袋ごと手渡す。

「ほれ」

「…………え？」

そして、手を困惑する少女の頭にもっていき、わしゃわしゃと髪をかき混ぜる。

初めはビクツ、と身体を震わせるが、すぐにくすぐったい感触に少女は身を任せた。

…………右隣で羨ましそうにそれを見ているのは割愛である。

「もう、すんなよ？」

「…………っ！ うんっ！」

もう一度目を合わせ、少女に説く陽。

暗に次は見逃せない、という意味を込めて。

それをしっかりと感じた少女は、力強く頷く。

厳しさと優しさに触れて、心から改心しようと思ったのだ。

納得した陽は、手を頭からどかす。

そのときの少女の名残惜しむような目には気付かなかったが。

「……見逃してもよかったの？」

「いいさ。無かったことにすれば問題なしだ」

「……たんばぼ、言っちゃおったなあ〜」

チラリと見るは俺の左手。

よし、撫でてやろう。

「っ！ えへへっ」

これで多分大丈夫だ。

確信はないけど。

にしても、見逃すのは流石に不味かったかな？

しかし、睨み返すあの目。

家族の為なら！弟の為なら！

そんな意志の強い目。

はつきり言って、気に入った。

だから見逃してしまった。

……仕事に私情を挟むのはこれっきりにしよう。

あれは私事に近いから良かったものの。

甘えてはいけない。

そういう世界に 自らの意思ではなくとも

今更、後には退けない。

踏み入たんだ。

さらさら退く気もない。

だったら割り切ろう。

戦は戦、政治は政治、民は民、そして、家族は家族、と。

そして、自らに誓おう。

母さんを必ず支えろと。

確かにそれによって、失うこともあるだろう。

けど。

今より輝こうとする子供たちを、汚い道に走らすことを留めることができる。

俺にとつて一番下らない存在でも、基盤である大人たちが、安心して安定した生産ができる。

今まで柱となってきたご老体を休ませることが出来る。

そんな近道となるのだから。

まあ、結局は自己満足さ。

だから、全て自分の為、だ。

戦う理由は、おかれた環境の改善。

以前、そう言った。

それも突き詰めれば自分の為だ。

半強制的に戦場に立たされるなら、書簡の山の前に立たされるなら、

そんなことをしなくて済むように。

自分が苦勞しなくて済むように。

そんな環境にする。

それすなわち、平和な世を作る、ってことになるよなあ……。

なんて大言壮語。

なんて甘ったれた考え。

……けど、それくらいじゃないと、面白くもなんともなくね？

ま、ただの一武官、ただの一文官の下らない決意さ。

聞き流してくれても、大爆笑してくれてもいい。

家族の皆はどつちもしなさそうだから、話さねえ。

母さんと薊さんはニマニマと笑い、山百合さんは無表情で笑い、瑪瑙さんは馬鹿にして笑い、翠姉は少し呆れ気味に笑い、蒲公英はいつものように可愛く笑うだろう。

だからこそ、……話さない。

思わないところできっかけを見つけたなあ。

喜ばしいことではあるけども。

さて、心は決まった。

後は身体、行動で示すだけだ。

…… やつとこさ深い眠りにつけそうだ。

やつぱ曖昧は駄目だなあ、とつくづく思った。

覚悟はあれど、決意は足らず。

そんな曖昧で不安定な心だったから、眠れなかったんだろう。

まあ、そんなのは今となつてはいつでも良いけどな。

とりあえず、まずはひき肉を買わネバダ。

お金だが、一握りだけ抜いて全部あげちゃったんで、ぶっちゃけ足りるかはわからんけど。

ま、母さんのさえ作れば文句は言われんだろう。

おっと……撫で回しすぎた。

目を回している蒲公英が可愛いと思ったのは秘密だぜ？

無事買い終え、作った麻婆丼が大盛況だったのは言うまでもないだろう。

陽は語る。

「まさか麻婆丼から始まって、俺が作った丼物やその他諸々がこんなに流行るなんて思わなかった……。そのお蔭でこっちは大富豪なんだけどな！」

と

第十五話（前書き）

一気に飛びます。

キングダムズンってやつですね、わかります。

第十五話

あれからざっと一年あまり……。

俺は武官としてだと、立派かどうかはさておいて、將にのしあがった。

文官としては、上から数えたほうが速いぐらいになっていた。そうした中で、まさかの軍師にもなっていた。

將軍兼文官兼第二軍師。

……なんつー兼業だよ。

初めに將軍。

正直まあまあだな。

俺は人の命を預かるとか出来ると思っていない。

預かるとか、そんな軽いことが出来るモノじゃねえだろ？

つてことで、自分の命は自分で責任を持って、と俺は言ってる。

部下の兵たちは、今までに言われたことのないあるうことと言われて、最初は戸惑っていたが、今は見違えるほどに成長した。

求心力も並より上。

つか、俺の隊からは心酔(?)されてる。

上出来じゃね？

次に文官。

かなり上の位置にいる。

……正直言えば、軍師職と被っていないくもないが、とりあえず、薊さんに比べればまだまだだ。

母さんの次席に勝て、つてのもアレだけどさ。

最後に軍師。

兵法や用兵術が、出来る出来ないで言えば、出来る。そら将やってんだから、一通りできるさ。

けど、あくまで將軍としてのそれらで、全体を動かすそれらではなかった。

だというのに、一番頭が回るし、軍師いないから、という理由で渋々やってる。

第二、とつけば第一がいるだろう、と思うだろう。

しかし、第一は10数年ほど前からずっと空いている。埋まることも、埋めることもないらしい。

だから実質、俺が筆頭軍師ってな訳。

なったからには、と、なかなかにあくどいこともやっている。

所詮は付け焼き刃みたいなもんだがな。

それぐらいしとかないと、ねえ？

まあそれにより、五胡相手には 戦略的撤退は省くと 負けは一度だけ。

敗北という味を知つとかないと後々困るだろうから、負けたのは良い経験だ。

賊相手には全勝。

取るに足らないからな。

何故ほぼ全勝できるのか。

詳しくはまたいずれ、だ。

とにかく、そんなこんなで、將軍の俺より軍師の俺のほうが信頼されている。

……困りもんだがな。

死神だの、狼だの、成公英の再来だの、色々言われている。

別に二つ名を気にしちゃいないが、その、成公英とやらは引つ掛かる。

……また今度調べることにしようと思つ。

まあ、こんなところだ。

他の家族の皆はというと。
母さんは適度にサボりつつ、見つかつては倍に増やされる、という感じ。

薊さんは相変わらず、酒を飲みながらも、義妹として母さんと肩を並べている。

山百合さんは、母さんの右腕をやっている。

瑪瑙（いい加減、さん付け止めると言われた）は薊さんの右腕として成長しつつある。

翠姉は猪癪は若干あるが、無事将になり、その中でも、かなり上だ。蒲公英は、俺、そろそろ負けるんじゃないかね（？）ってぐらいメキメキと実力を付けてきている。

そうそう、実は最近家族増えたんだ。

あのスリ少女と、その弟君。

俺は俺で他の討伐に行ってた時に、賊どもに村が襲われたらしい。それは母さん直々に殲滅して、村で生存者確認をしたところ、生き残ってたのがその二人だったそうだ。

戦争孤児ということと、俺も気に入ったあの目に惹かれた、このことで、母さんが家族に、と拾ってきた。

俺もほぼ拾われたに等しいから口に出して言わないけど。
いいのかそれで。

ま、母さんはホント物好きだな、と思つのは悪くないはず。

少女の方は馬休、真名は茜で、弟君は馬鉄、真名は藍だ。偶然にも付いていた名が休と鉄だったらしいよ？

二人もまた馬家に誘われた身。

今は護身術程度を習っているが、年を経れば本格化するだろうね。年端もいかない子供を巻き込ませない、という自己満足の為にもがんばらないと、なんてまた思いかえした。

Side 三人称

一方、その頃の他の恋姫たちかというと……。

義三姉妹は共に旅をしていた。

称して、人助けの旅。

大徳は、盧植の元で勉強を修め、母、劉弘の元を発ち早二年。筵を売り、時には手を差しのべ、人に笑顔を咲かせる。

賞金首をとつちめることでしか人を救えなかった後の軍神、燕人姉妹はそこに惹かれ、意気投合。

以来、三人で旅をしているのである。

「街なのだ！」

「あつ、待つてよ鈴々ちゃん！」

「……はあ」

一目散に駆ける末妹。
それを追う長女。

二人に呆れる次女。

美髪公の心労は計り知れない。

「お父上お母上、この趙子龍、乱世に苦しまんとする民の為、いつて参ります！」

常山では、新たな決意を胸に、龍が昇らんとしていた。

「はわわ！ しゅ、主席！？」

「あわわ………凄いや朱里ちゃん！」

「ふふふつ、頑張ったわね」

「はわわっ！ すつ、水鏡先生！ ありがとうございましゅ」

伏龍、鳳雛は師の元で、徐々に才能を開花させていた。

「桔梗さまあ………」

「な〜んじゃ、もうへばったか焰耶よ！」

「まあまあ、落ち着いて……。根を詰めすぎるのは良くないわ」

「むう……ちつとばかり熱くなりすぎたかの」

「そーだよー。焰耶お姉ちゃん、真っ白だもん」

「はっはっは、璃々にまで言われては敵わんわ」

蜀の老た……ゲフンゲフン、お姉さま方と反骨は、案外にのほほん
と過ごしていた。

後の魏王は他の誰よりも抜きん出ていた。

……母親である曹嵩さえ差し置いて。

それにより、母が健在していたにも関わらず、家督を継いでいた。
そんな、すでに曹家の看板を背負っている彼女は徐州に来ていた。

「華琳……あなたの霸道、天から見守っているわ」

「はい、お母様」

「春蘭、秋蘭……今更だけれど、華琳を宜しくね」

「はっ！ 命を賭けて！」

「お守りすることを誓います」

時代は徐々に、能臣より奸雄を必要としていた。

そして、“曹孟徳”を存分に發揮出来る環境を作るかのようになり、病
が曹嵩を犯した。

そして、今まさに迎えがやってきたのである。

霸王は泣けるはずがなかった。
これが天命、と清々しい笑みを浮かべ、逝った。
そんな母に、むしろ笑いかけたぐらいだった。

「……ごめんね……薊……」

しかし、死す直前にぽつりと洩らした言葉は聞き逃すことはなかった。

「あ~~~~っ！ もう嫌！」

「待って！」

王佐の才は、逃げ出した。

しかし、まわりこまれた。

頼み込まれたので仕方なく戻ったが、今日の分を終わらせたら夜逃げでもしてやろうと決意した。

それほどまでに袁家での待遇が悪かった。

「ルールルっ、ルルルルルル」

「季衣？呼んだ？」

「うづん、呼んでないよ！」

「じゃあ、今の何？」

「そのキノコ見てたら口ずさんでた」

「……？」

親衛隊長らは、未だ平和を謳歌していた。

……黒いマツシユルームな形のキノコが引き金とは、悪来は知らない。

「……ぐう」

「お嬢ちゃん、寝ないでくれ」

「おおっ！ 寝てませんよー」

「……どの口が言うのやら」

「おうおうねえちゃん、それは言わぬが吉つてもんだぜ」

「まあ、いつものことだから慣れたがな。ほれ、飴十本お待ち」

「ありがとうございますよー」

渦巻の飴。

いわゆる、ペロキヤンを買い込む金髪ウェーブの少女と、珍しく鼻血を噴かさず、呆れ顔の眼鏡っ子。

二人は旅に出ようとしていた。

昇り龍と出会う日が来るのはそう遠くないかもしれない。

飴工房があったのは、偶然か、必然か。

それは陽にしかわからない。

「師匠……行って参ります。……約束は必ずや果たしてみせます！」
墓の前で拳と手のひらを合わせ一礼する、銀髪の後ろを三つ編みにする者。

「はあゝ、かつこええなあゝ」

独特の反りを持つ一振の剣と、先が回る構造をした槍を眺め、息を洩らす者。

「むむむ……二人とも、遅いのー!」

自分の用を早めに済ませたものの、待ちぼうけを食らうはめになり、若干キレ気味の者。

三羽鳥もまた、巢立たんとしていた。

江東の虎が死んで早三年。

治めていた地は全て華南に拠点を置いていた袁家に掠め取られ、服していた豪族たちはここぞとばかりに離れた。

家族とも呼べる仲間たちは、分散させられており、未だ虎の子たちは、雌伏の時を過ごしていた。

「あー、いつでもお酒は美味しいわ」

「全くもってその通りじゃ！ それを冥琳のやつといえは……」

「ほお……続きをお聞かせ願えますかね？」

「「げえ、冥琳！」」

「穏もいますよー。逃げ場はありませんからあゝ」

後の小霸王と宿将が、勤務時間中に酒を飲んで呉軍筆頭軍師に見つかり、その弟子に（師からの命令によって）退路を絶たれてはお叱りを受ける。
いつも通りの構図である。

「（もう少しよ、もう少し……母様の宿願、必ず）果たしてみせる」

「聞いているのか、雪蓮！」

「はっ、はい！」

怒る美周郎に正坐する小霸王。
全く以て、何時も通りだ。

「……はあ」

「蓮華様……休憩にいたしましょうか？」

「っ！ いや、必要ない」

「……そう、ですか」

守りの戦では、私を凌ぐ、と現王に言わしめる程の次女は、数知れ

ぬ思いからか、ため息を吐く。

親衛隊長であり友である者は、そんな様子に心配するものの、深くは介入しないでいた。

出来ないでいた、の方が正しいが。

「お〜ね〜こ〜さ〜ま〜!!」

もう一人の親衛隊長といえば、全力で猫を追っていた。

「ほら、パパ！ お友達、連れてきたよ！」

「おお、この前言っつてい、た……」

満面の笑みで、白虎と熊猫を連れてくる弓腰姫。

啞然としすぎて、せつかくのダンディーな顔立ちを崩す孫三姉妹の
パパ。

パパとは誰か。

……元々投稿してたサイト様からの登場です。

「……うぐ〜。月溪様あ〜、多すぎです……」

もとは武官だったが、次期王に才を見出だされ、ふんどし飛ばされ、
早半年。

末娘のもとにいるもう一人の宿将の教えにより、すでに阿蒙ではな
くなっていた。

アニメ設定はスルーの方向で。

「おーっほっほっほっ！ 国士無双ですわ！」

「やっぱ、世の中博打っしょ！ うー、丁！」

「……麗羽さま、文ちゃん。そろそろ帰りましょうよ」

負け続けはするものの、運よく一発逆転の手で、負け分を帳消しにする、金髪特盛縦ロール。

四対六ぐらいで負けてこしているが、それでも博打が大好き女の子。気苦労絶えないおかつぱ娘。

王佐の才の猫に見限られても不思議ではない。

……この博打処、実は陽が作っていたりする。

「蜂蜜水を持ってくるのじゃー！」

「はいはい、了解です」

南方を治める袁家の長は、いつも通りだった。

本日一回目のおねだり（？）であるので、毒は吐かなかった側近。

……両袁家を、これ以上紹介することが正直ない。

「詠ちゃん……」

「大丈夫よ。月なら出来るわ」

「うん。……頑張る」

「うおおー！ 董卓様あ！ この華雄、一生ついていきましょう！」
董家を継ぎ、長として兵たちに号令する。

その様子に親友は、必ず天下人に見せろ、と改めて決意する。
ネタキャラの地位を不動のものとする、愛すべき猪將軍は少し熱かった。

「……ちんきゅ、行く」

「あつ、呂布殿お。お待ちください！」

「ホンマ、仲ええなあ」

家族の様子を見に行こうとする天下無双。

それを追うは、自らを専属軍師と名乗るちびっこ。

そんな二人を、クツクツと笑いながら酒を飲む神速。

三人は 厳密には二人 漢の将であり、長安にいた。

儂げな少女を主とする日は、すぐ近くまで迫っていた。

「……うう。いつになったら終わるんだ……」

幽州では、普通に出世コースを歩いている者がいた

普通に出来る人かつ、お人好しスキルを持っている為、仕事が集まっていた。

「よし！ 今日も頑張るぞー！ おー！」

「ちいの魅力でメロメロにしてやるんだから！」

「はあ……。二人揃ってお気楽なんだから」

若干天然気味の、みんな大好き天公將軍。

ない胸を張ってる、みんなの妹地公將軍。

二人に呆れる、とっても可愛い人公將軍。

このとき、自分たちの歌で乱をおきるとは知り得ないことだった。

「お前たち、行くによー！」

「おっにゃー！」

「了解にゃー！」

「……頑張るにゃん」

南方ではにゃーにゃーうるさかった。

陽は遠い目をして語る。

「あの頃は、仕事量が増加の一途をたどっていたよ……」
と

第十六話（前書き）

そういえば。

翠と蒲公英以外で初の恋姫キャラとの絡みだー！。

第十六話

狼とは、元来神聖な動物である。

実際、日本語のこの”狼”というのも”大神”が語源だ。

狛犬などのモチーフとなっていることも、それを証明する一つになるだろう。

主に農業が盛んであった地域の人々にとって、天敵といえる草食動物たちを喰らってくれる狼はありがたいものだった。

しかし、牧畜が主である地域の人々にとっては、狼が天敵だった。

さらに、中世ヨーロッパ時代に語られた人狼伝説、流行り病の狂犬病などにより、狼”悪”というイメージがついた。

例として、赤頭巾の童話を思い浮かべると分かりやすいことだろう。

……と、狼は一方で好かれ、他方では嫌われ、といった両極を併せもつ存在なのだ。

狼は、幼体や老体、病弱なものといった、弱い個体を喰らう動物である。

それは、狼、というイメージからは想像のつかないだろう臆病な気性からきていた。

それゆえ、（一夫一妻制が基本であるため）雌雄対の20匹ほどで一つの群れを形成する。

さらに、臆病とは相反するような語の、一匹狼、というのは、成長した狼が群れを離れ、配偶者を見つける間の状態をいうのであり、あまり格好良い意味を持っていない。

縄張りには100～1000kmと広い。

つまり、何が言いたいのか。

それは……、

「……完全に皮肉られてね？」

……西涼の天”狼”として名高くなった自分を、陽は考えているのである。

前述したことをすべて知っている、という訳ではないが、両方を併せ持っていることだけは、陽も知っている。

皮肉にも狼と自分に、被っている部分があることもわかっている。

だからこそ解せなかった。

西涼の皆が、天狼、と自分を称賛する理由がわからなかった。

確かに誇り高い、というイメージも持っている。

しかし、それでは足りない。

西涼（と言つより、華北のほとんど）は小麦や酪農が盛んである。

だから、本来、狼は嫌われる立場にいるはずなのだ。

S i d e
陽

片膝をつき、右手で左の拳を覆い、仰々しく頭を垂れてやる。

左右にはズラリと人が並び、正面奥には何段も上の椅子に腰かける者、すなわち漢の皇帝、劉宏がそこにいた。

「天子様の命により参上つかまつりました、隴西太守馬騰が代理、馬白にございます」

「代理、だと！ 貴様、何様のつもりだ！」

うるせえな。

今から説明すんだろーが。

「最近では五胡の動きが激しくなっております。当初は太守である馬騰が赴く予定でしたが、くしくも、羌国が大軍を率いて攻め込む、との報告がありました。封ぜられた土地を抜かれては天子様に合わせる顔が無い。しかしながら、天子様直々のご命令に背くなど、もつての他。……ですから、若輩ながら馬騰が軍師であり、側近を勤めさせて頂いている、私が参上した次第にございます。…

… 何進様、天子様、どうかご無礼をお許し下さい」

「だがしかし、蛮族者など、部下に任せておけば」

「何進、もうよい」

「りゅっ、劉宏様！ …… 御意」

面倒くさい野郎だな、あの何進ってやつ。

そんなことはおいといて。

皇帝からの命により、俺は遠路遙々、洛陽にやってきていた。

因みに、羌が攻めてきたから俺が来た、というのは真っ赤な嘘だ。

母さんが、行くのヤダ、めんどくさいんだもん、と駄々をこねたので、仕方なく代理で来ている。

仕方なく、だ（ここ重要）。

「して、貴様は馬白といったな？」

「御意に」

「では、天狼と称されているのも貴様だな？ 張譲から聞いている」

「……御意に」

よく知ってんなー。
グズの癖に。

「一介の将が、天を冠している……。そのような者が、よくも帝の前に姿を現せたものだ」

「張譲……」

張譲を睨む何進。
悠然とする張譲。

二人の絶えない（らしい）争いの中、今回の軍配は張譲にあがった
っぽい。

別に興味ないけど。
ただ、こんなところでやらんで欲しいな。
うざいから。

えっと、だ。

なんで直々に二つ名のことを聞かれたのかというところ。
皇帝を象徴する”天”を冠することはあってはならないらしいんだ

よ。

んなこと知ったことじゃねえよ、馬鹿。
すっげえどーでもいいいな。

つか、張讓のドヤ顔パネエ。

「弁明はしないのか？」

「……いえ、私に発言権を頂ければすぐにでも」

まあ、反逆者やー、って攻められ、家族に迷惑がかかってもあれなんで、取り繕うけどね。

「ならば、申してみよ」

「はっ」

眼鏡の真ん中の橋をクイツ、と押し上げる。

仕事中の射抜くような目が怖い、と皆が言つので、家族の時間との以外は掛けることにしているメガネ。
なんであんのかは知らん。

形は四角の縁なし。

似合ってるんだってさ。

……まあ、左目眼帯着用の上に眼鏡で、どうかとは思んだけどねー。

「……まず、五胡の国々では、作物が育たない環境ばかりでありますので、放牧や酪農などでしか、日々の糧を獲られません」

「ふん！ それに何の関係がある！」

何進が反応する。

話の途中に割って入ってくるの好きだなおい。

黙ってるよな。

うぜえから。

そう思っても、口に出さず、華麗に流しますけどね！。

「狼は、主に草を食べる動物を喰らいます。ですから、五胡の人々にとって、家畜を喰らう狼は天敵なのです」

「そうか……。貴様は蛮族相手にもひけをとっていないと聞く。それは本当らしい」

説明を終えると張讓が反応した。

お前、なんで反応したよ。

ち こないくせにイキがってんじゃねえよ。

お前も黙ってるよな。

うぜえから。

と内心思っけど、またも流し、てか無視で。

「この漢において、天とは天子様を表し、五胡にとって、狼とは敵を表します。天狼とは、天に仕えし狼、すなわち天子様に仕えし敵対者、という意味にございます」

「ふん！ 自ら劉宏様に仕えているとの発言……。先ほどから何様のつもりだッ！」

「この大陸でも家畜は飼われている。……。それすなわち、貴様の牙をこちらに向けることを意味するのではないか？」

ホントうるさい野郎だよ、このおっさん共。

少しだけ何進の方へ身体を向けて、話すことにする。

「一介の将が、とんだご無礼を……。しかしながら、この身、この武、この知能、全て天より授かりしものであり、これを天子様に捧ぐは世の理。……すなわち、全ての人々が天子様の為に在り、天子様に仕えているとは言えないでしょうか？」

「……………ふんっ」

何進は言葉につまったのか、何も言わなかった。

ま、全部口先だけのでまかせですけどね。

さて、次だ。

こいつもうるさいけど、論点はズレてないからました。張讓の方へ身体を向けて、話し始める。

「確かにこの大陸でも家畜の飼育は盛んです。しかし、いくら家畜といえど、狼は相手を選びます。狼は存外に臆病な動物にございませ……天子様”自ら任命された屈強で素晴らしく優秀な方々”に守られては、手足はおるか、牙さえとどきませんし、たてつこうとする勇氣すらも起こらないのです。よって、この”天子様が治める、この素晴らしき強国”、漢に牙を剥くことなど、あり得ないことです。私が喰うのは、天子様にたてつく知恵のない獣共のみにございませす」

「だがっ」

適当なことと言って言い逃れようとする。

反論しようとした張讓だったが、それを予想外にも皇帝サマが遮った。

「もうよい、何進、張讓。貴様が馬騰と同じように、忠義の将だと良くわかった。……ハッハッハッ！ 今日気分が良い……貴様の二つ名の件、許そう」

「有り難き幸せにございます」

一度頭を下げる。

見れば途端に、何進と張讓は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。皇帝のおバカさんが、ただの異名にしても、一介の将が”天”という字を使うことを許した。

さらに、その許可は皇帝自らの言葉だったから、覆すことの出来ないものとなってしまった。

大方、この二つのせいだろう。

褒められて嬉しくない奴はいないだろう。

能力が足りてない、と知りつつも、俺に言わせれば皇帝としての下らない誇りがあり、どこかで自分を信じている。

そこを突き、クズ共を任じたことと、今にも動乱が起こりそうなのに恐国を治めていることについて皇帝サマを褒めた。

それに気分良くし、罪を流した。

…… 皇帝サマが阿呆で良かった。

…… 本当にバカで。

…… こんなカスのせいで、大陸は不安定だ。

…… このクズが派遣した阿呆どもが、無駄な財を集め、さらには才を無駄にしている。

「………っ!?」

おっと、いかんいかん。

下らない奴にキレても仕方ないことだ。

余計な敵を作っても面倒だし。

反応した張讓の後ろに侍っている二人。

露出度高いな。

いや、それはおいといて。

赤髪の方はマジにヤバいからな。

でも、結構人がいる玉座で、反応できたのが二人だけとか。

しかし、あの赤髪は蛮族と言われても怒らないのかね？

「……劉宏様」

「おお、そうであつた。何進、頼む」

「はっ！ 隴西太守馬騰に告ぐ！ 貴殿は本日を以て西涼太守に任命する！ 拠点を金城とし、今まで以上に励むように！ 戦功を期待する！」

「はっ。謹んでお受け致します。最西の地より、天子様のご意向にそえる戦果、果たしてみせましょう」

何進の前に出て、書き記された紙と、西涼太守の証である印を受け取る。

戻つて、また同じように膝を付き、左の拳を右手で包み、深く礼をする。

はあ、これでやっと終わったぜ……。

何進は激情に、張讓はあくまで冷静に。
終始陽に対し、対称的な態度だった。
この違いが、後の熾烈なトップ争いの結果を生むことになる。

「張遼、呂布、貴様らは董卓の下に行け」

「こらまた、唐突で」

「文句があるか」

「……いえ、ありません」

「ならば行け。すぐにここを離れ、長安に行き、荷物を纏め次第、天水へと向かえ」

「……御意」

張遼は、いかにも不機嫌そうな顔をして退出する。
問うたところで理由を話す人ではないので、自ら聞くことはしない。
どうせアイツのことだろうとは予想はついている。
そうでなければ、わざわざ長安から呼びはしないだろうと内心思っ
ていた。
ただ、一緒にいた者、すなわち呂布は、ずっと首を傾げているのに
は苦笑した。

ちよつと城内の廊下をさ迷い歩いている。

いわゆる迷子ですが何か？

そしたら……、

「む」

「……あ」

「げ」

……むつつり張遼、無表情呂布が現れた。

いやー、このエンカウントはまずいなー。

片方は中ボス、もう片方はラスボス級とかどんだけ。

しかも、一人キレ気味。

ヤバくね？

「これはこれは、張遼殿に呂布殿。お二方の武勇、辺境の地にまで届いております。いやあ、そんなお二人に会えて、光栄にございませよ」

だいぶ焦ってるようで、自分で何を考えているかさつぱりだ。

ま、当たり障りのない挨拶(?)をしてはおきましたが。

「白々しいやつぢやなあ……。そんな棒読みな台詞、あるかいな」

「……お前の方が凄いな」

今までの怒りはどこに(?)、(?)と思うほど、豪快に笑う張遼。

少しだけ口角をあげる呂布。

「六割方嬉しいですよ。張讓様の部下としてでなければ、八割ぐらいかもしれませんかねえ。あと、お二方に比べれば大したことはありませんよー」

「……正直やなあ。まあ、ウチかて普通のとくに会いたかったわ。……あんときの殺気、尋常やなかったからなあ。あれ見て、しがらみなく殺り合いたい、と思うんわ、武人としての性ちゅーもんやで？」

苦笑いからの獰猛な笑み。

いやー、あの場で 目の前にいる二人の前で 殺気を洩らしたのは不味ったなあ。

「今後普通に会っても、絶対殺り合いませんけどね」

「……恋ともやる」

「ちょ、話、聞いてました？」

「……（コク）。でもやる」

でもじゃねえんだよ。

こっちは死活問題なんだよ、あんたらと闘うことがさあ。

「……まあ、機会があれば」

犬やら猫とかの見上げる視線、わかるだろ？

そんな動物のような上目遣いに根負けしましたが何か？

「…………約束」

「ウチも忘れんといてやー」

「…………ハア、わかりましたよ。ですが、絶対そんな機会、作ってあげませんから」

是非とも願い下げたい約束をしてしまったのだよ？
ため息ぐらい良いじゃないか。

「…………恋」

「は？」

「多分、約束の証うちゅーことやる。ウチは霞って呼んでや」

コクコクと頷く呂布さん。

便乗して真名を預けてくる張遼さん。

コイツらアホだろ。

そんな簡単に預けてどうすんだよ。

もっと大切にしなさい。

いや、までよ。

逆に、真名を交換することで、約束の価値を上げてるのか？
ふっ、なかなかやるな…………。

…………嫌あ！

「…………ハア。私は陽です」

俺が頂垂れると、張遼は笑い、呂布は不思議そうに首を傾げる。

終始そんな感じの他愛ない会話をして別れた。

Side 三人称

「……どう思う、恋ちゃん」

「……多分、いいひと」

いつもではあり得ない曖昧な答えに、怪訝そうな顔をする張遼。

「……弱い、けど、強い。怖い、けど、優しい人」

「どっちも矛盾しとるやん」

いつにない饒舌さで、相反する二つを並べる呂布。

呂布の言うことは、ほぼ当たることを知っている張遼は、さらに陽を不審がる。

「……霞は？」

「ウチ？ せやなあ……よーわからん、ってのが一番やな。ただ、嫌いではない奴やけどな」

張遼は、陽に対して元から興味はあった。

涼州連合筆頭であり、太守である馬騰の軍師。

西涼の人々にとっては天狼であり、賊にとっては死神。

軍師でありながら、武にも心得がある。

興味が湧かない訳がなかった。

そして、見た結果。

玉座の中で、出来る奴、と。

会話の中で、おもしろい奴、と判断したものの、率直に言えばわからない。

それは呂布も同じだった。

……だからこそ、張讓があそこまで気にする理由が解せなかった。

陽を、牡丹を、そして、西涼勢全体を。

陽は語る。

「思えばあの日は、いろんなことで綱渡りだったなあ……。流石に恋ちゃんと霞との約束は泣けた」と

第十七話（前書き）

進まない。

全く進まない。

第十七話

寝台の上で身をよじり、幸せそうに眠る美少女が一人。ふと、窓から溢れる光に目を覚ます。

「あれ、ここは……？」

寝台から身体を起こし、起き抜けのぼやけた眼を擦りながら、またか、と一言。

もう何十回にもなるであろう疑問が、頭を廻る。

曰く、なんで起きるところが、たまにお兄様の部屋なのか、と。

自室で寝た記憶はきちんとあるのに、何故か3/7の確率で兄の寝台で起床している

疑問で疑問で仕方がなかった。

それでも、最愛の兄の寝台で起きることに悪い気はしない、というかむしろ嬉しいので、美少女こと蒲公英はこれ以上考えることを止めていた。

……実を言えば、深夜遅くに用を足した後、引き寄せられるかのように兄、すなわち陽の部屋に潜り込んでいるのだが、その記憶がごっそり抜けている蒲公英なのであった。

「……お兄様？」

辺りを見回しても、この部屋の主がいない。

蒲公英が起きるまでの間、必ず部屋に、傍にいる筈のだが、今日はない。

一抹の不安と寂しさを感じた蒲公英は、急ぎ部屋を出て、探すことにした。

「陽？ ……見てないわ」

蒲公英は、最初に伯母の牡丹に会いに来ていた。

「あかね〜、らん〜！」

「なんですか、おばさん」

牡丹の呼ぶ声に反応した、茜こと馬休。

「おばさん言うなあ！ いい加減、お母さんと呼んでちょうだいな」

「い、や、よ！ だいたい、蒲公英お姉ちゃんだって、伯母上様って言ってるし」

「言ってる意味が違うじゃない……。らん〜、茜がいじめてくるよう〜（泣）」

助けを求めるかのように、牡丹は藍こと馬鉄に泣きつく。

「おばちゃん、ごめんなさい！ お姉ちゃんに悪気はないと思うんですー！」

「藍よ、お前もか！」

頼みの藍にさえ裏切られる形になった牡丹は、さも絶望の淵に立たされたかのような顔をする。

ころころと代わる表情は、もはや顔芸の域にまで達していた。

蒲公英は黙ってその場を離れることにする。

正直に言えば、蒲公英は茜と藍にも聞きたかった。

しかし、茜と藍が家族になってからというものの、牡丹と茜の二人の漫才（？）が尽きることはなく。

諦める他ないのである。

結局のところ、収穫なしだった。

「もう依存の域ね」

蒲公英が部屋から出て行った後、牡丹はぼつり、と一言溢す。

「何が？ おばさん」

「……それ、言いたいだけでしょう？」

牡丹は平静を装い、にこやかに青筋をたてる。

「うん」

が、茜の即答にプチッ、と音をたてる。

「キヤーっ、おばさんが怒ったあ！ 藍、逃げるよ！」

「じつ、ごめんなさい〜！」

逃げる茜とその手に引かれ、共に逃げる藍。

「ふう。陽……早く帰ってこないかしら！」

流石に幼い二人にブチギれる程愚かではないものの。

腹いせに、怒りをすべて陽に還元させる腹積もりでいる牡丹であった。

「陽？ ……牡丹のところにおらんのか？」

グビツ、と酒を飲む薊。

「伯母上様も知らないって」

「そうか。ならば知らん」

「そつかあ〜……。それはそうと、そんなに飲んでたら、またお兄様に怒られるよ？」

「気付けじゃ、気付け！ 他意はないぞ！」

そう言い、目を明後日の方向に向ける。

明らかに誤魔化していた。

薊にとって、酒の飲み過ぎで怒られるのは恐くはあるが、懐かしい思いの方が上である。
だからこそやめられなかった。

結局、またしても空振りという結果に終わった。

蒲公英は、この時点で気付くべきだった、と後悔することになるのは余談である。

「今日こそ500勝目、貰うよ」

「いや、今日はあたしが300勝目を貰う番だぜ！」

「……始め！」

どんだけやってんの……、と蒲公英は内心思う。

しかしながら、近くで開始の合図をした山百合が言うには、これが通算千戦目、とのこと。

それを聞いた蒲公英は苦笑することしか出来なかった。

繰り広げられるは互角の闘い。

攻守が幾度となく入れ代わり、せめぎあう。

剣戟が、まるで奏でているかのように響いたと思えば、静寂が辺りを包む。

どちらも、あと一步というところで決まらない。

互いに牽制し、最後まででは攻め込ませない。

何十、何百合打ち合っただろうか。
双方とも、肩で息をする。

自らの身体状態から、あと一撃、と二人は判断する。
そして、

「しゃおらあああああ!!」

「せいやあああああ!!」

ピタリ、と手が止まった。

一方の穂先は心臓の前に。
もう一方の穂先は首筋に。

「あーあ、また引き分けかよ」

「……………」

悔しがるは、馬超こと翠。

対して閻行こと瑪瑙は終始無言だった。

どんだん自分との差が縮まりつつあることに、焦りを感じていたのだ。

蒲公英は、ただただ凄いと思っていた。

その凄い二人にたまに勝つお兄様も大概だ、ともひそかに思いながら。

「何を寝ぼけているか知らないけど、アイツ、まだ帰ってきてないじゃん」

呆れ口調の瑪瑙。

「……………今は天水辺りと報告がありましたね」

普段と変わらない口調の山百合。

「なんだよ蒲公英、……………陽にご執心か？」

からかい口調の翠。

「っ!?!? 翠お姉さま、そんなこと言って……………、皆だってそうじゃないの?」

ニタニタと笑う翠にちよつと怒った蒲公英は、合いの手を入れる。

「」「……………」「」

その言葉には、三人共凶星だったようだ。

それぞれ意味合いは違うが、陽のことを考えていたのは確かだった。

寝ぼけていたたんぽぽも悪いけど、伯母上様たちも教えてくれればいいのに……………、と思う蒲公英であった。

一方、その頃の陽はというと……………。

S i d e
陽

ポクポクと黒兔の蹄を鳴らしながら歩を進める。
洛陽、隴西間の長い道程も、あと半分ほどだ。

……うん。

ひっじょくに疲れた。

そら歩きよりは楽だけど、乗ってるだけでも辛いんだよね。

「あゝ、ケツ痛え」

それに反応した黒兔がぶるっ、と黒兔が啼く。
すまん、と謝られてもなあ。

どうあつても避けられないことだから、黒兔は悪くないし。
大丈夫だ、と首を叩いておく。

さ、ちゃっちやと帰りますか。

早いところ、熟睡したいし。

外だと、自然と気張っちゃうから、深く寝れないんだよ。

「帰ったら俺、熟睡するんだ……」

……このとき、洛陽からの帰路がまさか、黄泉へと誘う道になって
いるとは、俺は微塵も思っていなかった。

前を見れば街が見えた。

あれが天水かー。

別になんてことはないが。

よく見ればおぼろげながら、城門前に人が立っているのが見えた。
なんか嫌な予感がするなー、と思って、眼帯を外して左目で見れば、
やっぱりだ。
知った顔の奴がいた。

「……………うわぁ、なんかめんどくさそうだなぁ」

自分の撒いた種を回収するんだから、そうも言ってもらえないんだけ
どな。

急ぎ、黒兎を走らせることにした。

「この辺りに巢食う賊共の所在がわかりました」

「…苦勞。……………それで？」

「……………街外れの小屋に」

「案内、頼めるか？」

「御意に」

徒歩でもそう時間はかからない街の外れに、寂れた廃小屋があった。
そこに、俺の手のひらで滑稽に踊ってくれた奴がいるらしい。

……………くつくつく。

おっと、いかん。

黒い笑いが出てしまった。

それでも最高に似合ってしまうのが、さすが俺。

……いや、冗談だぞ？

似合っても嬉しくはないだろ、そんな笑み。

「やあ！ 元気にしてたか？ この二週間を十分に謳歌したか？
生きた心地はしたか？」

「まっ、待ってくれ！」

無駄に調子よく話す。

口角を上げ、笑顔を作る。

相手は縛られ、転がっている。

何故に亀甲縛り、とは思ったが、隣にいる部下の趣味と勝手に解釈しておく。

何を待ってというの？

「キミのおかげで、被害が最小限に抑えられそうだ。キミは救世主だ。ほら、キミは治安維持に貢献したんだぜ。もっと喜ぶべきさ」

「全部吐いたんだ！ 助けてくれるんじゃないのか！？」

大袈裟に腕を広げる。

薄い笑みを作りながらも、目を細める。

吐いた？

確かに、洗いざらい吐いてくれたねえ。

助ける？

自身の存在により、周囲を無差別に巻き込む蟻地獄から、いつでも死と隣り合わせの生き地獄から、解放してやるうとしているんだ。

それは助ける、という行為だとは思わないのか？

「本当に感謝する、ありがとう。……そして、さようなら。キミは実に無能な人間だ」

「待つ……あぐ……」

腰に刺さっている剣で、心臓を刺す。

首を斬ると、血飛沫の飛距離が半端ないんだよ。

それが服に付いたりして、街に戻れなくなるのは流石に嫌だから、まあ刺殺ってことで。

「……………」

「……………そこまでしなくても、みたいな顔すんなよ。仕方のないことだと理解しろ。ここで温情をかけても、仇でしか返ってこないのがこの乱世の常。だったら、その業を噛み砕くは狼の仕事ってね」

隣の釈然としていない部下に、薄く笑ってみせる。

我ながら、なんてキザったらしい言葉だよ。

言ってる自分が恥ずかしくなってくるぜ。

「巷でも有名だろ？ 俺に敵として目をつけられた奴の運命は、その時点で死の一択のみ、とか、左目は絶望の始まり、って」

裏の世界で、俺は有名どころの騒ぎじゃない。

裏に精通してる表の奴ら、表に出てきた裏の奴らを、片っ端から殺してるからな」。

……流石に裏の奥までは踏み込んだりはしないが。

とりあえず、どうせ用意できないだろう賞金すらかかってるらしい。

はた迷惑なことだ。

「ま、嫌ならいつ辞めてくれてもいい。給金分の仕事をしてくれれば、な。ただ、横流しすれば、……わかつているな？」

「……裏切りなど、あり得ません。私だけでなく、皆、馬白様に忠誠を誓っていますから」

嬉しいことを言ってくれる。

「じゃあ、最後、頼む」

俺の名入りの書簡を二つ認め（したため）、黒地に白で狼と書かれた小さめの旗と共に渡す。

なんだかんだ、簡単な用意　携帯出来る筆とか、無記の竹簡とかを　を　し　と　い　て　良　か　っ　た　。

「はっ！　お任せを」

そそくさと出ていく。

まずは、甘味処に向かうことだろう。

「さて、帰るか」

天水で休もうかとちょっと悩んだけど、やめだ。

天水太守の董卓ちゃんと顔合わせするという展開になったら　好い子らしいけど　面倒だし、今はそんな気分でもないからね。

……さあ黒兎、行くか。
ぶるっ！

S i d e 三人称

「まさか軍資金の三割まで工面してくれるなんて……流石は天狼と
いったところね。それに……」

書簡の内容に、驚きを隠せない、天水太守の軍師。
賊の所在地、その人数、そしてお金。

書かれている全てに、自分との格の違いを見せつけられているよう
な気分にならなっていた。

「馬白さん、だったっけ。……会ってみたいなあ」

「ダメよ月！（……董卓軍の軍師は僕だけなんだから）」

「大丈夫だよ、詠ちゃん。私の軍師は詠ちゃんだけだから」

「……ゆゑ」

自信を無くしかけていた詠こと賈馱に、励ましと事実を伝える月こ
と董卓。

どちらにとっても欠けてはならない存在、と認識するほどに、二人
は深い絆で結ばれていた。

「誰かある!」

「はっ！」

「三日後にここを出立する！ 軍の再編等の指示があるまで待機。各々で鋭気を養うように、と伝えて頂戴」

「御意！」

陽からの書簡には、明日に、張讓配下である呂布、張遼が来る、と記してあった。

その通り来れば、二人を組み込んでよし。

来なければ、それはそれでよし。

どちらにも対応できるように、三日設けたのであった。

次の日に、二人が来たのは言うまでもないことである。

陽は語る。

「いやあ……今考えると、すげえ立場にいたんだな、俺って」と

第十七話（後書き）

陽

「あ？ んだよ、呼ばれたから来てみれば、誰もいねえし。これは……カンペか？ これを読めってか？

そんなんであとがきに呼ぶなよ、ドカス作者。

えー、『次から原作に突入させます！ 少々強引にでも！』
原作ってなんだよ！

大体、初めてあとがきぐらい、大切に使いやがれっ！」

すみません。

人物紹介（前書き）

今更ですね、わかります。

てか、本編じゃなくてごめんなさい

人物紹介

姓名／馬白

字／?????

真名／陽よう

歳／18

容姿／白髪で、肩口程の長さ。

前髪は意図的に左だけ下ろしている。

毛先はぴょんぴょん跳ねており、駄目大人っぽい雰囲気に見えなくもない。

顔は悪くはなく、寧ろ整っている（一刀が上の中なら、上の下の下ぐらい）。

目付きはとても悪く、つり目も相まって、無駄に鋭い。

右（2・0）は銀、左（5・0）は黒のオッドアイで、普段は左を眼帯で覆っている（左前髪だけ下ろしているのは、左目を髪で隠していた時の名残）。

仕事中は眼鏡着用。

背は180cm程で、西涼勢、つか、この世界のほとんどの人より高い。

所謂細マッチョというやつで、無駄な筋肉は少ない。

備考／本作の主人公、武将兼文官兼第二軍師（実質筆頭軍師）、と

いった、なんとも苦勞の似合う役職についている。

甘いものが好き。

しかし、甘過ぎるものは嫌い。

調和が大切、とは本人の言。

自分に甘く、他人に厳しい。

といつても、自身の中での甘く、の基準が異常に高く、他人に求める厳しい、が割に低い為（厳しいには厳しい）、周りから見れば、自分にも他人にも厳しい。

基本、冷たい。

名声もあるが、悪名高くもあつたりする。

自身の全てが矛盾の上に成り立っている、と言って良いほど、破綻した性格。

そして、なんと言つても、人が嫌い。

それゆえ、読心（唇）術が出来たり、表情を取り繕うことが出来たりする（嫌いだからこそ観察し、習得）。

武力はテンションで変動。

低ければ低いほど、真価を發揮する（つまりチート）。

強い、というより、巧い。

山百合曰く、冷徹さの集積。

武器は、全身が真つ黒で、異常に軽い槍と、ちよつとだけきらびやかな幅広の剣。

どちらも滅多に使うことはなく、兵に支給されているものを使う（折れたら拾えばいい、と考えからきている）。

一応、槍の名は闇閃で、剣の名は、特になし。

頭は良い方。

軍略も内政も各国の名高い軍師らには劣るが、一応インテル入ってる（つまりチート）。

作者から／チート乙。

書き始めた当初、ストライクフリーダムガンダム……じゃなかった主人公を目指しており、決してこんなダークな奴にするつもりはなかった。

どうしてこうなった！

主人公には、なりたいたい自分、というものを投影する傾向があるらしいが、半分はそうかもしれない、と思ったりする。

統：4 武：4 知：4 政：4 魅：1〜5

姓名／馬騰

字／寿成

真名／牡丹^{ぼたん}

歳／3？

容姿／髪は赤く、前髪が細くて目にかかる長さ、目付きが悪い、ということ以外、ほぼ翠と変わらない。

身長は170cm程で、意外に高い。

おばいは大きい。

張りには自信があるらしい。

20で翠を産んだが、その前からプロポーションは全く変わっていない。

緑のチャイナドレスを着用。

露出度は低め。

備考／陽の義母であり、今は違うが陽と基本は同じである。ほとんど笑みを絶やすことはなかったりする。

基本、面白ければなんでもいいらしい（ある人の姿勢が、多大に影響を及ぼしている）。

三傑の一人。

武力チートその二。

今でこそ、牡丹？関羽だが、全盛期は、各国最強の人たち<牡丹<恋、というパネエ強さだった。力と巧みさを兼ね備えている。

武器は、元は銀閃。

しかし、それは娘の翠に譲ったので、同じような十字字槍に変えた。名は、光閃。

237

知は、うん（娘のオツムから予想していただきたい）。内政等々は年の功により、なんとか出来る。

作者から／主人公があんなだから、こつちがストライクフリーダムになった。

……もつ、こつちが主人公でよくな？

統：5 武：5 知：3 政：3 魅：5

姓名／韓遂

字／文約

真名／薊あひま

歳／3？

容姿／薄紫色の髪を、首筋近いところで二つに分けている。

真面目なときは鋭くなるが、基本は丸い目で、色は髪と同じ。
勿論のごとく美人。

身長は168cmと高め。

おばいは大きい。

柔らかさに自信があるらしい。

若いころから、プロポーションはほとんど変わらない。

牡丹とお揃いのチャイナドレスを着用（但し、牡丹よりは若干露出度が高い）。

備考／牡丹の義妹で、瑪瑙の義母。

文官筆頭であるが、戦にでることもしばしば。

快活で酒好きだが、牡丹がフリーダムなため、しっかりはしている。
良き女房とも言える（紫苑と桔梗と祭を足して3で割った感じの性格、といえば分かりやすいかも）。

過去に牡丹と確執あり。

武力は、元々文官なので、そんなに強くはない。
が、一応蒲公英よりは強い。

ちなみに全盛期は、甘寧程。

武器は、無骨な偃月刀。

名は、月牙（なんか厨二っぽいが、スルーで）。

知は、政治経済に偏っているが、出来る人。
この人があるから、西涼はもっている、といっても過言ではないぐ
らい、一応凄い。

作者から／出したはいいが、話のネタが全く浮かばない人。
可哀想なので、救済措置はとりたいたいとは思っている。

統：4 武：3 知：4 政：5 魅：4

姓名／鳳徳

字／令明

真名／山百合さやめ

歳／28

容姿／赤紫色の髪を、後ろで一つに纏めている（纏めた髪は、牡丹
や翠ほど長くない）。

前髪は目にかかる程度に長く、サイドは肩にかかるほど。

目はキリリとしており、色はライトグリーン。

顔立ちは、かつこよさと美しさを兼ね備えつつも、あどけない可愛
さを若干残した、なんとも説明しづらいもの。

とりあえず、美人。おばいは、翠より少し大きい。

身長は、作者と同じ165cm（え

服装は、白のチャイナドレスで、露出ほぼないが、スリットだけは
何故かえげつない。

備考／牡丹の忠臣であり、馬騰軍の筆頭將軍。

牡丹とは、かれこれ20年来の付き合いがある。

クーデレで、たまに天然で、少女のように恥ずかしがることもしばしば（基本的に牡丹と陽のせい）。

可愛いものが好きだったりする。

牡丹に多大な恩あり。

武力は、翠より上（純粋な力勝負だと負ける）。

というか、牡丹と同等ぐらい。

陽ほどではないが、強いというより巧い。

武器は、二本の戟。

名は、驚天動地（KOEIの無双より引用）。

知は、それなりにある。

薊、陽に次ぐ文官でもあったりするほど。

作者から／オリキャラの中で一番可愛さを求めた人。

ていうか、（原作キャラ含まず）私の妄想の中で一番可愛い（え

そんな節はみられなかったですが、まあ、これからが濡れb 見

せ場です。

統：4 武：5 知：3 政：4 魅：4

姓名／閻行

字／彦明

真名 / 瑪瑙^{めのう}

歳 / 19

容姿 / 褐色の髪をツインテールにしている。陽や牡丹程ではないが、切れ長の鋭い赤目。これまた美女である。

女の象徴ともいえるところつるぺた、絶壁。

身長は163cm（今さらだが、この情報いるのか？）

適当な白シャツに、ファー付きのジャンパーっぽいのを羽織っている（この時代にファーあんの？とか考えてはいけない）。

黒のミニスカに、黒ニーソ着用。

備考 / 薊の義娘で、翠とは腐れ縁と呼びしめる仲。

娘となつて、14年は経つ。

母を支えるべく、頑張っている。

男が嫌い（あるトラウマのせい、というのもあるが、決してそれだけではない）。

ツンデレで、（限定の）ドM。

翠とは仲が良い（喧嘩するほどなんとやら）。

武力は、翠より上だが、追い付かれつつある。

山百合にも勝てなくはない。

純粹な力だけだと、一番強い。

武器は、両鎌槍（槍に小鎌を両サイドにつけた感じ）で、三つに折れて、三節戟にもなる。

名前は鬼灯丸（パクリではなく、リスペクト）。

知も、翠を小馬鹿に出来るほどにはある。

薊の補佐をしてるため、成長しつつあったりする。

作者から/正直、キャラの性格的に(シンデレ+M、というところ
が)某所の詠ちゃんと若干被ってたり。

だが、こちらは眼鏡っ子ではないし、三編みでもなく、戦えるし、
ドがつくM!

問題ない……はず。

統：4 武：5 知：3 政：4 魅：3

姓名/馬休

真名/茜^{あかね}

歳/14

容姿/肩口まで伸びた茶髪を、適当に後ろに流している。
ぱっちり若干つり目の赤目。

愛らしさがありつつも、思春期のういも見せる美少女。

身長は140cmあるが、いまだ成長途中(華琳 or z)。

胸は、今で言うBカップぐらいはある(瑪瑙 以下略)。

服装は、赤に近いオレンジ色で、蒲公英のネクタイ?ない版

下はスカートにスパッツ。

備考/元スリ少女。

かなりの凄腕だったりする(初めて捕まえられたのは陽であり、陽
の異常な観察力によるものである)。

元々親はおらず、村の長老であった義祖母に育てられる。

二年前に他界した為、スリをやっていた。

陽に捕まっただけからは止めて、真つ当に働いていたが、そこにタイムリ
ング悪く村が襲われ、戦争孤児となつたところを牡丹に引き取られ
た。

家族となつた当初、もっと早くこれたのでは、という疑念から牡丹
を嫌っていた。

やがて母として認めるようになるが、反抗期も相まって、未だに牡
丹を、母さんとは呼ばない。

藍が好き（一応、弟として）。

武力は、歳の割には高い。

が、蒲公英にもまだ及ばない。

固有の武器はまだない。

修練には矛を使う。

知も、翠よりある（翠はどんだけ低いのか、と思つてはいけない）。
ちゃんと勉強しているからである。

たまに陽に教えてもらうこともある。

作者からノネタが思いつかない人その2。

その1の人よりはるがあるが、優先順位にお蔵入りがしばしば。

一つは茜メインの話がちゃんと用意してあつたりする。

軍人じゃないのでステータスはなし。

姓名 / 馬鉄

真名 / 藍らん

容姿 / 自然と髪が立つほど短い茶髪。

目はクリクリまん丸の赤目。

丸かった顔のラインが引き締まり、少年からの脱却途中の為、まだあどけなさが残る。

イケメン候補（中の上 / 上の下になりつつある）。

身長は140cmで、未だ発展途上（170ぐらいになるはず）。

青のカンフーシャツに、白の長ズボンを着用。

備考 / 元二ト……ではなく、あくまで普通な子供（歳的にお手伝い程度）。

茜と境遇は同じ（牡丹を嫌っていた訳ではなかった）。

何よりも茜が好き。

姉として、ではない。

武力は、未だ発展途上。

まだまだである。

基本的に戟。

茜同様、固有の武器はない。

知もそれなりにある（翠より……以下略）。

たまに陽に教わることもある。

作者から / ネタが（ry

しかしながら、救済措置がないわけではない。

…… 薊がかわいそうでならなくなってきた。

ステータス（ry

人物紹介（後書き）

これらは次の話からの設定です。

因みに、翠は18、蒲公英は16という設定です。
何が、とは敢えて言いません。

つまりは、セクロスシーン（書かないけど）は二年後ってことです。

第十八話（前書き）

原作突入。

といっても、導入のみだけど。

第十八話

S i d e
陽

「うえ〜、びちよびちよだよ〜」

「流石にキツいよな」

ちよつとした木の下で雨宿り。

内心、やっぱりなあとは思うがな。

朝からずつと燕の鳥やらが低く飛んでたし。

全く、あの阿呆のせいで余計なことに巻き込まれたもんだぜ……。

金城に引越してから、もう半年程たった。

最近飛んだばつかだった気がするが、まあ、突っ込まないでくれ。

金城は、隴西よりも西、河水沿いに位置している。

そのお蔭か、隴西よりも栄えている。

如何に水が大切かが分かるだろう？

だが同時に、隴西よりも五胡の脅威に晒されていることも否定出来ない。

だからこそ俺たちをそこに置いた、と表向きはそういうことなのだろう。

しかし、表があれば裏がある。

劉宏は、というより何進及び張讓は、少しでも遠くに追いやりたいらしい。

一國を相手にするほどの力は今のところ持つていない現状で、そこまでの警戒される理由が、俺にはわからない。昔に何かあったとすれば、たぶん母さんや薊さんは知っているだろう。知れるなら知りたいが、母さんの地位が上がった分の仕事が増えるわ、五胡との接触や各地の賊の蜂起も増えるわ、雄が台頭しだすわ、とやるが多すぎる。とてもそんな余裕はない。

話が逸れた。

とりあえず俺と蒲公英は、金城よりはるか西（といっても馬で往復半日程度）の地までやって来ていた。

目的といえば、逢い引きや遠乗りなどという仰々しく空想的なものでなく、肅々として現実的なものである、敵情視察というやつだ。

さっきも言ったが、金城に来てからというものの、小競り合いが絶えない。

そうすると、嫌でも有能な人材が他から抜きん出てくるのである。という訳で、半年という短い間に蒲公英は將軍になつていた。

その蒲公英と俺で相手の動きを探るのだから、いわゆる将校斥候というやつになる。

部下に任せれば事足りることなのに、わざわざ自分で言うのもアレなんだが、中核を担う俺が出向く必要がわからなかった。

たとえ母さんの命令でも、だ。てか、確実に普通の斥候に任せれば済む問題だ。

ま、そんな反論は無視で結局強引に連れ出されたからここにいるんですけどねー。

んで、帰り途中に雨に降られたって訳だ。

いやはや……めんどくさい。

雨の激しさは留まることを知らないらしい。
ふと、隣の蒲公英を見やれば、身を震わせていた。
どうして気付いてやれなかったのだろうか。

朝の時点で雨が降るとわかっていたのは俺だけらしく、（その俺も
前述どおり強引に、であったので）雨対策など何一つしていない。
それゆえ雨に打たれていたのだ。
身体が冷えているにきまっている。

……まあ、西涼という寒い地域に住んでいるのに、何故　翠姉、
瑪瑙を含め　半袖で、下は膝上どんだけよ、と思うほどの短さを
気にしたら負けな気がするから、触れないでおく。

とにかく、だ。

思考に耽るよりも先決させるべきことだった。

……最低な兄貴だな、俺は。

上着　ロングコートとでもいうのだろうか？いや、今はどうでも
良いことだ　に手を掛け、素早く脱ぎ、それを蒲公英の前に掛け
る。

そこで俺は蒲公英の後ろに回って、抱いてやる。

雨で湿ってはいるものの、外気に触れない分だけましだろう。

それに、脱いだら俺、半袖だからな。

抱き付くのは双方にとって合理的だ。

あくまで、俺視点だけだ。

本当は、濡れた服を脱ぐべきだけど、その後に着る服はないしな。
肌で暖めあうとか、それは、……あかんで。

蒲公英は驚きと恥じらいの顔で、いいの、という視線を送ってくる。

「いいさ。雨には慣れてる。それに、……蒲公英が暖かいからな」
ニコリ、と笑いかける。
寒いには寒い、が、それくらい我慢するさ

「ありがとね、お兄様　えへへ……あつたかい」

この笑顔が見れるなら。

やっぱ、子供の笑顔ってやつはいいもんだ。

……自分も、昔はこんな笑顔をしていたんだろうか？

つと、危ねえ。

思わず回想に入るとこだった。

別に、俺の過去なんてどうでも良いことだろう？

「だいぶやんできたな」

「……そーだねー」

がっかり感を出す蒲公英さん。
なんでさ？

「……くしゅっ」

おいおい、マジかよ。

この時代では、ただの風邪ですら不味いぞ。
……この時代？

「急ごうか、蒲公英。……この雨だ、風呂ぐらい沸かしてくれてる
だろうからさ」

「……うん」

返事をしてから、ずび、と鼻をならす。

いやあ、……可愛いなあ。

おっと、こんなことを考えている場合ではない。

「こくとー、おーほー」

呼ぶと、すぐにやってくる二匹。

黒兎と黄鵬もまた、近くの木陰で雨を凌いでいたのです。

蒲公英を、黒兎に乗るよう促す。

んで、その後ろに俺も乗る。

そんな、なんで、みたいな顔して見上げないでよ。

熱っぽい目での上目遣いと、（たぶん）風邪熱でほんのり赤い顔で、
だぜ？

……発情すんぞ？

「黒兎を御せるのは俺だけだ。……それに、こっちの方が早く帰れ
る」

黄鵬とは翠姉の馬。

今回の任務は、機動力というか、速さがある。

という訳で、蒲公英は翠姉に借りたらしい。

だけでも、目利きである翠姉が選んだ、数多くからの三匹　紫燕、麒麟、黄鵬　中の一匹だとしても、黒兎には及ぶことはない。ちようど今の　黒兎には二人、黄鵬には騎手なし　状態で、やっつりあうぐらいだ。

……黒兎さん、マジパネっす。

「しっかり俺に抱かれてるよ！」

急ぎ黒兎と黄鵬を走らせる。

……なんか、不味い気がしないでもないから、説明しよう。

蒲公英は、俺の前に座っている。

掴まるところなんて手綱ぐらい。

だから、俺に身を預けてくれている方がずっと安定する、という訳だ。

決してやましいことなどない。

しかし、やっぱり熱まで出たのか、蒲公英の顔が赤い。

本当にヤバそうだ。

なのに、一刻も早く家に帰らなきゃなんのに、……凄く帰りたくなってきた。

あ のとき　洛陽から帰ったあと　から、危機察知能力は格段に上がったのだ。

それが警鐘を鳴らしてる。

……悪寒がトマライデス。

上着を蒲公英に与えているので、俺は今、半袖である。それが故に寒いだけだ、と切に願いたい。

家に帰れば、案の定と言うべきか、修羅がいました。

蒲公英はお風呂へ直行しました。

逃げたな、コンチクショウ！

「茜さんや、お兄ちゃん、なにかしたかな？ 悪いところがあったら、ちゃんと直すから、教えて？ お兄ちゃん、なんかした？」

震えが止まんないんだぜ！

後ろからの圧迫感が尋常じゃないんだぜ！

「……………どして？ 陽兄に悪いとこなんて、なんにもないよ？」

清々しい笑み。

うむ、なかなか可愛らしい良い笑顔じゃないか。

この笑顔に、間接的に俺をいじめている訳ではない、と確信できる。

だけど、ねえ……………。

背につたう冷や汗が半端じゃないんだぜ！

「じゃあ、さ。……………なんで母さんはあのときみたく怒っ、あ
~~~~~」

首根っこ、とられますた。

蒲公英には、山百合さんについていってもらったので、憂いはない。

……………さて、逝って参りますか。

前回は名目上のお稽古。

みっちりしごかれたよ。

今回はなんだろねえ？

案の定、寝起きは最悪でした。

母さんはくどくどくどくどくと。

俺がわふ〜、と。

母さんが酔いつぶれるまで、つてか寝るまで愚痴を聞き続けた結果だ。

薊さんが政務手伝ってくれないとか、山百合さんが最近可愛いとか、瑪瑙に若干避けられてるのではないとか、翠に父親は必要かとか、蒲公英に圧倒的に負けているのではないとか、茜に嫌われてるのではないとか、藍が強くなりたいたってきたとか。

……愚痴じゃない割と真面目な話もあったけど。  
とりあえず全然酔ってくれねーからさ、結局深夜遅くに寝落ちしたんです。

これはこれで死ねるね。

どうせ母さんも必要になるから、と、外の井戸に水をとりにきた俺、眼帯を外し、まずは眠気覚ましにと顔を洗う。

ひんやりとした水がなかなか気持ちいい。

ふと、顔を上げる。

その行為に至って意味はなく。

ただ、なんとなく、だ

そして、何故だかわからないが、それでいて、まるで決定事項であるかのように、東に目を向ける。

そこに、一筋のなにかが確かに、左目に映った気がした。

Side 三人称

「俺は、天の御遣いとかいう、胡散臭いながらも、世を憂う三人の手を助ける為の御輿的存在じゃなかったのかよ、バカヤロー」

その俺が皿洗いですか、と洗い場でばやく者が一人。

天の御遣いこと、北郷一刀である。

出会いやら、劉備からの懇願やらは、原作通りであり、他のSSでも見飽きているだろうから割愛する。

手抜きな訳じゃ、ないんだぜ！

「まあ、劉備も筵を作ってたんだし、下からのスタートはこんなもんなのかな？」

ぶつぶつと呟く姿に、周りはひいていた。

一刀は気付いていなかったが。

「ただ、……なんで女？ しかも美がつく。……新手的エロゲかよ」

まあいいけど、と続ける。

ツッコミかどうかは判断しにくいけど、その内容は的確に当たっていた。

「……アイツは劉備の理想を、甘い、と言って、笑うだろうなあ」

(それでも困っている人を、女の子を見過ごす訳にはいかない。だから、手伝いたい、と思ったんだ)

と、一刀は心の中で続ける。

「お前と違って、俺は平凡な奴だけど、出来る限りをしたい」

(だから、さ。

見ていてくれないか？

滑稽だ、と笑ってくれても、馬鹿にしてくれてもいい。

ただそこで見ていてほしいんだ)

そう、今は無き自らの親友に乞う。

「はい、追加だよ！」

どうやって運んできたんだろ、と思わず呟く一刀。

50枚積みの皿の山々が、そこにあった。

「言った矢先からどうかと思うけどさ、……ちょっとだけ目を反らしといてくれないか？」

現状に泣きたくなかった、一刀であった。

結局、全て終えたのは日が落ちる少し前。

働かせすぎたとの女将の好意により、宿と宿代をゲットした一刀、

劉三姉妹の御一行。

明朝に、紹介された桃園に向かい、契りを結ぶことになるのが、原作との相違である。

さらに、もう一点だけ、原作との違いがある。

「天からの使者、現れり。……こつ馬白様に報告しといておくれ」

「了解です。……しかし、貴女は女将という職に、よく短期間で慣れたものですね」

「あたしゃ、戦いが嫌いであらねえ……元々、こついうことがやりたかったのさ。半年もあれば、ちよちよいのちよいつてもんだよ」

「それは僥倖。……それでは失礼します」

陽は語る。

「こつからは激動の時代だね」と

第十九話（前書き）

進んだけども。

進んだ気がしないのはこれ如何に。

## 第十九話

天の御遣い。

蒼天切り裂きやって来て、乱世に平和を誘う天の使者。

噂であるので、多少言い回しは違ってきてるが、大体はこんな感じの紹介のされ方だ。

そいつが、最近この大陸に遙々やって来たらしい。

俺は正直、必ずやって来るとあらかじめ予想していた。

理由として、そいつはこの大陸に於ける始まりの象徴であり、収束の象徴でもあるから、というのが一つ。

もう一つは、俺の感覚的な確信からなる。

ひどく曖昧で、抽象的であるのに、何故か分かっていた。

本当に何故なのか分からない。

初めて天の御遣いの噂を耳にしたのは、ちょうど一月ほど前。

俺はその超絶的に胡散臭いのを、矛盾した存在奴だと思った。

微妙な均衡を保ってきたこの世を乱す不届き者。

悪政強いる馬鹿共が乱したこの世を正す道理者。

乱世へと誘う悪。

治世へと誘う善。

……実に愉快な存在だ。

さらに、その噂は俺が関与したから、というのも否定出来ないが大陸中に広まった。

数多の人間は実を取る。

目先の欲に囚われる。

後の影響を無視して、都合の良い方だけを選び取る。  
だからこそ、動乱を幕開ける象徴を渴望する。

……笑えるね、全く。

俺が歪んでいるから、こう思った訳ではない。

てか、最初から狂ってる。

俺自身が絶対的に矛盾した存在だ、と言えるぐらいに。

何も貫けない矛と何でも通す盾。

はたしてそれらは本当に矛と盾なのかは甚だ疑問だが、このように、  
矛盾にも色々あり、それを誰もが持ち得ている。

だが、絶対的矛盾、というものを持ち合わせた者は、そうはいない。  
何故なら、非情で異常な覚悟か、壊れた心。

所謂、狂精神。

それがなければ、必ず破綻するからだ。

殺す為に助ける。

悪を挫く為に悪に染まる。

……そういった数多くの矛盾に対して、それらを実行する冷たい覚  
悟。

俺自身、どうとも思わない壊れた心。

俺はどちらも兼ね備えている。

全てに於いて、揺るぎなく、圧倒的に矛盾する。

それが俺であり、絶対的矛盾、というやつだ。

それを　その絶対的矛盾を　表で繕っても、わかる人にはわか  
る。だからこそ、俺には好評も悪評もある。

だからこそ、狼と呼ばれるに相応しい。

「そうは思わないか、蒲公英」

「ん？」

休憩用に、と用意した三人掛けぐらいの椅子に座る蒲公英が反応する。

何時のときか考えていた”狼”たる所以は、ここにあると俺は前に結論付けていたんだが。

ま、突然ふつてもわからんだろうな。

突然だが、俺と蒲公英は、俺専用の執務室にいる。

金城に来て、念願の俺専用執務室を母さんから賜った。

まあ、書簡が膨大になったから、という泣ける理由だが。

とにかく、それができてから今に至るまでの問題（と言えるものではない）は、何故か蒲公英さんが入り浸ることです。

そして、俺の大切な動力源である糖分をばちっていきます。

俺は甘いものは好きなのです。

三度のメシと同じぐらいです。

甘すぎるのは嫌いです。

ほら、ベタつくじゃん？

おっと、好みの話は今はおいといて、だ。

ホントは是非ともやめて欲しいです。

ま、食べられたら、その後に、たんばぼてめーばかやろっ、と言っぐらいで済ましますがね。

俺はそんなに怒るほど狭量ではないのだよ。

「なんでもない」

「……ふん。 あっ、これって、天の御遣い様についての報告書？」

いつの間にか接近していた蒲公英さん。  
それで、俺が手に持っていた書簡を覗きこんでいた。

「たんぽぽ、その人に興味あるんだ？」

「そうか」

素っ気なく答えてしまった。

何故だろう。

なんだか、こっつ、……イライラするんだ。

別に蒲公英が誰に興味を持つのが関係ないのに。  
無性に腹が立つ。

けど、単純な怒りじゃなくて、……どこか悲しい。

……訳、わかんねえ。

「……お兄様？」

「俺は天の御遣いに何の興味も持たないね。全然、全身全霊、全体的に全面的に全般的に全部、興味がない」

別に、本当に興味がない訳じゃない。  
ただ

「天の御遣いに、これっぽっちの興味を持つてたまるか！」

文字通り、全力で否定したくなっただけだ。

勢いよく立ち上がり、そのまま退出してしまふ。  
呼び止めようとする蒲公英の声を無視して。  
ズキズキと痛む心は無視して。

S i d e 牡丹

「嫌われたあ〜?」

共にいた翠が怪訝そうな声を洩らす。

確かに、普段からみれば有り得ないことのように思えるかもしれないけど。

対する蒲公英は半べそかいている。

可愛い姪っ子ね、全く。

「どうしてそう思うの?」

詳しく聞かないとわからないけど、多分陽が悪い気がするわ。

そんな感じで事の顛末を聞けば、……フフッ

陽たらずいぶん人間らしくなったじゃないの。

いや、戻った、が正確かしら?

「……母上」

「ええ。全てに於いて、あの馬鹿息子が悪いわ」

「……ホントに？ でもお兄様、すっごい怒ってたよ」

愛しい馬鹿息子は今頃、自分の馴れない感情をもて余しているはず。本当に、可愛い馬鹿息子。

「大丈夫大丈夫。このおばさんに任せときなさい」

大きく張った胸を、さらに張ってみせる。  
フッフ……まだまだ衰えていないわね

「陽兄なら中庭にいたわ。……頑張ってるね、おばさん（笑）」

「茜……。くう〜！」

いつ、いつの間に入って来たのかしらっ！

茜と藍が後ろにいたわ。

いい加減やめてもらいたいけど、おばさん、と自分で言ってしまうだけに、今回は否定できない。

……全く、どこから聞き付けているのか、分かったもんじゃないわ。

まあでも

「ごめんなさい！」

「だから藍、謝らなくていいんだってば！」

大人で子供のあの馬鹿息子に比べたら、可愛いものよ。

「あっ！ ちょっと、……う〜」

「へへっ」

二人を撫でる。

振り払わないだけ、茜も私を受け入れてくれている。

藍は言わずもがな、よ。

年相応に頬を膨らます茜が、無性に可愛い。

くすぐったそうに目を細める藍も、可愛い。

二人はすでに私の娘と息子。

私の大事で大切に大好きな家族の一員。

……アンタが教えてくれた、家族という大切な存在。

その家族のみんなを紹介してやりたかったのに、どうして先に逝っちまったんだよ？

「……おば、さん？」

いけないいけない。

心配そうに見上げてくれた茜に、首を軽く振ってから、微笑んでみせる。

そうすると、顔を真っ赤にして、伏せちゃった。

ホント、可愛いわ

……今更言ったところで、どうしようもねえか。  
待ってな。

どうせすぐにいくだろうしよ、そんなときに紹介してやるから。

Side 三人称

「……………」

無言で剣を振るい、拳を奮つ。

研ぎ澄まされた剣術と、乱れた我流の拳術。

両者が合わさって、初めて陽自身の武の完成型となる。

「やっぱり、じっくりこねえ」

しかし、完成と言えど、まだ八割とも言える。

今、陽の持つ剣での限界の為、八割でも完成と言わざるを得ないの  
である。

「やっぱり陽のって、不思議な武よね」

「いつからそこに？」

陽は後ろを振り向きながら問うた。

「最初から、じっくりこねえ、までバッチリよ」

「堕ちたな、俺も……………」

サムズアップする牡丹に、ガックリ、といわんばかりに陽は肩を落  
とした。

「それは違うわ。自己嫌悪を振り払うので一杯だったんでしょ？」

「へえ……聞いたんだ」

「そこは驚きなさいよ。つまんないじゃないの」

今度は、牡丹が肩を落とす。

おどけたように、だが。

「……別に、アンタの面白いことに付き合う気は  
っっっ！」 「陽！」

怒りの形相で、牡丹は陽の名を呼び掛ける。  
それにはっ、となる陽。

「……ごめん、母さん。イラついてた」

「分かればいいのよ、分かれば。……ほら、おいで」

罰が悪そうに、陽は余所に目を背ける。

それに対して牡丹は、その場の芝生に正座して、自らの腿を叩いて  
陽を誘う。

膝枕をしようというのである。

「いや、それは流石に恥ず 「陽？」 わかったよ。わかりま

したよ！」

「そうそう。物分かりの良い子は好きよ」

「ったく、……しょうがねえ」

そう悪態を吐いて、牡丹に頭を預ける陽。

なんだかんだ言いつつも、結局陽が折れるのが、いつも構図である。

「陽って、ホント、分かんない子ね」

「あん？」

「無表情で分かりにくい時もあるけど、今みたいに他人行儀をしたりして、驚くほど分かりやすかったり、ね」

と、陽を撫でながら言葉を続ける牡丹。

振り払わない辺り、陽も満更ではないのかもしれない。

「馬鹿にしてんの？」

「ううん、褒めてるの」

「ホントかよ」

「本当よ」

「なんかハズイな」

「可愛いわ」

「それを言ったら母さんも」

「あら、ありがとう」

「いえいえ、お世辞ですから」

「むっ……可愛くない」

「それを言ったら母さ　「怒るわよ？」　サーセンした」

「……フフツ」「……ハハツ」

罵倒でも賞賛でもない言葉の応酬。

テンポよく軽口を叩きあう。

似ているからこそ出来る会話である。

二人は自然と笑っていた。

「ねえ、陽……自己嫌悪に陥る必要はないわ。そのイライラは、アナタが成長している証拠なんだもの」

勿論、蒲公英には謝って貰うけど、と牡丹は続けて言う。

「ああ、わかってる。ちゃんと謝るよ。……でも、このイライラってなんなのさ？」

陽は知りたかった。

自分の知らない感情を。

突然に支配された理由を。

「それは嫉妬よ」

「しっ……と？」

「そう、嫉妬。人間の醜くて、私に言わせれば、かけがえのない感情よ」

牡丹は優しい手付きで陽の頭を撫でる。

ただひたすらに慈愛を込めて。

「醜くて、かけがえのない？ ……よく分からん」

「直に分かるわ。私の息子で、似た存在なのだから」

満面の笑みを浮かべる牡丹。

その笑顔に、綺麗だ、と陽は思った。

陽が、牡丹の下から蒲公英のところに向かった後。

「嫉妬、か。 ……随分と久しい感情だとは思わない？」

辺りには誰も居らず、他から見れば、虚空に質問を投げかけたように見えることだろう。

「なんじゃ、気付いておったのか」

しかしながら、ここにはもう一人いた。  
小陰から出てくる薊。

「あ、ホントにいたんだ」

「気付いておった癖によく言う」

「フッフ　さ〜てね」

肩を竦める薊。

そんな様子に笑みを溢す牡丹。

「嫉妬……ふむ。確かに久しい。じゃが、……儂の”アンタ”に対する嫉妬は、計り知れないものであったのを　「覚えてる」む」

「私にも”テメエ”に対する嫉妬があったもの」

今となつては全部大切な時間よ、と牡丹は笑う。

「ハア……氣勢を削がれた気分じゃ」

もう一度肩を竦める薊。

しかし、その顔は笑顔だった。

「さて、義姉上。書簡どもが待ちくたびれていますぞ」

「……いやよっ！」

勢いよく立ち上がる牡丹。

「駄々を捏ねるでない！　それでも儂の義姉かつ！」

「やあつ……ダメ……こつ、こないで」

ズンズン、といわんばかりに歩を進める薊。

半泣き顔を作つて、それに合わせるように後退りながら、牡丹は言う。

「何故か儂が強引に迫っているように聞こえるのじゃが……」

「事実じゃない」

キョトンとする牡丹。

その隙を薊は見逃さなかった。

「ふっ、もう逃げられませぬぞ、義姉上殿？」

「くっ！ お母さん、はーなーしーてーよー！」

「子供か！ そして、儂はお主の母親でないわ！」

服の後ろの襟をヒシッ、っと薊は掴む。

逃げられない牡丹は、ジタバタと幼児退行をする。

果たして、一体どちらが姉なのだろうか。

「ふう。ねえ、薊。あなたに言っておかなきゃならないことがあるの」

「なんじゃ？ 急にしおらしくなりおって」

いきなりキリッとして真剣味を帯びた話し方に、薊は少し戸惑ったが、そのまま 襟を掴んだまま 聞くことにした。

「あのね、私、政務をすればするほど寿命が縮む病気なの！」

……………。

もう少し、マシな嘘は吐けないのだろうか。

「はい、連行。いくぞ」

「ああん、ホントなのにい！」

牡丹の悲痛な叫びは、城内に轟いた。

が、薊が怖いので、全員スルーするのであった。

「あれ、私、太守じゃなかったかしら？ 何故かしら？ ……目が  
ら汗が止まらないわ」

一方、天の御遣いはというと……。

「初戦はついくせんなう」

無事、公孫贇軍に将として組み入れて貰った四人。

天の御遣いこと北郷一刀の初めての戦である、黄巾党との初戦しよせんも終  
局を迎えていた。

「うっぷ……ヤバい、吐く」

おろろろろ

と、いわんばかりに勢いよく、胃の中のモノを吐き出す一刀。

「ちよ、御遣い様吐かな」

おろろろろ

と、衛兵Aはもらい吐きをしてしまう。

「そう言いつつ、お前まで吐いて」

おろろろろ

と、一刀と衛兵Aの吐瀉物の量に、もらってしまつ衛兵B。

この負の連鎖により、一刀と劉備、その二人を守護する衛兵達の中で、劉備一人だけが吐かないという、なんともシユールな光景がで  
きあがっていた。

「あつ、あれー？ 私も吐いた方がいいの、かな？」

陽は語る。

「嫉妬……今なら母さんの言ってた意味が十分に分かるよ。関羽見  
てたら、なあ」  
と

第二十話（前書き）

ああ、進まない。

進まないっいたら進まない。

大局はちょっとずつ進んでるはずなんだけござー。

## 第二十話

S i d e  
陽

「暇だ」

この一言から始められる1日がなんと嬉しきかな。

本日、俺は全日休暇だ。

東の方ではこのような休暇はとれまい！

何故かといえ、こーきんとー、とかいう賊どもがのさばっているからだ。

ま、生憎とこつちにその影響はねえから関係ねえのさ。

こーきんとー、とかいう奴らは2つに分けることができる。

一つはあいどる、ってやつの追っかけ。

もう一つは、その勢いに乗じた民や賊共。

と、いう具合だ。

そのあいどる、ってやつである、張三姉妹の活動域は大陸北東付近。さらに、こつちの賊は俺が駆逐したから、ほとんど居らず。

かといって、わざわざ俺の近くでその勢いに乗る勇氣のある民衆やら、逃げてきた賊はいないだろう。

死神やら狼やらと言わしめる俺を前にして蜂起するのは、よっぽどの自信家か馬鹿、としか言えねえ。

だからこそ、こつちして暇が出来るのさ。

こーきんとーといえ、面白い話を一つ。

主に将を務めるのは、追っかけ側の人だそうだ。  
能力がある奴や野心がある奴は、頭を殺し、自分がのしあがるらしい。

このように、こーきんとーの中でも弱肉強食の風習が蔓延っているという。

……笑えないか？

弱肉強食のこの世の業から逃れたいが為に乱に便乗してる癖に、ってね。

ま、どうでもいいけどさ。

宛もなくぶらぶらと歩いていると訓練場についた。

……嘘です、見に来たんです。

目的といえば、あと半刻ほどで昼になるからです。

「こりや凄いな」

思わず息を洩らす。

指示一つで様々な陣形に素早く変化させることができる。

その様は、一糸乱れぬ動きと言うべきか。

全く、相変わらず双方とも素晴らしいね。

脱帽もんです。

ま、帽子被ってないけど。

もうちょっと見たかったのに、終わっちゃった。

と思ったら、兵たちがぐるりと円を作り、その中心へと向かう二人。



呆け顔の山百合さん。  
ビキビキ、といわんばかりに青筋を立て、こめかみを押さえる瑪瑙。

「……陽君」

「うす」

わざと声を低くして返事をする。

そしたら、おおう。

山百合さんと瑪瑙の睨む目。

なかなか……くるね！

「……陽君」

「ハイ！ スイマセンした！」

このネタはやらないといけない気がした、とは死んでも言えないさ。  
兵たちに声かけをやめてもらうことにする。

てか、山百合さんに睨まれて、殆どやめてたけど。

案外、皆ノリノリでやってたのにな。

よし、仕切り直しだな。

「オホン！ では改めまして……見あって見あって、はっけよお  
い」

シュン、と風切り音が一つ。

ストツ、と何かが刺さる音が二つ。

その場で動けず硬直していると、髪が数本落ちたのが見えた。

ゆっくりと後ろを振り返れば一本、足下を見れば二本、の短刀刺さっていました。

あわわわわわわ……！！

「……陽君？」

「モウシワケアリマセンデシタ」

凄まじい速度で土下座する。

マジこええ……！！

ガクブルもんですよ！

結局殺り合わなかった。

萎えたらしい。

……ま、そういう風になるよう立ち回ったんだけど。

だって、昼は長い時間欲しいじゃない。

ホントだぜ？

決して、作者が戦闘描写書くのが面倒だからやめさせた訳ではないんだぜ？

活気溢れる大通りに面する、見慣れた派手な店構え。扉を両手で仰々しく押して入る。

「いらっしやいま……」っ、これは馬白様！

「どっ？ 繁盛してる？」

正直、聞かずとも知っている。

まあ、事務的なものと解釈して欲しい。

「ええ、お陰様で……それはもう、がっばがっばと」

手もみをしながら、卑しい感じの笑み。

こいつ、こついうことわざとやるから面白い奴なんだよね。

「おや？ これはこれは、鳳徳將軍に閻行將軍ではありませんか！  
いやー、お二方に来て頂けるとは、光栄の至りです」

「……………」

無視、というより、店内に興味をそそられて、耳に入っていないだけ……と願いたい。

「ところで馬白様……今日は両手に花ですね」

簡単にはめげないようだ。

流石は元俺の部下だ。

……つてかさあ。

「両手に、花？ なにそれ、どうゆこ」

言葉を遮るように、突然にスパパン、と後頭部への攻撃。  
地味にいてえ……。

「ボク達のこと」

「……きまっているでしょう」

「直ぐに暴力を振るったアンタらに、見目麗しい花に比喩することは間違っていると思われるッ！」

断じて認めぬわッ！

と、続けたかったがやめた。

だって、二人の笑顔が怖いもの。

てか、両手に花って、そういう意味なのかー。

知らなかった。

そんなことはおいといて。

「……ささ、こっちこっち」

「」

俺の華麗なる流しには、閉口せざるを得ないようだ。

流石、俺。

今更だが、現状を説明しよう。

誰に、とは聞いちゃ駄目だ。

俺は山百合さんと瑪瑙と共に街に来ている。

勿論、一緒に食事するためだ。

午後から二人とも非番であることを 俺はお偉いさんだから

知ってたんで、さつき誘ってみたらすんなりとオーケ……了承を得られた。

ま、俺の奢りって言葉に食いつかれた感はあるけどね。

全く……現金なやつらだずえ。

個室に入った俺達。

ここは、俺がわざわざ作らせた場所。

THE 豊部屋。

”和”のテイスト……様式が欲しかった俺にとって、ここは至福の場所なのだ。

「へえ〜。アンタにしては、変わった趣味じゃないの」

ぐるり、と室内を見回す瑪瑙。

「……ほぼ全てに於いて、陽君は変わっていると思いますが」

「あ、それもそうだった」

それに若干微笑みながら返すのは、山百合さん。

なんかひどくね？

変わり者、という自覚はない訳ではないけどもさあ。

ただ、……時代が違えば、これぐらい普通の部類に入ると思っただけどな。

「ま、別に俺の趣味なんざどうだっていいだろうさ。ほら、座った座った」

二人を座るよう促す。

(どつでもよくないわよ……)

(……どつでもよくありません)

「では……カツ丼で」

「ん〜、じゃ、天井一つ」

「俺はいつもので」

「畏まりました」

退出する店員。

「で、なんでアンタはボク達を誘ったわけ？」

そこに、瑪瑙が質問してきた。

「……それは私も知りたくありません」

山百合さんも聞きたい内容であるらしい。

別に理由なんていらなくね？

アンタらはタダ飯食えるんだしな。

言うけどさ。

「ホントは母さんやら、皆も誘おうかとは思ってたんだけど、仕事でさ……。だから、二人だけ誘った、つー訳」

母さんと薊さんは書類仕事。

茜と藍は二人でお出かけ。

翠姉と蒲公英に至っては、この街にすらない。

だから、山百合さんと瑪瑙だけになってしまっただけだ。

「ふう〜ん……ボク達は余り者って訳ね」

あからさまに不機嫌顔をする瑪瑙サン。

表立って表情に出してはいないものの、山百合さんも不機嫌さが滲みでている。

さっぱり意味がわからん。

「どういう解釈したらそうなるんだよ……。俺は元々、家族皆で食べに来たかったけど」

俺とて朝晩の食事は、母さん規則により 家族皆で撮っている。

しかし、そこに事実だけがあり、意味が伴っていなかった。

意味とは、会話をするコト。

俺は、それが出来ていなかった。

最近の仕事の膨大さには、そういった家族との交流を削るより他なかったのだ。

ほとんど家族の皆と話すことすらしなかった、出来なかった。

だから、こうして俺が非番である今日に、こういった時間を作った訳、なんだけど

「皆都合が悪かったみたいだから、結局二人だけという集合率の悪さになったんだけどね」

ま、仕方ねえさ。

「……そう、でしたか」

山百合さんは静かに答え、瑠璃はしんみり、といった様子で答えな  
かった。

「おまちどうぞさまですー!」

気まずい感じの空気の中、料理をもった店員がやってくる。

いつもいつも、こういったタイミン……時期は、図っているかように  
良いよ、マジで。

それぞれの前に置かれる、カツ丼、天丼、親子丼。

立つ湯気に、香りに、食欲が湧いてきた。

「まあ、食べようぜ」

「……仕方ないわね」

やれやれ、といわんばかりに肩を竦める瑠璃。

それでも、口元はどこか笑っていた。

いやー、良かった良かった。

「……ふふ」

「なっ、なに?」

山百合さんの含み笑いに、何故かひどく動揺する瑠璃。

こういうときの瑠璃は可愛い、って思ったり。

「」「いただきます」「」

食事前の合掌は、すでに馬家の口課だ。

他愛もない会話をしながら、食をすすめる。

やっぱ、こういうのって良いよなあ……、って自然に思う。  
あっ、と……。

「エビ天、頂くぜー」

「ああっ！ ボクのっ！ 返せっ！」

「フフン、取り返してみるがいい」

そう言いつつも、半分程の大きさになっていたエビ天を口に入れる。  
流石に一匹丸々は不味いと思っ、配慮はしたんだぜ？

ああ……、サクツとした衣に、プリツとしたエビ。

どうやってこんな内陸部まで鮮度を保ったかは突っ込まないけど。  
……堪らんなあ。

「ああ……、ボクの食べさしのエビ天……食べ、さし？」

3、2、1、ハイ！

「バカ ツ！！！！！」

これでもかッ、ってぐらいお顔が真っ赤です。  
今回に至っては耳まで。

「そんなに怒るなよ！ なっ！ 俺のやるからさっ！」

ここまでの”怒り”は初めてだ。

そんだけの怒りをぶつけられたら流石の俺も怖い。

けど、なんか可愛い。

……どうやら俺は、若干いじめっ子体質らしい。

「瑪瑙様！　これでお納めくださいませっ！」

箸に玉子に包まれた肉をつまんで、瑪瑙の　突きつけると言っても過言ではない速度で　口元に持っていく。

「~~~~~っっ！！！」

一瞬戸惑った仕草をみせるものの、箸の上の物を食べる瑪瑙。その後、声にもならない音（と言ったほうが分かりやすい）を上げ、動かなくなった。

……効果あり、なのか？

顔を見れば、むしろ赤みを増している。が、攻撃はしてこない。

フハハ、勝ったわ！

あ、これって所謂、あゝん、というやつじゃね？

「……全く。天性の女殺しですね、陽君は」

山百合さんの眩きは、俺届くことはなかった。

あのバカは、いつもボクの心を乱してくる。  
蹂躪してくる、と言っても言い過ぎじゃないほどに。  
目の前にいてもいなくても、寝ても覚めても、心にはバカがいる。  
ボクが大っ嫌いな男の癖に、平気で居座ろうとする。  
追い出しても追い出しても、何度でもやって来る。

何故？

男が嫌いなはずなのに。

何故？

嫌われてもおかしくないはずなのに。

何故？

心に入られていることを許している。

何故？

アンタの心に残りたいと願っている。

何故？

アンタの為に熱くなれる。

何故？

アンタの為に冷たくなれる。

何故？

もっと近づきたい。

何故？

もっと遠退きたい。

自分に何度問いかけようと、答えは分からないの一点張り。  
母様に問うても、答えはボクの心の中にある、の一点張り。

ねえ。

アンタならわかる？

陽。

Side 三人称

一方、天の御遣いはというと……。

諸葛亮と鳳統が仲間になった時。

「ロリ比率が上がった。 テレ〜テツテツテツテ〜」

と、口にしていた。

別に、天の御遣いこと北郷一刀の能力が上がった訳ではない。  
むしろマイナスにはたらくこともあった。

曰く……

「天の御遣い様は幼子おんこがお好きなのか」

……という具合に。

真面目に答えた本人は、

「そういったこだわりはない。ただ、好みか……そうだな、好きになつた子が好みかな」

と、いかにも種馬らしい発言をしたので、また、一目置かれていた。

そしてその数日後、曹操との会合を果たした一刀と愉快な仲間たちの5人。

遠のく背を一瞥し、後ろを振り返って発言する。

「ふむ。……………ちっせーんだな、曹操って」

「「「「「じっつ、ご主人様っ！」「」「」」

「にゃー、……………お兄ちゃん、本人を後ろにすごいのだ」

（ロリ……………なのか？

そう仮定したとして、Sでロリとはなかなか……………。

さらに、そうゆー奴がたまに見せるMっ気って萌えるよな）

四人が青ざめ、一人が感心している中、思考に耽る一刀。

「……………」

偶然にも、伝え忘れていたことを言いに、劉備軍の陣に帰ってきてきた曹操。

そこに迎えた言葉が、一刀のちっせーな発言だった。

……………どうやら十分に距離をとろうと、溜めたのが仇となったようだ。

（本人に背を向けて、気にしていることをさらりと言いのけるとはね。

この私を前にして、物怖じしない胆力。

私の覇道を阻む者になり得るモノを持っているじゃない。

流星は天の御遣い、というところかしら？）

と、一刀の目の前に立つ曹操は、怒りを乗り越し、称賛すら与えていた。

自分では、何も出来ない、や何もしていない、と発言する一刀だが、実際、駆け引きの場面などは、劉備より巧い。後は、人並みの能力と、桁外れの魅力。ただそれだけが、一刀のスペックである。

曹操は勘違いをしていた。

本人を背にして言いのける……。

そこに本人がいたことを知らないだけだ。物怖じしない……。

思考に耽っていたので、気配に気付いていないだけだ。

「って、あれ、曹操サン？ としてここに？」

思考の波から帰ってこれば。

目の前には、ガタガタと震える仲間たち。

視線の先を追って、後ろを振り返ると。

神妙な顔した曹操がいた。 今ここ

とりあえず、ひどく焦る一刀。

「まさか……気付いていなかったの？」

「あ、ああ、まあね」

こめかみを押さえる曹操。

自分の評価したほとんどが勘違いと理解したようだ。

「……覚悟は良いかしら？」

どこからともなく曹操の武器である鎌 絶 を取り出す。

「不味いんじゃないかな？ せっかくの同盟が破綻さ 「それ

とこれとは話がちがうわっ！」 ちよ、桃香、助けて」

仲間に懇願する一刀。

「殺さないでくださいねっ」

頭を下げる劉備。

あるえ？と首をかしげる一刀。

「その辺りに抜かりはないわ」

と、サディスティックな笑みを浮かべて曹操は言う。

「あっ、愛紗！」

委員長が頼みの綱だぜ！と一刀は愛紗に視線を送る。  
だが、そんなに現実には甘くはなかった。

「残念ですが、お助け出来ません。今回は、全面的にご主人様が悪いからです」

またもやあるえ？と首をかしげる一刀。

「はわわっ、がっ、頑張ってくださいっ！」

「あわわ、応援してましゅ」

「お兄ちゃん、頑張るのだ」

と、次々に見捨てられる一刀。

「もう、良いかしら？」

「……はい」

観念した一刀。

「アッ

！！！」

その叫び(?)は、陣全体に轟いたらしい。

陽は語る。

「そうか……、瑪瑙はツンデレだったのか。ボクっ子、ツンデレ……詠ちゃんと被ってね？ 勿論、YAZAWAじゃない詠ちゃんね」と

## 第二十一話（前書き）

戦闘描写、難しい。

そして御都合主義あります。

## 第二十一話

「そろそろ、か」

いつもの様に眉をひそめ、目を瞑り、馬上にも関わらず、手綱に手を掛けずに腕を組みながら、陽は眩く。

いつもの様に、と言っても、何時でも何処でも、というわけではない。

そのしかめっ面は、戦の前のときだけだ。

では、何故か。

それは陽の戦嫌いに起因する。

陽は基本的に、戦うことを好まないタイプである。

だが、乱世は幕開けることなど容易に想像できた 実際になった

為、それも言っていられない。

それならば、と。

それならば、極力少ない戦いで終わらせればいい。

そう考えた陽は、それを実行するための手段の一つとして、

” 相手が相対することを拒みたくなる存在になる ”

ということを、目標として置いた。

それを成すには、まず相手に、自分という存在に対しての畏怖、畏敬などといった、なんらかの感情を刷り込ませる必要がある。

敵対する者には多大なる恐怖を、味方する者にも敵対することを拒ませるほどの恐怖を、それぞれに印象付けさせる必要がある。

衝突した者はどうなり、どうされ、どうなったのか、ということ、偏見や誇張の混じった噂を耳にしてイメージさせる必要がある。

過程は違えど、結局は相手に、”馬白”という者の人物像を作らせる、ということにある。  
その人物像が大きければ大きいほど、恐ろしければ恐ろしいほど、真価を発揮する。  
進んで敵対しようとは思わなくなる。  
これこそが、陽の目指すモノである。

今現在、牡丹、薊及び一万の兵を除く、全軍で出撃している。  
五胡からの侵攻を防ぐ為だ。  
しかし、陽の場合はそれだけに留まらない。  
戦とは、相手に恐怖を覚えさせる絶好の機会なのだから。

「ぜりやっ!!」

「っ!?! あつぶな〜い」

力任せに振るわれた斧を、馬を退かせることにより避ける。

「ふははは! どうしたどうした! 仕掛けてきておいて、そんなものか!」

「こつちがどうしたの、って聞きたいよ。こんな小娘一人簡単に殺せるわ、って声高らかにいってたくせに(笑)」

手を口元につめていき、笑うのを抑えるようなふりをする。  
明らかな挑発だ。

……一騎打ちの最中だが、なかなかの余裕ぶりである。

「……本当に貴様は死にたいらしいな」

相對するものは、顔を真っ赤にして、怒りを露にする。

「そんなに睨んでも、お兄様に比べたら怖くないもんね〜だ！」

べ〜、と舌をすこしだして、さらに馬鹿にする。

……この者、挑発の才があるかもしれない。

「馬岱隊、反転！ 後退するよ！」

『おう！』

「何っ！ 逃げる気かっ！」

馬岱、すなわち蒲公英の号令の下、撤退する兵たち。  
元から正面きつてやるつもりはなかったようだ。

「これでもくらえっ！ ハハハッ！」

器用に尻を上げ、自分の手で叩いた いわゆるお尻ペンペンした

あと、すぐさま馬を駆る。

……キャラが変わった気がしないでもないが、気にしてはいけない。

「っ！……！ 全軍、全速前進！ あの小娘をぶち殺す！！」

散々に罵倒された挙げ句、討ち逃がしては堪ったものではない。  
激情に委せた突撃命令をする羌の将。

それが、冷静を欠いたその行動が、どれ程愚かなことであるのか。経験の少ない大将である彼と彼の部隊、すなわち、馬白という存在をほとんど耳にしていけない者たちは知らなかった。

……ただ、副大将とその直属の兵たちは冷静に、それでいて測っているかのように見ていた。

「ちい！ 探せ！ 探し出せ！」

簡単に言えば、五胡の兵たちは、立ち込める霧により、蒲公英らを見失っていた。

それもそのはず。

数歩先しか進んでいないにも関わらず、そこにいる、ということに確証が持てないほどの濃霧のかかる林の中だ。

流石にどうしようもなかった。

簡単には見つからず、逃げるのだけはうまいらしい、と悪態をついてしまうほど、大将はイライラしていた。

「む、あれは……。ふん、馬鹿な小娘よ」

大将の視線の先には、小さな篝火によって出来たであろう、ぼんやりとした光があった。

その光を見て、大将は蒲公英の低脳さを哀れむと同時に、先ほど受けた辱しめによる怒りが沸々と再び舞い上がっていた。

「速度を上げろ！ 全軍、突撃いいいい！」

『おー！！！！！』

大声を上げ、自ら先頭切つて走る大将。

向かうは、その小さな篝火。

徐々に近付いていったと思つた途端、霧が晴れる。

単に林を抜けたただけだが、大将はそれを一瞬で把握することは出来なかつた。

その隙が仇となり、気付けば矢の雨が降り注いでいた。

断末魔の聲が辺りに吸い込まれていく。

「ちい！」

盛大に舌打ちをする大将。

自身は駆け抜けることでなんとか切り抜けることが出来たが、後ろはそうはいかなかつた。

後ろを確認すれば、三割近く死んでいた。

(一体、誰がやりやがつた！)

そう心で叫びながら、顔を上げて辺りを見回す。

すると、みるみるうちに大将の顔が、驚愕の色に変わった。

「なつ、なにい！」

そこには、大将を含めた羌兵がいる場を中心にして放射状に延びる道が、西に向かう一本を除き、西涼兵で埋めつくされた様があつた。……羌兵が通つてきた北に向かう道さえも、だつた。

羌兵から見て、正面後方に漆黒白字の馬旗。

そのすこし手前に緑色に黄金で錦の文字の旗。

右斜め前に白色赤字の鳳旗。

左に褐色白字で艶の文字の旗。

そして後ろに橙色黒字の馬旗。真右にはなにも無く、道が拓けているという構図。

ほぼ完全に囲まれており、まさに八方塞がりである。

「ちい！ 罨かつ！」

嵌められたことに、さらに怒る大将。

そこに、錦旗を掲げたの部隊が近づく。

「そこのお前！ あたしと勝負しろ！」

馬超こと翠が突出する。

一騎討ちをしようというのである。

「いいだろう！ しかし、貴様に相手が勤まるかなあ！？」

それを受けることにする大将。

馬を走らせ、すれ違いざまに斧を思いの丈の力で薙ぐ。

翠も同様に、己の槍 銀閃 で頭を狙い薙いだ。

翠は、服の脇下部分を少し裂かれてしまおうが、銀閃の切っ先には血が付着していた。

「ちい！」

本日何十度目にもなる舌打ちをする大将。

少しだけ裂かれた頬から血が滴っていた。

それを力任せに拭い、馬を反転させ、再度突撃する。  
翠も、ほぼ同じタイミングで第二撃を仕掛けた。

今度は、威力を落とし、確実性のある薙ぎ。

それを見切った翠は、槍の中央付近でその斬撃受け止める。

そのまま斧を跳ね上げ、それにより生じた隙　大きくあいた脇  
を目掛け、切り上げる。

「……っ!!」

大将は咄嗟に手綱を引き、馬を退かせることでなんとか回避し、薄皮一枚にとどめた。

「こんなもんか。……期待外れだぜ」

翠によるあからさまな挑発。

だが

「黙れえ　　!!!!」

幾度となく愚弄されてきた大将にとっては、我慢の限界だった。

「ガアアアア　　!!」

大将は自らの斧を無茶苦茶に振り回す。

それを受けることはせず、巧みな槍術でもって流し、巧みな馬術でもって避ける翠。

流石は錦馬超と言っべきか。

すでに三十合ほど撃ち合っているが、息一つ乱れない。対する大將は肩で息をし、疲弊しきった様子だ。それを見て、そろそろ終わりか、と翠は判断する。半ばつまらないな、と思いながら。

「錦馬超、参る！」

最後になるであろう撃ち合いの前に、名乗りを上げて自らを鼓舞する。

「アアアアア、アアア　　！！！」

そんな翠を嘲笑うかのように、最大の力を込めて、大將は斧を振るう。

人の身体など、簡単に分断できるほどの威力だ。

「……くっ、う」

しかし、翠は顔をしかめながらも、難なく受け止めた。

その行為は、相手に動揺と驚愕と隙を与えるに十分すぎた。

「おらあ　　！！！」

横薙一閃。

翠は相手の首を跳ねた。

「敵將、錦馬超が討ち取った！」

西涼軍より歓声が上がる。

一方で、五胡では動揺が広がっていた。

「……ふ、やはりな。　ここは、俺の部隊が殿を勤める！　貴様らは逃げるが良い」

『はっ！』

副大将の指示に従い、撤退する大将直轄の兵たち。

一つしかない　誰も陣取った形跡のない西　逃げ道へと。  
自らの上司を討たれ、動揺していた彼らは知らなかった、気付かなかった。

その道が誘いであることを。

……副大将にとって、その兵たちは邪魔でしかなかったのだ。

西から時折聞こえる悲鳴と呻き声が鳴り止まない中、その会談は行われた。

「会談とは、随分な言い草だ。立場をわかっているのか？」

「ええ、弁えているつもりですが」

「貴様っ！」

社交的な笑みを携える二人。

片や指揮官、片や捕虜の二人。

捕虜の男は、どう見ても弁えていない。  
それに反応した将を、指揮官は手で制す。

「ま、いいや。……で、何をしにきた？ 自ら首を捧げに、と言  
うのなら、爆笑しながらその首跳ねてやるぞ？」

「貴殿に仕えたい、と。まあ、首を捧げるようなものです」

フン、と指揮官は鼻で笑う。

半分冗談、半分本気だったのだが、相手の真剣さを見て、爆笑しな  
かった。

「何故だ？」

「私は、いえ私達は、強き者の下で働きたいと常々思っていた所存。  
我ら羌族や北の匈奴など、蛮族に劣らぬ強さ。我らが仕えるにた  
ると判断しました」

「俺を皮肉ってんのか、自分を卑下してんのかはつきりしろ」

フン、と冷笑する指揮官。

”蛮族に劣らぬ”ということも、自らを自分で”蛮族”と呼んでい  
ることも、別段気にする程のことではなかったからだ。  
しかし、周りにいた将たちは笑えるはずがなかった。  
むしろ、殺気立っていた。

「これぐらいのことで、一々殺気を出すな。……だったら、これ  
から俺が負け続けたり、最悪死んだら、どうする？」

振り返って仲間を宥めてから、再度振り返り、問う。

「裏切ります」

「なんだとっ！」

捕虜の両側の首筋に刃があてられる。

左からは十文字の槍。

右からは両鎌付の槍。

少し動かされるだけで死ぬというのに、物怖じせずに見つめる捕虜、すなわち先の副大将。

「プツ、ハハハツ！！」

突然に笑いだす指揮官、すなわち陽。

副大将の悠然として潔く、外連もない態度に笑ったのである。

「いいよ。実に良い。じゃあ……負けしないで生き続けている限り、俺に忠誠を誓えるな？」

「ええ、誓いましょう」

口角を上げ、三日月のような笑みをし合う二人。

「……はあ。また、ですか」

「仕方ないよ、山百合お姉さま。だっってお兄様だもん」

その光景を見て、頭を抱えるふりをする山百合。

それを わざとだとわかつているが 慰めるは、苦笑気味の蒲公英。

陽と一緒に戦に出ることの多い二人は、もう慣れっこだった。  
……そういった慣れや共に駆けた戦場、稽古の数だけ、山百合と蒲公英は仲良くなっていたりする。

「馬超、閻行、武器を下ろせ。あと、これからのことに口を挟むなよ?」

「……はっ」

不服そうに、陽に従う二人。

仕事での立場上、二人の上司である為、従うより他なかった。

「さて、何に誓わせようか。あと、その口調止める。お前は形式上俺の部下になるが、実際は対等だ。……良いな?」

「わかり……わかった」

翠や瑪瑙は勿論、副大将も驚きを隠せなかった。  
ならば、と口を開く副大将。

「……その左目、見せてくれないか?」

「お前……遠慮というもんを知らんのか」

「対等なんだろう? ならば遠慮はいらんだろう。ついで、とは言わないが、その左目に誓って忠誠を約束する」

「……ハア。わかった」

ため息を吐き、顔を近付ける。

陽の左目も見せ物という訳ではない。  
誰彼構わず、万人に見せるものでもなくば、陽自身、見せたくもないもの。

周りにいる兵たちも例外ではない。

だからこそ、頻度は無論少ないが 見せるときには一対一、  
又は周りが視認出来ないほどに近付くのである。

「っ!?!? そつ、それは……」

「どうかしたか?」

今までで一番、というより初めて動揺を露にしたことを疑問に思う陽。

「いや、何でもない」

「ふうん、ならいい。さて、お前らの処遇だけど、……どうする?  
半々で分けるか、そのままで羌に帰るか、の二択があるぞ」

「はあ?」

声を上げたのは誰か、はたまた皆かは分からなかった。

( どういうく むぐっ )

( 翠お姉さま、黙ってて! )

( ……とりあえず、陽君に任せておいてください )

( ボク達は黙っている、と? )

( ……そういうことです )

「だーから、お前とお前の部下の半分は必ず羌に戻ってもらっ、  
って言うてんの。あと半分はお前が決める」

「……ふむ。なるほど、そうか。ならば連れて行く。多いに越したことはないからな」

「ならば行け。こっちからの用があれば、追って連絡する」

「了解したぜ、旦那」

「旦那は止めれ」

S i d e  
陽

ケン さっきの大胆不敵男 直属の五胡兵らが北へと帰ったのを見送って、自分の天幕へと入る。

「ふう、やーっと終わった」

「おっにいっさまあ〜!!」

飛び付いてきた蒲公英。  
地味に痛い。

「あのなあ、毎度毎度ホントに……。天幕内だからいいけど、兵の前でやったら怒るからな」

「わかってるよ」

その辺は自重してるから許してるんだけど。

「で、だ。陽、なんで全員帰らせたんだ？ 言い方は悪いけど、人質として半分残すのが普通じゃないか？」

……絶句した

翠姉からそんな言葉が。

「偉いぞ、翠姉！ そこまで自分で考えるなんて！」

ぼんぼんと頭を撫でる。

……最近、撫でるのが癖になってきた気がする。

「……いつもあたしが、何も考えていないかのような口振りだな」  
睨まれた。

別に恐くないけど。

「じゃあ、アンタはいつも何か考えているのか？」

「……そ、そう言われるとだな」

「ふ。やっぱりじゃない」

瑪瑙はまた余計な茶々をいれやがって。  
しかも、嘲笑付きで。  
どーせ喧嘩オチになるだろ。

「んだと！ やんのかコラ！」

「上等よ！ やってやるんじゃない！」

ま、そろそろとめようか。

「まあまあ、もちつけ。すぐに喧嘩腰になるのは良くないぞ」

「」「うっさい！」

何故か黙らされた。

何故なんでしょうねえ。

「落ち着く」

「関係ないのは」

「引っ込んでろ！」

あゝん

フッフ、そうですか。

「そんなにも……死にたいのですね。結構なことですよ」

殺気を上げる。

翠姉も瑪瑙もガクブルしてるが、許さぬ。

「お兄様……寒いよ」

む、そう言われてはかなわん。

殺気（つか、冷氣？）を出すのをやめる。

「……二人共、命拾いしましたね」

「……ああ」「……そうね」

反省しているのか、しおらしくなった二人。  
良かった良かった。

さっきの話の続きだが、翠姉の言うように、人質として置いておくのも一理ある。

なにより、戦力としての 羌に限らず 五胡の皆さんは素晴らしい。

ほとんどの者が馬に乗れ、かつ騎射っていうんだっけ（俺の記憶での名は流鎚馬だったか？）が出来る。

申し分ない練度を誇っている。

……だからこそ組み入れにくい、という点もなくはないが。  
しかし、だからといって受け入れを完全に拒否して、という訳でもない。

以前にも、何度か降ってきた者はいた。

その中で、俺の隊に入った奴は何人もいる。

そいつらは、俺に絶対的な忠誠を誓った。

だが、今回は違う。

名目上は俺が上だが、対等で、持ちつ持たれつの関係にある。

同盟を組んで直ぐに裏切ることに、利が全くない。

さらに、俺が奴に力を示す限り、裏切ることはない。

だからこそ、逆に信用できる。

俺が負けさえしなければ良いんだからな。

それに、向こうに多く帰ってもらった方がより良い不満を持つことが少ないだろうし、何より、やってもらいたいことなんて幾らでもある。

だから、正直どつちでも良かったんだな、これが。

「あ、そだ。 蒲公英、翠姉、良くやった」

蒲公英は先鋒、かつ誘い役。

翠姉は敵将の撃破。

未だに抱き付いている蒲公英と、（何故か（笑））涙目で座り込んでいる翠姉を撫でる。

「えへへっ」

「……………」

終始ご機嫌な蒲公英。

煮え切らない感じの翠姉。

……………従姉妹なのに似てなさすぎる。

「失礼します。 馬白様！ 後始末、完了しました」

天幕の外から、部下のその声が聞こえた。

後始末とは、死人の埋葬。

西のなだらかな山に挟まれた 敢えて旗印を上げなかった 道  
で死んだ者たちを、だ。

そこでは、虐殺ともいえる程の一方的な戦が行われた。

……………まあ、俺が伏兵として弓兵をおいたんだけどさ。  
誰も彼も、死んだらただの肉片だ。

死体を放置しといて道が使えなくなるのも困るし、疫病が流行る可能性がないわけでもない。  
だから埋めとくんだ。

「わかった。……では帰還する！」

### Side 三人称

その頃の天の御遣いはというと……。

「えっと、『その地より北方五十里に黄巾軍あり。規模は大きめの二万ほどで、黄巾軍の食料補給の要所。軍資金の三割を同封する。遠慮なく使っても結構。使い渋るも結構。使っても使わぬもあなた方のお心次第。ただし、返還は不要。ただ民を救う為にお使い頂ければと。漢皇室劉宏封西涼太守馬騰直轄預奉所軍所総監督馬白（かんこうしつりゆうこうがほうぜらるはせいりようたいしゅばとうちよっかつあずかりたてまつるところいくさどころそうかんとかばはく）』最後長ッ！」

思わず書簡にツツコミを入れる天の御遣いこと一刀。読み上げた後だった為に、ノリツツコミみたくなっただのは仕様である。

流石に、天の御遣いに集う愉快的仲間たちも苦笑する。

「なんだよ、このネタな役職は……。しかし、馬白、ね」

（そんなやついたっけ？）

と、疑問に思う一刀。

現代で、三國志には常人より興味があった。

他の人より知っている、という自信すらもつほどには。

「ホント、誰だ？」

「はわわっ！ 知らないのですしゅか！」

「あわわ〜。朱里ちゃん、落ち着いて」

興奮する諸葛亮を宥める鳳統。

しかし、その鳳統の鼻息も少し荒かった。

そんな二つの様子に、陽のことを知らない三姉妹と一刀は、若干引き気味である。

「狼さんで、英雄の一人で、死神で、商人で、悪の善政者なんですよ！」

「……ゴメン、朱里。話が全く見えない」

諸葛亮は、能力的に（武力以外）陽を上回っているにも関わらず、かなりリスペクトしている。

圧倒的なまでの情報を持ち、軍略、政治、商売にまで精通し、指揮をとっては軍師として、非情な策をも執る。

やり過ぎと思われる節がなくもないが、陽は軍師の鏡に近い存在なのである。

「朱里がそこまで興奮するとは……とりあえず、すごいのか」

う〜む、と腕を組んで、唸る一刀。

「そんなチートな奴が、ホントにいるのか？ はたまた俺と同じく

イレギュラーなのか？」

その咳きには誰にも届くことはなかった。

ときを同じくして……。

「雪蓮！」

「んー、なあーにい？」

珍しく書類仕事に明け暮れ、頂垂れ気味の孫策は、周瑜の呼ぶ声に気のない返事をする。

「これを見る」

「んーと、何々『南陽より南東四十里に…略…お使い頂ければと。』

漢皇室（ry）これがどうかしたの？」

慌てて私に見せる必要があるものでもないじゃない、と続ける孫策。読み上げた内容は、劉備らに送った先ほどの物とほぼ同様で、陽が送る書状としては何の変哲もないものである。

そのことを孫策自身が知っていて、周瑜が知らない訳がないのだ。

「いや、内容としては問題ない。が、同封されていた金がな、……五割近いんだ」

「うーん、間違えたんじゃない？ ほら、向こうとこっちじゃ戦に掛かるお金が違ったり、とか」

とりあえずの仮説を立てる孫策。

「それはない。辺りの諸侯には、規模や距離、行軍の速さまで計算された上での三割の金を出資している。間違えはしないだろう」

それを否定する周瑜。

陽は変にキツチリしているのである。

「だったら、たぶん孫家に味方してくれてるんじゃない？」

次は、率直な勘を言う孫策。

「そうとしか考えられないだろうな。しかしだな 「あら。私の勘は当たるのよ？」 そう、なんでもかんでも勘で当てられては、私の立つ瀬がないじゃないか」

それを否定はしない周瑜。

分かっているのだ。

孫策のいう通り、孫策自身の勘はよく当たるということを。軍師泣かせの勘が外れないということ。

「送り主が、馬騰さんの子だから、ってのは理由にならない？」

「私はあとのせサクサクが嫌いだ」

「……は？」

周瑜の言葉に思わず呆気にとられる孫策。

冗談っぽい言い方であった為そうなってしまったが、言い分としては至極真つ当なこと。

勘から推測して、理由を後付けするのは、軍師としては好ましいことではないのだ。

「冗談だ。……確かに一理としてあるかもしれんな」

だが、過去を思い返せば、筋が通っていない訳ではないな、と思った周瑜は認めざるを得なかった。

「ところで雪蓮、それはなんだ？」

「ん？」

2センチ四方程まで折り畳まれた紙が机にあった。

書簡を開いたときに落ちたのだろうと判断し、孫策は開いてみることにする。

すると、みるみるうちに目が鋭くなった。

「……どこまで知っているのかしらね」

辺りを照らしている火でその紙を燃やす。

……この時代、紙はまだ高価なものだから、そうしなければならなかった、ということだ。

「なんと？」

「『来るべき日にお使い下さい 陽』だって」

「危険だな」

「ええ」

陽は語る。

「あの戦の後に字を戦功と成人を理由に貰ったんだ。翠姉と一緒にね」と

## 第二十二話（前書き）

メインヒロインが出ていない、だと……！？  
と思り返すけど。

あ、それ割とよくあるわー。  
と、自分で思う今日この頃。

進まない……。

## 第二十二話

「死ぬる」

机に身を預けながら政務に励んでいる陽でございますよー。

まあ、戦後処理だから仕方ないことだけどさ。

今やってるのは主に戦中の状況報告。

さて、後日談といきましょう。

まあ、そんなに大層なもんじゃないけどな。

羌勢が2部隊、計一万ほどで攻めて来ること。

その大將が短気なこと。

そいつらが北の道から衢地　　各方にのびた道の収束地　　に  
来ること。

その途中の林は、年から年中霧に覆われていること。

西の道は傾斜の緩い山に挟まれていること。

それら全てを知っていた俺たち、つか俺は、敵部隊を殲滅すること  
を選んだ。

……皆が小競り合いに飽き飽きしていたから、ということも否定出  
来ないが。

ま、とにかく、大將の性質上、先鋒は蒲公英と決め、蒲公英と翠姉

を少し早めにそこに行かせた。

下見と準備　霧の濃さの把握とそれへの適応　の為にだ。

二十話で二人がいなかったのはこの為だ（メタ発言

んで、その1日後に、後続というか本隊として俺、山百合さん、瑪瑙が今回の戦場に到着。

すぐに西の道を挟む両山に、弓兵一千ずつを伏兵として配置する。

待つこと1日、ついに敵がやってくる。

蒲公英による言葉攻めによって発情（？）した敵の大将達を、霧で撒いて攪乱させ、篝火を使って衢地へと釣り出す。

勿論のこと、このときの蒲公英の部隊は霧の中だ。

連れて来ていたもう二千の弓兵に、羌勢が出てきたところを射させる。

そのあとは翠姉の独壇場となって、大将を討ち取る。

そいつの直轄であった半分は、運悪く西へと撤退したことにより、本来いた数の四分の一程度までに減らした。

……まあ運も糞も、西の道を通るといって一択しかなかったんだけど。

最後、副大将のケンを降して、羌に送り返す。

と言うより、味方を増やしてもらって送り込んだ、が正しいんだが。

終わってみれば、被害は三桁にとどくかどうか。

完勝と言える戦いだ。

……ケンの部隊も真面目に攻めて来ていたら、もっと甚大な被害が及んでいただろうけど。

はい、終わり。

至極簡単なことだっただろ？

大切なことは二つだけ。

一つは知ること。

ほら、孫子さんが言ってただろ。

彼を知り己を知れば百戦して殆からず、（だったっけ？）って。

もう一つは備えること。

これも、備えあれば憂いなし、って言うだろ。

それに、準備が大切だと僕は思ってるんで、って、どごぞのサッカー

ー（？）選手が言ってた気がする。

まあ、いいや。

本日の仕事は、これにて終了！

母さんに提出したら俺、怠惰な午後を過ごすんだ……。

「死亡フラグをわざとであろうと、口にするべきじゃなかったぜ……」

……

暇なら書庫の片付けしてこい、孫子の第三篇見つけだして持ってこい、って言われたよ！

母さんや……人使いが荒いぜ。

つか、フラグってなんだっけ？

「……ぶえつくしよい！」

埃っぺえなあ、おい……。

「だっ、誰っ！」

どうやら先客がいたようだ。

「あら、瑪瑙じゃん。なんでここに？」

「そっちこそ、なんでここにいのよ」

いや、こっちの質問に答えろよな……。

まあ、別にいいんだけど。

「書庫の片付けをさせられに来たんだよ」

「奇遇ね。ボクもよ」

そこ、少し喜ぶとこじゃありませんよー。

終わらぬ……。

無為に広い癖に、要るもんから要らんもんまでごったがえしてるとか、ねえ。

とりあえず、いる、いらない、わからない、に分別しているのだが、なかなかにして終わらない。

まあ、暇潰しにはなるんだが。

次に、と取った一冊の本の中をパラパラとめくる。

「ん？　これは……」

見れば、日記だった。

因みに、薊さんの、だ。

しかしながら、まだ半ばまでしか書かれていない。

最後に書き留められたのは、その項を見る限り、もう十年以上も前かららしい。

その項の題名は、

『成公英、死す』

……なかなか重いものだった。

だが、俺の知的好奇心を満たすものとしては十分すぎた。

「兄上が死んだ。

何故兄上が死なな　ばならないのか、今になっても一向にわからない。

義姉上は、兄上を殺した賊どもを皆殺しにし　らあと、脱け殻の様になつてしまわれている。

そんな義姉上を元氣付けようと、未だ五つを数えたばかりの翠や、一番の臣下である山百合が健気にも奔走し　るが、作り笑いを浮かべて礼を言うばかり。

その気持ちは痛いほどよくわかる。儂とて、関係を持つ　た身。

悲しくない訳がない。

しかし、兄上と義姉上の間柄は儂のそれより深い。半身どこ　はなく、全身を失つたのだ。計り知れない悲しみがあるのだろう。

儂には何もでき・い。

本当に何も・きない。

慰めるこ・も諫め・ことも。

結局、今回もまた、殿に救って・らう他ない・だから。  
駄目・女だ、儂は。  
す・。す・ぬ。・まぬ。牡丹、こ・な儂を許し くれ。』」

いかんせん古いので、擦りきれていたり、滲んでいたりして見にくかった。

だが、生憎と軽々しく言葉が出せる内容じゃなかった。

「『死因は、背中に受けた矢　　る失血だった。』」

だが、その身に数十の矢を受け　　お、倒れることなくずっと一人の少女を抱え　　た、いや、庇っていた。子供を守り、死すとは、  
な　　も兄上らしい、と不躰にも思ってしまった。  
その守り通した少女は　　」

「ああそれ、ボクのことよ」

「え？」

はっ、として後ろを見れば瑪瑙がいた。

「何度呼んでも無視するから、来てみれば……」

じとっ、とした目で見られる。

だが、瞳は悲しみに彩られているような気がした。

「すまん。ちょっと気になっただけ」

主に成公英、つてのが。

「ふうん……」

「……………」

「……聞かないの？」

「まあ、色々とあるんだろ？ 個人のことには軽々しく干渉するほど、俺はサイテーな人間じゃないぞ」

敵ならともかくとして、家族にそんなことはしない。敵なら、うん。

個人情報全て把握してやっても良い。覚えるのは無理だから、書き留めるようにしてたり。

「……独り言だから気にしないでね」

「ん」

中断していた分別を再開する。なるべく音は立てずに。

「そのあと、ボクは母様に保護された……身寄りがなかったから、娘になった」

「ふん」

「その時から、男は大嫌いと言ってきた」

あれ、なんか話全然違くない？  
別にいいけど。

「でも、それはウソ。……ただ近付けさせたくなかっただけなのよ」

「ふんふん」

「恐いのよ、男が。どうしようもなく男が、……怖い」

なる。

トラ……心的外傷な訳だ。

「戦では、武器を振るえばいいから問題ないけど、普段近付かれる  
すぎると、途端に動けなくなるの」

やっぱ、抱かれたまま死なれたから、なんだろうね。

成公英に悪気はないとしても、だ。

「だから、陽にも負けたんだけど」

初めて真名を呼ばれた気がするなー。

なんとなく嬉しい。

でもなあ、これって独り言なんだよねえ。

そう、俺は瑪瑙に何度か勝ったことがある。

西涼で二番目につおい瑪瑙にだぜ？

おいそこ、もっと褒める。

ま、瑪瑙の言う通りなのだろうさ。

瑪瑙は長めの両鎌槍（だったか？）で中距離主体だ。

だが実は、その槍は三節槍とでもいうのか、三つに折れる。  
だから、近距離にも一応対応している。

だが、俺は剣と拳。

近距離〜至近距離主体なのだ。

俺自身、勝ちパターン……決まった勝ち方、つまりは至近に入れば勝ちだ、ということに気付いてはいたけど。そういうことだったのか。

「なら……俺はどうなんだろうなー？」

俺のこれも独り言です。

「怖い」

そ、即答ですか……。

ただの独り言のはずなんだがなあ。

「世の皆が思うように、ボクも、馬孝雄という人間……狼が、恐ろしいと思う」

「そら、恐れさせるようにしてるからね」

「陽も怖い。ボクが歩み寄れない程、怖い」

おかしいな。

俺、どんな人でもバチコイ！

みたいな雰囲気を出してるはずなんだけどな！

おいそこ、どの口が言っている、とか言うな。

「そか。俺が恐ろしい、ね。……絶対母さんの方が恐ろしいと思うけど」

本音です、はい。

凶星だったらしく、ビクツと肩を震わす瑪瑙。

「ボクも、母様の娘になってもう十数年になるけど、……未だに、牡丹様が、恐いの」

……やっぱり、と思う。

通りで、二人に微妙な距離があると思った。

「母様の義姉なのに、今までも優しく接して頂いたのに、恐い。恐いの」

「……………」

なにも言わない。

正直、返す言葉なんてすでに浮かんでいるから。

「八年前、さっきの本によって事実を知ったときからずっと、恐くて」

自分がいなければ死ななかった。

自分がいたから死んでしまった。

そう、何度も頭を廻っただろう。

そして、自分が殺した、にたどり着いてしまったのだろう。

「ボクが武を磨いたのも、負けたく、グスツ、ないのも、牡丹様にとって、ボクが有益なモノで、ヒック、在り続けないと、捨てられる、殺される、と思ったがらで、それで、それで……………」

最愛の旦那を失わせた、という気持ちが大きくのし掛かったのだらう。

母さんから恨み、憎悪を買っていると勘違いしたのだろう。洩らす嗚咽や流す涙で、容易に判断出来る。全く、母さんも罪な女だ。

「もう泣かなくていい」

瑪瑙を抱く。

こうしていると、皆、俺より小さいんだなー、と妙な感じを覚える。

「良く全部言えたに。偉い、偉い」

子供をあやすように背を擦り、頭を撫でる。

反抗的に見上げてくる赤くなった目も、今は子供のそれにか見えない。

「母さんと似ている俺から言わせてもらえばだな、被害妄想だよ、それ」

「……え……？」

勝手に勘違いして、勝手に危害が及ぶのを恐れているだけ。

まあ、当たり前な対応を無視して優しくされると、逆に勘繰ってしまうのは、仕方のないことだとは思っけど。

「俺や母さんみたいな人間は普通、大元を恨む、憎む。今回の場合は殺した賊どもをね」

それが普通だと思うんだけど。

そう簡単にはいかないのが人間というもの。  
残った一人を妬み、責める者たちもいる。

……何故お前は生きている。

……何故お前だけ死なない。

……お前に生きている価値などないのに。

……消える、失せる、顔を見せるな、死ね。

……さつさと死んで見せろ。

全く、くだらない。

「大体、お前は守られた側の人間だ。実際に手をかけた訳じゃねえ  
だろ？ だったら、お前は悪くないじゃねえか」

「で、でも……！」

そう簡単に割り切れることじゃねえのは分かる。

大切なモノを奪うつてのは、それほどの事だ。

だが、瑪瑙が悪くないのも事実だ。

あの時は無力な子供に過ぎないんだ。

それは、どうしようもないことだ。

納得出来ない、って顔だ。

「それじゃあ、薊さんはいつもなんて言っている？」

「……儂の大切な娘だ、って」

気恥ずかしいのか、俺の胸に顔を埋める瑪瑙。

別に構わんのだが、汚いぞ？

「そう、それ。おかしいだろ？ 薊さんも関係を持っていたんだ…  
…母さんが恨んでいるなら、薊さんも恨んでいるとは思わなかった  
？」

「……………」

「それに、誰が好き好んで、恨みの対象を義妹の娘に迎え入れるか  
よ」

「……………自分が恨めしい」

俺の服を握る瑪瑙の手に、力が籠る。  
恨みの対象を懐に入れるようなマネ、俺は絶対出来ないね。  
だから、母さんも出来ない。  
つてことは、瑪瑙を恨んでいない。  
実に簡単だろう？

白くなるまで握られた手を優しくほどいてやる。

「謝ればいいんだよ……………今からな！」

「え？ ひゃっ！」

俺が一步下がると同時に、瑪瑙の後ろから抱き付く者。

「しどいわぁ！ こーんなに愛しているのになぁ……………」

なんともいえない苦笑いをした母さんである。

「ぼぼぼ、牡丹様っ!?!」

「ぼぼぼ牡丹ですよー。瑪瑙から見た私、極悪非道の極みじゃないのー」

「それは、その……」

「いいの、言わなくて。しかし、なんで私だけ恨んでる、って思ってたのかしら？」

もじもじとしている瑪瑙。  
居心地が悪いのだろうね。

「柄悪いからだよ、たば　「んん？」　ほら、それだ！　その眼光！」

恐いんだよ、その目。

「陽が言うことではないわね」  
だから、心を読むなと

「今、読んでなかったけど？」

「ちょうど今読んだから、どっちみちアウ……駄目です」  
もう反則だろ。

「それでね、瑪瑙」

「あるえ？　無視？」

「陽、ちよつと黙つてなさい」

……ええー。

なにこの仕打ち。

「貴女はね、ウチに来たときから、薊とあの人の間の娘なのよ。だから、薊にとって貴女は宝なの。私にとっての翠と同じように、ね。それを分かってくれただけで、私は嬉しい」

「じゃ、じゃあボクは、……牡丹様にとって、……なんなのですか？」

俯き気味で言葉を発する瑪瑙。

いまにも消え入りそうな声色。

不安で仕方がない、といった様子だ。

「私？ 迎え入れたときからずっと変わらない。私の大切な家族の一人よ」

「……ほん、と……うに、です、か？ ボクに、何の武もない、ただの女、だったと、しても？」

「家族になるのには武才や知才が必要、なんてくだらない定義、あると思う？」

「あり、まぜん」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、母さんに抱き付く瑪瑙。  
慈愛の眼差しで、母さんは瑪瑙の背を撫でる。

ま、これで元来あらぬ溝は消え、距離も縮まっただろう。  
良かった良かった。

「つか、母さん、何時からいたのさ？」

「そんなに私って恐ろしいかしら？」

だから、質問を質問で返さ　あ、やべ。

「後で私の部屋に来なさい」

「……………うーす」

後々聞けば、孫子持ってこいって言ったはずが、あんまりにも遅かったのを見に来たらしい。

ちよつとだけ、ニヤンニヤンしているのを期待していたそうなの。

……………ニヤンニヤンって、なに？

Side 三人称

「なーんかクサイな……………」

様々な書簡を並べ、陽は眩く。

成公英の死に興味を持ち、調べてみれば不可解な点が幾つかあった。

「ちょっと調べといて」

「御意」

情報が足りない、と判断した陽は、何もないところに声を掛ける。すると、そこに静かに誰かが現れ、すぐに姿を消した。

その頃の天の御遣いはというと……。

とりあえず、フラグを乱立していたそうなの。

畜生！

なんて羨まそう　羨ましい！

ああ、鳳統ちゃん、可愛いよ鳳統ちゃん。

そんな間諜の報告に、陽が頭を悩ませることなるのは言わずもがなである。

陽は語る。

「母さんの部屋に行ったら、純粹に礼を言われた。ありがとう、って。凄く意外だったよ。」

あ、そうだ。あと、俺たちが羌と殺り合ってた間に、趙雲が来てたらしいよ  
と

第二十三話（前書き）

またいきなり飛んだ。

キングクリムゾンというやつですね、はい。

それでも相変わらず日亭編。

## 第二十三話

S i d e  
陽

パアン、と部屋に響く。

一瞬、なにをされたのか分からなかった。

瞳に涙を目一杯溜めた蒲公英を見るまでは、ただじんと頬が痛むだけだった。

「お兄様なんて、大ッ嫌い！」

「ちよつ、あ……」

延ばした右手が空を切る。

逃げられてしまった。

「なんで、……」

なんで怒っているのか、理由が全くわからん。

前話の未登場が祟ったのか？

左手で叩かれた左頬を触れば、腫れ上がり、熱を帯びていた。

真っ赤になってるだろうことは容易に想像できよう。

あーあ、親父にもぶたれたことなかったのになあ。

……親父、ね。

まあ、いいや。

さ、仕事仕事！

「そんなに、母さんに嫉妬心を掻き立てさせたいのかしら？」

「……なんでだよ」

開口一番がそれって、どうかと思うね。

「どれだけ頼に紅葉を作ってもらえれば気がすむのよ」

いや、そんなこと言われても、ねえ。

こっちが聞きてえよ。

皆がひっ叩いてくるんだもの。

一番理不尽だったのは、翠姉がおもらししたって 別に聞きたかった訳じゃないのに 蒲公英に教えられ、俺が叩かれる、というものだった。

……翠姉が武器を持ち出して来なかっただけでもありがたいと言える、のか？

「とりあえず、経緯を話してもらおうかしら」

「なんで話さなきゃいけない流れになってんだよ」

いやまあ、別にいいんだけど。

最近（と言っても一月前だが）、黄巾の乱が終息を迎えた。

それによっでいるいろと忙しくなり、机に突っ伏して寝ることも多  
かった。

が、昨日はたまたま量が少なかったので、久方ぶりの寝台にありつ  
けた。

そして明くる朝、すなわち今日の朝、起きてみれば、蒲公英が隣に  
潜り込んでいた。

……言つとくが、こんなことはよくある話だからな？

蒲公英の寝顔を堪能しつつも、起こさないように寝台を出て、その  
傍で瞑想をする。

無心って大切だろ。

そんで、蒲公英が目を覚ました時、蒲公英が乞えば、横抱きで抱き  
上げて起こしてやる。

この一連の動作はいつも通り　色々と言弊があるが割愛する  
で、なんら問題はなかったはず。

……まあ、横抱き（いわゆるお姫様抱っこ？）したとき、少し重  
いと感じただけだね。  
だから、

「太った？」

と聞いたのだけど、その直後に叩かれたんだよ。

考え直してみたが。

……結局、なんで叩かれたのか、全くわからん。

「はあ……。陽、アナタねえ、女の子のことを少しは考えなさいよ」  
右手で頭を押さえる母さん。

「なにを？」

ダメだコイツ、なんとかしないと、みたい目をしないで！  
ああっ、ビクンビクン！  
……なんてね、冗談だ。

「……………」

「すみませんでした」

「ん、素直でよろしい」

俺でも分かる。  
今のはだめだ。

「……………ま、他の子にも聞いてみなさい、それ」

「わかった。……………母さん、太っ たあ！」

書簡投げられた。  
いつてえ……………。

「誰が私に聞けと言った？」

あん？って感じで睨む母さん。

「すみませんでした」

……マジ恐ええ。

「薊さん、太　　ってえ！」

パカッ、と書簡で殴られる。  
結構おもしろいから、めっちゃ痛い。

「久方ぶりに登場したかと思えば、それか？　どうなんじゃ、んん  
？」

「日記の筆者として登場して　　ったいの！」

また殴られた。

てか、メタ発言はいいのか、作者。

……メタ発言、って何だ？

「それは儂であって、儂でないわ！」

「まあそこは、ねえ？」

「何故に疑問形なんじゃ……」

ジト目の薊さん。

俺が預かり知ることじゃねえしな。

それに、……言えない。

ババアに焦点（昇天？）当てるつもりはないなんて。

ネタが思い付かないなんて（これもメタ発言（？）じゃないか？）  
言えないよ……。

「……フツ」

とても柔らかな笑みを浮かべる薊さん。

……墓穴つたな、こら。

「一回、逝ってこんかい！」

無駄のない動きをもってして、書簡による脳天への打撃。

無駄に無駄がないぜ！

スコオーン！！

と、良い音が頭の中で響く。

……痛いなんてもんじゃない。

だって、角だもの。

「~~~~~！」

「反省したなら、俺中心の話を一話書けと言っておくのじゃぞ」

イエス、ママ！

了解であります！

次元を越える頼みであろうと、叶えて見せましょう！

アカン、頭おかしくなってる！

……つか、あんたも読心術使えんのかい。

「あ、山百合さん、最近太　つぶねえ……」

短剣の投擲は駄目だと思うよ。  
生死に関わりません。

「……何か言いました？」

いつも通りに（？）笑む、山百合さん。

……でも、なんか恐いな。

「だから、太　ぬおっ！」

右足退いてなかったら、床に縫い付けられてたよ？

「……何か、仰いました？」

にこやかに笑む、山百合さん。

……いやー、冷や汗が止まらないなー。

「なな、なんでもないデスヨ。ただ、いつも通り、可愛いなあ、と」

「……そう、ですか」

山百合さんは、後ろを向いて、一目散に走り去ってしまった。

……耳が赤かったのは気のせいだろうか。

てか、いつも殆どが無表情なんだから、笑んでた時点でおかしかったのだ、と今気付いた。

「瑪瑙さん瑪瑙さん、最近太っ　　なな、なんだよ？」

襟を掴まれる。

ちよっ、吊るされる勢いなんですがつ！

「何処が!？」

「……はあ？」

「だから、具体的に何処がって、聞いてるのよ!」

今までの皆さんの反応と全く違うんですけど。

なんか必死なんですけど。  
てゆうか、具体制を求められても、ねえ。  
元々思ってもいないことだし。

「あー、……胸周り、って言って欲しいの？」

瑪瑙のそこは絶壁です、はい。

その為、まな板取って、と言ったとき、殺されかけたのは記憶に新しい。

……別に、薄かろうがたわわだろうが関係ない、と俺は思っけどな。

「……こんの、バカー！」

グボハアツ！

ナ、ナイスストレート。

「フンツ！……ばか」

憤然として瑪瑙は去ってしまった。

俺、放置っすか。

そっとう趣向ですか。

などと考えていたので、瑪瑙が最後に呟いた言葉は聞き取れなかった。

「翠姉さ、最近、ふー あべしっー！」

翠姉の槍 銀閃 の柄で小突かれる。

……いつも思うけど、どっから出すのよ、その槍。

っーかさあ。

「まだ最後まで言っていないのに、どういふことさー！」

布団が吹っ飛んだ、と言うかもしんじゃないじゃない。

「そりゃあ、お前が会う人会う人に聞いているもんだから、自然と耳に入ってくるって」

呆れ顔で言われた。

……そらそーだわな。

「ああ、そうだ。……蒲公英に謝つといた方がいいぞー。相当気にしてたみたいだからな」

「……………」

目を大きく見開いてみせる。

「なっ、なんだよ、その意外そうな顔は！」

「いやね、まさか翠姉に諭される日が来るなんて、ってね」

割と本気ですけどなにか？

「おい。いくらなんでも失礼過ぎやしないか？」

「まあまあ、そんなかつかすんなって」

ぼんぼん、と翠姉の頭を撫でる。

イラッ、ときたらしく、手を払われた。

「怒らせたのお前だろ！」

「冗談だつて。いつものようにからかったただけだつて」

「なお悪いわ！」

「さっきから叫んでばかり。……喉、潰れるよ？」

「はあ……もういい。とにかく、謝つとけよな」

「了解ですき、翠ねえやん」

「はいはい」

軽く流された。

面倒になったんですね、わかります。

……いやあ、やっぱり翠姉をからかうの面白いなあ。

そのあと、茜と藍のどこに行つて同じ質問をしたら、別にそんなことない、って普通に言われた。  
むしろ、痩せた？って聞かれる始末。

……なるほどねえ、と思った。

俺が衰えたって訳だ。  
別に蒲公英が太った訳じゃなく、純粹に俺の持ち上げる力が衰えた  
せいで、重く感じたよ。  
それを、俺が勘違いしたから怒ったよ。  
そういうことね。

結局。

土下座したけど、簡単には許してはくれなかった。  
蒲公英は1日中俺に口を利いてくれることはなかった。

……ただ。

俺にとって、こんなにもつまらない日は、

金城に来てから。

茜と藍が家族に加わってから。

初めての戦を経験してから。

更なる家族二人に会ってから。

馬家に迎え入れられてから。

そして蒲公英に出会ってから。

一度としてなかった。  
そう、一度として。

Side 三人称

一方、天の御遣いというと……。

趙雲を新たなる臣下、いや仲間に加え、封ぜられた平原に於いて、劉備と共に政務に忙殺されていた。

だが、今は束の間の休憩時間。  
机に身を預け、たればんだのごとく、ぐー垂れていた。

「失礼しましゅ！（はう／あう）」

いつもの如くかむ諸葛亮と鳳統に苦笑しつつも、その二人の持っているものに注視する天の御遣いこと一刀。

「あれ、疲れからかな？ ……おかしなものが見えるな」

この時代に有り得る可能性が、限りなく低いものがそこにあった。

「ご主人様、桃香様、休憩時間にこれをどうぞ」

「西方で有名な、けえき、なるものでしゅ！ ふわふわしてて、とても 「はわわっ！ 雛里ちゃん！」 あわわ！ ……申し訳ありません」

「あまりにも美味しそうだったので、雛里ちゃんと先に食べてしま  
いました」

二人とも必死に頭を下げる。

「構わないよ」

「仕方ないよ」。すっごく美味しそうだもんねえ」

そんな二人を笑って許す、一刀と劉備。  
流石である。

（いや、おかしくね？

流石に三國志の時代にケーキとかないだろ。

まあ、元々、結構おかしいからなあ。

……喫茶店とかあるし。

その流れで認めてもいいもんかねえ）

その中で、一刀は色々と考えを廻らしていた。

「うん、うまい」

なら、いつかなー。

と、かなり楽観的に判断する一刀。

……本来ならば、もっと警戒すべきだった。  
何故なら、西方だから。

だが、一刀と両軍師とでは、西方、の解釈がまるで違っていた。

一刀は大秦と。  
西軍師は西涼と。

陽は語る。

「なんであんなにもつまらなかつたのか……今なら手に取る様にわかる。もう、あの頃の時点で蒲公英が好きだったんだ」と

## 第二十三話（後書き）

西涼というか涼州に、殆ど黄巾関係なかった（気がする）から、書きようがなかったり。

他の人視点で書いてもいいんですが、もっと進みが遅くなりそうなので。

第二十四話（前書き）

なんかしっくりこない。

そして、進まない。

## 第二十四話

S i d e 陽

「兄……きて……」

んだよ、うるせえな。

「陽兄、……き……つてば……」

まだ寝てんだろぅがよ。

おいそこ、反応してる時点で起きてるんじゃね、とか言っな。

「陽兄！ 起きてよっ！」

「ふぐおっ！」

腹部への痛打。

あるうことか、肘打ち。

誰かが跳びのつてきた拍子に当たったらしい。

クソ痛え……。

「誰だっつてんだよ、俺の情眠の邪魔をするやつはよ……」

折角の休暇ぐらい寝かせるよ、コンニャロー。

「……ごめんなさい」

「んん、藍か」

意外なことに、馬鉄こと藍がのし掛かっていた。

つか、ごめんなさい、しか今まで言っただけじゃないか？

……深くは触れないでおこう。

「で、どつたのさ？　なんかあった？」

「ええ〜と、その……」

「あー、言いにくくなったならごめん。もうすっかりきつちりじゃつきりすつきり目、覚めたから。邪魔にはならんよ」

藍の頭を撫でる。

そんな不安そうな顔されたら、罪悪感が込み上げてくるじゃないか。

「……ホントにいいの？」

「おうさ。弟に嘘ついてなんになるよ」

藍にニツ、と笑いかける。

作り笑いじゃなく、自然に溢れる笑み。

そうすると、藍も笑顔になってくれた。

子供はやっぱ笑ってないかね。

「じゃあ、……陽兄、僕に稽古つけて！」

「……なんですと」

なんてこった……（泣）

Side 三人称

警邏にでようとしていた蒲公英は、偶然にも頂垂れ気味の陽と嬉々とした様子の藍と出会う。

「えーっ！ 藍、お兄様に稽古つけてもらうの！？ ……いいなあ」

「えへへ いいですよ」

「羨ましがるところでも、嬉しがるところでもねーよ」

理由を聞けば、陽兄にご教授賜るんだ、とVサインを送りながら藍は言う。

そんな様子に、蒲公英は純粹に羨ましがっていた。

蒲公英にとっても藍にとっても、陽に指南を受けることが 理由はそれぞれに違うが それほどまでに嬉しいことなのである。

「なんでまた？ しかも俺」

指名されるほど強くないんだがな、と陽は続ける。

一応承諾はしたものの、改めて理由を聞いてみることにした。

「ううん。陽兄が一番強いよ！ そう、皆も言ってるし」

(山百合さんはともかく、瑪瑙や翠姉、母さん、薊さんに加え、蒲公英にすら負けるんだが)

と、陽は心で呟く。

確かに、皆に勝ったことがない訳ではない。

だが、蒲公英以外には負け越していた。

……流石に兄としての体面や意地、プライドがあるようだ。

「それにみんな、陽兄に教わったほうがいいって言うんだもん」

「……なにをバカな。俺の専門、槍術、ってか長物じゃねえんだぞ？」

そこで首をかしげる藍。

「……？ 陽兄に教えてもらうのは剣術だよ？」

どうやら、槍術、というところに引っ掛かったようだ。

「……マジにか」

通りで俺か、と呟く陽。

馬騰こと牡丹や韓遂こと薊も、剣が使えない訳ではない。

が、専門外であるのも確か。  
それならば、陽に教えを乞うた方が早い、と考えたようだ。

「だけど、……足りんな。武が欲しい理由が、剣術を欲する理由が、  
ね」

馬家の一員となってからというものの、藍は茜とともに長物の鍛練は  
欠かさず行っている。  
だからこそ陽は疑問に思ったのである。

「僕は強くなりたいんだ。……お姉ちゃんを守る為に」

「ふむ」

藍はずっと姉である馬休、すなわち茜の背を見て来、追ってきた。  
むしろ、それが当然だとも思っていた。

何故なら、姉の茜は強いから。

守られるのが当然だと思っていた。

何故なら、自分は弱いから。

男と女の権力、武力、知力といった力が逆転しつつある今日、男が  
女に守られる、という構図は珍しいことではない。

藍と茜も、元にそんな関係であった。

だが、藍の中にあつた常識は覆された。

義兄、陽によって。

西涼の天狼とは、と問えば。

”男でありながら武に長け、知に富む、才色兼備の将”  
そう誰もが揃えて口にするほど、あまりにも有名だった。

勿論のこと、藍も知っており、憧れもした。

そして数奇な運命により、会うどころか、家族という間柄にまでに  
陽と藍は近づいた。

しかしながら、数日を共に過ごして、藍が陽に対して抱いたのは、  
ただの優しい兄だ、ということ。

期待はずれ他ならなかった。

評価が評価だけに、もっと強烈な人物像を浮かべていた藍は、酷く  
落胆もした。

……これは、陽の目指す事 過大評価による牽制 の弊害の一  
例だ。

一月余り経ち、藍はたまたま早起きした。

厠から戻る途中、藍は見た。

見てしまった、と言えた。

陽の鍛練している姿を。

鋭き牙のような姿を。

別人のような姿を。

身体の震えがとまらなかった。

凍りつく思いがした。

同時に、格好いいと思った。

そして、改めて憧れた。

奮える感情を抑えて、藍は声を絞り出した。

「……よ、陽兄？」

「あん？ ……あー、藍か。 みーたーなー」

なんてね、と微笑む姿には、先程とはまた別人を感じた。  
むしろ、何時もの雰囲気だった。

「将の俺、軍師の俺、そして家族の中の俺。どれも偽りなく俺だよ」  
少し話をしよう、と陽は藍を誘い、朝焼けの光が射す中、二人して  
中庭に座り込んだ。

「ただ、使い分けてるっつーか、なんつーか。ま、とにかく分けて  
るのさ。 ……ずっと敵つい目の俺も嫌だろ？」

態と右目の目尻を指で上げて冗談めかし、苦笑いをする陽。

「……なんで」

「ん？」

「なんで分けてるの？」

対する藍は、子供故の好奇心から、率直に聞きたかった。

「うーん……」

腕を組み、陽は思案顔をする。  
話すか否か迷っているようだ。

「……まあ、いいか。じゃ、藍に質問。なんで日も昇らない内に俺が鍛練してと思う?」

「……見られたくないから?」

「正解。……じゃあ、次。誰に、だと思っ?」

「うーん……皆?」

「皆、とは範囲が広いな。……答えは、兵たち。もっと具体的に言えば、俺の部下以外の兵たち」

何故そのような話をするのか、藍にはわからなかった。

「じゃ、最後。何の為に?」

「……わかんない」

ま、当然だわな、と相槌を一つ入れる陽。

「答えは、……虚勢を張るためだよ」

「……え?」

「俺っていう存在を大きく見せる為ってこと」

藍には、ますます意味がわからなかった。

「ちょっと難しいか。……簡単に言つとだな、相手に憧れさせるんだ」

「どづいづいと?」

「ほら、軍師の時の俺って、どんな印象を受ける?」

「厳しくて、怖い、とか」

もつとさ、格好いいとかさ、いつてくれたってさ。  
と、一応嘆く陽。

「じゃあ、将の時の俺は?」

「厳しくて、怖い、とか」

「ちょっと待て。軍師の時と同じじゃねーか」

ほら、強そうだ、とかあんじゃん、と陽は付け足す。  
まさかの同じ印象に、少し戸惑いを隠せなかったが。

「ま、あれだ。俺が裏で努力してる、なんて印象、持ったことないっしょ?」

「……あつ!」

確かにそれは言えた。

義兄が鍛練している姿など、藍は想像もしていなかった。

「こいつは凄い、と思わせれば、大体勝てるんだよ。敵にも、無論味方にもね」

その裏付けする為に隠れて鍛練してんのさ、と語り終えた陽は、藍の頭を撫でる。

「陽兄は、その虚勢ってやつで街の皆を守っているってこと？」

「……そう、なんのかねえ」

(俺が、戦なんてしたくないって気持ちが一番なんだけどな)

と、陽は苦笑する。

「……それでなら僕も、守れるかな」

「さあね。虚勢なんて、元々守る為のもんじゃない。相手の戦意を如何に殺ぐか、自分が闘わせたくないと思う人を、如何に闘わせずに済ませられるか。支点はそこにあるんだよ」

ま、頑張るこつた。

そう言いつつ、くしゃり、と藍の頭を撫でてから、陽は立ち上がる。

「さあ、飯だ、飯！」

「 藍」

「ひゃっ、ひゃいー」

義兄の呼ぶ声に、思考が現実引き戻される。

「言っとくけど、……剣術に限らず、武そのものは、相手を殺す為のもんで、守る為のもんじゃない。肝に銘じとけよ」

陽の冷たい声色にもおじることなく、藍は答えた。

「好きな人を、大好きなお姉ちゃんを闘わせずに済ませられるなら、守れるなら、誰であろうと僕は殺すよ。……たとえ、陽兄がお姉ちゃんの前に立ちはだかつてもね」

そんな藍の決意に陽はにこり、と笑うのだった。

陽は語る。

「茜と藍には毎度毎度、かなり驚かされたよ」と

## 第二十五話（前書き）

長い。

そして、御都合主義が満載。

さらに、口調が間違ってるかもしれない。

最後に、後半シリアスあり。

それでも良ければ、どうぞ。

## 第二十五話

S i d e  
陽

「私が愛した人。今でも変わらず愛し続けている人。私の人生を変えてくれた人の内の一人。私の旦那様」

母さんはそう言った。

「儂が愛した人。今でも変わらず愛し続けている人。儂の人生を変えてくれた人の内の一人。儂のお兄様」

薊さんはそう言った。

「……私が敬愛する人の内の一人。父のようで、兄のような人」

山百合さんはそう言った。

「あたしの父上。まだ小さかったからよくは覚えてないけど、笑顔が似合ってた。撫でる手は大きくて、暖かった」

翠姉はそう言った。

「ボクの義父で、命の恩人。最初で最後に見たその笑顔は、とても似合ってた。ボクを抱きしめて守ってくれたその腕は大きかった」

瑪瑙はそう言った。

「たんぽぼの伯父さん。ほとんど覚えてないけど、肩車されて見た隴西の街は、とっても高くて笑顔で一杯だった」

蒲公英はそう言った。

「知らない。けどお爺ちゃんが、今の陽兄ぐらい有名だったって言った」

「僕もそれ、聞いたことある。異民族の人や混血の人の地位向上に尽力したことで有名なんだったっけ」

茜と藍はそう言った。

十日ほど前、金城を出る前にあることを聞き、それぞれ返ってきた答え。

それを金城の街の人に聞けば、十代は知らないと、それ以上の年代の人は口を揃えて英雄だよ、と答えた。

通り道にある隴西で、同じ質問をしたところ、結果は同じだった。質問の内容は、

『成公英ってどんな人』

というもの。

亡くなって十数年余り経つのがから、十代は知らなくて当然。しかし、それ以上の年代では、訳が違うらしい。

あまりにも有名だったそうだ。

男女逆転の兆しが見え始めた、俺たちより一世代前。実力ある三人の女の筆頭の一角に仕えた、実力ある三人の男の一角として。

それすなわち

孫堅が左腕、程徳謀。

曹嵩が右腕、徐公明。

馬騰が両腕、成公英。

曹と孫に仕えた者たちに並び立つ存在として。

その三人が名高くなるきつかけとなった地、潼関に今俺は来ている。ま、残念ながら目的地はここじゃない。

ただの通り道だ。

俺は洛陽に用があるのさ。

霊帝が死んで、劉弁を傀儡に、漢を牛耳らんとした何進（ついでに何皇后）が何者かに殺され、とって変わるように劉協を擁立し、張讓により支配されんとしている洛陽に、な。

……ついでに言えば張讓は、董卓ちゃんを呼びよせて、武力に関しても、確固たるものを作りあげようとしていたが。

半月前、すなわち俺が金城を出る四日前、靈帝崩御、との知らせが入った。

まあ、長くないとは知ってたけどな。

そんなこんなで甲いにも行こか、ということでも出発した。

……勿論、第一の目的じゃないけど。

金城を出て三日、すなわち靈帝が死んで一週間、ゆるりと洛陽に向かっていた俺に、劉弁を擁立しようとした何進が殺されたとの報告があった。

展開としては想定範囲内、かつ、都合の良い方へ向かっていた。

「ちよつと急がないとなあ」

流石にゆっくりしすぎた。

自身の遅延で間に合わなかったとか、話にならんからね。

……え？

何に間に合わないって？

そりゃ、あれだよ。

董卓軍主催、 宦官駆逐作戦に、だよ。

「アンタ……何であるん？」

「陽……おひね」

張遼は、いかにも民草だ、という格好をした俺に問う。  
本来いないはずの俺が洛陽にある宮城の門前にいたのだ。  
疑問は当然だろうさ。

……呂布ちゃんはさほど気にしてないらしいが。  
とにかく、張遼、呂布ちゃんについて来ていた董卓軍の兵たちもざ  
わついていた。

「逆に聞こう。……知らない、と思ったか？ あ、呂布ちゃん、お  
いっす」

「……敵わんなあ。流石は馬孝雄ちゅーとこか」

ニヤツ、と笑ってみせれば、苦笑する張遼。

そんな様子を気にせず、軽く手を挙げながら声を掛け合っのが俺と  
呂布ちゃんクオリティ。

……クオリティって何だ？

因みに。

孝雄ってのは、俺の字だ。

翠姉と一緒に貰った、って前言ったろ？

「……恋」

「はい？」

「陽……恋って呼ぶ」

「……わかったよ、恋ちゃん」

「……ん」

恋ちゃんによる腫るづる＋上目遣いの動物的な仕草に、は根負けしましたが何か？

「ほんなら、ウチも霞って呼んでや。……恋ちゃんを真名で呼んだ癖に、ウチだけ仲間外れちゅーのはおかしいやろ？」

「……お前らグルだろ」

苦笑いから一転、満面の笑みを浮かべる張遼……霞。  
俺は項垂れた。

「んで、ホンマ何でおるん？ ……何が目的や？」

若干だが、未だ疑念を抱く霞。

因みに、この場には、陽と霞、恋しかない。

それ以外の董卓軍の兵たちには、洛陽の民に危害が及ばぬよう警戒と警備にあたらせていた。

……はつきり言えば、霞と恋だけでも事足りる為、必要ないってことだ。

「んー、目的としては、お前らとおんなじ。……まあ、お手伝いしてきた、とでも言えばいんじゃないかね？」

俺は右腕を挙げ、人差し指だけピツとたたせる。

「ウチに聞くなや。……ホンマにそれだけか？」

「……陽の言ったこと、多分ホント。……けど、まだある」

腕を組んで、唸ってみせる。

どうしよう、話すか否か。

結構迷ったが、まあいいか、と思う。

目的は同じなんだから、邪魔はしねえだろうし。

「……私怨だよ。どうしようもない私怨」

「「……………ッ!？」」

自嘲気味に笑いかける。

……………ん？

そんなに顔を歪めちゃって、どうしたよ二人とも。

陽はわかっていないが、二人は初めて会った宮中の玉座での冷気とも言えるあの殺気を、今まさに感じていた。

……自身から殺気が洩れでていることに気が付かなかったようだ。

結局、俺と霞、恋ちゃんて決行することになった。

他にいても、正直邪魔だしな。

「まあ、そろそろ行くこうか」

「アンタが仕切るなや!」

「……ん」

「恋ちゃんも、返事してどうすんねん!」

俺と恋ちゃんにすかさずツッコミを入れる霞。

流石、関西弁だけのことはあるなあ。

てか、(いつもの如く)自分で言っというてあれだけど、関西弁ってなんだっけ?

……とりあえず、霞がそれなのを気にしたら負けな気がする。

「こっからは隠密だ。静かに」

「ぐぬっ……」

突っ込ませたのアンタやる!

と、顔にありありとでてるので、簡単に見てとれる。

……おかしいな。

霞が何故か翠姉と同じような立ち位置になってんだけど。

「……誰か来る」

恋ちゃんが言う。

「警備の兵かな。……うるさかったんだろ、多分」

視認は出来なかったが、そんなところだろうと判断する。

つか、 実際にはまだなっていないが、ほぼ確実視されてる  
皇帝の劉協とその兄劉弁、警備兵と宦官以外がいてもいなくても  
困るけど。

「陽……覚えとき。絶対ヤキ入れたる」

「すまん。忘れた」

「忘れた、と反応した時点で、覚えとるっちゅーことなんやで」

不覚にも流せなかった。

……ちっ、やはり翠姉とは格が違ったか。

「むっ！ そこに誰かいるのか！」

気付かれちゃったじゃん、どーすんのだよ、って顔したら霞に殴ら  
れた。  
痛えじゃねえか。

「出てこい！ さもなくば、此方から行くぞ！」

いや、そんな宣言しなくても。

「いくぞ！ 本気で行くぞ！」

霞さんがプルプルしてます。

必死で何かを我慢しているようだ。

「いま、行くぞ！」

はよ来いや！

と、ツツコミたいらしい。

ま、わからんでもない。

流石に溜めすぎだろ。

「さあ、来たぞ！ むっ！ 誰だ貴さ 「ファアルコオン、パア

ンチ！」 ぐえっ！」

俺による腹部への強打。

食らった兵は倒れた。

……技名は気にしないでねっ！

「何事……むっ、なんだ貴様ら！ 者共、出合えい！」

どうやら、他の兵に見られたようだ。

だんだん兵が集まってくる。

「見つかってしまったか……隠密行動だったはずなんだけどな。全く、誰のせいだよ」

「……陽のせい」

「満場一致でアンタやボケエ！」

そう言っつて、霞は自身の武器 飛龍偃月刀 の石突きで俺を殴ってきた。

めちゃんこ痛えよ……。

つか、満場一致も糞も、二人しかいねーじゃん。

「もうええわ。ウチは先いくで」

「……恋も、行く」

「了解。……張譲は殺すなよ。俺が殺る」

「やるて……アンタ、そんな趣味　「ねーよ！」　冗談や  
ほな、なっ！」

……やられた。

まさか意趣返ししてくるとは。

けど、こう話してる間にも斬ってるからすげえ。

恋ちゃんは斬るっつーより、吹っ飛ばしてる。

……あんなに入って飛ぶもんかね？

ま、俺もそろそろいくか！。

渾身のファルコンパンチで倒した兵の剣を奪い、そいつの喉をぶつた斬る。

わざわざ自分の剣でクズを斬って、切れ味を落とすたくはないからな。

音がしなくなったのでふと前を見れば、あらまびっくり、全部終わってる。

いや、速えよ。

まあ、宮内に楽々入場出来たのは良いんだけど。

しかし、困ったな……俺のやることないかもなあ。

「蹇碩君……みいつけたあ」

「ひいひいひい！ あ、あわ……。おつ、お助け ガッ」

「うるせえ、この魔羅なし」

左手で首を締め上げる。

デブかつたんで、持ち上げることは出来なかったけど。

「お前は、金城太守に賄賂を送り続けていたな？」

「……い、いづ……ぐえ」

締める力を強める。

「十四年前だ。……そして事が終わると、そいつを解任して、払った賄賂を取り戻した」

「……ひゅー、はあ……な、にを」

酷く動揺している。

まあ、当たり前前の反応だが。

全て、裏で行われてきたことだからな。

「馬孝雄に知らぬことなど、何も無い」

「ッ！ー！」

俺がいることに驚いているのか、知られていたことに驚いたのかは

分からないが、驚愕の色をみせる。

ま、今から死ぬやつの気など、知ったことじゃないが。首をから手を放すと同時に、兵から奪った剣で叩つ斬る。

……血糊が多少跳んできたが、気にしないでいこう。

「さて、次だ、次」

宮内の廊下をゆるりと歩く。

辺りで断末魔の声が聞こえる。

霞も恋ちゃんもひでえことすんなあ、おい。

「死ねえ！」

真正面からバカが斬りかかる。

半身になって避ける。

本気でバカらしく、振り下ろす力をいれすぎていた。

切り返して、横に薙ぐことが出来るぐらいの力は残しとくべきだよねえ。

ホント、官軍の練度（笑）。

右手に持った剣で下から斬り上げ、斬りかかってきた兵士1の首をはねる。

血が噴き上げているが、気にしない。

「はあっ！／＼でやっ！」「」

今度は、左右から同時に斬りかかってくる。  
どちらかが一拍子遅らせたほうが有効的なのにねえ。  
ま、右からは兵士2の横薙ぎ、左からは兵士3の振りおろし、つてのは及第点を与えよう。  
けど、狙いが高いよ。

右から来たものを、左へ受け流すう。

……と、そんな軽いノリじゃなく、多少の軌道修正を加えて、兵士2の剣を兵士3の剣にあてる。

から空きになった兵士2の土手っ腹に蹴りをいれ、そのまま兵士3に回し蹴りをする。

どちらも綺麗に入ったようで、気絶した。

とどめとして、首を斬る。

……今回に限り、全て殺す。

普段の戦とかはギリギリ生かすぐらいに斬る。

手当てへと人員を割かせることも出来るし、なにより痛さにのたうちまわる姿に恐怖を増幅させるこうかも知るからね。

でも、今回は殲滅戦。

完全な降伏、服従を約束するまでは、誰一人として逃がす訳にはいかんのだ。

はい、そこ。

こんな狭い通路で槍なんて 達人を除いて 愚の骨頂だ。  
突進してきた兵士4を、右足を退いてひらりと身躲す。

その勢いで一回転して、遠心力のついた剣で首ちよんぱだ。

ひたすら宮内を練り歩く。  
はあー、今ので三十は斬ったかねえ。  
全く、ホント雑魚ばっか。  
こんなんで近衛とか、どんだけだよ。

「お、ここだな」

通りで突然兵士が増えた訳だ。  
流石にここまで騒がしかったらわかるよねえ。

「趙忠さ〜ん！ でておいで〜！」

そう言いながら、扉を押し開く。  
部屋に一步入ると、兵士31が斬りかかってきた。  
不意打ちだろうが、今までと同じく雑魚。  
造作もない。

剣を上を翳し受け止めて、前蹴りで兵士31を押し退ける。  
そのまま思いきり蹴り倒して、心を貫く。

結局部屋には、死んだ兵士31以外誰もいなかった。

……囿に使われるとは、災難だったねえ。

「グギャツ　　！！」

そんな気持ち悪い声が部屋の外から聞こえてきた。

行ってみれば、恋ちゃんと、恋ちゃんの武器　方天画戟　を突きつ

けられている半死の趙忠がいた。

「あ、恋ちゃん。おっす」

「……おす」

このやりとりは、俺が教えたが、何か？

「ところで恋ちゃん。兵士じゃない奴、何人殺した？」

「……三人。こいつで四人目」

「ヒイツ！！」

はええな、おい。

「恋ちゃん……そいつ、くれ」

「……ん。わかった」

方天画戟を趙忠からどける。

「あんがとよ。……さて、一応お久しぶりでございますなあ、趙忠殿」

一応、あん時の玉座にいたからね。

そんな描写なかった、って？

作者に言いなさい。

「実行させたのはあなたでしたよね。……蹇碩殿の根回しによって

磐石になったときに。十三年と半年ごろ前のことでしたな」

「なっ、なにを　ガアッ！」

左足で、斬られていた肩を踏みつける。

まだ、殺してあげないよ。

「殺した者を含む賊共は、一人残らず殺した、とある日記にありました。……実際には、関与した者はまだまだいたんですよね？  
それを、あなたが消した」

「だから、なん　ぐあっ！」

剣で右足を刺す。

やべー、問い詰めんのなんかめんどくさくなってきた。

「あとは、張讓殿で憂さを晴らします。……さよなら、靈帝、劉宏の母とまでいわしめた魔羅なしさん」

剣で頭を貫く。

ああ、……まだ足りない。

「よし、恋ちゃん。玉座いこか」

「……………」

頷く恋ちゃん。

多分そこにいる、と勘でわかっているだろう。

「そっちの首尾は？」

「上々や。……四人斬ったで」

「ふむ。……俺は二人、恋ちゃんは三人だから、あとは張譲のみだな」

「ま、とつくに場所も特定出来とるけどな」

玉座の扉の前での霞との会話。

律儀にも待つていてくれていたようだ。

やっぱり、流石の玉座前は重苦しいな。

……よし。

「Are You Ready Guys？」

「……………は？」

「……………イエイ」

ちよつとしたノリなんだぜ！

霞はついてこれなかつたらしいが、恋ちゃんは右腕を挙げてのつてくれた。

「It's Show Time！」

「なんや、訳分からん」

「……あんまり深く考えないのが、「コッ」

「……………さよか」

恋ちゃんの言葉に、遠い目をする霞であった。

「何故に語り部口調なんや！」

……………できれば心は読まないで欲しいんだけどな。

重苦しかった雰囲気も、完全に場違いではあるが、少し和やかにになったところで、こちらを威圧するかの如くそびえる扉を押し開く。

待っていたのは、やはりと言うべきか。

皇帝の椅子に劉協、その横に張讓、そのまた横に二人の兵士に刃を突きつけられた劉弁、そして俺たちの行く道を阻まんとする雑魚兵士が百人ほどいた。

「動くな、逆賊共！ 動けば、こやつ（少帝）の命は無いぞ！」

張讓が声を張って言う。

馬鹿丸出したな（笑）

「……………」

俺は黙って歩を進める。

「ちよ、ちよっと待ちいや、陽！ 少帝を死なすつもりかい！」

肩をグイッ、と引き寄せられ、霞にひそひそと怒鳴られる。  
……どんな妙技だよ。

「死なない、いや殺せないさ……少なくとも、ここにいる俺以外の人間には、な」

漢という国全体が、皇帝を敬うという風習が根強くある。  
尊ぶべき劉姓を手に掛けるなど言語道断。

その気が皆無な俺以外には、無理な話な訳だ。  
馬鹿馬鹿しい。

「大体さ、今の状況だと完全にあっちが逆賊じゃん？」

皇帝の血筋である劉姓の人間に刃を向けさせてる時点だね。

「まあ、せやなあ」

「じゃ、俺は行くねー」

納得していただけたようで。

また、前に進み始める。

「なっ！ 貴様、見殺しにする気が」

「ははっ！ ……殺そうとしてるアンタが言えることじゃないと思  
うけど？」

馬鹿丸出しに、張讓は声を張り上げる。

やべ、笑いが止まんねえ。

「くっ！ 囲んで殺してしまえ！」

俺と霞、恋ちゃんを囲う兵達。

……ホンマ、アホやる。

やべ、霞が感染った。

「……とんだとばっちりや」

頂垂れる霞。

フ……計画通り！

「霞……頑張る」

霞に向けて、左手を軽く握ってみせる恋ちゃん。  
いわゆる、ガッツポーズ（だっけ？）ってやつ。

「うん、頑張る。……やっぱり、恋ちゃんはええ娘やなあ」

霞はしみじみとした声色で答えた。

確かに同意しよう。

だが、蒲公英には勝てぬわ！

「二人にとっては、頑張るほどの兵数じゃないだろうに」

「うっさいわ、ボケ！ 誰のせいで精神的にきとると思っとなるんや

！」

「……さあ」

何故俺にキレルのか。

( ˘ ˘、 ; ) 因みに俺。

「……待つとれよ……必ずウチが殺したる」

そこは、緑川ヴォイス はっ！殺気！

……もうやめと」。

「え〜つと、50、50、0で頼むな」

因みに恋ちゃん、霞、俺の順だよ。

「……もうええわ。そんなくらい請け負ったる。はよ行き」

「……陽も、頑張る」

「悪いね。あと、ちょっとした注文なんだが」

包囲を突破した俺は、張譲へと向かう。  
憎き仇へと。

劉弁に刃を向けていた二人の雑魚兵士(32、33)が、張譲に命令されたか、斬りかかってくる。

連携がまるでなくてなく、ほぼ縦に並んでこっちにくる。全く、翠姉と瑪瑙の連携を見習わせたいものだ。

……依然として　喧嘩ではないだけは成長したが　じゃれあいが多々起こるのはいただけないけど。

とりあえず、右足の上段蹴りで、左顎を打ち抜く。

上手く入ったようで、その場に崩れ落ちる兵士32。

それを避けようと、兵士33は32の右に出る。

俺は、未だ上がっていた右足を崩れる兵士32の半歩手前におろし、それを軸足に、出てきた兵士33の顔面を左足で蹴り飛ばす　実際には飛ばないが。

これも上手く入ったようで、気絶した。

「くっ！」

予想外なことに取り乱したか、張譲はより近くにいた劉協に短剣を突きつける。

「こっ、こいつがどうなってもいいのか！」

その手は俄に震えている。

覚悟のない馬鹿が、刃物なんか持つな。

「別に。俺になんら関係ないしね」

「くっ　　っ！」「」

三人とも、顔を驚愕の色に染める。

ま、当然だろうっねえ。

その隙に、一気に距離をつめ、張譲の腕を掴む。

「大体、アンタにはどちらも　特に劉協は　殺せないだろう？」

張讓の、大切な大切なお人形さんだもんねえ。  
張讓の、短剣を持つ右腕を握り締める。

「……………あ、ぐっ……………」

耐えきれなかったか、張讓は短剣を落とす。  
それぐらいの握力は、俺にありますよー。  
そして、そのままソバットで張讓の腹を蹴る。  
張讓はその場に崩れた。

「……………悪いね。ああ言わないと、隙を作れなかったから、さ」

本心ではあるんだけどさ。

劉協の頭を撫でる。

最初は恐がっていたが、徐々に年相応の笑顔を見せてくれた。  
こんな小さな子まで巻き込むとは、……………ホント腐ってんな。  
次は、劉弁だな。

「……………恐かったろ。泣いていいんだぞ。生憎と、ここには弟を合わ  
せて、四人しかいないからな」

床に座り込んだ劉弁を立たせ、埃を払いながら問いかける。

四人とは、俺と霞、恋ちゃんそして劉協。

後は張讓を含め、玉座の間にいた全員寝ている。

……………ま、注文とは、子供の前だから殺さないで、というものだった  
って訳さ。

「……………えぐつ、ぐすつ……………ふえええん　　！！！」

どうやら、限界だったみたいだな。  
優しく抱いてやる。

本当に家族になったあの日、母さんが抱いてくれたように。

「……………うわああん！　おにいちゃん！　恐がっただよお　　！！！」

劉協も本当は限界だったようで、つられて泣き始め、兄の劉弁へ駆け寄ってきた。

「……………俺のここ、空いてるぞ」

劉弁にも弟を受け入れる余裕は、今はない。

だったら、俺がやってやる。

左半身ぐらい、貸してやるぞ。

……………ま、右半身は、今は劉弁に貸してるからって話だけど。

「……………ふええええん！！！」

「よしよし」

二人の頭を撫でる。

皇帝だろつがなんだろうが、やっぱり子供は可愛いねえ。

「……………変態や」

「……………待てえええい！！　それは聞き捨てならんぞ！！！」

小声でシャウト。

あれ、俺も妙技、できちった。  
つか、シャウトってなんさ？

「陽……変態？」

「だから待てと言っに！」

ったく、いい話で終わらせてくれたっていいじゃないか！

Side 三人称

「おはようございますなあ、張讓殿。……良い夢は見られましたかな？」

これでもかというぐらい作った笑顔で、陽は壁に礫に 無論、陽  
によって されている張讓に問う。

「……貴様は何がしたい」

「なんだと思います？」

張讓は陽を睨む。

対する陽は、あくまでにこやかに問う。

「……さあな。わからぬから聞いている」

陽を挑発するかのように、張讓は毅然とした態度をとり続ける。

「では……一つ、十三丁四年前。二つ、西涼。三つ、汚職。四つ、英雄。五つ、暗殺。……もうお分かりです？」

「……わからぬな」

親指から、一本ずつ指を立てて、ヒントを出す陽。対する張讓は、流石十常侍筆頭と言っべきか。ものともしていないようだ。

「ま、答えようが答えまいが構いはしませんよ。……どう転んでも、アンタは死ぬ」

そう言って用意したのは、ただの八本の剣だった。

「一本目。これは彼の友の分」

そう言って、右腕に刺す。

張讓の呻く声を無視する。

彼は西涼にて、陽と同じく　というより、陽が真似をしたのだが　多くの情報を集めんとした。

「二本目。彼を慕った民の分」

そう言って、左腕に刺す。

張讓の呻く声を無視する。

その際、汚職を見つけては表立って摘発していた。

「三本目。蒲公英の分」

そう言つて、左足に刺す。

張讓の呻く声を無視する。

潼関の戦い以降、宦官たちは英雄となつた彼の、その行為を疎ましく思った。

「四本目。瑪瑙の分」

そう言つて、右足に刺す。

張讓の呻く声を無視する。

張讓を筆頭に、宦官たちは策を考じた……彼の暗殺計画を。

「五本目。翠姉の分」

そう言つて、右脇に刺す。

張讓は辛うじての息づかいになるが、陽は気にとめない。

張讓から趙忠、趙忠から蹇碩へと指示がくだる……金城太守に賄賂を送れ、と。

「六本目。山百合さんの分」

そう言つて、左脇に刺す。

張讓は辛うじての息づかいになるが、陽は気にとめない。

受け取つたその頃の金城太守は、汚職、すなわち人身売買の契約を

した……買われたのは六歳をまだ数えたばかりの瑪瑙だった。

「七本目。薊さんの分」

そう言つて、身体を中心に貫く。

張譲は息絶えたが、陽は気にとめない。

それを知った彼は、軍を動かして取引前に賊を襲い、瑪瑙を救いだすという作戦に出た……畏とは知らずに。

「八本目。母さんの分」

そう言つて、思いの丈をぶつけるように頭を貫く。

張譲は息絶えていたが、陽は気にとめない。

彼の調べた情報より賊の練度は高く、数が多かった為、別動隊として彼自身で瑪瑙の救出という二面作戦を行う。

救出には成功したものの、待ち伏せに遭い、彼の伝令にいった部下以外は全て殺され。

残ったのは、死して尚、守るように彼に抱かれていた瑪瑙だけだった。

それは、今から遡ること十四、三年前の出来事。

「終わったよ。後始末は全部俺らが請け負うわ」

眠ってしまった弁、協兄弟と、玉座の間で殺さなかった百と二人と

共に宮城から出ていた霞と恋に、にこやかに笑いかける。  
血濡れているにも関わらず、実に清々しい笑みだ。

私怨とは聞いていたが、ここまでだとは流石に思っではいなかった  
霞。

……少しだけ、恐怖を覚えても悪くはないだろう。

「夜明けまでは入らないでね」

ばいびー、と手をひらひらさせて陽は西へと帰る。

その様子を見送る二人には、血に濡れたように赤い夕陽が見えていた。

陽は語る。

「あん時は、武力制圧になるとわかってたから、ちんきゅは連れて来なかったらしいよ。作者が忘れた訳じゃないよ（ガチ）」

## 第二十六話（前書き）

この小説、良く飛ぶわー。

きんぐくりむぞん、すげえ多いです。

本当に。

## 第二十六話

S i d e  
陽

「……………」

……………」

……………」

あれ、始まつてる？

……………」

……………」 あ、こんにちは。

只今内政無双中の馬孝雄こと陽でございます。

いやー、ばねえっすわ。

分量多すぎですわ。

……………」 たまにどーでもいいのも入ったりするけど。

ま、今は陳情とか報告とかやっています。

いくつか挙げていきましよう。

『鳳徳様の調練が厳しいです』

本人に言えや！

つか、それはお前が軟弱だからだよ。

『落とし穴によくはまってしまつのですが……………」』

知らねえよ。

どんだけ不幸だよ。

いや、お前の不幸度なんざ、知りたくもねえけど。

ま、とりあえず蒲公英にはきちんと埋めとくよう、言い聞かせておきます。

落とし穴の九割九分九厘が蒲公英作なんです。

それがまた巧妙で、翠姉がことごとく引っ掛かる訳です。

……翠姉が不憫に思えてきた。

『酒が足らん！ 韓遂』

知るか！

陳情の中に入れてくんないや！

あの人も阿呆だろ、絶対。

……頭痛くなってきた

『馬白さま！ 遊ぼ！』

よし、今行く！

……じゃなかった。

陳情の中に入れちゃダメだぞ、ガキ共。

遊ぶのは休暇のときに、ね。

『華陀、と名乗る者が、治療行為の許可を求めてきました。……お連れの方々が、とてつもないです』

ほう、華陀ね。

大陸中を回って、治療を施している、と聞くけど、こんな辺境の地

までくるのか。

まあ、ありがたいと言えばありがたいけどね。

……この城の門前に空き家があったっけか。

そこで、ここにいる間は診療所でも開いてもらおうかな。

いや、これならないほど重病な人には意味がないか。

うん、やっぱ基本は自由にしてもらおう。

ただ、宿は用意しておくけど。

……さて、おばちゃんに俺が全額払うってことで、無料優遇を頼んどくか。

連れてるのは、無駄にムキムキの奴らかな。

特に 格好はアレだけど 有害ではないらしいし、手出しされない限りは放置ってことにしておこう。

『馬印の呉服屋です。最近、売上が下がってきています。特に、幽州辺り、平原は顕著であります。このままでは、決算が！』

流石は、天の御遣い君が 実質は劉備だが 治めているだけのこと  
ことはある。

天のデザ……意匠というものをこらしているらしい。

さて、……こうなったら切り札をだすか。

黄色い全身、くりくりの黒目、赤いほっぺ、尖った耳、ギザギザの尻尾。

もうお分かりだろう？

……ピカ ユウさっ！

俺の記憶が正しければ、万人に愛されている動物だった。

確かに知名度の高さからのものかもしれない。  
だが、あの可愛さ、愛くるしさは、そんなものに左右されるものではないと俺はふんだっ！

とりあえず、ぬいぐるみから出しましょう。

人気が出ると信じ、ピ チュウ仕様の服     いわゆる、耳つきのフードつきの服     を作り。

そして、各地の呉服屋をすぐさま圧倒し、呉服企業を征服してやるうではないか！

これが、ホントの電撃作戦だ！

え？

うまくない？

………うるせえ。

俺が良いなら良いんだよ。

『北の袁家に不穏な動き有り。各地の諸侯に対し、檄文を送る準備に取り掛かっております。………標的は董卓であるようです』

………重要な案件が、どうしてこんなふうに分れ込んでんだよ。

つか標的、董卓ちゃんか！。

『董卓軍は、何進を殺害し、皇帝を傀儡にせんとした逆賊、張讓を討ち、皇帝をお救い申し上げ、都に安寧をもたらした』

って、前のことを流しておいたんだけどな。

戦をふっかける意味が全く以てわからん。

………袁家だから、って言われたらあれだけど。

まあ、いいや。

引き続き調査しておいてもらおうか。

どつせ、起こつちまうだらうつしな。  
さて、どうしたもんかねえ。

「ねえ、母さん。……国建てる気、あ、るっ？」

「……は？ あっ、そこお！」

珍しく呆けた声で聞き返してくる母さん。  
まあ、当然と言えば当然だけだな。

「だーからー、……国規模のっ、支配者になる気があるかっ、っ  
て聞いてんの」

「まだ漢があるっ、はっつ、じゃないの。……かろうじて、だけど  
ニヤリと嘲笑う母さん。

後ろからでもわかるほどにだ。

世間一般では忠臣と言われてるけどさ……これのどこがだよ。

「まあ、っね。そのかろうじて、が崩れた時のことをっと、聞いと  
きたいんだよ」

「そうねえ……。はっきり言えば、ないわ。興味ないもの。……あ  
う、そこ、もっとお！」

「興味本意で決めんなよ……。んしょ」

流石に頭を抱えなくなった。

……頭痛えな。

「いいのよ。んつ。……私は家族の皆とお、慕ってくれる西涼の民を守れさえすれば、あぁっ、どんな形であろうとそれだけでいいの」

こんどは満面の笑み。

後ろからでもわかるほどにだ。

てか、さ。

「いい加減、喘ぐのやめい！ 止めるぞ？」

「はうん……やめちゃらめえ」

俺は手を止める。

なんかイラツときたからな。

「……なによお、せめてものご褒美じゃない」

「それが余計なんだっての！」

「……堅物ねえ。ま、いいわ。ありがとう」

母さんはグルグルと、確かめるように肩を回す。

「毎度ながら、いい仕事するわねえ」

「まあ、肩揉みなんてなれたもんだからな」

因みに、全身の指圧とかも出来たりする。  
なんで出来るかはよくわからんけど。

「ぬおっ！」

そんな不可解な疑問について考えていたせいで。  
突然立ち上がって、俺の腕をとる母さんに反応できず。  
俺は引き寄せられるがままに、母さんに抱かれてしまう。  
……頭がくらくらするなあ。

「毎度毎度、いちいち抱くの止めにしない？」

「いいじゃない 感謝の気持ちを伝えるのは、とっても大切なことよ？」

「わかったから！ 十二分に伝わったから！」

お胸様の感触は素晴らしいが。  
いい加減、放してえ！

「……しょうがないわねえ」

やっと解放された。

……っど。

やべえ。

「ほんじゃあね。俺も仕事に戻るよ」

急ぎ俺は部屋をでる。  
けっほ、けっほ！

S i d e 牡丹

「……………国を建てる、か」

すごく懐かしい響き。

同じことを聞かれたのは、もう二十年以上前のことだったかしら。

『国を建てる気はあるかい？ 君が主で、軍師が僕で』

あのとときも 理由は全く違ったけど 断ったのよね。

大体、そんな立場にいなかったもの。

そんなもの夢のまた夢よ、と罵倒したのだけ。

……………私の姓名と掛けたのだけれど、面白くなかったかしら？

ま、いいわ。

私には、国を建てる気は毛頭ない。

昔も、そしてこれからも。

それに……………私には、これから、の足りなさすぎるのよ。

……………残量が足りないの。

「あと、どれ程保つのかしらね……………」

ずっと前から、覚悟は出来てはいるのだけごと。

「…………クソ、めっちゃだりい」

なんか、すつげえ体調悪くなった。

本当だと、廊下を歩くにも壁づたいじゃないと歩けないくらいだ。

…………まあ、そんなことは絶対にしてやらないけどな。

廊下のご真ん中を悠然と歩いていると、薊さんが見えた。

「む、陽か。 なんじゃ…………顔色が悪いぞ」

やっぱり？

「ちよつと倦怠感がねー」

その他として、頭痛と目眩、吐き気を催しております。

「働き過ぎではないか？ ……無理をするもではないぞ」

「わかってますよ。…………けど、一月前の分のことを考えると、どうしても、ね」

あ、一月前って、洛陽行つてたときのことね。

「その気持ちはわからんでもないがのう…………。儂としては、お主に休んでもらいたいのじゃ。…………儂ら、と言つべきかの？」

「俺に聞かないでよ」

「なーにを言うか。……仇討ちなんじゃろ？ それも、儂らの為の」  
うへ、ばれてら。」

「礼は言わぬぞ。……じゃが、せめてもの感謝じゃ、受け取れい」

薊さんに引き寄せられて、抱かれる。

ブルータス……じゃなかった。

薊さん、お前もか！

「……なんじゃ、不服か？」

「いや、呆れだよ」

嬉しくないと言えは嘘になるけども。

「む、これ以上を求めるならば、儂の部屋に」 「こんだけで十分  
過ぎるから！」 「なぐんじゃ、つれんなあ」

言い方は不服そうだが、声色からだど、実に愉快そうだ。

……ぜってえ面白がつてるよ、この人。

「む、言わせてもらうが、本気じゃぞ？」

だから、心を読むなど。

「いい湯ーだーな、あははん　　つとー」

風呂に浸かったら、歌うべきだと、俺は思うのだよ。  
あ、今日はお風呂の日。

言つとくが、入れるのは珍しいんだからな！

そんなことはおいといて。

結局あの　薊さんに抱かれた　後、普通に政務に戻った。

……抱かれたつてのは、勿論のこと、18禁的な意味じゃないんだ  
ぜ！

何回か吐きそうだったけど、そこは気力でなんとかした。  
これも、どーでもいいか。

さて、どうしよう。

どっちにつこうかねえー。

反董卓連合側か、董卓ちゃん側か。

……正直、どっちについても勝てるんだしな。

檄文内容は、

『救ったつていつてるけど、結局は皇帝に劉協君を擁立して暴政敷  
いてるからやつつけちゃおうー！』

みたいなノリなんだろうね。

乱世に躍り出ようとする諸侯は、便乗するはず。

董卓ちゃん側としては、とんだとばっちりだ。

……ま、袁家が何進側で、不幸にも、董卓軍が張讓側と思われてし  
まったのが運の尽きだが。

しかし、だ。

恋ちゃんと霞、一応友達認定はしてんだよなあ。

だからといって、個人的な理由で軍は動かしたくはねえ。けど、上手くいけば、董卓ちゃんと等しいぐらいの地位に、母さんをもつてくことだって出来たりするしな！。

……母さんが乗り気じゃないから迷ってたんだが。

お猪口に入れた酒を煽る。

風呂で酒というのも乙だろう？

……現実逃避の行為と思ってくれたまえよ。

本来俺は、酒が嫌いだからな。

理由は、酔いとは違う、不明な頭痛がするからだ。

まあ、今飲んでる酒は、水みたいなものだから余裕だけどな。飲んだ感じ、度数が低いつぽいし。

酒、って俺の中じゃ思えないから無事な訳だ。

因みに、俺が本当に酒、って思える奴を、造つてたりする。

わざわざ酒蔵作つてな。

完成と云えるのは、まだ十本足らずしかできてないが。

「あれ、お兄様だ〜！」

「ブー！」

思わず吹き出した。

酒が口から噴き出たと言うべきかもしれない。

いきなりの蒲公英の声に超ビビった。

ばっちなー、おい。

「「「なななな、なんで陽がいるんだよおおおおー！」」」

桶を投げられた。  
痛え。

「……！！」

また、桶を投げられた。  
痛え。

「あ、陽兄だ」

視線を投げてかけてきた。  
痛え。

「師匠、いたんだ」

特に何もなかった。  
逆に痛え。

声的に、最初は翠姉と瑪瑙だろう。

次は山百合さんだよな？

そのまた次は、茜かな。

最後は藍だろ。

つか、さ。

「翠姉と瑪瑙、うるせえよ！ 風呂場だから、すげえ響くんだよ！  
山百合さんは最早声になってないし！ 茜、おまつ、めっちゃ軽  
いな！ 藍は師匠って言うな！ 痛え！ 皆、地味に痛えよ！ つ  
てか、こっちが聞きてえわ！ なんでいんだよ！ なんで危害加え

られなきゃなんねえんだよ！ 言っとくが、使用中って立て札、ちゃんと立てといたからな！」

俺は悪くない！

くそ、頭痛え……。

「ねえ、すすつ翠。しつ使用中、って書いたかか看板なんてあった？」

「いや、あたしは見てないぞ。山百合は？」

「……いえ見てません茜ちゃんはどつですか？」

「見てないね。藍は？」

「僕も見えてないよ」

あれ、おつかしーなー。

俺が悪い、みたいな流れになってんじやん。

ああ……なるほど理解した。

イタズラにしては度がすぎてやいないですかな？

「……まあまあ、皆もちつけよ。蒲公英、てめー、ちょっとこっちこい」

「ん？」

初めに俺の存在をばらした後、ずっとしゃべってないと思ったら、今は髪洗ってんじやねーか、おい。

一緒に入る気満々だよこの子。

貞操観念大丈夫？

「やっぱくん 「えへ、もう来ちゃった」 最初っから、狙いはこれかよ」

「うん」

……一本とられた、のか？

流石は蒲公英、と言っておこうか。

「はあ、もういいよ。俺が悪かった。悪うございました！」

ここは俺が折れておこう。

「そつ、そこまで謝るなら、いつ、一緒に入ってやらないこともないんだからねっ！」

「まあ、藍もいるし、別にいいか」

「……仕方ありませんねいいでしょう一緒に入って差し上げます」

「別に陽兄がいるから、と言って、これといった問題があるわけじゃないしね」

「僕は一緒に入りたい！」

あれ、一緒入るはめに……。

いや、別にいいんだけど、さ。

「あうっ、いったあい！ 皆で入ったっていいじゃん！」

「別に悪いとは言っていないさ。……ただ、理不尽な暴力に晒された俺の気持ちを察しなさい」

手刀を一つ落としておく。

これぐらいはいいだろう？

しゃかしゃかと藍の髪を洗う。  
気持ち良さそうだなによりだ。  
けど、やっぱり釈然としねえ。

「何で全員分やんなきゃなんねえの!？」

おかしいよね!?

藍からねだられたから、仕方なくやってあげようとしてたら、全員便乗してくるとか、なくね?

あ、石鹸は俺の指示のもとで作ってもらったよ。  
結構普及してたり、売れてたりしてます。

名前は、”あじえんす”、”らくくす”で迷ったのち、”つばき”にしました。

なんで作れたかは、察せ!

「はい、終わり! 次は茜!」

しゃかしゃかと洗う。

俺と同じで、肩までほどの長さだから、比較的楽だ。

……ごーすんのさ。

他の皆、最低背中の中の半分が隠れるぐらいの長さなんですけど。

「はい終わり！ 次は蒲公英、って自分で洗ってただろ！？」

「いいじゃん！ たんぽぽだけ仲間外れは嫌だよ！」

「……はあ、わかったよ」

直ぐに折れるから、甘いと言われるのかも。

しゃかしゃかと洗う。

少しくセのある髪を手櫛でとかしつつ、毛先まで馴染ませる。

……綺麗な髪だよなあ。

「はい終わり！ 次は翠姉……マジかよ」

しゃかしゃかと洗う。

この中では一番長えし、量もかなり多い。

一言で言えば、めんどくせえ。

だが、手を抜かないのは俺クオリティなんだぜ！

……クオリティって、なんだったっけ？

「この感じ、懐かしいなあ」

「……なにが？」

「ああ、うん。……あたしが小さかったとき、父様が洗ってくれてな。そんなときの感じを思い出してた」

「……そか」

なんや、しんみりしてまったやないの。  
あ、霞が感染った。

「はい終わり！ 次は瑪瑙か」

しゃかしゃかと洗う。

腕がだるいっす。

流石に五人目だし。

「……むー」

「わかったわかった。真面目にやりますよ」

「……ん　　っ！」

顔が赤い。

自分でも思わなかった声が出たことが恥ずかしいかったんか？

……つか、無防備に男の俺を近づけていいのかよ。

「はい終わり！ 最後は山百合さんだね」

はあ、やっと終わる。

「……やはり自分でやります」

「ちょ……急になんだよ？　つか、もうここまで来ちゃったし、逆にやらせなさい」

前倒しとかで予定が崩れると逆に困るよね！

「…………嫌です」

「いやいやいや、やれつつたのあんたらなんだぜ！」

「…………私は言ってますん」

突然に何故頑固になったし。

「もういいから、黙って後ろ向いてなさい」

「…………嫌です あ」

しゃかししゃかと洗う。

長く続きそうだったから、少々強引に始めさせてもらった。

「…………やめてくだ ……嫌です」 むう

山百合さんの真似をしてやる。

やめてなんかやらねえぞ！

「…………頑固ですな」

「それを山百合さんが言いますか」

呆れを通り越す発言。

たまに天然なんだよね。

「そつゆーとこがまた、山百合さんは可愛いとこだよなあ」

髪を洗いつつ、頭を撫でる。

「……………っ！！」

山百合さんは顔を真っ赤にして、両手で覆ってしまっつ。  
あれ、……………怒ってる？

「……………むう」「

不満気な声が2つ聞こえた。

……………なんでさ？

「はい終わり！ ああ、疲れたあー」

一流ししたらあがろう。

やらなきゃならんことは、まだまだあるからな。

ま、あんな恥ずかしいところにいられるかっ、ってというのが本音だけ  
ど。

……………皆、湯の中じゃ前になにもかけてないんだぜ？

ちゃんと隠そうね。

血統としては、翠と蒲公英以外、皆つながってないんだから。

「……………」

おかしいなー。

浴場から部屋への道って、こんなに歪んでたっけ？

「　　っは、まじやべえ」

明日にでも、華陀に診てもらおうかな。

ご都合主義でもなんでもいいから、来てくれていたことに感謝したいと、な。

「くそ、遠いな」

足取りが重い。

思い通りに動いてくれない。

壁づたいで歩いているのに、安定すらしない。

「うつ、く、はあ……」

こりゃ、限界だわ。

不快感が、一気に込み上げてくる。

膝をつき、思わず服の胸辺りを掴み、にぎりしめてしまっほどに、  
気持ちが悪い。

「げぼっ！　ゲホッ！」

うわ、これは不味いやつだ。

口に宛がった右手を見てみる。

「……………ええ……………血い……………」

赤々としたモノが手一杯に広がっていた。

……………こりゃあかんわ。

そこで俺は意識を手放した。

……この時点では、これが俺の人生のターニングポイントとなることを知るよしもなかった。

陽は語る。

「血を吐くつてさ、相当気力とか持つてかれるよね。精神的にも肉体的にも限界だった俺には、あれ以上の抵抗は無理だった訳だ」と

## 第二十六話（後書き）

翠に恥じらいがないのは、陽や藍を男、と意識してないからです。

あくまで家族、って感じ。

## 第二十七話（前書き）

口調がわからなくなってきた。

もう、午前中、という範囲にしよう。

自分で決めた10時までには投稿、とか難しくなってきたし。

## 第二十七話

「……………」

「……で、華陀君、だったかしら。……陽はどうなの？」

牡丹は、寝台に横たわる患者。

すなわち、陽の様子を診察した華陀に問う。

「はっきり言わせてもらおうが……、分からない」

「なっ、どういっ　「瑪瑙、黙っておれ」　母様！」

「…………説明してもらおうぞ」

掴みかかろうとした瑪瑙を御し、薊は問う。

対する華陀は、難色を示す事なく話し始めた。

「勿論だ。……俺はゴットヴェイダーの教えに従っていつも治療している」

「…………ごっつと、べいどうっ？」

何か引つ掛かったのか、藍が復唱する。

皆はスルーしたが、気になったようだ。

…………むしろ、これが普通の反応なのであるが。

「違う違う。ゴットヴェイダー!!! だ!」

「こんぺいとう?」

次は牡丹が呟く。

……完全に悪ノリである。

「義姉上……、弁明の余地はまだあるぞ?」

「ごめんなさい、ゴットヴェイダーでした。すいません。……華陀君続けて下さい」

ペコペコと頭を下げる牡丹。

マジギレ寸前の薊には、頭が上がらないようだ。

……本当に太守なのか、疑わしい限りである。

「……こう、義姉上も言っておられるし、後にも言い聞かせておくじゃから、華陀殿、話を続けてくれぬか?」

「わかった。……その教えにより、俺は体内に巣食う病魔を見るこ  
とが出来る」

「だったら、陽も見れたんじゃないのか?」

「……その上で分からない、ということですか?」

華陀の言葉に反応して、翠、山百合の順で言葉を続ける。

「そうではないんだ」

「じゃあおじさん、どういうこと？」

「……。見えなかったんだ。本来見えるはずの病魔も、その影すらも見当たらないんだ」

華陀は伏し目がちに、言葉を紡ぐ。

「……苦笑いで茜のおじさん発言をスルーところは流石と言うべきだろう。」

「じゃあ、なんでお兄様は？」

「……。そこなんだ。それが分からないんだ。……。呼吸も安定しているし、血流も悪くない」

蒲公英の問いに答え、さらに、と華陀は続ける。

「韓遂殿から聞いた昨日の馬白殿の様子から、過労の線も探ってみだが、そんなに疲労も溜めていなかった」

「ふむ。……。ますます分からないわね。全く、陽つてば世話の焼ける子ねえ」

牡丹は陽の寝る寝台に腰掛け、慈しむように薄く笑い、優しくその頭を撫でる。

「すまない。……。俺が力不足なばかりに」

「いいのよ。……。この子は死にはしないし」

華陀は俯き、グッと拳を握る。

医者として、治せないのが悔しいのだ。  
そんな華陀の様子に、柔らかく微笑んでみせる牡丹。

「……それは勘か？」

「ええ。私の勘は当たるのよ」

「……願掛けで真似している、という訳ではなかるうな」

「当たり前じゃない」

勘、という言葉に薊は訝しむが、牡丹は相変わらずの笑みを溢す。  
諦めか信頼か。

薊も微笑んで見せた。

「その言葉、信じるぞ。……っと、すまぬ。少なくとも、医者  
の貴殿を前にして話す事ではなかったかの」

「いや、構わないさ。あまり勘で判断して欲しくない気持ちもある  
が、今回の場合、俺は宛にならないからな」

薊の謝罪に苦笑いで返す華陀。

医者にとっても、勘で全て言い当てられても困るのである。

……とりあえずどこぞの小霸王は、ちょっと自重すべき。

「……悪かったわね、華陀君。さつて、と。んー、陽も一応無事  
だったことだし、今日のところはこの辺でいいかしらね」

「……ですね。それに、後がつつかえておられるようです」

「陽にばっか時間を割かせてんのは、華陀にも皆にも気が引けるしな」

牡丹の言葉に同意した山百合と翠が追従する。

すくつ、と牡丹は不意に立ち上がり、華陀の前で左の拳を右手で覆い、深く一礼する。

その牡丹の顔に、いつもの笑みはなかった。

「華陀殿、我らの身勝手な願いを聞き入れて頂き、誠に感謝いたします。そして、我らの貴殿に対する数々の非礼、お許し下さい」

「いつ、いや、結局、力になれなかった俺にそのような」

「時間を割いて頂いたのは事実です。御礼申し上げるのことも、非礼を詫びるのも当然のことであります」

今までとは違ってかわった牡丹の様子に、当惑する華陀。  
これまでにない表情をいきなり見せられて、驚かない筈がないだろう。

感謝も謝罪も受け取らない華陀を、牡丹は説き伏せ、続ける。

「重ね重ね申し上げありませんが、もうひとつだけ、我らの願い、聞き入れて頂けないでしょうか」

「……ああ！ 何でもいつてくれ！」

「ありがとうございます。では、……未だ病魔に苦しむ我らの民をよろしくお願い致します」

「……………」

そこに病人がいるというのに、自分の力不足から 実はそうではないのだが 治療出来なかったことに、華陀は罪悪感に近いものを感じていた。

そんな気持ちからか、牡丹たちの願い、というものには全力で身を投じようと、自身で決意していた。

しかし、そこにもとより自分の仕事であり、ここに来た目的でもある、民草の治療を乞われたのだ。

もう一度深く頭を下げる牡丹に、華陀は言葉を失ってしまった。

「ここにいる馬白も、華陀殿からすれば捨て置けぬ患者ではありません。しかし、貴殿は安定している、と仰られた。ならばこそ、今にも病魔に崩れ落ちんとする我らが民を救って頂きたいのです。

……………それが馬白自身の願いでもあります」

牡丹の言い分はこうだ。

原因不明の病に倒れた陽を、放つてはおけないだろう。

しかし、何かはわからないにしても、今のところ危険はない。

ならば、治せない陽のもとにいるよりも、治せる民を優先してほしい。

それは、牡丹と同じである陽の願いでもある。

と、いうことだ。

権力者で独占するより、力なき民に分け与える。

……………どんな時代から見ても、特殊な構図である。

「……………わかった。それが貴女方の願いなら」

「ありがとうございます」

牡丹はニコリ、と笑いかけた。  
また、うってかわった表情と雰囲気、見惚れるものがあるな、と華陀は思った。

「……終わったようじゃな。さて、皆も各々の仕事に戻れ。無論、義姉上も、な」

「嫌よ！」

牡丹と薊以外の6人は、肅々と持ち場に戻る。  
拒否った牡丹は薊に引き摺られて戻ることとなった。  
…… 本当に太守（ry

辺りが暗闇で覆われた頃……。

「ふう。……それで、話とは何かしら、華陀君。陽のこと？ もしくは愛の告白」

「馬騰殿、……分かってるだろう？」

「つれないわね」

「すまない。……本題だが、貴女も」

「誰にも言わないで頂戴」

「……………わかった」

「感謝するわ。……………見立てでは、あとどれぐらい？」

「……………一年はきっている」

「そ。ありがとう」

「いや、不甲斐ない限りだ」

片方が微笑む傍ら、対する片方は、悔しがっていた。

「陽ちゃんが倒れたらしいわん」

「ふむ、例のオノコか。どのような顔をしておるのぉ。……………ドキがムネムネしてきたわい！」

「どぶふ、そこはムネがドキドキ、よん」

「む、勘違いするでないぞ！ べ、別に貴様の為に間違った訳ではないからの！」

「分かってるわよん」

「おっと、話が逸れてしまったわ。……………外史拒んだか」

「あくまでも、突端はご主人様のようねん」

「じゃが、付属でしかないファクターが、外史に拒ませるとはの……なかつた、と言つべきじゃな」

「これから、この外史は何処まで許容するのか……見ものねん」

「むむむ、やはり、ドキがムネムネしてきたわい！」

会話こそ聞こえなかつたものの、様子を窺っていた兵は、身をよじる二人に吐き気を覚えた。

明くる朝……。

華陀は、どこからともなく聞こえる騒がしさにより、  
陽の手配  
した 宿にて、目を覚ます。

外か、と判断し、眠気眼で開いた窓から外を見た。

華陀を一瞬で眠気を覚まさせる光景が、そこに広がっていた。

老若男女問わない長蛇の列が、大通りにできていたのである。

華陀は大通りに面したある一室に泊まっていたため、窓からそれを一望することも、どこに向かっているのか確認することもできた。

……言つまでもなく、城に向かっていた。

華陀は、急いで寝間着から着替え、朝食も採らないで、真つ直ぐに城へ向かった。

城に近づくごとに、人の密度は増し、門前近くでは、半身になって  
でなければ通れないほどであった。

「ちよつとすまない」

「おいおい、兄ちゃん。横入りは良くねえぜ。皆、順番に並んでん  
だ」

「そつだそつだ！」

「かつこいいからつて、調子にのらないで！」

城に近づく度に、こんな絡みをされる華陀。  
ちよつと不憫である

「ちよつと退いてくれ」

「おいおい」ry

「そつだ」ry

「かつこい」ry

「おお、華陀先生ではありませんか。昨日はありがとうござえまし  
た」

「いや、当然のこと

『華陀先生だつて!?!』

え?」

人だかりの中心で華陀と叫ばれる。  
そして、皆がみな、一斉に華陀を見る。  
ちよっとだけたじろいだのは仕方がない。

『うおー！ 華陀先生だ！ お通ししろ！』

『華陀先生の邪魔するなー！』

『きゃー、かつこいいわー！』

手のひらを返すかのように、対応も、言葉も変わり。  
今まであった人だかりが一瞬で左右に分かれ、城までの道のりが開けられる。

華陀は、なんとも言い難い気持ちになった。

「あ、あの……」

「あつ、こらっ！」

突然少女が、華陀の前に躍り出る。  
連れ戻そうとする母親を手で制して、華陀は少女に笑ってみせた。

「どうしたんだい？ どこか痛いのか？」

少女は俯きながらも首を振る。

どうやら違つらしい。

少女黙つたまま、右手を華陀に差し出して、開いた。

「これは……、綺麗な石だね」

手のひらの上には、磨かれたかのように艶めく石があった。華陀にはまだ意図がわからなかった。

「……俺にくれるのか？」

コクツ、と少女は頷く。

しかしそれだけではなかった。

「……これで、お兄ちゃんを、治して」

恥ずかしさ半分、不安さ半分の、今にも泣きそうな声色で懇願する少女。

対する華陀は、医者顔に変えた。

「君のお兄ちゃんはどこにいるんだ？」

華陀の問いに、少女は当たり前前であるかのように城を指差す。はつきりしない自分の子の様子に、母親が助け船を出す。

「この子、というより、ここにいる子供たち皆の言うお兄ちゃん、とは、馬白様のことです」

「……と、いうことは」

少女に便乗したか、わらわらと華陀のもとに子供たちが集まってくる。

「僕の今月のお小遣いをあげるから！」



陽の部屋にて、華陀は城中にこだますほどの声を張り上げる。そして、ありつたけの氣を注いだ鍼を、陽の心臓に打ち込む。

本来、氣のこもった鍼を患部に打ち込むことで、病魔を滅するのが、五斗米道の基本である。

だが、ひとつだけ、そういった治療とは違った奥義があった。

その名は、投氣亜外流。

またの名を、鬪氣注入。

自らの氣を、他人に分け与える、というものである。

……鬪魂ではないので氣をつけるように。

その奥義に、

『使用後には、愛と哀を知ることができ、後の好敵手との戦いの末に昇天する』

という逸話が、あつたりなかつたり。

とにかく、華陀は今回、それを陽に施した。

むしろ、これしかない、と確信したのであつた。

「……………ふう」

『……………』

玉のような汗を拭う華陀。

そんな中でも、達成感のある顔をしていた。

対して馬家の人々は、華陀の音量に呆然する。

……昨日は診察のみで、治療はしていなかったので、知らなかつたのである。

「……で、どうなのかしら？」

いち早く戻ってきた牡丹は、達成感に溢れつつも、疲労感も拭えない様子の華陀に問う。

……もう少し労ってもらいたいものである。

「……様子を診てみないとわからないが、俺の氣がうまく馴染めば成功だ」

「ならば、まだ数日はかかる、ということになるのかの？」

腕を組み、右の眉を上げた薊は、困ったように呟く。

文官をまとめる立場としては、陽が数日間動けない、というのは、相当な痛手なのである。

「ああ、そうだ。どれ程で馴染むかもわからないし、たとえ馴染んだとしても、何が起きるか俺にもわからない。……数日は絶対安静にしてもらうことになるからな」

「ふむ。これは、困った困った。……陽の抜けた穴を埋める為にも、義姉上にも頑張ってもらわぬとな」

「……なん……だ、と……！」

若干細く笑む薊。

牡丹は、絶望に瀕したような顔つきになる。

……この二人は、シリアスだということをわかっているのだろうか。

その日の夜……。

「……………困ったわね」

「全くじゃ」

『……………』

牡丹が呟き、薊が相槌を打つ。

言葉には出さないものの、この場にいる全ての者たちが同じ気持ちだった。

「……………どうしようかしら、この、反董卓連合、ってやつ」

数日前から、陽の頭を悩ませていたものだった。

「そんなもん、出陣するに決まってるだろ！」

「あんたバカア？ 集結するのシ水関なのよ？ ……まるっきり返  
でしょうが」

翠の言に、反論する瑪瑙。

出陣以前に、西涼から、というより、今現在董卓たちがいる洛陽より西側から、シ水関前に馳せ参じる、ということ事態がおかしいのである。

さらには、多大な時間がかかる、かつ、向かうまでの食料、資金などの問題がネックになっていた。

「……まあまあ、落ち着いて下さい。それに、どちら側を標的に出陣するか、も重要です」

山百合は熱くなる二人を諫めつつ、さらに問題を提起する。

「山百合お姉さま、それって」

「……はい。董卓側か、反董卓側か、ということですよ」

山百合は腕組みをし、目を閉じて、蒲公英の言葉に続ける。

反董卓連合の言い分は、陽の予想通りのものであった。

その内容の信憑性は不確かであるが、事実ではない、とは確信出来ないもの。

どちらに正統性があるのか、判断しかねていた。

「うーん、反董卓連合側に付くことにしたとして、……やっぱりシ水関まで行くのって、面倒よねえ」

「母上っ！ 洛陽の民が逆賊の手にかかってもいって言うのかっ！？」

翠は檄文の内容を信じており、あたしが討ってやる、ぐらいの気概でいたのだ。

母親である牡丹のだらけた発言に怒るのも当然である。だが。

「別に。関係ないもの」

「っ！ー！」

牡丹は据わった目で答えた。  
その顔に、いつもの笑みはなかった。

「私にとって、この西涼の地以外、どこでもいいのよ。……そもそも私、あそこ、嫌いなよね」

どちらに付いても、あそこいかなきゃいけないのか、あーあ、やだよだ。

牡丹は無機質な顔をして、おどけた感じでそう続ける。

牡丹の心の底から出た本音であった。

結局何も決まらず、一刻経つ。  
険悪なムードも高まっていた。

「……お兄様がいたらなあ」

「……蒲公英ちゃん、それは言わない約束です」

そう。

蒲公英の言うように、陽が居れば全て解決出来るのである。

檄文の内容の真相も、どちらに付くべきなのかも、そして、どんな展開が待ち受けているのかも。

総じて、冒頭の困った、とは、陽がないことを指していた。

「……も〜、仕方ないわねえ。ウダウダ考えてたって何にも進まないし。……翠の意を汲みましよう。我らは反董卓連合に参加する」

『……御意!』

散々悩んだ末、牡丹は漸く決意する。  
いつもは即断即決が基本の牡丹であるが、それがなせるは、主に陽のおかげなのだ。

「出陣は三日後と、一応しておくわ」

「一応、とは、どついつことじゃ」

薊は、あやふやなのを好まないタイプである。

「明後日までに陽が回復すれば、あの子の意見も聞くってこと。その意見次第で、出立する日も変わるかも知れないでしょ?」

「なるほどの」

ぼん、と手を叩く。

……直前になって変更することになる可能性がある、ということには突っ込まなくても良いのだろうか。

「ま、どう転んでも、薊と瑪瑙はお留守番だけだね」

「……ええっ!?!」

薊はともかくとして、瑪瑙は若干だが、やる気を出していたところに、牡丹の発言。

驚きの声をあげてしまうのに不思議はない。

「ええっ、ってなによ。誰がここと陽を守るっていつの?」

「ことは、金城と隴西を含む西涼全体のことである。」

「まあ、確かにの」

「……………」

未だ不満気な瑪瑙。

そんな義娘を見かねた薊はこう耳打ちした。

（…………陽は例外として、残るのは儂とお前の二人だけじゃ。陽と二人っきりの時間を作ることなど、造作もないことなのじゃぞ？）

「うん、わかった。残るよ、母様。……牡丹様、喜んでお引き受けします！」

凄まじい勢いで切り返し図った瑪瑙。

そんな様子に、牡丹はしまった、と右手で顔を覆い、薊はしたり顔ををし、羨望の眼差しで瑪瑙を見る山百合と蒲公英。  
どうやら耳打ちの内容がわかったらしい。

「……………?」

若干一名、わかっていなかったりする。

一方、各地では…………。

「勿論、参加するわ」

「ですが、華琳様っ！」

「いいのよ、桂花。麗羽のバカな策に、乗じさせてもらうわ。……最後に笑うのは、霸王である私なのよ」

「……御意」

「まだ納得いかないかしら？」

「いつ、いえ、そんなことは」

「可愛いわね。……今日は私の閨に来なさい」

「はっ、はい」

陳留での一コマ。

……真面目な話から、どうしたら百合百合しい話に転ぶのか。

「……来たわ。千載一遇の好機よ」

「ああ。この期に乗じる他ないな」

「で、どうする？ アレ、使っちゃおう？」

「遠慮なく、と、いきたいところだが、まだ保留だ。向こうで会ったら聞けば良い」

「それもそうね……。……贈った本人がこないのは残念だけど」

夜闇の中での断金の会話。

アレとは、このときの為に、贈られた膨大なお金のことである。

……陽が倒れたことは、局地的に知られていた。

「……いや、いるよね。絶対いるよね。むしろ、いなかったらおかしいよね!?!」

一刀は街中でシャウトする。

そうしないといられなかった。

黄色い全身、くりくりの黒目、赤いほっぺ、尖った耳、ギザギザの尻尾。

「……ピカ ユウ」

なんとも愛らしいぬいぐるみがあったのである。

陽がピカチ ウのぬいぐるみを市場に出すと決定したのは、わずか三日前。

元々隴西において、少量だがすでに生産していた。

今でさえ、色々と突っ込みたい気がしないでもないが、問題はそこではない。

どうすれば三日の内に平原まで持ってこられるのか、である。

……そこは華麗にスルーしてもらうと、作者的に助かったりする。とにかく、檄文は（何故か）届いていない為、今日も平原は平和だった。

……距離的に一番近い筈なのであるが。

陽は語る。

「俺があのと看倒れてなかったら、どうなってたんだろね。心底愉快な流れになってただろうな」と

## 第二十七話（後書き）

華陀の技は、勝手に決めたものです。

某世紀末覇者が救世主の嫁の後ろ首を突いて、鬨氣を送った、ってのを思い出したのですが何か（・・・）（キリッ

第二十八話（前書き）

やっとこそ、反董卓連合編。

長かった……。。

## 第二十八話

夢を見ていた。

過去を見た、と言ってもいい。

五、六歳ぐらいのときに拾われたときのことを。

「（俺／儂）についてこい」

そう言われたときのことを。

誘われるがままについていったときのことを。

夢を見ていた。

遠い遠い過去を見た、と言ってもいい。

一人の少年と出会ったときのことを。

その少年が友になってくれたときのことを。

夢を見ていた。

遠い遠い過去を見た、と言ってもいい。

親代わりのじじいに勉強を教わり、剣術を習い、寝食を共にしたときのことを。

師範代となり、子供たちに剣術を教えていたときのことを。

夢を見ていた。

遠くはない過去を見た、と言ってもいい。

一人の少女と出会ったときのことを。

その少女に意味も解らずイラついたときのことを。

夢を見ていた。

遠くはない過去を見た、と言ってもいい。

親代わりのおやじに勉強を教わり、拳術を見稽古し、寝食を共にしたときのことを。

強くなりたくて、先の少女に教えている姿をひたすら盗み見ていたときのことを。

夢見ていた。

じじいにも、おやじにも、恩返し出来る日がやってくる時を。

だが、そんなありふれた小さな夢さえ、叶うことはなかった。

## Side 陽

「知らない……知ってる天井だ」

このネタ二度目だよね。

まあ、気にしないでいこう。

てか、久々に光を見た気がするなー。

そっぴゃ、倒れたんだっけ？

……あー、吐血したんだっけ。

そっから覚えてねーや。

そんなことより聞いてくれ。

「……なんで蒲公英が上にのってんだよ」

一応、俺って病人だよな。

ダルさとか倦怠感とか全く感じられないから、これといった問題は別にないんだけどさ。

「蒲公英、おーきーろー」

ぷにぷに、とほっぺをつついて、蒲公英を起こす。  
柔らげえなあ、おい。

……別に下心からやってる訳じゃないんだぜ！

蒲公英を上からどかして寝台から出ようと思っつて、全身規模で身体を動かそうとしても、全く反応してくれない。

動こうとすると、こっ、力が抜けてく感じなんだよね。  
だから、唯一動く右腕を使って起こそうとして思い付いたのが、これなのだ！

「んっ、むー、もうちよつと」

「あ、鳶が鷹を産んでるー」

「それ、たんぽぽのネタだからとっちやダメー」

そんなきまりあんの？

次元的に超越してるっぽいので、深くは介入しませんが。

「おはよう」

「あ、お兄様、おはよう！　って、えええー！！！」

笑顔で蒲公英に挨拶したら叫ばれた。  
なんで？

「ちょ、耳元うるさい」

「あ、ごめんなさい。……じゃなくて！ いつの間に起きたの!？」

「さっき間に起きたの。つか、そんな驚くこと？」

「……うん。……ぐすつ、でも、よかつ、たあ……」

半泣き、かつ満面の笑みで蒲公英に抱きつかれる。

蒲公英の泣き顔なんて、久しぶりに見た気がする。

確か半年前、俺の執務室の机に足の小指ぶつけた、ってやつだったか。

仕方ないと思う。

あれは痛い。

……足を押さえて、涙目で俺を見上げるその姿に、可愛い、と思っ  
てしまったのは秘密だぞ！

まあ、何が言いたいか、というのだ。

蒲公英は俺に、滅多に泣き顔を見せないってこと。

だから、よほどの事だったんだろうな。

「……何かあったの？」

右手で蒲公英の頭を撫でながら、出来る限りの優しい声色で問いかけてみる。

聞かなきゃ始まんねえだろ？

「何かって、……お兄様が倒れて、何日も起きなかつたんだよ！」

若干怒ってますね。

睨まれてますもん。

まあ、別に怖くないけど。

……この上なく可愛いし。

つか、ちよつと待て。

「俺が倒れて何日目？」

「今日で一週間だよ！」

え、マジかよ。

「じゃあ、反董卓連合は？」

「勿論参加するよ。今日が出発の日だし。……って、話をすり替えないで！」

「ごめん、ごめん。そっちも結構重要なことだからね」

苦笑いを浮かべる俺。

俺が倒れてる間に決めやがったなコノヤロウ。

今更変えることもしないし、出来ねえだろうなあ。

ま、いつか。

若干の罪悪感はないにしてもあらずだけど、関係ねえと言えば関係ねえ。

どのみち俺がいなくても、董卓ちゃんたち独自で張讓含む十常侍とか殺すつもりだったんだしな。

まあ、なんだ。

……董卓ちゃん、ドンマイ。

「あ、他のこと考えてる！ しかも、女のこと！」

なにこの鋭さ、こわっ！

「悪い、悪い。絶対届かんけど、董卓ちゃんを慰めてた」

「……え、董卓って、女なの？ てつきり豚みたいな容姿で、酒池肉林だ、とか言ってる奴だと思ってた」

あれ、知らんかったの？

つか、凄い偏見っぷり。

流石にひでえよ。

董卓ちゃん、かわいそ。

「そんなやつだったら、恋ちゃんも霞も、主にはしねえよ」

「……恋と霞、って誰のことっ！？ もしかして浮気っ!?!」

胸ぐらを捕まれて、ぐわんぐわんと強制的に頭を振らされる。

蒲公英は馬乗りでやってきますから、俺は当然逃げられない。

まあ、もともと動かないんだけどね。

つか、浮気、って言ったけど、まず本命がいねえよ。

大体、なにこの夫婦漫才っぽい感じ。

……悪い気はしないが。

「恋ちゃんは呂布、霞は張遼のこと！ どっちも友達だって！ 前

に話したろ！」

「あ、そっか」

突然に手を離される。

動かない訳だから、受け身が取れない訳で。

背中を寝台に打つ訳で。

いってえ……。

「たっ、たんぽぽは悪くないよ！ 二人の真名なんて聞いてないしっ！」

「……へえ」

「ううっ、……ごめんなさい」

「うむ、宜しい」

にこやかに笑いかける。

子供は素直が一番だ！

えーと、何処にやったかな？

「俺の執務室にある戸棚の、上から二番目の引き出しは二重底だな。多分、そこに董卓ちゃんの似顔絵があると思う」

埋伏に描かせたやつだ。

なかなか上手だと思う。

同じく描かせた恋ちゃんたちも、結構似てたし。

「……それ、慰みものにしてないよね？」

「おいおい、そりゃねえぜ！ 流石に怒るぞ？」

それ、ただの外道じゃねーか。

「やだなあゝ、冗談だよ」

「ならまあ、いいさ。それでその似顔絵だけど、母さんたちには、人相書きにはしない、って約束させてから見せてね」

ここは徹底しておく。

ちよつとした罪悪感からの偽善、自己満足。

笑えるだろう？

「たんぽぽは約束してないのに、いいの？」

「こつやって話してる時点で、約束みたいなものだろ。……それに、蒲公英を信じてるからね」

母さんは同じだから例外として、一番信頼してるのは蒲公英。無論、家族の皆にも最大限の信頼は寄せてはいる。

けど、情報を与えるに比例して、選択肢を増やして、どれが自身にとっての利益が大きいかによって選びとる。

そう、どうしても計算的になってしまうのが、大人ってやつな訳だ。その点、いくら大人顔負けの武や知があっても、大人びた節が垣間見えても、まだまだ子供の蒲公英。

家族の皆には悪いが、蒲公英に寄せる信頼は一步前なのさ。

「……うん！ えっと、その代わりって訳じゃないけど、ぎゅーっ  
てして？」

満面の笑みを溢しながら抱きついておいて、今更何を言ってるのや  
ら。

まあ、いいけどさ。

両腕で抱き締めてやる。

……あ、左腕動いた。

これで起き上がれ

「むー」

また、後にしよう。

むくれ顔して、上目遣いで睨む蒲公英さんに根負けしましたが何か？

457

どれくらい経っただろうか。

「……もういい？」

「……うん。もうちょっととして欲しいけど、そろそろ時間だからね  
」

マジで残念がる蒲公英。

俺自身、実はもうちょっとしたかったりする。

ぬくぬくとした暖かさがある、という理由の他に、もう一つぐらい  
ある気がするが、はっきりはわかんね。

……自分の心の内がわからんとかどうなのさ、と思うのは俺だけ？

蒲公英はそのそと起き上がって、寝台を降りる。

……いつもとは逆だけど、同じく感じるのは名残惜しさ。

黄緑色のリボン 何時だったか、俺が買ってあげたやつ をいつものように結び、とんとんと靴先を地面に叩いて履き心地を確かめ、傍に立てかけてあった武器 影閃 を手に取る。

……なして俺の部屋なのに用意してあるん？

「出発前に、俺の執務室にいけよ」

「うん」

似顔絵の件ね。

「あ、そだ。母さんに黒兎貸したる、って、言っというて」

「うん」

貸して貸してうるさかったんで、ちょうどいい機会だ。

「あと、もう一つ。『使うもよし、使わぬもよし。自由にして欲しい』って、母さんから孫策ちゃんに伝えるように言っというて」

「うん」

お金の件ね。

「あ、今回の戦いだけど、うちからは手出し無用だからね」

「うん」

まあ、出せないと思うけど。

騎兵なんて、攻城戦ではあんま使えねえしな。

「よし、じゃあ、いってらっしゃい」

「……………」

うん？

返事がない？

そう思った後からは、時が流れるのが遅く感じた。

ゆっくりと蒲公英の 影閃を立てかけ直したことによって空いた

両手が俺の頬を優しく包む。

不可抗力、と言うべきか。

何の力も蒲公英の手からは働いていないのに、自然と引き寄せられる。

そして、自然に、ごく自然に、唇が合わさる。

柔らかなファーストキスだった。

そしてまた自然に唇が離れた。

「いつてくるね！」

そう言つて、蒲公英は脱兎の如く部屋を出ていった。

待てよ、うん、待て。

俺、今、盛大に焦ってます。

ちよ、えっ、マジ？

された？

今の俺の頭の中は

接吻、口付け、チュー、きす、鱧？、キス、k i s s、K I S S！！

こんな感じ。

「おおっ、ジーザス」

もうゴールしてもいいよね。

俺は意識を手放すことにした。

S i d e 三人称

おお、陽よ。

意識をなくしてしまうとは嘆かわしい。

と、まとめてみるが、仕方のないことだ。

はつきり言えば、陽にとつて全て初めてのことばかりなのだ。

内面で取り乱しても　その為、自ら発する横文字にツツコミを入れていないのである　、表面に出る前に意識をぶっ飛ばしたのは、実に最良の選択と言えよう。

さて、陽を取り乱させた方を見ていこう。

蒲公英は陽の執務室にやってきた。

勿論、言付け通りにする為に。

「……………しちゃった」

ゆっくりと、しかし確実に、陽の唇の感触を思い出させるように、指を唇に這わせる。

そうするだけで、自分の鼓動が速まるのを、蒲公英はしかと感じていた。

蒲公英の胸を占めるのは、ドキドキ感と幸福感。

堪らなく胸が一杯で、自然と笑みが溢れてしまうほどである。

遅れたことによつて怒られ、胸に占めるこのキモチをなくすまい、と蒲公英は似顔絵を引き出しから抜き取って、急ぎ部屋を出る。

集合場所まで向かう間も、ずっとにへら、という感じで笑っていたので、すれ違った兵は、役得だと思ふ奴もいれば、悔しがる奴、引いていた奴もいたとかいかなかったとか。

「え、嘘、マジ？ おっしゃ！ 黒兔の乗馬許可キタ！ これで勝つる！」

力強いガッツポーズをし、いかにもk t k r、といった感じで、おかしいぐらいにテンションが上がっている牡丹。

蒲公英から陽の伝言の内容によって、興奮したようだ。

これが西涼太守の姿だとは、誰も認めてはくれないだろう。

……しかし、一体、何に勝つのだろうか

そして、彼女は電波ではない。彼女は電波ではない。

(大事なことなので二度(r y))

「こーくーとーっ！ おいでーっ！ ちゃんと陽から許可、取ったわよ！」

異常なぐらい大声を張る牡丹。

正直に言っと、現在、牡丹は狂っております。

でも、断じて電波では(r y)

そこに、黒兔がやってくる。

周りの将たちだけでなく、兵でさえ黒兔がため息を吐いたように見えたとか。

……黒兔がいかに呆れているかが見てとれよう。

「……私は嫌？」

牡丹が黒兎に問う。

些か異常な光景に見えるが、西涼勢は慣れっこだった。別に嫌じゃないけど、みたいな感じで、黒兎は牡丹の頬を舐める。

「…………最大限の我慢はするわ。だからお願い！　ねっ」

手を合わせて頼み込み、ねっ、のところで笑顔で首を傾げる。

黒兎は、しゃあねえな、といった感じで、ブルツと啼いた。

…………馬も飼い主に似るものなのだろうか。

ここで、男の名誉として説明しておこうと思う。

世には、ギャップ萌え、というものがある。

簡単に説明すると　私程度が説明する必要はないと思うが、

いつもとは違った仕種を見せることで、相手に萌え、という感情を生じさせるものだ。

さらに、落差が大きければ大きいほど効果を発揮するものでもある。

自分の仕える君主が、可愛らしい仕種をしたら、どう思うだろうか。いつもは威厳に満ち溢れ、西涼の民の万人から慕われる主の、柔らかな笑顔を見たら、どう思うだろうか。

アラフォーババアだが、まだまだ美人にカテゴライズされる人の、年頃の女のような仕種をしたら、どう思うだろうか。

男なら萌えるはずだっ！

ということ、その時の牡丹を見てしまった兵たちは、一様に腰を屈め、前のめりになった。

端的に言えば、一部がスタンディングオベーションになったのであった。

出立が遅れたのは言うまでもないことである。

数日後の洛陽にて……。

「……不味いわね」

城内の一室で、爪を噛み、呟く者が一人。  
董卓軍にその人あり、と言われる賈馱である。

「なにが不味いんや？」

「連合のことなら安心しろ！ そんなもの、私が粉碎してやろう！」

そこに、霞と華雄がやってくる。

どちらもほぼ戦の準備が完了したので、指示を仰ぎに来ていたところ、先の言葉を聞いたのである。

「……華雄一人で、二十万を相手にする気？」

「当たり前だ！」

「……流石に無理やと思うで」

自信たっぷりな華雄に、頭に手をやって、呆れる二人。

「んで、何が不味いんや？」

華雄そつちのけで話を進めるようとする霞。

……何気にひどい。

「……連合の面子よ」

「兵数がアホみたいにおるの両袁家の他に、どこがおるん？」

「……まず、袁家の片割れは、厄介なのを飼ってるわ。それに、陳留の曹操ね」

「孫策に曹操か。……キツツイなあ」

霞は腕を組み唸る。

完全に華雄は空気である。

敢えて表記するならば、孫策って、孫堅の娘だったっけ、みたいなことを考えてたりする。

「後は天の御遣いとかいところね」

「関羽と張飛は有名所やったな。……殺り合ってみたいわ」

凜猛な笑みをする霞。

その中で、ふと思う。

「陽……やなかった、西涼の馬騰は？」

「頼みの綱ではあったけど、残念ながら敵よ。けど、別に厄介な相手ではないわ」

「前にゆーとつた事と違わへんか？」

霞の言う、前に言っていたこと。

『味方につけば、この上ない援軍となるし、敵になれば、この上なく厄介な相手になるわ』

これに明らかに矛盾していた。

「違うわいよ。……確かに西涼勢の武力、兵力は厄介だけど、攻城戦ではあんまり意味を為さないわ。それに、一番厄介なのは天狼の存在なのよ」

賈馱が一番警戒していたのは陽なのである。

「……ん？　ほんなら、陽、馬白は連合におらへんの？」

「そついうことよ。十日ほど前に倒れたらしいわ」

「つまり、ちゅーべきか、僥倖、ちゅーべきか、なあ」

陽が倒れた、と聞いたとき、賈馱は嬉しがることも、悔しがることもなかった。

正確には、淡い期待と多大の焦燥を持っていたので、どちらも出来なかったのである。

ただ、勝算が安定してほつとした、というのが一番だった。

……良くも悪くも、勝利への鍵を握るのは陽なのだ。

結局は、劣勢に変わりはない。

ならばこそ勝率を上げるには、と賈馱は思考する。

それが軍師の仕事であり、董卓を天下人にする、という夢に近づく  
為の一步なのだから。

「……さて、軍議をするわ。霞は恋とねねを、華雄は月を呼んで来  
て頂戴」

「了解や」

「む、わかった」

陽は語る。

「実にふっくらであった！」  
と

## 第二十八話（後書き）

改善点など、何かしらあれば、どしどしください。

一応処女作ですから、勝手がわからない部分もありますので。

## 第二十九話（前書き）

主人公が本編にまるまる出てこないなんて……。

## 第二十九話

「やってきました、シ水関！」

「……ハア」

テンションが上がりすぎて狂った牡丹を見て、ため息を吐く山百合。頭を抱えたくなるほどだ。

戦い自体には、二十七話の通り乗り気ではない。

にも関わらず、何故、前回同様こんなにもテンションが高いのか。

それは、黒兎に理由があった。

正確には、黒兎の脚、である。

表現しにくいが、ぶっちゃけ、黒兎は脚が速い。

地に影さえ落とさぬ、というほどだ。

……主が違っていれば、絶影、と呼ばれていたかもしれない。

まあ、それはさておいて。

お分かりだろうか。

牡丹は、生粋のスピード狂だったのである。

とりあえず行軍中は常に、黒兎を走らせ、ヒヤッハー言っていた。

……勿論、牡丹はモヒカンでも、拳王配下でもないのだが。

「……西涼太守馬騰が、一万の兵と共に参上しました、と、お伝え下さい」

「はっ。中央の大天幕に於いて、軍議が行われております。準備が整い次第、参上せよ、とのことですよ」

「……わかりました。すぐに行きます」

金ぴかの鎧に身を包んだ兵を袁紹軍の兵だと判断し、着いたこと報告する山百合。

これでいいのか、と思われるかも知れない。

この報告事態、本当は牡丹本人がやるべきことなのだ。

だが、山百合にとって、牡丹の尻拭いをする事は慣れっことであり、むしろそれが自分の仕事だと思っているので、なんの気苦労も感じたりしない。

まさに主従の鏡である。

「……翠様と蒲公英ちゃんは、兵たちに天幕を張るよう指示を」

「了解!」「はいっ!」

山百合の指示で、翠と蒲公英も動き出す。

「……さて、牡丹様。軍議にいきますよ」

「えー、やだ」

「……ハア」

またこの人は……、といった様子で山百合は頭を抱える。

「山百合はそうやってため息を吐くけど、どーせ皆が腹の探り合いするの、目に見えてるんだから。そんなところ行きたくないわ」

「……………オホン。さて、軍議にいきますよ」

「あれ、何で流したかな？」

「……………全て引用はいけないと思いますよ」

「何で知ってるのよ」

「……………それは牡丹様にも言えることかと」

先の台詞、目聡い人ならすぐにわかっただろう。

呉ルートシ水関攻略前、軍議に行くことに駄々を捏ねた孫策の台詞、まんまである。

……………何故二人は知っていたのだろうか。

「わかったわよ。行けばいいんでしょ、行けば！」

多少の不満からか、少々言葉に棘があるが、決して怒ってはいない。むしろ、今は笑っていた。

……………いいことを思い付いた、と言わんばかりの満面の笑みで。

「……来たわね」

「そのようです」

「……………」

天幕内では、曹操と夏侯淵、及び周瑜は、外からやって来る牡丹と山百合の二人の存在を感じとっていた。

……流石は名の残る名将といったところである。

曹操とその側近の夏侯淵とのやりとりと共に、ぱさりと入り口が開かれる。

「…… つ!?」「」「」

ここで、曹操と夏侯淵、それに、周瑜は驚きを隠せなかった。何故なら入ってきたのが山百合一人だけだったからであり、感じていたもう一人の存在が消えたからである。

たったの一動作。

天幕内に入ってくる、という一動作をする間に、一人いなくなっていたのだ。

驚かない訳がなかった。

「山百合、なにしてんの？ 早く来なさい」

「…… つ!?」

今度は、牡丹を除く、天幕内の全ての人が驚きを露にする。先の三人はどうやって、と。残りはいつの間に、と。

強者を見分け、強さを感じるに少なからず自信があった三人。だが、天幕内に入るときにいなくなったはずの存在が、いつの間にか対面に座っている。

これがどういうことか、わかるだろうか

牡丹は、三人の認識を掻い潜り、さらには、天幕内の全員にも視認させなかった、ということになるのだ。

「……ぼーたーんーさーまー」

恨みがましく睨む山百合。

当然のことであろう。

「いいじゃない 少しぐらい面白いことしたって、ねえ」

そんな視線をものともせず、少しばかり本音を吐く牡丹。

牡丹にとって、この戦いは実にどうでもよく、つまらないものなのである。

だからこそ、こういった面白い事に関する小さな積み重ねをしないと、牡丹は充たされないので。

「……良くありません」

「ちえっ、ケチー」

「……ケチ臭くした覚えはありませんが」

「はいはい、わかりましたよーだ。私が悪うございました」

一応謝る牡丹。

反省の色は全く見えないが。

「とっ、とりあえず、貴女は誰ですの？」

袁紹が問う。

すると、天幕内の諸侯の目が一齐に一人に集まる。

……無論、袁紹に、である。

奇しくも馬騰、という存在は、陽のせい、というのもあるが  
知らない方がおかしい、と言える人物なのだ。

「……あ、そういうば、袁紹ちゃんとは初顔合わせだったわね」

(なんだかんだ、会ったこと無かったんだっけ)

牡丹はそう心で続けて呟く。

「まあ、挨拶もかねて、と。オホン……西涼太守の馬騰でーっす」

キラッ、と言わんばかりに星を出しながら右目を瞑り、そこに右手  
で作ったピースを翳しながら挨拶をする牡丹。

最早挨拶ですらなく、さらには、アラフォーババアがそれをやって  
いるのである。

はっきりに言って痛かった。

『……………』

天幕内の諸侯らは、一様に押し黙る。

満場一致のドン引きだった。

(あ、これは、不味った)

その時の牡丹の率直な心境である。

(……山百合もやりなさい)

(……はい?)

(いいから、私と同じことをやりなさい)

(……嫌です。恥ずかし過ぎて死ねます)

(ほら、一種の荒療治だと思って、ね? こんなこと出来ないようじゃ )

(……うう。わかりました)

近くに来ていた山百合とひそひそと話し、同じことをやるよう強要する牡丹。

半分は、自分のように自爆させようと考えていたりする。

……上司として最低である。

「……西涼太守、馬騰が剣、ほほほ……鳳、徳です。……っ……!」

命令通り、牡丹と同じ動きをする山百合。

星は出せなかったものの、恥ずかしさで顔を赤らめる、というオプシヨンつきである。

『……………』

天幕内の諸侯らは、また一様に押し黙る。  
満場一致の鼻血だった。

顕著な例を見ていくと……。

曹操は、己の手をわきわきさせていた。

勿論、鼻血は垂れている。

「（何あの可愛い生物……。ああ！欲しい！そして、この手で愛でたいわっ！）」

そう、心の中で叫ぶ曹操。

百合が故に、食指が疼いていたのである。

周瑜は呆然としていた。

勿論、鼻血は垂れている。

「（なんだあれは……。かつ、可愛い過ぎる！あれは本当に山百合姉様なのか！？）」

こちらもまた、心の中で叫ぶ。

知り合いが故に、信じられなかった。

「……皆、死ねばいいのに」

少し危ない発言をする牡丹。

自爆しろ、という半分の気持ちから出た言葉だ。

……もう半分は、可愛い山百合が見たい、という純粋な願望であったのであるが。

「……穴があつたら入りたい」

絶賛うなだれ中の山百合。

限定的な場面に於いては、極度に恥ずかしがる山百合だが、別に人前で話したりすることが恥ずかしい訳ではない。

今回の場面は、やる動作が恥ずかし過ぎたのである。

……極端に恥ずかしがる場面は、ほとんど陽や牡丹が絡んでいたりする。

このような牡丹と山百合の自己紹介(？)が無事(？)に終わって半刻は経ったが、軍議は全く進んでいない。

総大将が一向に決まらないのである。

……明らかにやりたそうな人はいるのにも関わらず、だ。

(つまんねえ。……寝ていい?)

(……素が出てますよ)

(まあ、こんだけつまんねえとな……イライラもするさ)

(……否定は出来ません)  
(実際俺にとって、軍議なんてどーでもいいことだし。だから寝るわ)

(……分かりました。重要なことがあれば起こします)

(あんがと。じゃ、おやすみ)

声をひそめ、話す二人。

話している間、一人は椅子に腰掛け、腕と脚を組み据わった目をし  
ており、もう一人はその側に佇んでいる。  
元から軍議に必要性を見出していなかった腰掛けている一人が、眠  
りにつく。

顔は俯き気味あるため、目にかかる髪がその者の表情を隠しており、  
これで寝ているとは気付きにくいだろう。

(……これは、そうとう黒兎君に頑張ってもらわないといけません  
ね)

側に仕えるもう一人は、そう心でこちた。

そしてさらに半刻の時が経つ。

息抜きや休息を兼ねて色々な人が出たり入ったりしたが、ここで、  
赤髪ポニー、またの名を、ミス普通が天幕を出た。

原作を知っていたら分かるだろう。

そう、軍議が進む合図である。

何刻もかかった軍議は、公孫贄に連れられてやってきた、天の御遣  
いこと一刀と劉備の乱入によって、終幕を迎えた。

本当は、総大将さえ決まってしまうえばすぐに軍議は終わっていたの  
である。

しかしどの陣営も、お前が総大将に推薦したんだから、お前一番槍  
になれ、みたいな被害は被りたくないのだ。

だからこそ、誰もが発言することなく無意に時間を浪費していたところをやってきた二人には、表には出さないものの、諸手を挙げて喜んだ。

「……牡丹様、軍議、終わりましたよ？」

山百合は半刻前に寝た牡丹の肩を叩く。

「ん、わかってるわ。にしても、中々面白い子ね、天の御遣い君って」

柔らかい笑みを浮かべて答える牡丹。

「……起きていらしたのですか？」

「まあねー。……特別な気みたいなのを感じたから、面白そーだなーって思ってたね」

「……その、面白さ至上主義をどうにかしてください」

牡丹の発言に、呆れ口調で答える山百合。

……内心は、牡丹がキレてなくてほっとしていたりする。

「御遣い君、結構やる子なんじゃない？」

「……確かに、最善を尽くしたと言えましょう」

天幕を出ながら、二人は話す。

先の理由より、小規模軍勢にも関わらず先陣を任された二人。

一刀は、その際どい状況下で、兵と武具の借用を求めた。山百合の言う通り、不幸中の幸いは得たのである。

「んー、まあ、それもそうだけどね。私が言いたいののはね……魅力よ。人を惹き付ける魅力」

劉備ちゃんも持ってたけどね。

牡丹はそう続ける。

「……私には、陽君ほどの魅力は感じられませんでしたか？」

「あら？ あらあらあら？」

ニヤニヤニヨニヨ。

牡丹は口に手をあて、からかうように笑う。

「……~~~~~っ!!!! 忘れて下さいっ!!」

「無理よ うふふふっ」

顔を真っ赤に染めて懇願する山百合を見て、牡丹思う。

いいネタをゲットしたと。

同時に、強敵が現れたと。

「ん？ あれは……」

ひとしきり山百合をからかった後、天幕から少し歩いたところに佇む者に、牡丹は気付く。

「お久しぶりでございます」

「本当ね。どれくらいぶりかしら」

「……5年程かと」

静かに頭を垂れる者に、明るく牡丹は声をかける。

山百合は少し顔を綻ばせながら、牡丹に補足をいれる。

「これは公的な場か、私的な場……どちらかしら？」

「……どちらかと言えば、私用です」

「そ。じゃあ、……久しぶりね、冥琳ちゃん　ずいぶん大きくなっただわねえ」

背も、胸も、と付け足す牡丹。

……完全にオツサンである。

その横では、冥琳、すなわち周瑜の胸を見ては下を向いて自分のを見る、という動作を何度もしている。

「（これで満足させてあげられるでしょうか？）」

金城にお留守番している一人が聞いたなら、思わず殺意が芽生えそうなことを考えていた。

……自身が大きい方だということを自覚していない山百合だった。

「心配しなくても、山百合のでも十分いけるわよ。……イけるかしらね」

「……心を読まないで下さい」

牡丹の言葉に答える山百合の声は無機質だが、顔はほんのり赤らんでおり、微妙に隠せていなかった。

「無理　そんなことより、山百合も挨拶しないと　5年ぶりなんでしょう？」

「……そうでした」

牡丹は話をすり替えるプロフェッショナルだった。

無論、この無駄なスキルによって被害を被るのは陽であるが。

「……お久しぶりです、冥琳ちゃん。元気にしてましたか？」

「文台様がお亡くなりになられてからは多忙を極めておりましたが、ほどほどには。……雪蓮の元気さには困り果てていますが」

山百合は、滅多に見せることのない柔らかな笑みを浮かべる。  
答える周瑜は苦笑いである。

「……振り回される冥琳ちゃんの姿が目には浮かびますね」

山百合も流石に苦笑いを浮かべる。  
孫策の人柄を知っていれば、想像することなど容易なことなのである。

「あれを御せるのは、今や山百合姉様だけでしょう」

「……まあ、手慣れてますからね」

呆れと若干の諦めを含んだ周瑜の言葉に答えつつ、山百合はちらりと牡丹を見る。

「ん？ なに？」

「……いえ、なんでもありません」

主であるこの人も、相当な自由人なのである。

「……ですが、私に頼ってもらっても困ります。雪蓮ちゃんは、貴女の友で、恋人で、主なのですから」

山百合の心の内では、二人には御す御されるの関係になって欲しくないと思っっていたりする。

山百合自身が述べたように、主従でありつつも、断金と謳われる程に深い友情と愛情がそこにはあるのだから。

「……勿論です！」

周瑜の頼もしげな首肯に、山百合はもう一度笑んで見せるのだった。

翠の天幕にて、二つの影がある。

「すう〜いい〜……まだ怒ってるのお〜？」

「……ふんっ」

翠の隣に腰掛け、若干甘ったるい声を出しながら首に腕を回し、抱きつく牡丹。

それに対し、翠はツンとした態度をとる。

翠は、ツンデレという属性を持ちあわせていない。

つまり、本当に怒っていた。

「そんなに洛陽の民をないがしろにするような発言が気に食わなかった？」

怒らせた張本人である牡丹は、困ったように笑む。

しかし、どこか嬉しそうな笑みでもあった。

「当たり前だろうっ！？ 罪のない民が苦しめられてるってのに、それをっ」

思わず握る手に力を込める翠。

流石は未来の、いや、正史でも名を馳せた五虎将の一人、と言っべきだろうか。

義に篤かった。

「……翠は良い子ねえ」

翠を更に引き寄せ、頬擦りをする牡丹。

その顔には、慈しむような笑みを浮かべている。

「わっぷ、やめろよ母上！」

離れようとする翠だが、生憎と牡丹は甘くなかった。逃がさないように、がちりホールドしていたのである。……無理矢理であれば、引き剥がすことも出来なくはない強さではあるが。

「だあくめ！ もう、はなさないわ……つぶ、つぶつぶ」

「ちよつ、母上……？」

いきなりのキャラチェンジ 黒い笑みをする牡丹 にとじろぐ  
翠。

牡丹の今の気分は、ヤンデレだった。

「と、まあ、冗談はここまでとして」

「ほつ、本当に？」

「そんなところで嘘ついて、意味あると思う？」

いつも通りに、ニツ、と笑む牡丹の表情を見て、安堵のため息を吐く翠。

「確かに、関係ない、は言い過ぎたと思うわ。でもね、本心でもあるの。……私には、西涼の皆と、家族と、友達以外は別にどうだっていい。……そう思えるぐらい、皆が大切なのよ」

まあ、心の狭い人間、とも言えるけどね。

と、牡丹は真面目な顔でそう紡ぐ。

そんな母の顔を横目で見て、翠は絶句する。

曰く、こんな真面目な母上を見たことない、と。

「こんな狭量の私の下で、義に篤い娘に成長してくれて、私は嬉しいわ」

「母上……」

娘の成長を素直に喜ぶ牡丹。

愛を注いできた結果といえるものだから、当然であろう。

翠が母の愛を知ること、金城からここに来るまでのギクシャクした雰囲気はどこかにいつていた。

今回の翠のように、感情的に昂ぶった状態では、話の真意を汲み取るのは難しい。

ならば、感情的になった事とは全く違う事柄に持っていき、一度零に戻す。

そう、これこそが牡丹の話術であり、陽の話術である。

「ところで翠、天の御遣い君見た？」

「いんや、見てないけど」

牡丹の問いに、翠は素直に首を振る。

ちなみに、未だ牡丹は抱きついたままである。

「そ。なら、一度見ておくことをオススメするわ」

「……なんでだよ？」

出来れば会っておきたいな、ぐらいには思っていただけに、牡丹の

言葉を少しだけ訝しむ翠。

「面白くなりさ　って、ちょっと翠、怒らないでよあ。まだ続きがあるんだから」

ふざけた理由に翠は怒って立ち上がるうとするが、涙目　勿論、嘘泣きだが　の牡丹に、仕方なく抑える。

……牡丹にとって、この程度表情を変化させることはお手の物なのである。

「確かにそれが一番だけど、人柄とか見ておくのも悪くないかなって。それに、性格や陣営の雰囲気、信条とか、諸々が翠に合ってると思うのよね」

ま、半分は勘だけど。  
そう牡丹は評価する。

「（それに、まだ間に合う。……陽に翠をくれてやる気なぞ、毛頭ないわ！）」

心の中で、そう親バカなことを思っているのは秘密である。

「うー……ん、よくわかんねえけど、とりあえず見とけ、ってことだな」

翠は片目を瞑り、珍しく思案顔をし、答えを出す。

「うん　これにて、私からのお話はおしまい。さてさて、暇だし、昼寝と洒落込まない？」

「……昼寝？ てつきり酒を飲もつ、って言うと思ったんだけど」

「翠が普段、どんな目で私を見ているか、よくわかったわ……」

牡丹は、落胆と怒りと非難を交えた目で翠を睨む。

「いや、その、悪かった？」

「何故に疑問形なのよっ！」

牡丹は天幕内の簡易的な寝床に、翠を押し倒す。  
そして、ウガッー、と言わんばかりに襲いかかっ

「……何をしてるんですか」

らなかつた。

正確には、かかれなかつた。

何故なら偶然にも、遮った声の主、すなわち山百合が天幕に入つて来たからである。

「なあ〜んにもしてないわよ、ナニも」

牡丹は、マウントポジションからおりながら答える。

「……子に手を出す程の外道ではないと、信じておりましたが……」

「ちよつとお！ いくら私だって、そこまで落ちぶれちゃあいないわよ！ ……多分」

「（今、多分って言ったよな）」

疑わしげな目線を送る山百合に、苦笑い気味に怒る牡丹。

最後は言葉　翠には聞こえていたようだ　は勿論小声であり、  
なんとも締まらない一言。

可能性を示唆しているような一言でもあった。

……山百合は山百合で、”娘”や”実子”ではなく”子”と使うと  
ころ、何気に強かである。

「……まあいいです。それより、今しがた袁家の方から伝令があり  
まして」

「何々？　つまらなかったら、翠を愛でるわよ？」

「なんでだよ！」

「……どうぞ勝手に　「うおい！　止めるよ！」　さて、内  
容ですが」

牡丹の後ろにいる翠からツッコミが入るが、完全無視である。

……何気に酷い。

「……各軍の配置が決まったようです。先鋒は軍議の通り劉備軍、  
その後方に袁紹軍、そのまた後ろに公孫軍とその他です。右翼前方  
に孫策軍、後方に袁術軍、左翼前方は曹操軍で、後方は私たち西涼  
軍、だそうです」

「ええっ！　遠っ！　せつかく夜襲を仕掛けようと思ったのに……」

「はあ？」「……はい？」

翠と山百合共々、疑問符を浮かべる。

先の牡丹の言葉にそう反応をするのは、別段普通のことだ。

今回は主に攻城戦であり、西涼軍は主に騎馬隊で構成されている。はつきり言って、夜襲など不可能なのである。それぐらい、翠にでも分かる。

「ああ、夜襲って別に戦の話じゃないわ。ちょっと個人的に、ね」

大体、シ水関なんて天の御遣い君に任せとけば終わるでしょ。と、冗談に聞こえないトーンで牡丹はそう続ける。

「……では、どこに仕掛けるのです？」

「ひっみつっー」

「母上……。流石にキツイよ」

哀愁の漂う目で、翠は牡丹を見つめる。

……軍議の時に、何故懲りなかったのだろうか。

「……まあ、とりあえず山百合も一緒に、ってことだけ覚えておいて頂戴」

「……分かりました」

「うん。……それじゃあ、移動しよっかー」

「……はっ!」「了解!」

牡丹の言葉に、二人は元気よく返事をするのだった。

「……………ちよつと、ええっ！ 今日、たんぼぼの出番無し!？」

メインヒロインなのにハブられる、という事態が起こったが、西涼勢は今日も平和である。

「ええっ！ 俺の出番無し!？」

「ボクも無いようね」

「……………僕はもう慣れたぞ」

「……………」

主人公なのに丸々一話出てこない、という不測な事態が起こったが、お留守番勢も結構平和である。

……………若干一名不憫な方がいらっしやるが、スルーで。

陽は語る。

「この、病み上がりだからと貰った休暇は実に充実したよ。だって、  
母さんがいなかったものっ！」  
と

第二十九話（後書き）

信長協奏曲、面白い！

転生モノやらタイムスリップモノが好きなんだなー、とつくづく思う作者です。

どうでもいいんですけどねー。

### 第三十話（前書き）

口調やらがわからなくなってきた。

大分やってないからな！。

## 第三十話

「……今回こそは、ボクたちの出番があるといいね」

「そうだね、プロテインだね」

「……ぷろ、て、いん？ わかんないけど、多分古い気がするよ」

「いや、ちょっとしたマイ（作者）ブームで」

「……さつきから、意味のわからない言葉を……。やめた方がいいんじゃない？」

「そうだね、プロト　「黙れ！」　んだよ、振ったのは瑪瑙じゃねーか」

「……そうだね、ぷろていんだね」

「あ、おまつ、パクんじゃねえ！　大体、会話の四往復だけで三回も使うとかくどすぎるだろ」

「そうだね、ぷろて　「もういいわ！」　ふん、元はといえばアンタが悪いんだからねっ！」

「ふむ。……こんな他愛のない会話にすら、俺は混ぜて貰えぬのだな」

「「……サーセンしたっ！」」

……不憫だ。

「薊がすつごーく可哀想な気がするんだけど、始めさせて貰ってもいいかしらね？」

「……まあ、よろしいかと」

何処からか、電波を受け取った牡丹が、華麗にスルーすることにしたようだ。

「さてさて、夜になった訳だけど？」

「……よもや、夜襲に酒を持って行く等とは」

山百合がそう言うのも仕方がないだろう。

武器を持たずして、しかも、用意したのは俗に言う良い酒ばかり。二人は、到底夜襲に向かうとは思えぬ格好をしていたのだ。

「まあまあ。直ぐに分かるから、ね」

「……と、いいですか。私達、反対側に来ているのですが」

山百合がボソリ、と呟く。

若干、二人の話が噛み合っていないようで、ちょっとだけかすっている。

今現在 山百合が言ったように 西涼勢と曹操軍が陣を敷く左翼の真反対、右翼に来ていた。直ぐに分かる、と連呼する牡丹に付いていったところ、自分たちの陣から反対側の場所に着いていたのである。

「ほら、着いた」

「……成程、そういうことでしたか」

陣を見て、山百合は理解した。

「会いたかったでしょ？」

「……それは、まあ、はい」

旧友との再会。

山百合がほんの少しだけ望んでいたこと。

……ほんの少し、と言っても、山百合が自ら望むことは少ないので、常人の強く望む事に等しいのだが。

その山百合の心を読みきった牡丹は、計らっていたのである。

「行つてきなさい 私も私で用があるから、ね」

「……ありがとうございます」

柔らかい笑みで一礼し、歩いて行く山百合。  
旧友の在る天幕へと向かうのだろう。

その少しだけ嬉しそうな背を見て、牡丹は呟く。

「まったく、山百合は変わらないわねえ」

山百合が少女だったの頃から見てきた彼女の笑顔。

歳は繰りつてくせに、それだけは寸分も変わらない。

そんなことを思いつつ、牡丹は牡丹の用を果たしに向かった。

暗き闇夜の空の下で、金色に輝く欠けのない月。

このような佳き日に酒を飲まない酒豪家はいない。

しかして、呉の酒豪家、悪く言えば飲んだくれの黄蓋もまた、月を肴に、酒を飲んでいた。

「……ほんに、良い月じゃのう」

思わず感嘆の声を上げてしまうほどに美しい月。

「……だ〜れだっ!」

そんな月が雲に隠されてしまったとき、黄蓋にとって思わぬ来訪者が現れる。

黄蓋は後ろから両目を手で覆われたと思えば、先のふざけたような

言葉。

この際、口調はどつでもよい。

重要なのは、呉の宿将とまで呼ばれる黄蓋の後ろを、いとも簡単にとつてみせたことである。

いくら酒を飲んでいるからと言っても、後ろに気を配っていない訳ではない。

宿将と言わしめるレベルならばもつての他。

だが、とられた。

「……牡丹じゃろ」

そこまで考えて、黄蓋は答えた。

「どくして分かったのよ。つまんないじゃない」

黄蓋の目を覆っていた手を外しながら、むくれたような声で答える者。

黄蓋の言う通り、牡丹だった。

「僕の知る限り、楽々と僕の後ろをとれる者は二人しかおらん」

一人はもう、逝ってしまわれたのがの。

ボソリと黄蓋は続ける。

「……気を消し過ぎたのが仇になった訳ね」

最後の言葉は聞こえない振りをして、牡丹は肩をすくめた。

人は無意識のうち自らの氣を発し、さらには他人の氣を感じる。自分の氣が高ければ、他人の氣を敏感に感ずることができ、相手の氣が圧倒的であれば、自分の氣が低くても感じられる。

…… 昏間の軍議に於いて、牡丹と山百合が入ってくる、と曹操、夏侯淵及び周瑜が氣付けたのもこの為である。

では、牡丹はどうやって黄蓋の背後に周りこんだのか。

簡単だ。

牡丹の言う通り、自ら発する氣を抑えたのである。

……この行為は言うほど簡単ではないが。

突然だが黄蓋は、氣の扱いが上手い。

故に、僅かな氣の漏れでさえ存在に氣付かれ、見つかってしまう。

だから、黄蓋にイタズラがしたかった牡丹は、氣付かない程に氣を抑えた。

だが、そのような芸当が出来るのは、黄蓋の知る限りでは、今は牡丹一人だけ。

だからこそ、誰が目を覆っていたのかが分かられてしまった。

そんな訳で、氣を抑える、ということが、今回は仇となったのである。

言うなれば、氣≡氣配だ。

氣を消せば、氣配は消せる。

存在を隠すことと同義なことが可能なのだ。

……そう、昏間の軍議の際、牡丹が皆に氣付かれずに席に着けたのも、この為だった。

「毎度毎度、後ろをとるのを止めてくれぬか？ 武人としての誇り

が傷付いてかなわん」

「無理　むしろ、気付けるように精進したらいいんじゃない？」

肩を落としながら、牡丹に訴える黄蓋。

が、即答で否定し、さらに難題を出す牡丹。

「ああ言えば、こう言いおって……。まあ、よい。で、何用じゃ、儂は暇ではないぞ？」

……酒を飲むのに忙しいだけであるが。

「祭と久しぶりに飲もうかな」と思ったけど、暇じゃないのね。わざわざ西涼から良い酒持ってきたのになー」

あーあ、残念だなー、とわざとらしい声を上げる牡丹。

「（良い酒……）うむ、そんなに急ぐことも無かったの。共に飲むわけではないか」

良い酒、という言葉に、いとも簡単に釣られる黄蓋。

……なんて現金な人なのだろうか。

それほどまでに、西涼から持ってきた良い酒、というものに魅力があるとも言えた。

「暇じゃないんでしょー？　迷惑とかかけらんないから帰るねー」

「いつ、いや、待て　「待て？」　ではなかった、待って下さ

れ！　一緒に飲まさせて下され！」

後ろを向いて、帰ろうとする牡丹を引き留める黄蓋。  
もう、性格が少し変わってしまったほどそれが飲みたかった。

「しょうがないわね」

いかにも言葉通りのような顔をする牡丹。

……内心、滅茶苦茶笑っているのだが。

「うむ、美味しい！」

「ある、あるこーる発酵、だったかな？ とりあえず、それで作ったお酒なんだって」

黄蓋の感嘆の言葉に、少しだけ誇らしげに補足を入れる牡丹。

「ふうむ、聞いたこともない製法じゃな」

「ま、正直私にも分からないわ。陽が勝手にやって、勝手に持ってきたものだしね」

ホント、やる事なす事突拍子のないことばかりなのよね。

と、牡丹は呆れ口調で話すが、満面の笑みを浮かべている。

牡丹にとって、思わず笑顔になってしまう程に、陽の予想外の行動が愉快極まりないのだ。

「陽？ 誰じゃ？」

知らぬ名に反応する黄蓋。

当然と言えば当然であろう。

「ああ、忘れてた。私の息子の馬白のことよ」

「はて、息子……馬白。……馬孝雄。もしや、天狼のことか？」

「は？ 天狼って？」

「……は？」

聞き返す牡丹に、呆気にとられる黄蓋。

「……まさか、自分の息子の二つ名を知らぬ訳ではあるまいな？」

「なにそれ？ 陽に二つ名なんて大仰なものついてるわけー？」

心底あり得ない、と言わんばかりに □調は疑問形なのだが

否定する牡丹。

そんな様子に、肩をすくめ、呆れ果てる黄蓋。

自分の部下、ひいては息子の二つ名を知らないのだ。

呆れない理由がなかった。

……ただ、このこと 息子の風評を知らない牡丹に呆れたこと

が、自らの主である孫策に対しても呆れていることになる、ということを、黄蓋は知るよしもない。

（孫策には”江東の小霸王”という二つ名があったのだが、本人は、周瑜に教えて貰うまで知らなかったのである）

「”西涼の天狼”じゃ！ 儂でも知っておるのに、何故お主が知らんのだ！？」

「へー。それ、陽のことだったのねー」

てか、なんか語呂悪くない？

若干興奮気味の黄蓋の言葉を適当にあしらうだけでなく、紡ぐ言葉も気だるげで、あまり興味を示さない牡丹。

「……………変に、堅殿に似ておる」

「最大の誉め言葉ね、それ」

自分が楽しいそう、面白そう、といえるもの、こと。

それ以外には、基本的に興味を示さない。

これが、牡丹の性格である。

先のやりとりでそれを垣間見た黄蓋は、自らの言う堅殿 前呉王  
であり、元の主である孫堅文台 に似ている、と呟いてしまう。

実は、それは仕方のないことなのである。

元々その性格は、孫堅自身の性情なのだ。

更に言えば、似ている、のではなく、似せている。

つまり、牡丹が孫堅の性情に影響を受けた、取り込んだ 悪く言

えば、真似した、パクった が、一番正しい。

黄蓋はそれを知らぬ故に似ている、と言い、牡丹は上手く似せてい  
られていることを喜んだのである。

「にしても、狼、ね」

「……………」

何の因縁か、はたまた西涼ということ、あやかっただのか。

そう思いはするが、陰りのある牡丹の表情に、黄蓋は口に出すこと

を止める。

それも一つの、友としての優しさである。

「……ふ。まあいいわ」

「……そうか」

「……ってというか、そんなことはどうでもよくてね」

時は少し遡り……。

山百合は、ある天幕の前に立っていた。

どうしようかと立ち尽くしている、と言っている。

山百合の主である牡丹は、夜襲をしに来た、と言っていた。

主に従うならば、このまま　不意討ちの様に　天幕内に押し入るのがベストだろう。

しかし、山百合も武人。

不意討ちはあまり好きでない。

やらないこともないが、出来るだけやりたくない。

やはり、　位置的に、すでに深く侵入していることになるだが

　呉の兵に伝えてもらうべきか。

そんな今更なことをずっと考えていた。

「誰だ！」

……後ろに人が接近していることにすら気付かぬほどに。刺すような鋭い声に、ビクリ、と肩を震わす山百合。おそろおそろ後ろを振り向くと知己の者がいた。

「……冥琳ちゃん」

助かった、と呟くほどほっとする山百合。これで夜襲をしなくても済む、と。

「何も助かってはいないぞ」

「……え？」

答える暇もなく、周瑜愛用の武器 白虎九尾 に縛られる山百合。完全に油断していたので、簡単に捕まってしまっていた。

「我が主、孫策の暗殺を試みた罪は重いぞ」

何故か笑んでいる周瑜に、山百合は首を傾げた。

「あら冥琳、どうかしたの？ お仕事ならちゃんとやってるわよ」  
言葉を続けるにつれて、どんどんトーンが下がっていく。

孫策もまた、酒をよく飲む。  
故に、金色に輝く月を着に、酒が飲みたかった。  
なのに、まさかの仕事。

テンションが下がらない訳もなく、声のトーンが下がるのも必然だった。

「先ほど、貴女を狙った暗殺者がいてな。やはり、近衛をつけたほうが良い」

「え、嘘？」

「本当だ。……入れ」

周瑜の言葉と共に、縛られた者が入ってくる。

孫策の疑うような目が、みるみるうちに驚愕に変わった。

「……えっ!？」

「……5年ぶりであると言つのに、このような対面になるつとは、姉貴分として顔向け出来ませんね」

ばつの悪そうに俯きながら入ってくる、姉と慕っていた山百合には、驚くしかなかった。

「……勿論、暗殺などするつもりはありませんでしたよ。ちょっとした「山百合お姉ちゃん!」 おおっと」

いきなり抱き付いてくる孫策に驚きながらも、両手が腕ごと縛られているため 使えないので、体重移動と足さばきを駆使して受けきる山百合。

流星は歴戦の将、と言つべきだろうか。

……才能を無駄に使っている、とも言えるのだが。

「久しぶり! ずーっと会いたかったんだから!」

「……ごめんなさい。私も会いたかったのですが、二人の成長の為に心を鬼にしました」

それに、具体的なきつかけ、というものもありませんでしたから。と、柔らかく笑んで続ける山百合。

言葉にした通り、本当はもっと早くに会いたかった。

孫策、周瑜、山百合が最後に会ったのは5年前。

それから半年、孫家は墮ちた。

前呉王であり、孫策の母である孫堅が亡くなったからだ。

それにより、孫家についていた豪族たちは次第に離れてしまった。

だがそれでも、孫家を守っていかなければ、支えていかねばならない。

さらに、盗られたものは取り返さねばなるまい。

その筆頭に立つのは、孫堅が嫡子、孫策。

それを補佐するのは周瑜。

それぞれ、孫に連なる者達をまとめる重要な立場になった。

他州の将と会っている暇があったら、少しでも復興を進めるべきだ。そう心に刻んむことで会いたい気持ちを抑え、二人は政務に励んだ。

……孫策はほどほどにサボるのだが。

安易な慰め、励ましは逆効果であり、二人の成長の妨げ、かつ無駄な時間になる。

山百合もそう思うことで、抑えていた。

そんな中での再会。

孫策の少々責を問うような言い方になるのも仕方のないことだった。

「……そろそろ解いてくれませんか？」

「うん、わかった」

「いや、待て！」

「……信用出来ませんか？」

「そういう訳ではっ！ただ、建前として……」

「残念。もう解いちゃった」

「雪蓮！……全く、お前というやつは！」

「はいはい、久しぶりに三人揃った時なんだからそんなカリカリしない」

「誰が怒らせていると思っている！」

「……ふふっ」

5年程前と寸分違わぬ二人の言い合いに、最後に会ったのが昨日であるかの様に思えてくる山百合。

情勢や立場が変わっていく中で、こういったやりとりは変わらない。何とも言えない可笑しさに、自然と笑みが溢れた。

「……雪蓮ちゃん」

「ん、何？」

「……そんなに真琳ちゃんをいじめないであげて下さい」

「え、山百合お姉ちゃんは冥琳に付くわけ」

「……いいえ。私は中立です」

元々、二人の敵になるつもりはありませんから。

そう続ける山百合。

どちらに与する訳でもなく、かといって、介入しない訳でもない。基本的に、山百合はどちらかの味方ではなく、どちら共の味方なのである。

「……私は至極真つ当、当然のことを話しますね」

「なつ、何？」

山百合の放つ一語一句に、見えないプレッシャーを感じ、たじろぐ孫策。

……周瑜は、いいぞもつとやれ状態である。

「……貴女は王なのですよ？ 親衛隊がないとはどういうことでしょうか？」

「あ、あははは？」

「……ですから私が暗殺未遂の罪を被る事になってしまったのですよ？」

孫策には渴いた笑いしか浮かんでこない。

このあとは、ずっと山百合のターンだった。

……周瑜がわざわざ山百合を捕らえたのは、親衛隊も付けない孫策

を叱って貰う為だったのである。

この後、普段は二人以上の兵、もしくは将の一人が付く、というこ  
とで合意したらしい。

その時の孫策は、心なしかげっそりしていたという。

場所は戻り……。

「なんじゃとっ！？ それは真かつ！？」

「ええ、ホント。そんなことに嘔吐いてどっつするのよ」

酷く狼狽する黄蓋。

対する牡丹は酷く冷静だった。

「……いつ頃じゃ」

「私の花は咲くかしらね」

「……そう、か」

「そうよ。……お墓参りに行けないのが悔しいわ」

一陣の秋風が二人の頬を撫でた。

場所はまた戻り、先から半刻後の孫策の天幕にて……。

「はっあゝい　雪蓮ちゃんも元気　うっぷ、ぎぼぢわるい」

「ちよつ、大丈夫ですか？」

「だあーいじょーぶい」

「……いえ、かなり壊れてますよ、牡丹様」

あの後、言葉数は格段に減った為、酒を煽る機会が多くなる。

ここで、陽の作った酒について解説しよう。

酒、と言っても、一概には言えず色々ある（作者は未成年だからそこまで知らないけどね！）。

その中でも、アルコール発酵とは、日本酒を醸造するときの行程の一つだ。

そう、日本酒。

牡丹が（勝手に）持って来たのは、　完全ではないのだが　まさにそれ。

……本当に、どうやって作ったのだろうか。

それはさておいて。

いくら未完成だと言えど、この時代の濁り酒とは訳が違う。

具体的にはアルコールの度数が違う。

いくらこの時代の酒に於いて”ザル”と言えど、陽の作った酒は違

うのだ。

もうお分かりだろう。

牡丹は酔っていた。

……若干壊れてしまっぐらいには。

黄蓋も同じく酔っていたので、孫策の天幕に牡丹を案内してすぐに帰っていった。

……悲痛に染まった今の顔を見せたくない、という気持ちもあるが。

「……牡丹様、帰りますよ」

「うん。……あ、ちょっと待って」

咳払いをして、改めて孫策の方に向き直る牡丹。

その姿勢、態度には、酔っていることを感じさせないほどに、真剣さが滲み出ていた。

「大きくなったわね、雪蓮ちゃん。一瞬、王蓮かと思っちゃったわ」

「あの鬼に見間違われた事を喜ぶべきなのかしら」

思案顔をする孫策。

……本当は嬉しいのだが。

「さあね、そこは自分で決めなさい。そういえば、……狼がね、自由に使って、だって。ま、私的にも存分に使って欲しいと思ってるわ」

何度も助けて貰ったのに、まるで恩返しができやしなかったからね。

と、牡丹は遠い目をしながらそう言う。  
あとね、と続ける。

「敬語はなしね。私も雪蓮ちゃんも互いに一軍の長。立場は等しいんだから、ね」

左目で軽くウィンクする牡丹。

「はい、じゃなかった、……ええ、そうね」

「ん、よろしい」

にっこりと笑う牡丹。

が、次の瞬間には顔を青ざめさせた。

「……もう、げん……かい」

「……牡丹様、ここで出してはなりません！」

「でも、……らめえっ！ れちやううううっ！」

「……頑張つて我慢して下さい、牡丹様！ すみません、こんな形ですが、おいとまさせて頂きます」

「うん、またね、牡丹さん、山百合お姉ちゃん」

その後、牡丹は呉の敷いた陣の外に出た途端、存分に吐いたそうな。

「……嵐みたいだね」

「文台様に、負けず劣らずだ」

天幕に取り残された二人はそう呟いた。

「はあ、また出番なしだよ……」

「まあまあ、落ち込むなって。今回はあたしもないことだし、な？」

「訳が違つよっ！ 前回出番のあった翠お姉さまとはねっ！」

今回の出番なしの現地組は賑やかだった。

……作者的にも、蒲公英が出せないのは悔しかったりする。

てか、メタ発言やめれ。

陽は語。

「って、おいしいいい！ 出てねえんだから、語るとこなんて一個もねえじゃねーか！！」

「うっさいわね！ 耳元で叫ぶな！」

「これが叫ばないでいられますかね!！」

「そうだね、ぷろていんだね」

「こいつ、またやった!？」

「だから、儂も交ぜて、って言ってるでしょっ!！」

「( 薊さん / 母様 ) が壊れたっ!？」

居残り組も、違う意味で賑やかだった。

## 第三十話（後書き）

氣やら氣配やらは、独自解釈です。

本編では、美少女達がつおいのは、無意識に氣を使っているせいだ  
と  
思  
っ  
て  
下  
さ  
い。

第三十一話（前書き）

もう一月か……。

早いなー。

## 第三十一話

「ここは誰？ 私はどこ？」

「……昨夜から引き続き壊れている牡丹様です」

「山百合、ちょっと来なさい」

「……お断りします」

「いらっ！ 待ちなす　うえっぶ」

「……大丈夫ですか？」

「うふふふ　これは、……できちゃったのかしら？」

「……大丈夫ですか？　主に頭の方が」

「ちょっと、辛辣！」

西涼軍と（ついでに）劉備軍の、連合に参加してからの初めての夜が明けた。

しかし、同じ初めての夜、と言っても、西涼軍と劉備軍では圧倒的に違う。

何故なら劉備軍は、ある意味自業自得なのだが 今日から最前線で戦わなくてはならないからだ。

準備に忙しかったことだろう。

それと違って変わって、西涼軍は左翼の後曲。

ぶつちやけ、ほとんどやることはない。

故に、先のような会話が出来る程にのんびりしていた。

……若干二名、陣を抜け出していたりもするが。

「……なあ蒲公英、本当にいいのかな？」

「いいに決まってるじゃん。どうせやることないんだし。それに伯母上様が見とけ、って言ってたんでしょ？」

無問題だよ、翠お姉さま。

と、そう諭すは、妹分である蒲公英。

一緒にいる姉貴分の翠が諭される、という立場はどうなの、とは思ってはいけない。

……単に、翠より蒲公英がアクティブなだけなのだ。

「あつ、あれかな？」

「ん、どれだ？」

いち早く気付いた蒲公英。

その声に反応した翠は、辺りを見回す。

……先程の、勝手に陣を出ても良かったのか、という迷いはいつの間にか消えていたりする。

「ほら、あそこ」

「へ、ホントに輝いてるんだな」

蒲公英の指差す方を見て、感嘆の声を上げる翠。

噂などでは聞いたことはあるものの、とても信じられなかっただけに、感動は小さくなかったのだ。

「どうする、翠お姉さま？ もっと近付いてみる？」

「これ以上近付いたら絶対バレ 聞いとして先に行くなよ！」

「~~~~~っ！！」

先走った蒲公英に小走りで近付き、げんこつを落とす翠。

声を出させないように加減はしたようだが、痛いものは痛い。

それでも、蒲公英は涙目にながらも、前に進んだ。

どうやら、痛みより好奇心が勝ったようだ。

因みに。

今現在、二人が行っているのは、簡易的な隠密だ。

言い換えれば、どちらかといえば、こちらが正確だが 覗きである。

やることなく退屈だった蒲公英は、昨日牡丹が翠に言った、天の御遣いを見とけ、というのを聞きつけ 翠本人に聞いたのだが それを決行したのである。

流石は牡丹の姪、と言うべきだろうか。凄まじい行動力を持ち併せていたのだった。

「……だ」

「え？ なんか言った？」

後ろで翠がぼそり、と呟いた言葉を聞き取れず、聞き直す蒲公英。……さつきから常に、蒲公英が前を行き、後ろから翠が付いて来ている状態である。

「……無理だ」

「どうしてっ！ やつとここまで来た……の、に」

翠の諦めを含んだ言葉に、後ろを振り向いて抗議しようとする蒲公英だったが、翠の顔を見て、声を萎ませていく。

顔を真っ赤にしている翠の様子に純粋に驚き、声が出せなくなったのである。

が、すぐに切り替えるのが蒲公英である。

「あれ、もしかして翠お姉さま、天の御遣い様に、お・ね・っ？」

「なになつ何言ってた蒲公英！ そんなわけあるか！」

「うんうん、分かってるよ。確かに格好いい人だったもんね」

「だから、違っつて言ってたんだろ！」

「これは伯母上様にも報告しないとね」

口元に手を当て、悪戯っぽく笑う蒲公英。

この後、翠は蒲公英に弄りに弄られ、半泣きになったらしい。

時は進み、2日後。

場所は金城のある執務室にて……。

S i d e  
陽

『報告、シ水関の戦い。』

先鋒、劉備軍の活躍により、関を守る敵軍を引き出す。

引き出された兵たちは、劉備軍が奇謀により、袁紹軍と激突。

その大将である華雄を劉備軍が将、張飛が撃破。

華雄は、命に別状はないものの、傷は深いため、戦線を離脱。

左翼の曹操軍は、袁紹軍の助けに入り、右翼の孫策軍は、関への一番乗りを果たす。

被害は、袁紹軍が中程度で劉備軍が少程度、他の軍はほぼ被害なし。  
現在、虎牢関に向けて行軍中。

追記、翠が天の御遣い君に惚れたらしいわ。 馬騰 寿成』

「うわ、つまんねー」

そんなこと言うなって？

仕方ねーじゃん。

読み通りの展開になっちゃったんだからさあ。

かゆーはすぐに熱くなる、（愛される）バカだから、挑発すりゃあ  
同じく守る霞が強引に押さえつけねえ限り すぐ出てくる。

そう予測してたかんね。

ま、劉備軍が先鋒つてのは流石に予想外デス。

つか、母さんや。

別に追記はいらねえよ。

そりゃあ、娘が男に興味を持ったことが喜ばしいかもしんねえけど  
よ。

……あ、別に俺が男に見られてない、って訳じゃないぜ？

家族の一員で弟、っていう部類に入ってるだけだから。

だから、少なくとも浮わついた関係に発展することは皆無だね、う  
ん。

話が逸れた。

まあ、なんだ。

とりあえず、皆、頑張れ。

俺は応援してるぜ！

……うん、言いたいことはわかるよ。

そんなんでいいのか、だろ？

でもさ、しょうがないんだよ。  
俺にはこれしか出来ないんだからさ。  
なんてったって、動けないんだもの。

日常生活全般は出来るんだが、この戦の話になると、思考以外、何も出来なくなるんだよ。

喋ることも書くことも儘ならないから、指示は出せないし。

まるで、

”この戦には手を出させない”

と、そんなことを感じさせるね、流石にここまでされるぞ。

……だからといって、手をつたない訳はないんだけど。

まあいいさ。

大いに休みを楽しもうジャマイカ。

厨房に移動中の俺。

「おっなつかグーグー煮込んでグー、グツグツ煮込みハンバーグ、グツグツ煮込みハンバーグ」

こういうくだらねえ記憶（なのか？）が頭に流れてくる時にも左目が痛むから、なんとも言えねえ気分だ。

左目が痛むときは、大抵何らかの情報を獲られる。

くだらねえことから、すつげえ為になることまで、数多くな。今回はふざけた歌が思い浮かんだんだが、元はハンバーグだ。ハンバーグ、というものが頭に流れて来た後の影響で、先の歌が浮かんだ訳だ。

めんどくさくて仕方ねえ。

……いや、さっきのは完全にノリで歌っちゃったんだけどさ。

「という訳で、ハンバーグを作ろうと思う」

「……突然何言ってるの？」

目が冷たいっすよ、瑪瑙さん。

ああ、ちなみに今、俺は車椅子に乗ってます。

瑪瑙に押しってもらってます。

……さっきの煮込みハンバーグの歌もバッチリ聞かれています。

「車椅子、作っというて良かったな、ってな」

車軸らへんはかなり苦戦したな、うん。

「……さっき言ってたことと全く違うじゃない」

「ま、そこはとばせよ」

「で、どういう訳でその、半婆具　「ハンバーグな。なんかすつげえ恐えよ」　それを作ろうと？」

……ホントにとばしやがった。

まあ、明確な理由なんてないんですけどねー。

あえて言うならノリ。

けど、そう言ったら怒るもん、この人。

「……旨そうだったからさ。勿論、お前と薊さんのも作ってやんよ」

これは二割、ノリは六割。

あとは、街に出たかったからだよ。

「それは当然でしょ」

そう言いつつも、心なしか嬉しそうなんだがな。

ま、別にいいんだけど。

Side 三人称

食材が足りない、ということでも街に繰り出す、陽とそれが乗る車椅子を押す瑪瑙。

二人が通ろうとするところは、皆道を開けている。

……そう、まるで帝王が通っているかのよう。

今、陽は車椅子に座っている。

右の肘置きに頬杖をつき、長い足を組んでは、左の口角のみを上げるといふ不敵な笑みを浮かべながら、である。

正面から見ると、無駄に威圧感があった。

ここで、汚物は消毒だあ、という声が入れば、もうバツチリかもしれない。

総じてしまつと。

今の陽の座り方を端的に言つてしまえば、サウザーだ。サウザーが行軍するとき、車の後ろに備え付けられている椅子に座るときの体勢だ。

……陽の場合は車椅子なので、あまり格好はついていないが。

何故その座り方 サウザースタイルと呼ぶことにする なのか、と問われたならば、なんとなくサウザーの気分だったから、と陽は答えるだろう。

……ちなみに、車椅子に初めて乗ったときに、これを思い出したらしい。

「おお、これは馬白様。お元気なご様子で何よりじゃ」

「ああ。心配を掛けた」

果敢に話かける年老いた爺。

それに対し、威厳を保つ様に答えてみせる陽。

「おつ、馬白の旦那！ 元気そうじゃねーですか」

「ああ、まあな」

次は八百屋のおっさん。

答える陽は、ちょっとだけ青筋をたてる。

笑みも少し引きつっている。

「あら、馬白さん。また食べにいらしてね」

「……ああ」

そのまた次は、茶屋のお姉さん。  
答える陽は、こめかみを押さえる。  
だいが笑みも引きつる。

「あ、お兄ちゃん！ 今から遊ぼう！」

「テメエ等……、いい加減にしろやゴルア！ 今、近寄り難い雰囲気作ってたじゃねえか！ 最初の方のノリはどうしたんだよおおお！」

子供にまで声をかけられ、遂にキレル陽。

色んな人に声をかけられる、ということとは慕われている、ということのだが、陽の今の気分はサウザー！

簡単に言えば、ははーっ、とやって欲しかったのである。

それなのに、普通に絡まれた。

キレルのも無理はなかった。

……些か理不尽であるが。

その様子に、周りがドッ、と湧いた。

「なんだよクソツタレ！ ノッてくれたっていいじゃねえか！」

いじけたように言葉を発し、涙を拭くような仕草をする陽に、また笑い声が起こる。

「ふっ……はははっ！」

そんな周りの様子につられ、陽も笑ってしまふ。

サウザースタイルを含め、自分が今演じた全てが馬鹿馬鹿しく思え

たから、というのものもあるが、それ以上にこの場の雰囲気は愉快に思えたからであった。

陽が演じ始めた時から　いちいちツツコミを入れているときりがないので　口を出さず、ただ車椅子を押すことだけをしていた瑪瑙は、ここにきて初めて口を開く。  
その言葉には、明らかな呆れが混じっていた。

「アンタ……、なに馬鹿やってんのよ」

「何言ってるんだよ？　俺はいつだって大真面目だったの」

「……それで？」

「おう、これで」

「あっそ。(……)ホント馬鹿じゃないの」

陽に聞こえないように、瑪瑙は小さく呟く。  
言葉では貶しているが、口元には笑みが溢れていた。

「……おいしい」

「ふむ、これはなかなか。……白米が欲しくなるのう」

「そう言ってくれれば、わざわざ作った甲斐があるってもんだぜ」

陽は満足気に笑んでみせる。

二人に好評価だったのは、言うまでもなく、ハンバーグのことである。

「四人が帰ったきたら、この、犯婆具　「だからハンバーグな。いちいち当て字が恐えんだよ」　なるものを作る気か？」

「そりゃそうでしょ」

純粹に問う薊に、呆れ口調で答える陽。

当たり前過ぎて、問われたこと事態がおかしく思えた。

「……覚悟しておくんじゃない」

「は？」

声のトーンを低めて言う薊に、思わず聞き返してしまう陽。

そこに、瑪瑙がすかさず答えてみせる。

「最低でも十人前は必要になるわよ？」

「……あ、ああそうね。あははは〜ん……ハア」

(くそ、二人分でもけっこう大変だったのにつ)

頂垂れながら心の中で呟く陽。

材料　特につなぎとして使うパン　を集めるのに一苦労したのである。

ならばパンを自分で作ればいい、と言うかもしれないが、それはまた難儀なことだ。

……作れない、という訳ではないようだが。

さらに、ひとり一人前ずつの四人前にしてもらえばいいのだが、それは絶対牡丹が許さない。

故に、溜め息を吐いてしまうのも仕方がなかった。

「……むむむっ！」

「……何が、むむむ、なんですか。いい加減正常に戻って下さい」

「俺はいつだって正常だ。……いちいち山百合はうるせえんだよ」

「……そこまでは戻らないで下さいませ、牡丹様」

「しょうがないわね」

「……ほっ」

「何が、むむむ、なのかっていうのはね、家に帰ったら何か良いことがありそうって」

「……いつもの如く『ピッ』とですか？」

「ええ、そうよ」

「……………御愁傷様です、陽君」

結論。

牡丹が受信する良いこと、というものは、陽の身に面倒ごとが起ることに直結する。

「……………出番出番、って皆言ってるけど、一番出番が無いのはわたし達よねー」

「そんなこと僕に言われてもね……………」

「あーあ、早く帰ってこないかな、……………お母さん」

「……………えっ？ お姉ちゃん、今お母さ……………」

「言っていないっ！ きっ、聞き間違えよ！ わたしはおばさん、って言ったわっ！」

「……………ふうん、そっか」

「づぐっ……………藍、そっ、その目は、なによ……………」

「いや、ね……………狼狽するお姉ちゃんも可愛いになって」

「ばっ、ばかっ！ そっ、そんなこと……………っ！」

満面の笑みを浮かべて言う藍に、顔を真っ赤にする茜。  
出番云々の話のはずだったのだが、今は何故か桃色な雰囲気醸し  
出している二人。

……相思相愛な二人は、知らぬところで大人の階段を昇りつつあつ  
たりする。

最近の成長：普通に手を繋ぐ 貝殻のように手を繋ぐ。

陽は語る。

「安くて旨いと評判になりましたよ、ええ。しかも、パン自体がほ  
とんど流通してないもんだから、つなぎにパンを使う発想など生ま  
れず、結果このハンバーグの真似は出来ない。俺、うはうは、って  
訳だ」  
と

### 第三十一話（後書き）

戦闘シーンは省かせて頂きました。

基本的に原作沿いですから、書いても仕方ないですしー。

沿わなかったり、改悪されたりするところは書く、って感じですね。

第三十二話（前書き）

「ご都合主義です、はい。」

## 第三十二話

S i d e  
陽

「ほれ、飲まんか」

「いや……、俺、あんまり酒好きじゃ」

この突然の状況にツッコミきれないので、当たり障りなく返してお  
く。

「なんじゃ？ 儂の酒が飲めぬと言うのか!？」

「……いや、あのね、ちょっと待とうか薊さん」

酒が注がれたのは小皿のようで、ちょっと深さのある皿。  
縁に3つぐらい小さな窪みが意図的にある。  
なんでこの時代にあんのさ？

……この時代？

いや、今はそんなことはどうでもいい。

問題は薊さんが酒を注いだ皿。

どう見ても灰皿ほこやじです、ありがとうございます。

「なんて危険なネタで絡んできてんだアンタは!」

「だって、……出番くないんじゃないもん」

急にしおらしくなっちゃって。  
もう、かーわーういーういー

「……ほう、儂を茶化すか」

「ちょ、マジ、すみませんでした。いたいたいたいたいっ！」

右手で頭を掴まれてます。

……握力半端ねえつす。

この人は怒らせちゃあなるめえ……。

### Side 三人称

「陽ったら、スツゴい娘達を友達にしたものね」

「……流石は陽君、といったところでしょうか」

目をキラキラさせながら牡丹は言う。

それに答えるは、不機嫌な山百合である。

「うーん……死合いを申込まれたり、他愛のないことを話しただけ

だよ？ それって友達、っていうのかなあ」

純粹に疑問に思った蒲公英。

陽自身からその友達との出会いの経緯を聞いたのだが、冷静に考えればなんともおかしいことだ。

……相手は女性ということ、聞いた時は少々熱くなっていた為に、今までその思考には至らなかったのは余談である。

「ま、そんなもんだろ、友達になるきっかけなんてさ」

「……翠様の言う通りですよ、蒲公英ちゃん。人と人が交わるきっかけ、というものはほんの些細なことですよ」

私と牡丹様然り、陽君と蒲公英ちゃん然り、です。

と、そう続けるは山百合。

人と人が関係を持つに、きっかけというものは、本当に小さなものだ。

陽と蒲公英が出会ったのも、畏にかかった、それを助けた。

陽とその友達たちが出会ったのも、洛陽で偶然居合わせた、偶然廊下を通りかかった。

山百合と牡丹が出会ったのも、賊に襲われていた、それを助けた。

ただそれだけだ。

どこにでもありそうな小さな出来事から、人と人の交流は始まるものだ。

「友達になるきっかけなんて、顔を合わせた程度でさえ十分なのよ」

牡丹からすれば、話をした、死合う約束をした、それだけでも友達になるに十分すぎることなのである。

「にしても、見事としか言い表せないぐらい食い散らかしたわね」

「……両袁家の被害は甚大でしょうね」

先ほどから、相変わらずテンションが高めの牡丹。

答える山百合は薄く笑う。

基本的に孫家　というより孫策及び周瑜の　味方である山百合には、袁術軍に被害が出たことが喜ばしかったのである。

「その辺も考慮して、山百合、それに翠、……勝てる？」

「……一人は天下無双……まさにその通りかと。はっきり言えば無理でしょう。もう一人は神速……こちらはどうかになりますね」

「あたしも同感だぜ。蒲公英にはどっちも絶対無理だけだな」

「言われなくてもわかってるってば!」

牡丹の問いに、二人はそれぞれに答える。

牡丹が蒲公英には問わなかった時点で分かりきっているにも関わらず、わざわざ言ってるくらいには、翠は意地悪だった。

「私……、殺り合ってみたい」

「……ハア」

「……………」

獐猛な笑みと共に発した牡丹の言葉に頭を抱えなくなる山百合と、  
驚愕する二人。

「……………そのような機会があれば良いですね」

「……………ええっ!?!」

肯定的な山百合に、止めないの、みたいな視線を送る二人。

「……………止めるだけ無駄ですからね」

「言い種が酷くないかしら、山百合」

「……………事実ですから仕方ありません」

若干怒っている牡丹に対して、今回は譲らない山百合。  
譲る必要がないからである。  
なんといつでも事実だから。

「むう……………、しょうがないわね。今回は許してあげる」

「……………ありがとうございます」

「許すも許されるもないと思うんだけどな」

「翠お姉さま、そこに触れない方がいいと思うよ」

翠の言う通り、牡丹が山百合を許してやることも、山百合がわざわざ

ざ礼を述べる必要もない。

山百合が行ったのは、物事を円滑に進めるための処世術だ。

……このやりとりもいつも通りなので、処世術というほどのものではないが。

「翠」

「げっ！」

矛先を翠に変えた牡丹。

蒲公英の言う通り、触れなければ良かった、と後悔した翠であった。

先ほどから四人が話していたのは、虎牢関に着いてからの初めての戦についてである。

弱小軍であったはずの劉備軍に将を撃破され、孫策軍には関への一番乗りを果たされ、なんの活躍もないまま被害だけを被った袁紹軍と、被害はなかったが、袁紹軍と同じく目立たなかった袁術軍。功を焦った二つの軍は、虎牢関に着くなり先鋒についた。

一方の董卓軍。

虎牢関には、華雄一人残したことへの悔いと、仇討ちに 本当は死んでいないが、それを知るよしもない 若干燃える張遼と、董卓をいじめる連合を赦さない、とこちらも燃える呂布と、そのお付きの軍師、陳宮を擁していた。

天下に謳われる呂布の武と、巧みな馬術と神速と名高い張遼の武等々を考慮し、相手の士気を下げることが目的とし、うって出ることにした陳宮。

勝ったのは、勿論董卓軍。

陳宮の策は見事に当たり、数が多いだけの雑兵たちは二人とその部下等に蹴散らされる羽目になり、両袁家の士気はどん底。董卓軍は、悠々と関に帰っていったのであった。

その一部始終を傍観していた牡丹たち。

手を出したくもないし、出す気もないし、出せないからである。この戦いの後に始まるであろう群雄割拠の時代。

そこに乗じる気のない牡丹は、言うなれば、親交がある孫呉の味方。手を出して、わざわざ両袁家の被害を少なくする必要はない。

さらに、牡丹たちが配置されているのは　シ水関の戦いの時と同じく　左翼の後曲。

手を出せるはずもないのだ。

結局、陽の友達である二人の独壇場ともいえる戦いの全てを見終えてから、牡丹が口を開くに始まり、先の会話に至った。

544

「……牡丹様、伝令によれば、今から軍議を行うようです」

「今更？　もっと早くやるべきだったでしょ」

「……私に言われましたも」

棘のある牡丹の口調。

答える山百合は無表情。

が、あまり乗り気ではないのは確かである。

「はあ、めんどくさい。蒲公英、翠を頼むわね」

「はーっ！ 伯母上様、いつてらっしゃーい！」

「うんうん、今は蒲公英の明るさだけが私の活力だわ」

笑顔で手を振る蒲公英。

それに答えるように、振り向いて手を振り返す牡丹。

元気一杯に送り出してくれる蒲公英のお蔭で軍議に参加出来る、と言っぐらい乗り気でない牡丹であった。

「虎牢関攻略の鍵は、ずばり劉備軍ですわっ！」

軍議の冒頭、こんな総大将のお言葉から始まった。

シ水関を攻略したんだから、虎牢関もいけるんじゃない？

多分、そんな安易な考えから発せられた言葉であろう。

ほとんどの諸侯は、最初からそうしろよ、みたいな目である。

例外は劉備軍が長、天の御遣いこと一刀と劉備。

苦虫を噛み潰したような顔をし、伏し目がちである。

二人は仲間であり軍師の諸葛亮、鳳統から、最悪のケースを聞かされていた。

最初から前線に出されていれば、なんとか出来る策はあった。

董卓軍が出てくるであろうことは予測済みだったからだ。

が、功が欲しい両袁家により、全てが無為になった。

勝利したことにより、董卓軍の士気は跳ね上がり、連合側は  
くら軍が違うといえど 惨敗した、という事実による士気の低下  
は小さくない。

董卓軍は、このまま関に籠城してしまえば勝ててしまつたろう程だ。  
そのタイミングで、実質シ水関を攻略した劉備軍が、虎牢関の攻略  
の先鋒を任される。

これが、今まさに成ってしまった最悪のケースである。

「ちよつと待つた」

「なんですの、馬騰さん？」

はいはい、と手を挙げる牡丹。

……子供か、と突つ込みたくなる程に。

「いくらなんでも、劉備軍単体は不味いと思うわ。それに、ここで  
倒されちゃつたら面白くな……じゃなかった、連合を解散せざるを  
得ないくらい、士気が下がつてしまつてしまふでしょ？」

「……確かにその通りですわね」

「それに、袁紹ちゃん、袁術ちゃんの軍は被害が大きい。これ以上  
兵を減らすのは御免被りたいでしょ？」

それに、こんな関一つに総大将が出張ることもないわよ。  
と、牡丹は甘い言葉を発する。

これ以上被害を受けるのは拒みたいが、功が欲しい。

だが、関を取った、という功など、洛陽凱旋に比べればちっぽけなもの。

だから、後にある功のために今は下がっていけば良い。

表向きとしてはそう言っているのである。

……さつさと後曲へと下がれ、という裏がありりなのだが。

「わかり、ましたわ」

「わかったのじゃ！」

甘美な狂言に誘われるがままに、袁紹は二つ返事をする。袁術も同様に、首肯した。

その二人の反応に、牡丹はニコリ、と笑んだ。

「それで、結局先鋒はどうしますの？」

「先鋒はそのまま劉備軍で、……そうねえ、後は天の御遣い君に選ばせたら？」

「えっ、俺っ!？」

突然の牡丹からの指名に、驚く一刀。

呆れたような目をする牡丹。

曰く、誰の多くの利の為にやっているのだ、と。

「この胡散臭い男に？」

「皇帝陛下は勿論のこと、うちの天狼も結構出来る子だし。同様に”天”を冠してるんだから、きつと大丈夫よ」

「そんなものですか？」

「そんなものですの。だから安心して頂戴。それに、袁紹ちゃんの名が、袁家の名が傷付くことはないから」

ね？

と、ウインクする牡丹。

「おーっほっほっほっ！ わかりましたわ！ 総大将であるこの、この私が、北郷一刀さんを、臨時指揮官として認めてさしあげますわっ！」

「……………つて、ええええええ！！」

……………劉備さんは空気。

「……………牡丹様」

「うふふっ、あははっ、はぁーっはっはっはっはっ！」

三段笑い……………。

そうは思うが、皆は突っ込むことをしない。

……………皆、といっても、すでに袁紹、袁術等はいないが。

(こんなに簡単に引つ掛かるなんてな。ふっ、……少なくとも袁家として乱世は生き抜けねえな、あいつ等は)

(……牡丹様、戻ってますよ)

(気分がいいからな)

(……そう、ですか)

ニヤリ、と笑う牡丹。

この口調には、その笑みが似合っていた。

「さあ、御遣い君、存分にやって頂戴な」

「……え？」

「呆けている暇なんてないわよ？ 私が出来るのはここまでなんだから。後は、君が勝てる策を立てるだけよ」

「いや、……何気に一番重要な役なんですが」

「ま、その辺は、……君に丸投げよ」

その牡丹の言葉に、目の前が真つ暗になる感覚を覚えた一刀。

彼からすれば、歴史に名を残すそうそうたるメンバーを纏める、という意味と同義なのだ。

(……この子もなかなか反応が面白いわ)

牡丹は牡丹で、些か最低なことを考えていた。

……牡丹さんは、人をからかうのがお好き。

その後、明日の朝に軍議はやると決まり、お開きとなった。

明日の軍議には、各軍の参謀、軍師等をつれても良い、いや、むしろつれてきてください。  
と、一刀は頭を下げたそう。

「口車にのせる、か。二人の専売特許を取っちゃったかしら？」

「……牡丹様も人が悪いです」

「そんなこと言ったら、二人はどうなのよー」

「……少なくとも、陽君は最悪、ですね」

「ふふっ、そうねー」

天幕を出て、自陣に帰る道程で、他愛もなく会話をする二人。  
昔と今、どちらも思い巡らしながら。

「牡丹さん、山百合お姉ちゃん」

「あら、雪蓮ちゃん」

「……どうかしました？」

後ろからやってくる孫策の声に反応する二人。

間髪なく続いた二人の言葉に、孫策は少し目を丸くするが、直ぐに普通の顔に戻し、要件を伝えることにする。

「さつき、大将代理が探してたわよ？ お礼でも言いたいんじゃないかしら？」

「お礼、ねえ……」

「……一応、受け取っておけばよろしいのでは？」

「そうよ。向こうにすれば、助けられたみたいな感じなんだし？」

思案顔をする牡丹に、受け取るよう促す山百合と孫策。

「それもそう、ね。……何かくれるのかしら？」

「……物を期待してどうしますか」

「それは流石に、ねえ」

物を期待する牡丹の発言に、呆れをみせる二人。至極当然のことであろう。

……元より、そんなに礼を頂く気もないので、「冗談であるが。」

「「ありがとうございましたっ！」」

「……なんかスッゴい罪悪感なんですけどっ」

「……牡丹様自身が招いた結果です、しかと受けるべきかと」  
精神誠意お礼を述べる一刀と劉備に、うっ、と身を引く牡丹。

一応、助けたことには助けた。

しかし、一刀は立場的にむしろ危険になった。

更に、牡丹らに不利益になることは 指揮代理も一刀に擦り付けたので 何もない。

最後に、西涼軍は騎馬が多めなので、関攻めにあまり役にたたない。その辺りを全て計算した上で、両袁家を下からせた 実質、排除した のである。

それ故に、純粹に礼を言われると逆に困る牡丹だった。

S i d e  
陽

「……うわあ、面倒なことをしてくれたもんだ」

なんでわざわざ介入しちゃったかな。

触らぬ神に祟りなし、って言うじゃんか。

母さん、マジで勘弁してくれ。

『虎牢関で苦戦してるの。陽、助けて』

母さん口調で言うと、こんな感じの書状が届いた。

これが届くのに、最速でも2日はかかる。

…… どれだけ速いんだ、とは突っ込むなよ？

漢全土なんざ、もう俺の縄張りみたいなもんなんだから、この速さは普通だぜ。

とにもかくにも、もう3日近くは足止めされているらしい。

流星は恋と霞、ついでにちんきゅーと言うべきか。

かゆーのようにはいかねえな。

…… 最も、かゆーが例外なのだとは思うが。

「どうすっかな〜」

大きく分けて、手は二つ。

一つは西 函谷関側 から攻める。

元々、天水までは進軍するつもりだったから、そのついでに行けば良かったりする。

もう一つは中から煽る。

これは埋伏等々に頑張ってもらわねばなるまいが。

…… あ、良いこと思いついた。

善は急げ。

ちやきちやきやりましょー。

「つつても、やるには補助がいるわけなんだが……」

「ここにいるぞー！」

蒲公英十八番の台詞を言い放ち、扉を開け放って、誰かが入ってくる

る。

瑪瑙じゃねーか。

……ってか、蒲公英って俺の台詞をどこで聞いてんだろうか。

こういったタイミングで蒲公英は　今回は瑪瑙なんだが　いつ

も突入してくるんだよね。

……タイミング？

いや、そんなことよりちょっと遺憾な点がある。

「……おい瑪瑙、テメーちよつとこつちこい」

手招きしてやる。

素直に来る分、可愛いもんだ。

まあ、今回はチョップをおみまいしてやりましたが。

「いったあ！　何すんのよっ！」

「さっきの台詞は蒲公英の十八番だ。パクんじゃねえ」

「……確かに、言ってみたのはいいけど、確かに蒲公英じゃないと  
しっくり来ないわね。何でだろ？」

そこに触れるのは禁則事項です。

「で、何すればいいの？」

「噂を流すための書と、母さんへを書いて欲しいんだ」

「……自分で書けば？」

出来たらやっつてんだよ。  
前に言った通り、直接的にこの戦いに関わることをしようとするど、  
頭以外動かなくなる。

そこで出したのが、あらかじめ字を書いておいた木管と細長い棒。

「……なにそれ？」

「ちよつとした便利道具さ」

今の俺に最適な物。

……いや、この為に作ったんだけども。

「最初の問いに答えると、だ。戦いに関することになると、話せないし、書けないんだよ」

「なんで？」

「知らん。むしろ俺が聞きたい。そこでこれを使おう、という結論に至ったわけよ」

「……ぶっ飛びすぎてワケわかんない」

まあ、無理に理解しなくていいんだけどな。

「使い方だが、俺がこの棒の先で字を指すから、そこから解釈してくれ。合ってたら首肯するから」

「……試しに一つぐらい練習させなさいよ」

「そうだな……」

俺が指したのは、『悪』『即』『斬』。

……おいそこ、斎藤さんWとか言っくんじゃねえ。

「悪いヤツは直ぐに斬り捨てる、ってこと？」

(こくこく)

肯定の頷きをする。

……自分でやっておいてアレなんだが、不意に恋ちゃんを思いだしちゃったよ。

「さて、次からは本番だぞ」

半刻ほどで完成した。

いやあ、理解が速くて助かる。

「アンタ、最低ね」

「そうか？ 至極真つ当な策だと思うけどな」

「現実的に考えればね。私が言いたいのは、人として、よ」

「別にどうってことねえだろ、いつものことだしな。……それに、

馬鹿は乱世に必要なえだろ？」

「まあ……、そうだけど」

完成した書を、瑪瑙にそれぞれの伝令へと渡してもらおう。

ま、追加でもう三つ一緒に母さんの所に行く伝令に持たせたけどね。

……そのうち二つは、送り主がホントは違うけど。

理由は、この戦いの結末をどうするかを、全ては母さんの手に委ねてやったからだ。

……そうは言っても、どの道を選択するかなんて、正直読めてるけどね。

せめてもの抵抗、ってやつだ。

面白くなればいいね、母さん。

陽は語る。

「母さんの性質上、やっぱりな、とは思ったよ」と

### 第三十三話（前書き）

遅くなりました。

言い訳ですが、長い分、手直しに時間がかかってしまった。  
二限に授業があった。

そんなところです。

### 第三十三話

「華陀せんせい、子供たちと外で遊ばせてください」

「おお、馬白じゃないか。そうだな……許可したいところだが、まだ安静にしていた方がいい」

「でもダーリン、もう十日も経ってるのよん？」

「ふむ、貂蝉はそのオノコに付くか。じゃあダーリンは儂のモノじやな」

「あらん、誰も譲るなんて言っていないわよん！」

「（むさ苦しいから外でやってくんねえかな）」

華陀の診療所での一コマ。

虎牢関に着いて早一週間。

戦況は、どちらも動かない為 董卓軍側は動く必要もないので  
睨み合いが続いている。

……食糧的な問題があるため、連合側が些か不利ではあるが。

「どつしよつかしらね〜」

「……牡丹様、それは？」

「ん、陽からのお手紙よ。見事なまでに、私への愛が囁かれて

「……ませんね？」 つれないわね〜」

「……真面目ですから、陽君は」

そう答える山百合。

……暗に牡丹は真面目じゃない、という意味を含んでいたりしない  
でもない。

「ま、こんな感じよ」

「……これ、は」

『華雄を死んだこととする。』

その亡骸を両袁家がなぶった、という噂を大陸全体に流す。

さらに、董卓軍にいる埋伏の奴を斥候として、華雄の死に様を惨く

呂布と張遼、陳宮に伝えておく。

後は、頑張れ』

「なかなかにして最低な内容よね〜」

「……仕方、ありません。敵軍を動かすには、これくらい……」

陽からの書を読み、呟く二人。

山百合の手は、白くなるまで固く握られていた。

言葉では、仕方ない、と言ったが、武人の誇りを汚すようなこの書の内容は、山百合の教示には反していたのである。

「怒らないであげて、山百合。……陽に対しても、そして、自分に對しても」

「……っ!!」

手を優しく解き、両手で包まれながら紡がれた牡丹の言葉に、目を見開き驚く山百合。

武人を汚す陽に怒る一方、また陽を悪に進ませることになった自身の不甲斐なさに、怒りを覚えていたことに気付かされたからである。

「それにね、罪滅ぼしかは知らないけど、陽からこんなのも届いたのよね」

「……もう一つ、ですか？」

「ううん、ホントは三つよ」

二つは私宛じゃないからね。

と、そう言いながら牡丹から渡された、円の中に秘、と書かれた書を開く山百合。

そこには、感情を揺れ動かせることが少ない山百合でも、もう一度驚愕することが書かれていた。

「……これでは、どちらが敵なのか、分からないではありませんか  
っ！」

「ええ、そうよね」

相変わらず軽い反応の牡丹に、肩透かし気味になる山百合。  
しかし、牡丹は牡丹でいろいろ考えていた。

「……これを渡すことは、私の一存に任せる、ってことよね」

「……そう、なりますね」

「全く、なんてことしてくれるのかしら」

ぷりぷりと怒る牡丹。

陽が今頃、ほそく笑んでいることだろうことを考えて。

「……で、どうするのですか？」

「蒲公英が持ってた似顔絵とこれを見るに、本当のことみたいだし  
ね。……うーん、どうしよ」

腕を組んで、割と本気で唸る牡丹。

……どうすれば面白くなるか、であるが。

「……大将代理に任せてみては如何でしょう？」

「っっっ」

「……彼らの陣営のみに、ですが」

「ちょっと待ってね」

目を瞑り、熟考する牡丹。

……再三言つが、どうすれば面白くなるかを、である。

「うん、いいわ。山百合の案を採用する」

「……ありがとうございます」

ニコリ、と微笑む牡丹。

……牡丹の頭の中では、自身にとって満足のいく結末になるようだ。

「……それより、翠様と蒲公英ちゃんには？」

「まだよ。山百合に話してからにしよう、と思つてね」

三者三様に反応されたら、私でも対応出来ないから。  
と、牡丹はそう続けた。

案の定、最初の書を見た翠は怒り、蒲公英は悲しんだり悔やんだり  
した。

山百合と同じ思い　怒りと不甲斐なさ　が、一人ずつに表れた  
のである。

最も、二つ目の書にはどちらも驚愕したが。

場所は変わり、劉備軍の天幕。

「ねえ御遣い君、これ見てどう思った？」

「……これは、この内容は本当なんですか？」

「ええ、そうよ。なんと言ってもうちの天狼からの書だし」

三國志の知識があるが故に、驚く一刀。

「じゃあ、そのちみっこ軍師殿たちは？」

「はわわ……ち、ちみっこ」

「あわわ……」

牡丹の齒に物を着せぬ言葉に、愕然とする二人。

……自身で理解はしているが、改めて言われるとちよっとショックなのである。

「冗談よ、冗談。で、どうかしら、神算鬼謀の両軍師殿？」

真面目な評価を口にする牡丹。

シ水関の戦い時に於ける策を見抜いたが故の、真つ当な評価なのである。

「正直、裏があるとは思っていません」

ここまでとは予想してませんでした。  
と、諸葛亮はそう答える。

「斥候さんたちが帰って来なかったのも、これで合点がいきましゅ」  
鳳統が続けて答える。

……ちよつと噛んだが、真面目な席なので訂正は入れなかった。

「で、劉備ちゃん。貴女はどうする？」

「え？ どうって？」

「聞き返されても困るんだけど……」

天然ボケをかます劉備に呆れる牡丹。

そんな牡丹をスルーして、後ろを向いてひそひそと話す劉備と諸葛亮。

どうやら本気で状況がわかっていなかったようだ。

「勿論助けます！」

「そ。じゃ、善は急げ、ね」

劉備に二つ返事をし、退出しようとする牡丹。

その腕をとり、引き留める一刀。

「ちよ、ちよつと待って下さい。……なんで俺達、なんですか？」

「……………じい〜」

「あ、すみません」

わざと声をプラスした牡丹のジト目に、手を放す一刀。

……後ろで見つめる張飛以外もジト目であることを、一刀は知らない。

「そうねえ……、面白そうだから、かな？」

「なっ！ そんな理由で　「落ち着け、愛紗」　星っ！」

牡丹の発言にキレた関羽を諫める趙雲。

……今回はむしろ関羽の反応の方が正しいのだが。

「馬騰殿、続きを」

「趙雲ちゃんは冷静ね」

「貴殿を知らぬ存ぜぬでしたら、私もこれと同じような反応をしたでしょうな」

1〜2行程度の紹介で終わったが、二人は面識があったのである。

「あら、庇ってるの？」

「いえ、事実です」

「自己分析もなかなかのものね。ますますもって面白いわ」

対面したとき、面白い娘、と評価していた牡丹。

どうやらその評価が間違っていたようだ。

「三傑の一人である馬騰殿にそう言って頂けるとは、武人の誉れというものです」

「そ。じゃ、また」

「おっと、うむやむなまま帰す訳にはいきませぬな」

「ちえっ、もうちよつとだったのにい〜」

肩をガシツ、と趙雲に捕まえられたので、両手を挙げて降参のポーズをとる牡丹。

さっきまで二人だけの会話になっており、劉備軍の皆は置いてきぼりだった。

あと趙雲さえ言いくるめられたならば、牡丹はこの場から逃げられたのだが、そうそう上手くはいかなかった。

「一番私欲が少ない、御遣い君の無類の女好き、先鋒。挙げればきりがないから、まずはこれぐらいね。これらから信が置けると判断したまでよ」

「俺は別に女好きじゃ……」

「今でさえそんだけ侍らせといて？ この女の敵ー！ 女つたらし

ー！ お前の母ちゃん出っぺっそー！」

「最後関係なくね！？」

一刀の答えに、何故かはわからないが野次を飛ばす牡丹。  
……一刀の返しに、なかなかのツッコミ、と牡丹は密かに評価して  
いたりする。

私欲が少ないと言わしめた劉備達が参加した理由は、洛陽の民を救  
うため、というもの。

それ以外は何らかの裏が含まれている。  
顕著な例を挙げれば。

両袁家及び、その他の諸侯達は、現在の董卓の位置に取って代わり  
たいため。

曹操は、後に訪れる乱世に備え、霸王としての道を歩まんとするた  
め。

孫策は、袁術に盗られた領地を取り戻すため。

……牡丹は、面白そうだからであるが。

そうしたとき、董卓を本当の意味で助けられるか、と考えれば、劉  
備軍しかないのである。

「それに、自業自得だ、なんてあの子言ってたけど、ホントは助け  
たいのよ」

友の友としても、そして自分の為にも、ね。

と、牡丹は慈しむような目で、遙か西へと視線を送った。

その後すぐに軍議は行われ、陽の考えた策は採用されることとなる。  
他に手はないし、牡丹の手元に陽からの書が届いた時点で、既に策  
は発動しているので、止める術もないのである。

その辺りをわかってやっている”天狼”の恐ろしさを、諸侯達は改めて感じていた。

……策自体はこれはないわ、みたいな反応で引かれていたが。

その軍議から一日後……。

「……赦さない」

「これは、……ウチも我慢できへんわ」

「れ、恋殿、それに霞殿！ お、落ち着いてくだされ！」

斥候が持ち帰った情報に、武人であるが故にぶちギレた二人。

……策通り、その斥候は陽の息がかかっており、言ったことのほとんどが嘘なのだが。

その内容は、こうだ。

『戦死したと思われた華雄だが、噂では武人の誇りを汚す殺され方をされた。』

汚され、犯され、終いには首さらされたとのこと。総大将である袁紹及び、その妹の袁術らが考案し、連合の諸侯等が不快感を示すも、立場上口出しは出来ず。

辺りの邑や街で、まことしやかに囁かれているそうなの』

知り合い、ひいては轡を並べた仲である者たちからすれば、ぶちギ

しても仕方がなかった。

……これを考えた陽が、最低、と罵られるのも仕方がないとも言える。

勿論、全てまやかしてであり、華雄は生きている。

張飛に斬られたが、大事には至らず、南方に逃れたため、生きている。

(大切なことなので二回言ってみた)

「……出る」

「なっ！ 待つてくだされ、恋殿！ 華雄殿のこと、誠に遺憾なのは百も承知なのです。ですが、その憎き仇の両袁家は遙か後陣……はつきり言つて無理なのです！」

「……でも、行く！」

「ですがっ！」

「……ねね、分かっとなるやろ？ ああなったら恋ちゃんは止められん。それにな、ウチかて止まる氣い、ないで？」

これまでに見たことのない恋の激昂にも、無謀さ故に食い下がる陳宮。

そんな陳宮の肩に手を置き、諦めるよう促す霞。

「それにアレ、見てみい。……我慢させとくのは流石に無理やろ」

今いる場所、すなわち虎牢関の上から、霞の指差す自陣を見渡す陳宮。

そこには、今にでも戦ってやる、と血気盛んな兵達ばかり。  
おそらく華雄の報について聞いたのだろうと解釈する。

……董卓軍内にいる陽の埋伏がさらに煽っていたことを知らずに。

「……分かったのです。もう一度我が軍の恐ろしさを思い知らせてやるのです！」

「……（コクコク！）」

「おっしゃ、殺つたるでえ！」

……この時はまだ、陽に踊らされていることを三人は知るよしもない。

「……これでよろしいでしょうか？」

「ええ、私は構わないわ」

「右に同じね」

「異存はないな」

「問題ないわ さつすが御遣い君っ！ よっ、大陸ー！」

一刀の確認に返事をするは、上から曹操、孫策、公孫賛、牡丹である。

……相変わらず牡丹のノリが不明であるが。

「……茶化さないくださいよ。皆で考えたんです。俺は聞いてただけですから」

「ほら、そんなに謙遜しない 聞く、ってことが出来るのは、普通に凄いことなのよ？ あ、ハムちゃん、ごめんね」

「誰がハムちゃんですかっ！ しかも、馬騰殿は何故謝ったんです！？」

一刀に賛辞を送る中、何故か公孫贄の方を向いて謝った牡丹。そんな牡丹にキレル公孫贄。

途中からは、もはや名前ですらないハムと呼ばれたことより、突然の謝罪の方が気になっていたが。

……しかし、なぜ牡丹はハム、というあだ名を知っているのだろうか。

「……言っているの？」

「うう、やっぱりいいです」

牡丹の含みのある言葉に引き下がった公孫贄。

因みに牡丹は、普通、と口に出してしまったので、一応謝ったのである。

……公孫贄は、食い下がらなくて正解だったかもしれない。

「じゃ、お開きってことで。……解散！」

「締まらないわね……」

「ま、これくらいのてきとーさが丁度良いのよ、馬騰さんには、ね」

「同感だな。お前同様、自由でこそ生きるお方だからな」

「……遊んでるだけじゃないのか？」

上から、曹操、孫策、周瑜、公孫贇である。

……孫策、周瑜の意見も正しいが、一番合っているのは公孫贇だったりする。

「ハムちゃん、ちょーっと、O H A N A S H I、しましよ  
か」

「だからハムじゃ……うう」

「……牡丹様という藪を、変につつくからですよ」

合っているが故に許せなかった牡丹。

公孫贇の襟を引いて、天幕を出ていく。

軍議の席にいた人々は、誰も止めなかった。

山百合に至っては、いじられ役として、牡丹のお眼鏡にかなってしまったのが悪い、というニュアンスを含んだことまで言っている。

……それを可哀想、というかもしれないが、絡まれないだけ扱いはマシだ、と考えるのはおかしいだろうか。

これをきっかけに、軍議は終了した。

終わり方が終わり方なので、かなりグダグダだったが。

ちなみに、あの場にはかなり人がいたりした。  
が、今も語り継がれる英雄、次代を担う英雄を発することは出来な  
かったのである。

……例外として、未来の英雄になるであろう劉備は一刀の隣ですつ  
とニコニコしていたが。

開け放たれた虎牢関の扉。

そこから湧き出てくるは、偽の情報に怒った董卓軍の兵たち。

その先頭を駆けるは、天下無双と謳われる呂奉先、神速と名高い張  
文遠。

先鋒として配属されている劉備軍の本陣で、一刀はかつてないほど  
の緊張感を感じていた。

呂布はそのまま中央突破、張遼は別動隊として右翼 担当は曹操  
軍 を駆け抜けてくるだろう。

相手軍の動きを見て、そう解釈する一刀。

やはり、とは思いが、相手にするのを出来るだけ御免被りたい呂布  
が向かってくることに、 緊張の元である 不安と焦りが滲み  
出る。

「策自体は、シ水関の戦い時と同じく、劉備軍の中央を切り裂いて  
くる董卓軍を、崩れた様に見せかけて素通りさせましゅ」

「馬白さんの策が上手くいっているなら、狙いはあくまでも両袁家

ですので、わざわざ私たちが相手にする必要はありませんから」  
諸葛亮と鳳統からそれを聞いたとき、妙になるほど、と思つた一刀が、続いて出た言葉には驚かざるを得なかつた。

曰く、將の呂布及び張遼は止めなければならぬ、という言葉に。  
両袁家の兵たちがいくら殺されようが構わないが、これ以上の士気低下は不味い。

牡丹が前に言っていたように、連合を解散せざるを得なくなるからだ。

そうすると、連合の発起人である袁紹が癩癩を起こし、無理矢理にでも洛陽を我が物にしようと、董卓を暗殺するかもしれない。

考え過ぎかもしれないが、あり得ないなんてことはあり得ないのだ。本当に実行されたら、董卓を救えなくなる。

そう考えたとき、士気を下がらない程度の被害に抑える一番有効な手立ては、一番の脅威である呂布及び、張遼の足止めをすること、なのである。

史実を知る一刀は、勿論反対であつたが、それ以外の策はないので、三人で相手をする、という条件でしぶしぶ賛成した。

……これが、不安と焦りの理由でもあつた。

「愛紗、鈴々、星……」

「大丈夫だよ、ご主人様。皆、絶対無事に帰ってくるよ」

「桃香……。そうだよな、俺たちが信じてやらないとな！」

若干カッコイイこと言っているが、その心配は杞憂に終わったりする。

「なんだか鈴々達が悪者みたいなのだ」

「……言うな、鈴々」

「しかし愛紗よ、誠にその通りだっただろう？」

「星！ 言ってくれな……」

張飛の純粹な感想と趙雲の悪戯からなる追撃に、グサツ、と心に何かが刺さった感覚を覚える関羽。

自分でもわかつていただけに、言い返せないもどかさも同時に感じていた。

……こんな話をしているが、目の前には恋がいたりする。

「……お前達、面白い」

「愛紗よ、天下無双の呂布に誉められたぞ？ 良かったではないか」

「何も良くないだろうっ！」

趙雲に律儀に突っ込む関羽。

「鈴々は嬉しいのだ」

「嬉しいがる誉れではないではないかっ！」

そんなノリで、張飛にも突っ込む関羽。

「あの呂布からの直々の誉めの言葉だぞ？ それを誉れでないとは、なんと欲張りな奴だ。……そうがつつくと、主に嫌われるぞ？」

「そつ、それは……。今の話には関係のないことだ」

「ふむ、つれぬな」

「せえ〜いい〜!!!」

ようやく趙雲がからかっていたことに気付く関羽。

……もう一度言うが、目の前には恋がいたりする。

「……恋、もう行っていい？」

「鈴々達の役目は一応足止めだから、もう少し付き合って貰うのだ」

趙雲と関羽できゃいきゃい、と盛り上がっており、この二人はそっちのけである。

というか。

何故こんなにも朗らかな空気なのか。

先にあつたように、恋は華雄のことでぶちギレていたはずである。

では何故、と思うだろう。

答えは簡単だ。

キレていた理由を無くしてやれば良い。

今回のことに合わせるなら、嘘だと教えてやれば良いのだ。それも、嘘をついた本人から。

……そう、牡丹宛てでなかった残り二つの書は、恋と霞宛てだったのである。

『文面だけど、一応久しぶり。』

単刀直入に言くと、華雄は生きてる。

ただ、怪我してるから直ぐには会えないと思う。

それでも、というなら俺に手紙を頂戴な。

董卓達の命は保証する手は打つといたから、嘘ついたこと、勘弁してな。 陽』

手紙の内容はこんな感じで、これを読んで恋は大人しくなり、手合わせたいと三人が乞い、今に至る。

言ってしまうば、一刀の危惧は全くの無駄だったのである。

……手紙は三人が恋と対峙する少し前に山百合から渡されたため、一刀は知らなかった。

「恋殿〜！」

「……ねね？」

「虎牢関が陥落してしまったのです！ ここは逃げるしか道がないのです！」

「……わかった。でも……」

「行くが良い。こちらとしても都合が良いからな」

「……………(コク)」

陳宮からの報告により、逃げる余地しか残っていないことを理解する恋。

それを阻むであろう三人に注意を払うが、趙雲の殺気も闘う気もない言葉に、素直に従った。

「お、来た来た」

「……………わざわざ翠様から銀閃をお借りなされて。本当にやるのですか？」

「当たり前じゃない 何の為にここにいたと思ってるの。ね、黒兎？」

「ぶるっ」

ある開けた道に、通る者を阻むかのように二人と一頭が立っている。牡丹と山百合、黒兎である。

二人と一頭が待っていたのは……………。

「……………じゃま」

「そこを退くのです！ 呂布殿のお通りなのですぞ！」

……天下無双、呂布だった。

「じゃ、いつてきまーす！　いくわよ、黒兎！」

「ぶるっ」

「……あつ。ハア、御武運を」

言っても聞かない牡丹への呆れから、ため息が洩らす山百合。

……それでも無事を祈るのが忠臣と言つべきだろうか。

向かってくる恋と陳宮の走らせる馬に併走し、牡丹は話す。

……頭上から見て、右から陳宮、恋、牡丹の順である。

「こんにちは、呂布ちゃん。私は馬騰つて言うの。一番分かりやすく言えば、陽のお母さんよ」

「……陽の？」

「ええ、そうよ　前置きは全部省くわ。私と勝負して頂戴」

「……勝負？」

「ええ、勝負。あそこの突き当たりまでに呂布ちゃんを馬上から落とせば私の勝ち。逃げ切れば呂布ちゃんの勝ち。勿論馬への攻撃は無し。……どっつ？」

「恋殿、聞く耳を持たないでください。こちらに得がないのです！」

牡丹は恋に勝負を持ちかける。  
が、陳宮はそれを阻む。

理由は言う通り、自分たちに利がないからである。

「……確かにそうね。でも、こつちにも利と言えるほどのものはないわよ。捕まえるとか考えてないし」

「今ならなんとも言えるのです!」

牡丹としては、ただ純粹に勝負したいだけであり、邪なことは全く考えていなかった。

それでも食い下がる陳宮。

無為に時間を使い、捕まることは避けたいのである。

「じゃあ……これ。多分肉まん十個は買えるわ。オススメは、馬の字を丸で囲った印のあるお店ね。『安心の品質、驚きの低価格』こんな言い回しで有名よ」

「お金で釣ろう等とは……」

「ん……わかった」

「れ、恋殿」

お金で、というより、食べ物で釣れたようだ。

「……ねね、少し離れる」

「……わかったのです」

渋々、といった様子で5メートルくらい後ろに下がる陳宮。  
恋自身が同意したため、もう止めることは出来ないのである。

「っしやあ！ ……いくぜ」

「……来い」

濃密な殺気が、辺りを包む。

明らかに勝負、と言える雰囲気ではなかった。

「……ふっ！」

先ずは、といわんばかりに、牡丹は一息で十度の突きを放つ。

それを最低限の動きで避け、身体の芯を捉えた突きだけを自身の武器 方天画戟 で、難なく受ける恋。

……翠並の力に、趙雲並の速さの突きを、である。

防ぐだけに終わらず、恋は左腕一本で横風ぎを放つ。

牡丹は左に黒兎を退かせ、受けることはしなかった。

「……やるねえ」

「恋の方が強い」

「……ああ、そうかもな。だが、馬上、いや、黒兎の上ではどうか、なっ！」

一気に恋に近づき、牡丹は横風ぎを放つ。

無論、恋は難なく受けとめ、弾いて斬りつけようとする。

しかし、その時にはもう牡丹は間合いにはいなかった。

「……………?」

よくわからないまま、今度は恋が馬を寄せ、左上から斬り下ろそうとする。

が、その時には間合いの中の中まで近づかれており、力が余り込められなかったため、牡丹に難なく受け止められる。

戟が上に弾かれ、右上から斬り下ろしを放たれるが、それも難なく引き寄せた戟で受け止め、弾いて斬りつけようとする。  
が、また間合いにはいなかった。

「……………?」

恋には意味がわからなかった。

後ろで見ている陳宮にも理解出来なかった。

それだけではなく、酷く驚いていた。

闘い方云々ではなく、黒兎の動きに、である。

恋が不思議がつているのは、一瞬のうちに間合いの外や内の内に移動すること。

それはただ単に、攻撃される寸前に移動しているだけのことである。そこで、ある問題が浮上する。

曰く、攻撃する一瞬の内にどうやって移動しているのか、だ。

無論、牡丹は黒兎の上にいるため、黒兎が移動している。

問題はそこではなく、どうやって間合いを移動しているか、である。

……それを解決するためには、黒兎の能力、つまりチートな要素について話さねばなるまい。

黒兎は脚が速い、頭が良い。

これは普通　騎手である陽と牡丹も大概だが　に会話レベルのことができるのだから、わかるはずだ。

では、どう速く、どう頭が良いのか。

まずは脚の速さについてだが、こちらは簡単だ。

己の脚力をもってして、爆発的な力で地を蹴り、速さに変えるのである。

これは他の馬達となんら変わらないが、その蹴りつける力が隔絶的なのだ。

瞬発力を生む筋肉、すなわち、速筋が多いのである。

持久力を生む筋肉、すなわち、遅筋も少なくはないのだが。

次に、頭の良さについてだ。

陽の初陣の時に言ったが、黒兎は主の思考を感じて動き、かつ、主が思考していなくても動くのである。

ここでの主、とは背にのせた人物を指しており、その主と心を通じ合うほど、思考を読み取るのも容易になる。

さらに、主と心を通じ合うほど、信頼は生まれ、どう動けば主にとって最善となるのかを選び、主の思考なしでも動くようになる。

黒兎は、ある意味人すらを凌駕するほどの頭脳を持っているのである。

このような芸当が出来る馬はそうそういない。

これが黒兎がチートたる所以なのである。

これらを考慮した上で、先の競り合いを話そう。恋の攻撃を、避ける時には斜め左前に流れ、受ける時には斜め右前に寄せる。

それも、爆発的な加速をもってして、かつ、牡丹の手綱操作なしで、

これを恋から相対的に見れば、自身も前方に動いているので、横にスライドしているように見える。

ただそれだけのことなのだ。

「……………らあっ！」

「……………くっ」

何十合もの牡丹の攻撃を受け、自身の攻撃のほとんどが空振りばかりなので、流石の恋も徐々に疲れの色を見せる。

このままいけば、牡丹に軍配が上がるだろう。だが、そうそう上手くいくはずもなく。

牡丹が指定した突き当たりまで、もう間近というところまで来ていた。

「……………ちっ、終いか」

牡丹が悪態を吐くのも無理はない。

久しぶりに全力でやれたのに、という口惜しさと、勝ちきれなかった、という悔しさを感じていたのだ。

「……疲れた。でも楽しかった。またやる」

「ん、また会えたら、ね　じゃ、バイバーイ」

「ん、ばいばい」

さりげなく再戦の約束をし、恋は牡丹に手を振り返す。

先ほどまで死合いをしていたのにも関わらず、なんとも軽い挨拶である。

「本当にねね達を見逃すですか……?」

「捕らえる気なら、一人で相手をしてもらう必要がないじゃない」

「それはそうなのですが……」

少し困惑気味の陳宮。

敵将である恋を捕らえる、という当たり前なことをしなかったからである。

「まあいいじゃない　それより、置いてかれちゃっわよ?」

「あつ、待って下され、恋殿ーっ!」

結局つむやむなまま、陳宮は恋を追っかけていく。

ここら辺りが落とし所だと気付いたからかもしれない。

「ごめんね、黒兎。無理させちゃって」



第三十三話（後書き）

はい、ご都合主義乙。

黒兔さんはマジチート。

主人公の馬って補正かかるよねー？

黒王号仕様とか。

え、そんなことない？

第三十四話（前書き）

あぶねっ！

滑り込みセーフだっ！

## 第三十四話

S i d e 陽

「不つ祥事っ 不つ祥事っ  
」

「……ノリノリで言うことじゃないと思っただけど?」

何言ってるのさ、瑪瑙さん。

「世に巣くうクズが一人減るんだぜ? 喜ばしいことだと思っただ  
がな」

「まあ、ね」

ちなみに八百長ではありませんよ。  
ただの(?) 人身売買です。

……八百長?

「さて、どう潰してやるっかね」

「……あれ、こっちは?」

「あゝ、蜀ね。無視しといて構わんよ。……っーか、手出しする気  
になんねえんだよなあ」

ホント、なんでだろーな。

「……よし。孟ちゃん、仕えるゆつていきなり悪いんやけど、暇くれへん？」

「勿論断るけど、霞、暇をあげたら一体何をする気？」

「ちよつくら西涼まで行ってな、……あんのアホの首、へし折つてくる」

新たな主となつた曹操に申し出る霞。

……速攻で却下されたが。

吊り上がった肩。

青筋の立つ額。

今にも竹簡が碎けそうになるくらいまで握り締められた手。

曹操が思わず質問してしまうほど、霞はブチ切れを振り切り、ブツチキール！に転じていた。

「……あの、うちの陽く……いえ、馬白様が何か粗相を？」

「粗相なんてモンやないわっ！これ、見てみい！」

霞が曹操軍に降つたとのことで、山百合は陽からの手紙　と言っ

ても竹簡だが　を直接渡しにここへ来ていた。

そして、渡した手紙を読んでいく中、みるみる怒りに染まっていく霞。

……完全に陽君のせいでしょうね、と心で思いつつ、聞いてみれば、返ってきたのは怒りの言葉と渡した手紙。それを読んだ山百合は溜め息を吐いた。

内容は恋に渡した手紙とほぼ変わらない。が、書き方が酷すぎた。

それはもう、バカにした言葉がてんこ盛りだったのである。極めつけは、『馬w鹿wめw』という字が五回ほど書かれていたこと。

……縦書きだったが、意味は伝わったようだ。

「……誠に申し訳ありません。馬騰様からキツく叱って頂きますので」

「ああ、氣い使ってもらわんでええねん。……ウチで殺らしてもらうから」

山百合の謝罪を断る霞。

……理由はアレだが。

心では、らしいっちゃあらしいんやけどな、なんて思っていたりする。

「……ですが」

「ほんなら言伝を。陽に、『首洗って待ったとき』って。……あとは、その処理も」

「……了解しました」

悪い気はしているので食い下がる山百合。  
埒があかないと感じたか、霞は色々頼むことにした。

「では、曹操様、お邪魔致しました」

「私としては、邪魔ではなかったのだけれどね」

山百合は一礼して去った。

その後……。

「霞」

「……何や？」

「今回だけよ」

「おおきに」

手紙の内容こそ知らないものの、何かがあると気付いた曹操。  
……霞が『董卓の命は保証する……』の部分を読んでいたときの、  
僅かな表情変化を見逃していなかったのである。

「正直、分ける必要はなかったと思う」

「は？」

不祥事のくだりと、だよ。

「何でもねえ。……さて、天水にはるばるやってきた訳だが？」

「はつきり言って、暇、ね」

建て前上、董卓の地元のことを押さえて置かないといかんのだよ。  
……あくまで建て前、だけど。

ちゃんと現天水太守には董卓ちゃん達助けるから、と言っている。  
ま、俺の名声と同じ涼州ということも相まって、簡単に受け入れて  
くれましたよ。

「俺は暇じゃないけどな！」

「……なんか腹立つ言い方ね」

いや、事実だし。

「と言っても、もう直ぐ終わるんだけどな」

劉備軍に協力を要請した、っていう母さんからの書には、もう対応  
し終わったから、後は全体の戦いの報告書読むだけだし。

「ふーん。なら、待ってる」

……いや何で？

別にいいけどさ。

『虎牢関の戦い

基本は策通り。

呂布は先鋒の劉備軍と衝突。

虎牢関陥落の報を受けた呂布は逃亡し、隊のほとんどが共にについていった。

張遼及び、その隊は曹操軍に投降。

虎牢関への一番乗りは、孫策軍。

追記 暇だったから呂布ちゃんと死合ってみた。滅茶苦茶強かったわ。  
馬騰 寿成』

戦いの全容としては、予想の範囲を越えないね、全く。

……いや、流石に母さんの行動は予想外だったがな。

暇だった、じゃ済む相手じゃねえって、恋ちゃんはさ。

さてと、後は洛陽を残すのみ。

両袁家に馬鹿をやってもらうを残すのみ、とも言い換えられたりするが。

……董卓ちゃんたちを助ける手立ては出来てるからね。

よし、終わり！

「終わったぞー。何か用があったんか？」

「うん、まあ、ちょっと、ね」

瑪瑙が待つ、なんて珍しいから聞いて見れば、なんだか齒切れの悪いこと。

「何だよ、はっきり言えよ」

「いつ、一緒に、ぐじぐじ飯なんて、どう……？」

顔真っ赤にして、どもって言うことか？

可愛いから許すけど。

……最近、妙に瑪瑙が可愛く思えるんだが。

ま、蒲公英には劣るけどな！

「ぐじぐじ飯ね、別に構わんよ。瑪瑙の奢りで 勿論、アンタ

の奢りよ」「何でだよっ！」

「いいじゃない。アンタ、金持ちでしょ？」

「確かにそうだけでも！」

誘った奴が奢るモンだろーが、普通はよ。

ま、別にいいんだけどさ。

有り余るほど金はあるから。

……具体的に言つと、全資産集めたら、官職の最高の位である三公の位の一つを十回は余裕で買えるぐらい、かな。

「ねえ、そうひへば、どうふるひゅもりだったによ?」

「……がつつくんじゃねーよ、食いしん坊キャラを新たに確立するつもりか。つか、行儀悪いぞ」

小籠包を口一杯に頬張る瑪瑙。

中から溢れる肉汁が熱いか、はふはふと口を動かしている。

餓鬼かお前は。

愛らしさを覚えるけど。

そんな状態で喋るもんだから、何も聞き取れやしねえ。

てか、よく喋ろうと思ったな。

……キャラって、何だっけ?

「(ゴックン)はふ〜。つて、~~~~っ!」

「……………」

至福の吐息を吐く瑪瑙。

一瞬の後、俺を気付いて頂けたようで、顔を赤らめてやがる。

小籠包が好きなのは知らねえが、ちよつとの間で　てめえで誘ったくせに　俺の存在をかき消してたよ。

これは小籠包の味を褒めるべきか、瑪瑙のナメた精神をぶち壊してやるべきか。

「その、ごめん!　あんまりにもこれが美味しかったから……………」

「つたりめーだ、ボケ。俺が改良してやったんだからな」

「……………は?」

別に呆気にとられることでもないだろうに。

「ここは俺が手入れをしてやったって言うてんの。……ついぞに言やあ、俺が経営してたり、支援してる店は漢全土に展開してるからな」

「……………ええ〜」

広すぎて逆に引いてますね。

……まあ、その気持ちかわからないでもないけどな。

ここで解説しておこう！

陽の関わる店の集合体及び、本社の名を『馬印』という。

……決してチヨーク製造会社ではない。

印、所謂シンボルマークは、円の中に、馬という字もしくは、その絵が書かれたもの。

本社は、現時点では金城に置かれ、社長は勿論、陽である。

『馬印』は、食品店、呉服店、飲食店、駄菓子屋、さらには博打屋等、様々なジャンルに精通している。

陽が行うのは、新商品開発及びその費用の支援、製品改良のアドバイス、料理のレシピや服等の制作工程の譲渡又は販売。

これらをひっくるめて『関わる』と言い、上記の何れかに『関わる』ことがあれば、馬印のシンボルマークの表示の義務付けと、売上の一定額の納金を必要としている。

いまや店の数は三桁にもなるのだが、三つのタイプに分けることが出来る。

一つ目は、陽直轄の店。

これは各州に二丁四つ程ずつ存在する。

その店の店長は、基本的に陽の元部下達である。

すでに軍に在籍していないが、忠誠心は陽にある（ここに直轄の意があるのだ）。

本業とは別に副業があるが、今はそのことは割愛する。

二つ目は、陽と提携した店。

これは全土まばらに存在する。

その店の店長は、元々個人経営していた人である。

幾つかの契約のみの関係で、あまり深い繋がりではない。

が、契約は絶対 破れば斬首 なので、破った者はまだいない。

……今二人が食事をしているのはこのタイプの店である。

三つ目は、陽との契約関係から、信頼関係へと昇華した店。

言い換えれば、二つ目の項目から発展したもの。

陽と直に会った、契約関係にある店のほぼ全てがこのタイプに転じる。

一つ目とは違う副業があるが、また割愛する。

以上の三つの形をもってして大陸全土に展開している。

……現代の大企業を参考にしてもらうと分かり易いかもしれない。

「と、まあ、こんな感じだ」

「……信じられない」

心底驚いてますね。

これが普通の反応なんですけどね。

母さんと薊さんは、それぐらい出来るだろ、みたいな感じの反応でしたもん。

……頭おかしいだろ、あのバカ義姉妹の二人。

「で、何か聞きたいことがあったの？」

瑪瑙の舌足らずの言葉は質問であったことは理解してました。

「あ、うん。今回の戦いだけど、……もしアンタが倒れてなかったらどうするつもりだったの？」

「……聞きてえの、そんなこと」

もう俺の中では終わった話なんだけどな。

だって、……結末は俺の支配下にあるし。

……あ、今の台詞、ナシで。

ちよっとキザになった。

相当イタイよ、今の。

いやマジで。

それはさて置いて、結局成立しなかった未来を語ってもなあ、なんて思ったりする。

時が戻せる訳がないから、教えたところで何の意味もないし。

「じゃあねえ、面白くないから少しだけな。……董卓軍と連合の戦いは成立しなかったかもな」

ま、瑪瑙の顔つきから意志の固さは窺えるので、ちょっとだけ教えてやりましたが。

Side 三人称

陽が書を受け取った次の日の昼頃……。

「場所と時がぐちゃぐちゃになるから、交互しない方が良さと思うんだけど」

「……牡丹様、何を？」

……牡丹さんや、正論はやめてくれ。

「なんでもないわ。さてさて、上手くやってるかしらね？」

「……まあ、彼等ならば大丈夫でしょう」

牡丹が気にかけているのは、無論一刀たちのこと。

さほど心配はしていないので、事務的な問い掛けと言っても良いほどに軽い言い方である。

……最も、山百合は色々考えた上での返事であるが。

「それもそうね ……あ、炊き出しの準備しといてって、翠と蒲公英に言っというてね。私は寝てるから」

「……寝かせませんよ」

「きゃっ、山百合ったら大胆」

「……………」

今夜は寝かせない、というニュアンスで 勿論、ボケで 捉えた牡丹。

それを一蹴するかのように、山百合は冷たい目で牡丹を見据える。

「うっ、その視線がっらいっ！ 冗談だってば！ そうだ、炊き出しっ、炊き出しの準備手伝うから、ねっ？」

「……それは大いに助かりますね」

「ぐ……………誘導された気がしないでもないわ」

「……………誘導してますからね」

一連のやりとりに、悪態をつく牡丹。

山百合は正直に答え、子供のいたずらが成功した時のようにふふっ、と笑う。

そんな様子に、前々から思ってたけど、やっぱり変わったな、と牡丹は内心思う。

実は、牡丹がこう思ったのは二度目である。

一度目は、かれこれ20年近く前のこと。

変えたのは、父の様にも、兄の様にも慕った人。

彼は、山百合に感性和少しの感情を与えた。

二度目は、ここ最近。  
変えたのは、弟の様に接しながらも、男としても慕うようになる人。  
彼は、明確な感情とそれに応ずる表情を与えた。

……拾ったのは牡丹であるのに、変化が訪れたのはどちらも男と接した時、ということに、少しへこんだのは言うまでもないことだ。

洛陽中枢にて……。

「君が董卓ちゃん？」

「はい。私が董卓です」

「ちよっ、月っ！」

「詠ちゃん、もういいの」

一刀の問いに素直に答え、賈駆の制止の意を含んだ声にも、首を振って諭すように声に出す董卓。

その表情から、それが真実であることが窺えた。

「董卓ちゃんに、賈駆ちゃん。私達はあなた達を助けたいんですっ  
！」

「……え？」  
「は？」

劉備の突然の言葉に、呆気にとられる二人。  
敵の大將とその軍師である自分達を助けたい、といきなり言われたのだ。  
至極当然のことであろう。

「桃香様、そう唐突に物を言っでは、伝わるものも伝わりませんっ  
！」

「うう、そんなに怒らないですよ」

関羽の注意　本人は諭しているつもりだが　に、しゅん、とす  
る劉備。

「確かに、前置きは大切だと思うよ」

「うう、ご主人様までえ」

「はいはい。まあ、愛紗ももう少し優しくね」

「むう……」

両方を諭す一刀。

そして、董卓と賈馱の方へ身体を向けて口を開く。

「とにかく、だ。董卓ちゃんの状況は理解してるし、ここに来る以前に知った。それに、……逃げてても連合軍は責任転嫁のために、何処までも追いかけてくるだろうね」

「……何が言いたいのだよ」

「確実に追い詰められる二人を放って置けない。だから、……董卓、賈馱には死んで貰いたいんだ」

「そんなこと、させる訳ないでしょ！」

「あ、ごめん、言葉足らずだったね。……死んだことになってもらう、だった」

「……それは、どういうことですか？」

一刀と賈馱の言い合いに、董卓が割って入る。単純に、一刀の言葉が気になったようだ。

「つまり、桃香の言うとおり、助けたいってことさ」

「……一つ質問があります」

「何なりと」

おずおずとだが、はっきりとした声で問う董卓。にこやかに微笑んで、答えてみせる一刀。

……流石は種馬。

「……私達を助けて、何の得があるのでしょうか？」

「得、ね……。得は無いね」

「そだね。得は無いけど、罪がないのに処罰する意味はないし、得もないよ」

「それに、……頼まれたから、つてのもあるかな」

流石に主君をやっていたただけはあり、甘言に警戒心を持っているようだ。

その間に、難なく答える一刀と劉備。

「……疑ってるね、やっぱり」

「当たり前よっ！ 今さっきまで敵だったアンタ達の差し伸べる手を、簡単に取る訳がないっ！」

「そりゃそうだ。ま、俺達が言ってるのは本音なんだよね」

「あとは、お主たちが信じるかどうかだけだ」

敵が簡単に味方に転ずることがどれだけ有り得ないことか。だが、有り得ないなんてことは有り得ない。今まさに、しているのだから。

「……信用しても、良いのですか？」

「もちのろんっ、だよっ」

不安げに聞く董卓に、元気良く答えてみせる劉備。その屈託のない笑みに、董卓は魅せられた気がした。

「……詠ちゃん、私、この人たちを信じたい。ううん、信じる」

「でも……」

「このまま涼州に帰っても……、父様にも母様にも、街の皆を……巻き込んだじゃう」

「それが嫌なのね？」

「……うん」

「……分かった、月の判断に従うわ」

どうやら二人の間では解決したようだ。

「……で、ボクたちを隠蔽する策は？」

「切り替えが速いな……。えっと、まずは董卓たちは俺達が討ち取ったとする」

「……で？」

「名前を捨てる。俺達も知らなかったんだ、顔を知ってる人なんて殆どいないと思うんだ」

「ふむ。……確かに見知っている人間は少ないでしょうな」

元々考えていた策を教える一刀。  
相槌を打つは趙雲。

「あ……、いたわ……一番厄介なのが。……無理よ。絶対逃げ切れ  
ないわ」

「それって？ 曹操や孫策じゃあ、……ないよな」

「全身から放たれるあの覇気。……真面目に宮仕えしている訳がな  
いでしょうな」

「じゃあ、誰なのだ？」

賈馱の絶望に似た諦めの言葉に、うんうんと考える劉備軍。

「そんな二人、生ぬるいわよ。……情報戦に於いては、ね」

「詠ちゃん、……もしかして、馬白さん？」

「そう、馬孝雄。”天狼”よ」

「でも、……面識はないよね？」

「それでも、絶対知ってるから怖いのよ……」

自分の肩を抱き、身を震わせる賈馱。

場所こそ違うが、同じ涼州という領域内に、同じ職である軍師とし  
ていたのだ。

陽の恐ろしさを、この中の誰よりも知っていた。

……今は蒲公英が持っているが、二人の似顔絵の元々の所有者は陽

である。

「ああ、それなら大丈夫。『董卓ちゃんたちを助けてあげて』って頼んできたのって、馬騰さんだし」

「……………え、嘘……………」

「本当だつてば！ それに、董卓ちゃんたちは悪い人じゃない、つて教えてくれたのも馬白さんなんだよっ！」

「間諜からの報告書をそのまま渡された、といった感じではあったがな」

一刀の言葉に、驚く賈馱。

次いで更なる情報を教えるは劉備。  
それを補足する趙雲。

「あ、多分書いたの私です」

『……………えっ？』

この場にいる数人を除く全ての人が呆気にとられる。  
むしろ、驚かない方がおかしかった。

董卓を護衛していた兵たちの中から進み出てきたことに。

「どっ……………、どっいうことですか？」

「どつもどつもありませんよ、董卓様。……………我が主の命に従ったの

み

「ということとは、貴様」

「ええ、馬白様の埋伏です」

いち早く回復した董卓が問えば、にこやかに答え、関羽の確信を突いたであろう言葉を遮って、真面目な顔で答える護衛兵。  
いや、”元”もしくは”偽”の護衛兵と言った方が良さだろう。

「そう警戒しないでください」

「……しないわけではないじゃない。今言っただでしょ、一番馬白が厄介だって」

全く警戒を解く気のない様子に溜め息を一つ吐き、口を開く。

「当たり前のことですが、名は伏せます。私の仕事は主に、馬白様への報告書を書くことです」

「ふむ。今回も例外ではなかった、ということか」

「その通りです」

趙雲の導き出した答えは正しかったので、素直に首肯する元護衛兵  
改め、陽の埋伏その1。

この場で一番冷静だった為、進行役を買って出ざるを得なかった。

「あの……、董卓ちゃんが悪政なんてしてないって、いつから知っていたんですか？」

「愚問ですね。……最初からです。私は董卓様が天水を治められていたときからの、いわば古参の埋伏なんです」

「それを知っていて、助けようとは思わなかったんですかっ!？」

「馬白様の命もないですし、私自身、大した力も持ち合わせてもいませんので」

「っ!」

まさに柳に風。

劉備の心からの訴えも、どこか吹く風のよう。

……このとき董卓と賈馱は、天水の時から古参だ、というところに驚いていた。

「では、今回名乗り出たのは命があったから、ということだな」

「はい。董卓様が忘れ物を取りにいつている間に、これが」

「して、内容は？」

「私たちへの命とあなた方への伝言です。……読み上げますね」

話を進める趙雲。

埋伏その1は、懐から書を取り出してみせ、読み上げ始める。

「私たちへの命は、

『劉備軍が来るまで護衛。

来ても裏切りそうな場合、または他の軍が来た場合は全力で二人を

逃がせ。

ただし、お前等も逃げきれ。

劉備軍が二人を助けるだろう雰囲気だったら、お前等は空気にいる。馬騰が要請した、という話になったら、適当な時に名乗り出る』  
だそうです」

「けっこういいやつなのだ」

「部下を思いやる気持ちはあるようだが……、こちらが裏切ることまで想定されているのは心外だな」

「仕方あるまい。可能性としては否定出来んことだからな」

「……で、俺たちへのメッセ……言伝は？」

評価を下すは、上から、張飛、関羽、趙雲。  
話を進めるよう促すは一刀。

「……怒らないでくださいね。『文面上ですが、一応久しぶりの馬白です。』

先ず、この度の力添え、誠に感謝します。

得がないにも関わらず、手を差し伸べる優しさに感服致しました。

ですが、それに乘じてこちらを責めないでくださいね。

万人があなた方のように優しい訳もなければ、こちらにも動けない理由もあつたのです。

どうかご容赦を。

話は変わり、董卓殿及び賈馱殿ですが、別に涼州に帰って来て頂いても構いません。

その場合、命は保証しますが、沢山使われて貰いますので。

このまま劉備軍に匿われた方が良いかと。  
その場合、私は手を出さないことを約束します。  
いくら狼と言えど、友の友に牙剥く愚かな獣に成り下がるつもりは  
ありません。  
後日、改めて感謝の宗をお伝え致しますね』  
だ、そうです」

「良いやつなのか、悪いやつなのか、よくわからなくなったのだ」  
「だが、誇りは大したものだ」

「ふむ。善人か悪人かは量れんが、正論ではあるな」  
「またも評価する、張飛、関羽、趙雲。」

「助けられなかった理由ってなんだろう？」

「たぶんだけど……、この戦が始める前に倒れたことなんじゃない  
？」

気になった点を口にした劉備に答える賈馱。

「あっ！」

「どうか……、しましたか？」

そんな中、突然声を上げる一刀。  
それを訊ねるは董卓。

「いや、ね。その書の最後辺りだけど、どこかで聞いた気がしてて

ね。今思い出したんだ」

「して主よ、どこで聞いたのだ？」

「どこと聞かれると、正確には覚えてないから困るんだけど、言っていたのは馬騰さんだよ。

『狼と言えど、友の友に牙を剥くほど愚かな獣ではないわ、天狼はね』って」

一刀は笑顔で答えてみせた。

「……やはり馬白様と馬騰様は、相思相愛と言っても過言ではありませんなあ」

陽が書いた内容の一部と、牡丹が一刀に対して言った内容。

まるで打ち合わせでもしたかのように、ほぼ全てが等しかった。

しかし、陽は現在天水に、牡丹は現在洛陽に、いる。

打ち合わせなど、出来る訳がない。

……実際は、やろうと思えば 例えば、手紙とかを使えば 出  
来るが、そんなことをする必要がないのである。

互いが互いを十全に知り尽くしているのだから 。

ここまで考えて、埋伏その1は、そうごちた。

「ご主人様ーっ！」

はわあわ軍師の登場により、物語は進んでゆく。

歯車は回る。

規則正しく、くるくると。

そうして外史も動いてゆく。

筋書き通り、終息へと。

まるで、

何もなかったかのように。

陽は語る。

「董卓ちゃん達は当然こなかったよ。……ここからが本番の本番だね。……そういえば、埋伏の『私達』は間違いじゃない。他にも何人がいたんだよ、あそこに、ね」と

## 第三十五話（前書き）

反産卓ちゃん連合編が割とさらっと終わり。

また日常編です。

## 第三十五話

「何故じゃ……?」

その者は自室で、自らにそう問いかける。

「何故じゃっ!?!」

その者は自室で、空気にそう訴いかける。

「何故じゃ何故じゃ何故じゃ何故じゃ何故じゃあああっ!?!」

……積み上げられた書簡達と闘いながら。

「何故、儂一人で処理しておるんじゃっ!?! おかしいじゃんっ!  
半端じゃないじゃんっ! なにこれえっ! 完全に罰としか考え  
られないじゃんっ! ちょww 皆、マジ鬼畜www」

平時よりは少ないのだが、皆の皺寄せを一身に受ける形になってい  
るのだ。

こうなってもおかしくはない。

「……おおっと、いかんいかん。ここで壊れては女が廃ると言つても  
の」

……もう壊れた部分は露呈してしまったが。

「にしても、あの二人、マジざっけんな! 政務出来るやつも連れ  
ていきやがった! 人の皮を被った畜生め……! テメエ等の血は

何色だーっ!!」

そして、今も絶賛露呈中であるのだが。

「ちくそう……、絶対に許さんっ！ 相応の報いを以て償って貰おうっ……！ ふふふふふ……」

……しばらく治りそうもなさそうだ。

今まさに壊れてしまっている者の名を、薊といった。

「薊さんが黒い……」

「なんて言うかさ、……」愁傷様、だよな

「お姉ちゃん、それはちょっと酷いよ?」

「……ごめん。もう絶対言わないから、その……、わたしのこと、嫌いにならないでね?」

「ううん、お姉ちゃんの素直なところ、悪いことじゃないんだ。……ちよつと、ズバツと言い過ぎかかって思ったただだよ。……大体お姉ちゃんのこと、嫌いになるはずがないよ。ずっとずっと、好きだから」

「藍……っ！ わたしも大好きっ！」

ドアの隙間からチラツと、薊の様子を覗いていた、藍と茜。

が、今は二人とも場所を忘れ、愛を囁き合いながら抱き合っていた。  
……なんて酷いのだろうか。

S i d e  
陽

天水にて……。

「やっぱり、自分の足じゃないとねー」

「……ボクとしては車椅子の方が嬉しいんだけど（しつこいしつこい）」

改めて、自分の足で歩けることに感動する俺。

やっぱり、自由が効かないんだよ、車椅子だとさー。

……まあ、天水まで来るのに馬のってるから、今更な発言なんだけ  
ど。

それでも、感動モノは感動モノなのさっ！

「何か言った？」

「べ、別になんでも」



「おつ、おい、兄ちゃん！」

「ほう、話が分かるじゃねえか」

ニコリ、と作り笑いを携えて、人並みを掻き分けて進み出て申し出てやる。

止めようとする腑抜けの声は無視する。

もう、こんなことしてやるなんて、特別なんだからねっ！

「命は換えが効かないからね。馬は今連れてくるよう言っておいた。

……で、いくら？」

「そつ、そうだな……、たくさんだ」

具体的に聞かれて困ったね、こいつ（笑）  
込み上げてくる嘲笑を抑えつつ、懐から巾着ごと取り出す。

「こんなもんでいいかい？」

そう言っ出て出した巾着はパンパンです。

……これで二軒分の納金代んだけどね。  
すげえだろ。

ねだったってやんねえよー、バーカ。

「おう、十分だ。こっちにこい」

「はいはい」

馬鹿だね、コイツ。

油断しきってやがるし、相手の力量も計れちゃいねえ。

……まあ、俺の格好　文官用のひらひらの多い服　に加え、表情　温和そうな作り笑い　のせいなんだけど。

歩み寄る俺。

「うおっと!」「うわっ!」

「ガキは用済みだ!」

空いている右手で俺は腕を引かれ、それと同時に少年は解き放たれる。

次の瞬間に、俺は先ほどまで少年が収まっていた位置に収められる。

あらどうしましょう、男に抱かれてしまいましたわ。

なんて言ってみたかったが、流石にやめた。

「……あれ、今度は私が人質?」

「そうだ。……そんだけ金を持ってんだ、どっかの金持ちの子息様なんだろうなあ?」

「……ぷふっ」

こらえきれねえ!

「あははははははははっ」

「てめえ、何が可笑し　ゲハッ!」

鳩尾におもつきり右肘を入れてやる。

それで、回されている左腕を利用して一本背負い。  
その後、胸の辺りを右足で軽く踏む、ってか押さえる。

ごろつき君は、痛みに加え、何が起きたのか分からない、といった顔だ。

そんな表情に、さらに笑えてくる。

「ぶっ、ははは、は、腹痛えー」

「あーっ！ いいとこ全部とつたな！」

「ぶっ、おっせーんだよ」

後ろからやってきた瑪瑙にそう返してやる。

……念の為、ごろつき君の後ろに回り込んで貰ってたんです。  
結果、意味なかったけどね！。

「バカだね、お前。……この馬孝雄を前にして人質をとろうなんだよ、  
一万年と二千年早えんだよ」

「馬孝雄だとっ！？ なっ、なんで……なんでこんなところに天狼  
が……！？」

「さあな。お前には関係ねえことだ」

「まさしくその通りね」

瑪瑙は自分の武器 鬼灯丸 をごろつき君に突き付ける。

……あつれえ、瑪瑙ってさっき、武器持ってたかな？

そんなことを考えてると、警備兵がやってきた。  
遅いんじゃないの？

「こつ、これは馬白様に閻行様！ お手を煩わせてしまい、申し訳  
ありませんっ！」

「ヤダ。……って言ったらどうするの？」

「そつ、それは……」

「おいおい、警備兵を苛めてやんなよなー」

「ふんっ、そんなのボクの勝手でしょっ！」

確かにそうだけでもさ。

「あの……、僕を助けて頂き、ありがとうございました」

「……固いつ！」

「……えっ？」

丁寧にお辞儀をしやがる少年にそう言ってやる。

その少年は、呆気にとられた様子だ。

……今みたいに言われた礼よりはマシな顔だ。

「少年、おめえはまだガキなんだからよあ、んな丁寧に言わんでも  
いいんだ。……かるーく元気に、はいもう一度」

「えっ、あ、……助けてくれてありがとうございますっ！」

「まだ固いっ！ 友達に言う感じで、はいもう一度！」

「うえっ、も、もう一回っ！？ うー……あっ、ありがとうっ！」

「うむ、それでよろしい！」

「……はあ、なーにやってんだか」

貼り付けた様な固っ苦しい表情で礼を言われても嬉しくねえ。

ガキはガキらしく、笑って礼を言えよなー、って話。

……アレ、瑪瑙さんが呆れちゃってますよー。

誰だよ、呆れさせた奴はっ！

俺ですね、はい。

「……小遣いあげよう。巻き込んだしまった詫びだ」

「えっ、いいの？」

「いいの。儲けもんだと思って受け取っとけて」

巾着の中から抜き取った一握りを手渡してやる。

別にこれくらい、大した出費にはならねえしな。

「ありがとね、おじさん！」

「おい……ちょっと待て……。誰がおじさんだゴルアアア……！」

このあと、大人気なく、追いかけて回してやりましたよ。  
だってさ、いくら白髪だからといって、この歳でおじさんはキツい  
じゃない。

にしても、子供の笑顔ってのはいいもんだ。

……でも、何かが違うんだ。

確かに子供の笑顔は好きだ。

けど、何か違う。

ま、その何かは、まだわかんねえんだけどさ。

「うっし、帰るか」

「……突然ね。思いつきで言ってるんだったらぶっ殺すわよ?」

ちよ、怖いよ、瑪瑙さん。

「ちゃんと理由があるから断る。『そろそろ洛陽発つからね』って  
母さんから連絡があった。だから帰る」

「別に、ここで合流すればいいんじゃない? どうせ通り道なんだ  
しゅ」

「いや、ダメだ。やっぱさ、……家族を待つのは、迎えるのは、然

るべき場所じゃないと」

ここで待つ、ってのは確かに合理的さ。  
けど、それじゃあダメなんだ。

家族の帰りを待つのは、おかえり、って、帰ってきた家族を迎えるのは、やっぱり我が家であるべきなんだ。

……母さんも、それを望んでるはず。

「変にこだわるのね、そういうとこ。でも、……嫌いじゃないわ」

「そうか。じゃ、準備を始めてくれ」

「わかったわ」

多分、準備に半日もかからないかな。

二日後の金城にて……。

「ただいま」

「あつ、陽兄！ おかえりーっ！」

「師匠、おかえりなさいっ！」

出迎えてくれた茜と藍を撫でてやる。  
でも、少し怒りたいと思う。

「藍、師匠って呼ぶのはやめてくれ。前も言ったろ？」

「うん……でも、なんで？」

「いや、ちょっと、ね……。別に藍が悪い訳じゃないんだけどさ」

「陽兄がこう言ってるんだし、やめてあげたら？」

「わかった。じゃ、先生で」

「いや、兄さん、とかお兄ちゃん、とかでいいじゃんよ……」

肩を落としてみせる。

まあ、何でもいいんだけどさ。

……師匠以外なら。

師匠、って言葉を聞くとさ、どうしても思い出しちゃうんだよなあ。  
あの銀髪のがきをさ。

……いや、俺もそんな時はガキだったけども。  
とにかく、だ。

師匠、と呼び慕って、後ろをちょこちょこ付いていくあのガキが腹  
立たしくて仕方がなかったんだ。

後ろの纏めた髪を共にふりふりさせながら、先を歩く二人の姿が羨  
ましくて仕方がなかった。

だから、師匠って言葉は嫌いなのだ。

「そっいや、瑪瑙は？」

「ああ、瑪瑙姉なら薊おばさんのところ。……行かない方がいいと思うよ」

「はっ、なして?」

「多分大変なことに　「キヤーーーーーッ!」　なってるから」

茜の忠告を遮るような悲鳴を上げたのは瑪瑙。

多分、瑪瑙の悲鳴を聞いたのはこれが初めてだよ。

……ヤバいね、絶つ対。

「……逃げるの?」

「ぬぐう……。聞け藍よ、これは逃げではない。戦略的撤退、すなわち明日への前進なのだよ!!」

「結局、引き延ばしにしかならないよ?」

「ふっ、やるようになったな、藍よ。……そうさ、ここで逃げるは男のすることじゃねえっ!　逝つたるわーーーーッ!」

……ま、こんなふうにぶざけていた時もありました。

「薊さん、邪魔すんでー」

「邪魔するんやったら帰ってやー」

「はいなー」

パタン、と扉を閉める。

通常はここで、ノリツツコミをしなくてはならない。  
だがな。

……そんな空気じゃねえ。

「陽兄、どうかしたの？ スツゴい汗だよ？」

「うん、ちょっと……」

ダラダラと垂れる汗。

……ええ、怖いんですよ！

おおっと、地獄の門が開いたようだ。

「ほれ、入らぬか」

「いやー、ちょっと遠慮しようかなー、なんて、あははー。……は  
は、勿論冗談ですよー」

ガシツ、と肩を掴まれた俺。

掴んだのは、鬼よりタチが悪い人。  
やさぐれ、酔いどれ、のんだくれ。

……二つは意味が被ってるが。  
そんな感じの薊さんです。

これは死んだ。

この後、あの部屋にいた瑪瑙と一緒に終日愚痴を聞かされました。母さんが苛めるとか、俺も苛めるとか、母さんが真面目に政務してくれないとか、母さんが無理矢理仕事を押し付けてくるとか、母さんが……、母さんが……、母さんが……。と、殆ど母さんがらみで。…… どんだけ鬱憤たまってたんだ。

明くる朝……。

「流石にキツイぜよ」

腰が悲鳴をあげてるぜ！

立ちっぱなしもつらいけど、座りっぱなしもダメだぜ！

まあ、母さんの愚痴を聞いた時よりはマシだけど。

…… あの時は夜もぶっ通しだったからねえ。

にしても、腹減った。

…… そうだ、母さんがいねえから作らねえと。

そう思っただけで厨房にやってきたんだが…… お取り込み中でした。正確には、お取り込みチューでございます。

一方はもう一方の両頬に両手を添えて、妖艶な笑みを浮かべており、

今にもしそうな勢いで迫ってます。  
もう一方は受け入れ体制です。付け加えると、無駄に足が絡まっています。

いやいやいや……待て、うん。  
もちつけ俺。

状況の把握は完了した。  
そして、俺の選択肢は、逃げるか、止めるか……。  
んなもん、止めるわっ！  
近親相姦はダメエ！  
つか、俺に気付かんのかいっ！

「ちよっ、待てえええーい！！ ストオオオーッ！！」

二人の顔の間に右手を入れる。  
俺の手の平と甲に口付けをしたことになる。  
フー、危なかったぜ……！  
……俺、今変なこと言ったか？

「ちゅっ……って、誰よ！ 藍との甘い口付けの邪魔したのはっ  
！ あっ、陽兄」

「あっ、先生」

「そりゃ、邪魔するだろうよ、目の前で姉弟がいきなりチューしようとしてたらさ」

普通だよね？

え、そうでもない？

あ、そうですか。

「この愛を邪魔する権限なんて、誰にもないっ！」

「いや、あるだろ、倫理的に。姉弟だろ、お前ら」

流石に不味いよね。

……茜の台詞が妙にクサイのはつっこまんど。

「……言っとくけど、わたしと藍は、本当の姉弟じゃないよ？」

「……え、マジ？」

「うん。……お姉ちゃんと僕は同じような境遇で、村長のおばあちゃんちゃんの所に来て、姉弟のように育てられただけなんだ」

なんてこった。

じゃ、あれだ。

馬の五兄弟姉妹　翠姉、俺、蒲公英、茜、藍　はみんな兄弟姉妹じゃねえ、つてことだ。

……ま、血縁だけが兄弟姉妹の証と考えるのは愚の骨頂だけだな。

「あー……、悪い。邪魔したな」

「そうだよ！　もう、雰囲気台無しじゃん……」

「だから、すまんつて。……大体、なんでこんなところで口付けなんてしようと？」

「好きな人とするのに、理由なんているの？」

確かにそうだけでも。

妹に押され気味の兄ってどうよ？

え、割と普通？

あ、そうですか。

「強いて言えば、手伝ってくれたお礼かな。……身体で払おうと思  
つて」

「大人かつ！」

あ、ツッコミ間違った！

「その言葉、どこで習った！」

「ここ。おばさんが教えてくれた」

「なんてこった！」

何してんだ、母さんはっ！

バカだとは思ってたけど、やっぱりバカだった。

只今、朝食中。

薊さんと瑪瑙は寝てるから、分けて置いてあります。

「ていうか、そういう陽兄こそどうなの？」

「は？ 何が？ お、うまい」

茜が不意に質問してきた。

なんだかわからねえから、聞き返してみる。

「蒲公英姉と、……しないの？ あっ、ありがと。それ、自信作なんだ」

「僕とお姉ちゃんの合作だからねっ！」

「何を？ そっか。お、他もなかなかイケるぞ」

蒲公英になんか関係が？

食材の旨味をキチンと引き出してる。

これなら店でも出しても問題ないぐらいだ。

俺なら金をだすね、鼻屑目でみなくても。

「ちゅー」

「ぶっ！ な、何言ってるんだよ！ する理由がねえじゃんよ」

……したけど、わざわざ言ってる必要はねえよな？  
むしろ、された、だし。

「さっき言ったじゃん。理由なんていらないうって」

「好きな人に限るんだろ？ つか、互いが好き合っていないと、そもそも成立しねえし」

一方がどれだけ好きだろうが、受ける側が拒めばそれで終わりだ。要は、結局双方の合意が必要な訳さ。

……そら、奪うことも可能だろうけど。

「じゃ、蒲公英姉のこと、好きじゃないの？」

「そう言われるとだなあ……、そりゃあ好きだよ。でもさ、兄妹のそれであってだな……」

「ふうーん」

なんだ、二人してその呆れたような目は。傷付くじゃないか。

蒲公英は好きさ。

確かに好きだ。

茜と藍の二人には、兄妹のそれ、と言ったが、実際は俺も分かってない。

正直、計り兼ねてるし、持て余してる。

だってさ、あの時の口付け、奪われたに近いけど、嫌じゃなかった。むしろ、嬉しかった、かも？

ってことは、俺は拒んでないんだから、されても良いほどには好きな訳だ。

それが、兄妹のそれ、で収まる好きなのか、俺にも判断出来ないのさ。

……ったく、茜は俺の思考を掻き乱してくれたもんだ。

それから三日間、何をやってても、頭の片隅には残ってたよ。  
……恐ろしい量の書簡共に埋もれていても、ね。

「たっだいま〜」

「ぬおっ!」

俺の首目掛けて、抱き付いてくる。

勿論、難なく抱き止めますよ。

軽いからね、半歩片足を退く程度で十分なんです。

「はあ、おかえり。……つたく、飛びつくんじゃねえよ、危ねえだろーが」

「お兄様なら、たんぽぼの身の危険から守ってくれるもん」

「……どこにそんな確証があるってんだ」

「ないよ? でも、現にちゃんとして受け止めてくれたじゃん」

「まあ、そうだけだよー」

隠してるけど、俺的にはまだ口付けした恥ずかしさがあるんだがな。  
蒲公英はいつもと変わらねえけど。

……些か上機嫌だが。

ま、有り難いことだけどね。

アレで気まずくなるのは嫌だしな。

それに、……うだうだと考える必要もなくなるし。

「よつと」

「あん、もうおしまい？」

「母さん達にも挨拶しなきゃいかんだろ？ 蒲公英ぶら下げたままとかキツいだろ」

「それはそうだけどさ」

色んな意味でキツイね。

不躰だし、俺の首的にも、蒲公英の腕的にも、ね。

……あら、蒲公英さん、かなりのガツカリ感出してますね。

「あつ、蒲公英っ！ あたしに全部押し付けてどこ行ったかと思えばっ！」

「や、やだなー。たんぽぽはお花を摘みにいってただけだよー。で、偶々そこでお兄様に会っただけだもん！」

「おい、陽、ホントか？」

「知らね。翠姉、俺に会うまでの蒲公英の行動をどう知れと？」

「……確かに」

いや、納得すんのかよ。

つか、それ以前に蒲公英の挙動不審に気付こうぜ。  
明らかに目、逸らしてましたやん。

お花を摘みにく、にはツツコミませんよ？

「あ、そうそう。……翠姉、おかえり」

「ん、おお、ただいま」

やっぱ、挨拶は大切ね。

「たっただいま」

「うわ、危なっ！」

声に反応してとっさに避けちゃったから、飛びついてきた人は標的を失う訳で。

……見事な飛び込み前転を決めました。

「はいっ！」

「おお、素晴らしい」

足を綺麗に揃え、両腕を広げて上に挙げ、キメる母さん。

大した技じゃないのだが、体操選手ばりの、ビシッとしたキメだ。  
思わず拍手してしまうほどだ。

……体操選手？

「つて、ちがーう！」

「おお、素晴らしい」

見事なノリツツコミだ。

またもや拍手してしまった。

その隙に、母さんに両頬を抓られた。  
痛い。

「だ・か・ら！　なんで避けたかな！」

「いひゃいひゃいひゃい、い……たいつての！　つか、文がおかし  
いから！　だから、で前後が繋がってないから！」

「うるさいっ！」

「んな、理不尽なキレ方があるかっ！」

抓る母さんの両手を振り払ってツツコミを入れたら、普通に怒って  
黙らせてきた。

翠姉と蒲公英に助けを求めようと目線を送るが、見事にそらしやが  
った。

……うん、あとでシメる。

ああもう、……めんどくせえ。

「はあ、疲れた。……で、蒲公英は受け止めたくせに私はダメなの  
？　そんなの不公平じゃない」

「いや……、公平不公平とかあんの？」

それ以前に、見てたんかいつ。

「あるっ!」

「はつきり言いやがったよ、この人……」

頭を抱えなくなった。

不意に前を見ると、汚れのない白を纏っている人……あ、山百合さんじゃねーか。

「……ハア。だだをこねる子供ですか」

「だって、……陽ったら、抱きつかせてくんないんだもん」

「……それは、……陽君が悪いです」

「ええっ! ここで寝返っちゃっ!?!」

「お兄様が悪いと思うよ」

「だなー。陽、お前が悪い」

「……なんてこった」

四面楚歌じゃねえか。

いや、完全に流れがおかしいでしょ。

別に悪いとこなくね?

大体、なんでそれも抱きつきたいのやら。

……じゃあねえ。

両腕を大きく開いてやる。

全員、キョトンとしてますね。

そっちが要求したくせに、その反応はどうなのさ。

「おら。どうにでもしろ」

「……ふふっ 陽、ただいま」

「……おかえり」

抱きつく母さんの背を、ポンポンッと軽く叩く。

なんだかんだ、よく抱きついてくる母さんだが、今日はなんだか気  
恥ずかしい。

……いつもは不意打ち、今日は正攻法、だからかな。

「ほら、山百合もいつちやいなさい」

「………はい？」

離れたかと思えば、何言ってるの、母さん。

「山百合お姉さま、ここで逃すと損するかもよ？」

「ほらほら、蒲公英もああ言ってるんだし、ね？」

なにが損なのか、全くわかりませんよ、蒲公英さん。

「……いえ、その、ですがっ」

「ドーンと行けよ、山百合。ほら、ドーン……」

翠姉、それは無理矢理というものでは？

……つか、なにこの女子高生の告白前みたいノリ

「ぐはっ！」

「……あ、すみません」

「いや、大したことはないよ」

まあ、結構な力、きましたよ。  
でも、我慢するのが男です。

「……えと、あの」

「ほら、もう一息よ！」

「頑張つて、山百合お姉さま！」

「お前なら出来る！」

山百合さんは現在、両腕を胸の前に置く体制であり、その手は組んだり握ったりしている。

頭は俯いており、表情は見えないが、耳の赤さから、相当に恥ずかしがっていると思われる。

そのくせ、両腕とおでこの辺りは、ピトッと俺の胸にしっかりとっつけてある。

……つか、まだ続けてんのか、そのノリ。

「……ただいま、戻り……ました」

「よし、よく言ったわ！」

「お兄様の答えは！」

「何やってんだ陽の奴！ 早く返事してやれよ！」

頬を紅潮させた顔を上げ、上目遣いで物を言うもんだから、不覚にも、ドキッとしてしまったじゃないか。

いやいや、可愛いなの。

なんと言つか、ホントに子供みたいなんだもん、山百合さん。

……もうツツコミは入れんぞ。

「うん。おかえり、山百合さん」

「よしっ！」「やったね！」「よしっ！」

……何がよし、なのか、さっぱりわかんねえんだがな。

「何やら騒がしいと思えば……お主等か」

「あら薙。……いい感じにやつれてるわね」

「誰のせいだと思っておるっ！」

「えんしょーちゃん」

「ぐべ……、なまじ間違っておらぬだけに言い返し辛い……」

いつもは負ける母さんだが、今日は一枚上手だったようだ。

……あっちでは、いつの間にか来てた瑪瑙と翠姉がきゃいきゃいと  
言い合ってたたり、こっちでは、これまたいつの間にか来てた茜と藍  
と蒲公英で怪しい会合してる。

そして、俺の隣 何故かかなり近いよ には山百合さんがいる。

「ふふっ  
」

「……何がおかしいのじゃ、馬鹿者」

「ウチはやっぱりこうじゃないと、って思って、ね」

「ふっ、そこは僕も同意じゃな」

聞こえてきた声に、俺もそう思う。

連合とかいう下らねえ召集でバラバラになってた家族が、こうして  
また集まって。

結構久しぶりだったのに、いつも通りの混沌とした様子で。

当然、これから乱世が訪れる訳なんだが。

……こんなありふれた時間が、いつまでも続けばいいと思った。

陽は語る。

「薊さんからの仕返しには、俺も母さんも発狂しそうになったね。

……一週間の公休に入った薊さんの仕事を二人で分け合ったんだぜ  
？」

と

第三十六話（前書き）

またまた日常編。

相変わらず話は進まない。

## 第三十六話

「もー、なんで私までー」

「だだをこねるでない！ 普通、お主だけで行くものなのじゃぞ？ 儂が付き添いをしてやってるのをありがたく思わんか！」

「そう言われても、イヤなものはイヤなのよー。……あの爺共と顔を合わせるなんて」

「儂だつて嫌じゃ。だが、仕方がないものは仕方がなかつた」

そう言い合いながら、馬を走らせる二人。  
牡丹と薊である。

牡丹等が洛陽から金城へと帰つて来て、中一日。  
ある会合に出席するために、二人は武威へと足を運んでいた。

武威城内のある一室にて……。

中央に大きな机が置かれ、四人ずつ向かい合うように年老いた老人達が着席している。

……G8ならぬ、爺8と言えば上手だろうか。

上座には、いすの上に右の踵をのせて膝を立て、その膝を肘おきのようにして頬杖を付く牡丹と、普通に腰掛けている薊がいた。明らかに牡丹の態度は不遜だが、誰も咎めはしない。

……正確には、立場的に出来ない、のであるが。

「……んで。盟主様を呼びつけるとは、どういつこった？」

「ほっほっほっ、寿成嬢、そう息巻くな」

「……もう、嬢と呼ばれる歳じゃねえんだがなあ」

「儂等からすれば、まだまだ嬢じゃよ」

爺8の一人、侯選がそうからかって笑えば、同調するように、室内にいる牡丹と薊以外の人間が笑う。

「笑い事じゃねえんだよ、糞爺共が。……で、なんの用だ」

「言わずともわかるであろうっ？」

「言わなきゃわからねえなあ」

「……ふ、いいよるわい」

ニヤリと笑う牡丹に溜め息を吐く爺8の一人、張横。そうすると、別の爺8の一人、程銀が口を開く。

「此度の戦い、反董卓連合と言ったか？ そのことについてじゃ」

「まあ、それしかねえわな。……で、それが？ 結末は言う必要も

ねえだろ？」

「うむ。報告は受けておるからの。……あの坊主、なかなか仕事が早い」

「つたりめえだ。俺の息子だぞ？」

爺8の一人、成宜が陽を褒めれば、フン、と少しだけ誇らしげに鼻を鳴らす牡丹。

……子を評価されて、喜ばない親がいるであろうか。

「ふん、天狼か。真似事をしているだけではないか、ぱ」

「黙れ。戦いの話に戻せ」

「おお、怖い怖い」

爺8の一人、李堪の過ぎた口を遮る牡丹。

その目には怒りが宿っていた。

……陽を貶める発言にか、遮る直前に言いかけたことにか、は定かでないが。

「此度の戦いについて、今一度確認したいじゃが？」

「構わん」

「連合に参加したのは実質、馬騰嬢の軍と言ってよい」

「この中で兵を出したのは俺達だけだからな」

「じゃが、名目上は西涼軍となっておる」

爺8の一人、馬玩が確認する。

彼の言うとおり、兵を出したのは牡丹の軍のみ。

だが、馬騰軍とは言わず、西涼軍と言っていた。

これには理由があった。

「……軍需品や食糧等の物資の工面と引き換えだからな」

「そうじゃ。儂等は兵を出さん代わりに、物資を提供した。西涼軍という名にするのは当然のこと」

「……で、何が言いたい」

「帝からの報酬も、西涼軍として賜るのが筋と言つものであるう？」

牡丹の問いに答える爺8の一人、梁興。

要はこう言いたいのだ。

物資出したのだから、報酬は我等にも等しくあるべきだ、と。

「かもなあ。だが、そんな話はまだきてねえぞ？」

「最悪、永遠にこぬかもしれぬな」

「……ハッ、その時の為の保険を、ここでかけよつてか。ご苦労なこつた」

「そう言ってくれるな、寿成嬢。儂等にも事情というものがある」

そう言つて、肩を竦める爺8の一人、楊秋。

漢王朝の弱体化は、今回の戦いから明白である。

そんな王朝から、功績などを称えられ、褒美がもらえるかどうかなど、わからない。

だが、物資を出したのも事実。

つまり、褒美が貰えない、又は、貰えたとしても馬騰軍として貰う、といった時の場合に備えようというのである。

「……三割だ。それ以上は返さねえ」

「たったの三割じゃと？……我等も舐められたものよ」

李堪が苦言を洩らす。

「誰が死にかけの爺なんざを舐めるか。……こっちは命賭けたんだ、妥当だろうが。むしろ返して貰えるだけありがたいと思つて欲しい限りだ」

「それは傲慢というものじゃな、寿成嬢。そちらが用意出来ないから工面してやったのじゃぞ？」

「してやった？ ハッ、それこそ思い上がりだぜ」

牡丹は腕を広げ、態とらしく肩を竦め、鼻で笑い。

そして直ぐに、ニヤリと口角を上げた。

「……天狼を抱える俺達が本当に用意出来なかつたとしても？……有り得ねえよなあ」

「む、儂等の顔を立てたとしても？」

「だとしたらどうするんだ？」

「ぬう……」

張横が問うても、牡丹はニヤニヤするのを止めない。

……事実、陽の莫大な資産を駆使すれば、用意しようと思えば余裕でできたのだ。

「であるとしても、用意してもらったのも事実。……牡丹よ、ここは盟主として器を見せるべきじゃと思うぞ？」

「お前はどっちの味方なんだよ、薊」

「涼州連合内部の話じゃ。敵も味方もなからう？」

「まあ、な」

隣同士で話し合う二人。

薊が言うとおり、これは涼州連合の話し合いである。

……今では、涼州連合というより、西涼連合といった方が妥当だが。

ここで、涼州連合の簡単な説明をしておこう。

名前の由来は、その名の通り、涼州で組まれたからである。

組まれたのは、19年前。

盟主は牡丹で、副盟主は14年前から薊が務めており。

そして先の8人は、最初からのメンバーである。

組まれた当時、彼らは涼州内のあちこちで太守をしており、牡丹も

また隴西で太守をしていた為、涼州連合という名前になったのだ。  
発足理由等は、また今度としよう。

長らく思案顔をしていた牡丹だったが、空いていた左手で頭の後ろ  
搔いてから、口を開く。

「あー……、四割だ。どう転んでも、それ以上は出さねえ。……っ  
たく、薊に感謝するんだな」

「ほっほっほっ、文約嬢はお優しいのう」

「俺は優しくねえみてえな言い方だな、おい」

そう言つて牡丹は爺8を睨むが、ほっほっほっ、と笑つて返される。  
が、そんな返しは予測済みだったので、牡丹自身も口元に笑みを作  
った。

帰り道にて……。

「全く、まだ死なないの、あの爺共は」

「……思つても口にすべきではないと思つぞ？」

「わかつてるわよ。でもさ、舐めるように見つめてくるんだもん、  
あの爺共。ま、私のこの、ないすばでい、のせいと言われたら仕方

がないんだけどさー」

……実際は、爺は牡丹の一挙一動まで観察しているだけである。流石に爺なのだ、身体に興味がある訳がなかった。

「なんじゃその、ないすばでい、というのは」

「良い体つき、って意味よ。例えば、こんなカ・ラ・ダ」

そう言つて、併走している薊の乗る馬の、ちょうど薊の後ろに飛び乗る牡丹。

滅茶苦茶器用である。

……いや、そんな簡単に言えるレベルではないが。

「ひゃっ、あん……ちっ、乳を揉むでないっ！」

「まだまだ衰えてないわね！」

後ろから、薊のおっぱいを揉む牡丹。  
手つきがエロい。

「……や……ふあっ……だっ、から、乳を揉むなとっ！」

「もう、つれないわね」

「や、喧しい！」

もう一度揉む牡丹だったが、薊が牡丹の手を振り払うことによつて阻止されてしまう。

……周りに男がいれば、一部が一樣にスタンディングしていたこと

だろう。

牡丹は自分がさっきまで乗っていた馬に、また飛び乗った。

……だから、簡単に（ry

「こうして思ったんだけど、最近、百合百合してなかったわよね」

「最近所の話ではなかるうに。もう13年ぐらいは経つぞ？」

「あれ、そうだったけ。月日が流れるのは早いわね」

少しばかり思いを馳せる二人。

「……ってか、よく覚えてたわね。もしかして、期待してたり？」

「しとらんわっ！ あの時は、お兄様が言うから……し、仕方なくしておったんじゃ！」

ニヤリ、と牡丹が笑いかけてやれば、顔を真っ赤にして反論する薊。……顔を赤くしたのは、怒りからか恥ずかしさからか。

「……ふうん」

「ぐっ……」

含み笑いを浮かべて見てくる牡丹にたじろぐ薊。

「ま、そうしといてあげるわ」

「……ふんっ！」

ニコツ、と牡丹が笑んでやればそっぽをむく薊。  
……チラリと見える薊の耳は赤味がさしていた。

「あははっ、可愛いな、薊は。チュツチュツしてあげる。」

「いつ、いらんわ馬鹿者っ！」

「ほらほら、遠慮せずに。」

「抜かせっ！ 儂は先に帰るっ！」

馬を寄せて唇を近付ける牡丹。

身を引いて避ける薊。

更に牡丹が唇を近付けければ、薊は帰ると称して逃げていった。

「ふふっ、やーっぱり可愛いわね、薊は。」

(薊への贈り物は、あっつい口付け、で決まりね)

逃げられた牡丹は心でそう呟いて、薊を追った。

S i d e  
陽

「クソだりい」

馬孝雄こと俺の一日は、この一言から始まった。  
基本的に、俺の一日の始まりは早い。

朝日が昇る前には起きる。

…… 太陽が苦手、つか嫌いだからです。

寝間着から動きやすい服装に着替え、城門外周りを  
街の外を  
三周する。

戦には体力が必要だからね、毎日の体力作りには欠かせんのだよ。

…… まあ、俺は軍師なんだけどね。

その後、城内中庭に戻り、片手腕立て伏せを百ずつと、適当な木にぶら下がって、捻りを入れた腹筋背筋を百ずつ。  
身体の軸を作るため、体幹を鍛えることが大切だ。

次は、突きを百ずつと、蹴りも百ずつ。

一応、利き手利き足は右のはずなんだが、左も右並みに使えたりします。

むしろ、剣の扱いなら左の方が上手かったり。

そのまた次は、片手での薪割り五十ずつ。

鍛えるついでに冬に備えているのだよ。

…… 夏場とかは、単に剣を振ってたりする。

これは、手首を鍛えてるんだ。

突くときって、手首の捻りが意外に重要なんだぜ？

それが終わったら、兵に支給される普通の槍を二本ばかり用意する。  
肩幅程度、間を開けてそれらを地面に刺して、槍を逆手で持ち直してから両足を高く挙げる。

…… 槍を掴んでの逆立ちだ。

そこから両足を徐々に下ろしていき、石突の上に片足ずつ載せてやる。

そして、槍から手を離すと、二本の槍の上に人が立っている、という状況ができますねー。

いや、これは言うほど簡単じゃないぜ？

ただ地面に刺しただけの二本の槍の上だ。すっげえぐらつく。

……まあ、この後、片足で槍の上に立つんだけどな。

身体の軸が出来れば、さほど問題なく出来たりする。

問題なく、と言っても、両足で立つことが出来るのなら、の話だけどな。

で、最後。

ご飯の用意が出来る少し前に呼びにやってくる蒲公英と試合をする。

……二本の槍は、ここで有効活用されたり。

七割方俺が負けて、試合は終わり、朝食へと進む。

べ、別に悔しくねえし！

槍で勝てると思ってねえし！

むしろ三割勝てて嬉しいくらいだしっ！

……あれ、なんだか悲しくなってきたぞー。

他愛のない話をしつつの食事の後、地獄の政務が始まります。

薊さんの公休のお蔭です、本当にありがとございました。

まあ、なんだかんだ母さんの手伝いをしてあげるくらいには優しい薊さんだけど。

……俺は放置ですかー！。

三割ちよつとしか終わってないのに、もう昼過ぎ。

……昼飯には規則はないから、いつ、誰と、どこで食べるのも自由。そういうことで、俺はこう言ってる。

「俺に飯を作って欲しい奴はいるか」

「ここにいるぞーっ！」

ほらきた。

扉をバーンと開け放ち、右手を高々と挙げた格好の蒲公英。やっぱりいたよ。

……ホント、どこで聞きつけてるんだらうか。

「……いつからいたの？」

「今来たところだよ」

逢引き前の、遅れてきた彼女からの質問に対しての答えかっ！

……いかん、ツッコミが長くなった。

「……正直に言っと？」

「ホントだつてば！ ……ふうん、お兄様はたんぽぽを疑うんだあ」

半目でこちらを見上げてくる蒲公英。

……「こういうのは全然教えてくれない。

「や、そういうことじゃなくてだな。……いつも待ってなくてもいいじゃん、と思ってね。今日は特に遅いし」

「だから待ってないってば！ 偶々だよ、偶々」

「女の子が、たまたまたまたま言うんじゃありませんっ！」

「お兄様が言わせたんじゃん！」

と、こんな話をしつつ厨房に向かう。

……話すのは僅かな時間だけど、毎度毎度マジで楽しい。

突然なんだが、厨房と食堂の話しよう。

俺達が隴西にいたところからなのだが、厨房と食堂は別々にあった。配膳するのも面倒だった。

そこで、厨房と食堂を一緒にしたらいいんじゃないかね、と俺は考えた。

そして、食堂を厨房の隣の部屋に配置し直して。壁をぶち抜いた。

火を扱う方の反対側に、四角く大きめの穴を開けたのです。

これで、食堂側から厨房を見ることが出来れば、逆も然り、という状態になったね！。

結局何が言いたいのか、と問われれば。

配膳用カウンターを作ってみたんだよ。  
やっぱ、自分の食べたい物を自分で頼み、自分で取りに行くべきだ  
と思ってたし。  
作ってから配膳されるまでの間の時間が勿体無いし、最悪冷める。  
その他諸々の理由で作ってみたんだ。  
そしたら、これがまた使い勝手が良くてだな、金城でも採用された  
のだ。

「という解説を入れてみた訳だが、……なしてあんたらここにおる  
ん？」

「……いけませんか？」

「いや、ダメじゃないけど……」

「じゃ、問題ないわね。そんなことより、待っててあげたんだから  
早く作りなさいよ」

「待たせたつもりはねえよ！」

「いいから早く作ってくれよ！ お前の作る料理が食いたいんだよ、  
皆」

「翠姉の言葉がなかったら、絶対作ってなかったな！」

厨房からカウンターを挟んで食堂を覗けば、一番手前の机に、山百  
合さんと瑪瑙と翠姉と蒲公英が座ってた。

蒲公英はいいとして、他に理由を問うてみれば、納得いくようない  
かないような。

ま、別にいいけど。

……丁度試してみたいヤツもあったしね。

「作ってやっても構わねえけど、初めて出すやつだからな。試食者になってもらうんで、そこんとこ宜しく」

「いいぜ」「いいよー」「いいわよ」「……構いません」

皆さん即答でんなー。

それだけ料理の腕は信頼されてる、と思って良いよな？

大きな鍋に、湯を沸かす。

作り置きしてあった四つの汁のうち、三つを温め直す。

……麺は作り置きしてあったんだが、丁度四玉分を残した記憶はないんだがな。

とりあえず、ご都合主義ということにしておこう。

麺を茹でる。

温めたスープをそれぞれの器いれる。

刻んだネギとチャーシューをスープの上に浮かべる。

同時に薄焼き卵を焼く。

途中で、隙を見て　　なんであるのとは思ったが、唐辛子があるからいいかと思つた　　トマトとキュウリを切る。

茹で上がった麺を水洗いしてぬめりをとって、冷やす。

三人前分の麺の水を入念に切つて、スープとは別の器に麺とその上にメンマを盛り付ければ、三人分のつけ麺の完成だ。

同じく水切りした一人前の麺を平たい皿に盛り、ネギとトマトと薄

焼き卵の刻んだやつをのせて、かけ汁を上からかけてやれば、冷やし中華の完成だ。

「お待ちどーん」

「お、やっとできたな」

「待ちくたびれたじゃない」

翠姉は普通に嬉しそうだ。

瑪瑙はなんでそう上から目線なのか。

カウンターにやってきた、翠姉にはつけ麺、瑪瑙には冷やし中華を渡す。

「……これは？」

「もしかして、前に言ってたつけ麺、ってやつ？」

小首を子供のように可愛く傾げる山百合さん。

蒲公英は良く覚えてたな。

山百合さんと蒲公英にもつけ麺を渡す。

「……明らかにボクだけ違うんだけど？」

「……たまたまだ」

「その間はなによー！」

「いいから食えって。味は確かだから」

カウンターに頬杖をついて見守る。  
さてはて、どんな評価が下るのやら。

「……どうやって食うんだ？」

翠姉の言葉に、ズルツと頭を落としてしまう。

……いや、当然か。

こういつつけ麺形式は初めてみるだろうからな。

「麺を汁につけて食うんだよ。あ、瑪瑙のはそのまま食えるから」

「それくらい、見ればわかるわよ」

「さいですか」

補足してやっただけなのに！。

「てかさ……、分ける意味、あんのかよ」

「……翠様、それは言わぬが吉かと」

正直、俺だってそうは思う。

けど、商売になると少し違うんだよ。

「そんなにねえけど、変わった食べ方、ってのが興味を惹くのさ」

「……成る程。一理ありますね」

「どづいづいとだ？」

「そんなことも分からないの？ ばっかじゃない？」

「……悪いかっ！」

「そこは開き直るとこじゃないよ、翠お姉さま」

瑪瑙に馬鹿にされすぎて、開き直るようになった翠姉。  
ちよつとは勉強しようぜ？

……今回は勉強云々の問題じゃないけど。

「いいか、翠姉。例えば、新しい飲食店ができたとしてよ。そこには珍しい料理があるそうだ。……行く？」

「行く」

「じゃ、なんで行きたい？」

「珍しいものがあるんだろ？ 試しに食べてみたいじゃないか」

「そういつことだよ」

「どづいつことだよ？」

もう一度頭をズルツと落としてしまう。

……今回に限っては、三人もズッコケそうになってたけど。

「ここまでくると、呆れて物も言えない……」

「そ、そうだねー」

「（……翠様はどちらに似たのでしょうか？）」

お二人さん、聞こえてまつせ。

山百合さんは、何か考えてるね。

心は読めるけど読みません。

……だって、家族だろ。

「その店を、そのつけ麺に置き換えて考えてみて」

「……………あ、なるほど」

ポンツと右手で左手の平を叩いて言う翠姉。

茜や藍ともう一度勉強し直してきたら？

と、割と本気で思った瞬間だった。

ついでに。

つけ麺にはつけ麺の利点はあるのだよ。

ほら、ラーメンは熱いのが基本だろ？

けど、つけ麺なら、冷たいのもイける。

そういうこと。

結果、評価は上々だったよ。  
ただ瑪瑙に

「時期が違つてでしょ！」

と言われた。

当たり前だ。

冷やし中華は夏に食うべきものだし。

(ちなみに今は秋から冬にかけての変わり目ぐらい)

……めっちゃ上から言うから、ちょっとした意趣返しをしたまでさ！

昼飯のあとは、地獄の政務？。

俺は、仕事と私情は混同しない方だけど、今回はダメだ。  
集中力が保たない。

ぬうううううううん！

今回はマジで多い、キツイ。

おやつを食う暇がない、だと？

ぬううううああああ！

い、癒やしが、糖分が、足りないいいいい！

……血涙が出そうだ。

「どづかしたの、陽兄？」

「……あれ、茜さん？ いつからそこに？」

「い、癒やしが、糖分が、足りないいいいい、から」

なにそれ恥ずかし。

つか、何故心の声が聞こえたし。

「だって、口に出たし」

「うっそだあ。今まさに心を読んだじゃんよ」

「嘘じゃないよ？　だって顔に書いてあったもん、何故心の声が聞こえた、って」

どんな顔だよ、それ。

「……そんなわかりやすい顔してたか？」

「ううん。ほとんど変わってないよ」

「じゃ、なんでわかった？」

「だって家族だもん。少しの表情の違いでわかるよ」

「……確かに言ってるな、それ」

母さんはいつも表情では笑ってるけど、本当は笑っていないときもある。

わざとらしく、ニコリと笑ったりするときは、そんな感じだ。

……付け加えると、　が出るときは、機嫌がいいときだ。

山百合さんは　二年という長きにわたる時間が実り、感情を表情に表すことが出来るようになったもの　無表情でいることが多い。

それでも、なんとなく表情で何を考えているかわかる。

……顔を真っ赤にする等、恐ろしくわかりやすいときもあるけど。

心を読まずとも、表情で相手の気持ちを理解する。  
……それは、接してきた時間と密度で決まるらしい。

「ま、蒲公英姉の受け売りだけどねー」

「は？ 何故にそこで蒲公英が？」

「だって、陽兄の表情見ただけでどんな気持ちなのかを判断する」  
ツを教えてくれたの、蒲公英姉だもん」

「……そうか」

何気にすごいことしてるよ、蒲公英さんは。  
まあ、それが嬉しくない、と言えば嘘になるけど。

「もぐもぐ。……はあ、生き返るう」

「ホントに甘い物、好きなんだね」

「うむ！ これがなかったら、お兄ちゃん、壊れそうだったよ。  
むぐむぐ」

「いや……、十分壊れてたと思うけど」

「俺が壊れたらこんなもんじゃないぜ？ もしやもしや」

「……それって自慢するところ？」

茜が持つてきてくれた大福を三つばかり頬張る俺。  
これぐらいならペロリといけませ。

食うに時間はそうかからないけど、おやつを買って持つてくる時間  
が惜しい。

……それを、食う暇と言っていたのですよ？

「そっいや、藍は？」

「おばさんのと」

「なんで？」

「お茶を淹れにいった。……一緒に行く、って言っても、別々の方  
が効率がいいって」

「そっか（……怒ってんなー）」

母さんのことはもう嫌いじゃないとは思っけど。  
藍と一緒にじゃないのが気に食わないらしい。

「……茜はホントに藍が好きなんだな」

「うん、大好きだよ」

まっ、眩しいっ！

その純粋な笑みが眩しすぎるっ！

でも、それがあまり良くないのも、確かなんだよね。

「……俺はさ、茜が藍を想つくらい、藍も茜を想つてると思つんだ」  
「当然！」

胸を張る茜。

……瑪瑙のまな板度に、憐れみすら抱いたよ。

「だからさ、藍を信じて、……敢えて退いてみたらどうだ？」

「……え？」

「ほら、いつもべつたりだろ、お前ら。それを悪いとは言わないけど、良いとも言えないな」

「……」

好き合うのは別に構いやしねえさ。

けど、溺愛は良い方には向かわないのも事実なんだよ。

「藍だつて男だ。……自立したいのさ、姉がいなくてもできるように。親離れならぬ姉離れ、とでも言つべきか」

「うん……」

悲しそうな顔で俯く茜。

……あんまり見たくねえ顔だ。

「そして、一人前の男になりたいんだよ、好きな女を守れるくらいに、な」

「うん……！」

僅かに上げたその顔に、悲しみの感情はない。

「だからさ、茜も年長者として、女として、藍が男になるのを待ってやんな」

「うん！」

良かった、いい笑顔だ。

……ホント、笑顔が一番だぜ。

「……ついで言うと、焦らした方が燃えるもんらしいぜ？」

「そうなの？」

「らしい。母さん曰わく、だから、信用に値するかは知らんがな」

「ふうーん」

と、茜と話し込んでしまったせいで、夕食前になっても終わりませんでした。

夕食時も話し込んだせいで、結局、残りは明日に持ち越しになりました。

……まあ、悲観することはないんだけど。

夕食時に話し込んでしまったのは、先の戦いのことを話したせい。話させたのは母さんだけど、皆も知りたかったこと。

そのせいで、残っていた分をする時間がなくなった。  
だから、明日の政務は少し手伝ってくれる。  
ということなんだ。

マジ助かった、と思ったよ。

陽は語る。

「倒れてからかな？ 横文字とその意味が一致するようになったのは。……このころには、それが完全なものとなってたね」と

第三十六話（後書き）

牡丹さんの口の悪さは一級品。

ヒッシャー！

やっとコピペ分が終了したぜ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2814z/>

---

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

2012年1月14日10時42分発行